

東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

三太刀遺跡(I)

2003

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

三太刀遺跡(I)



本郷町位置図（◎は遺跡を示す。）

2003

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

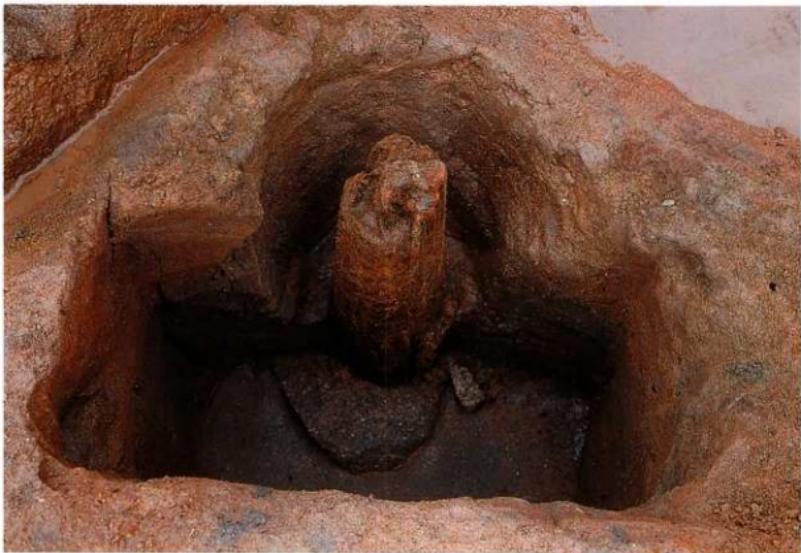


a A区全景（南から）



b A区全景（東から）

巻頭図版 2



a SA 3 P 4 柱根（南から）



b B区全景（北西から）

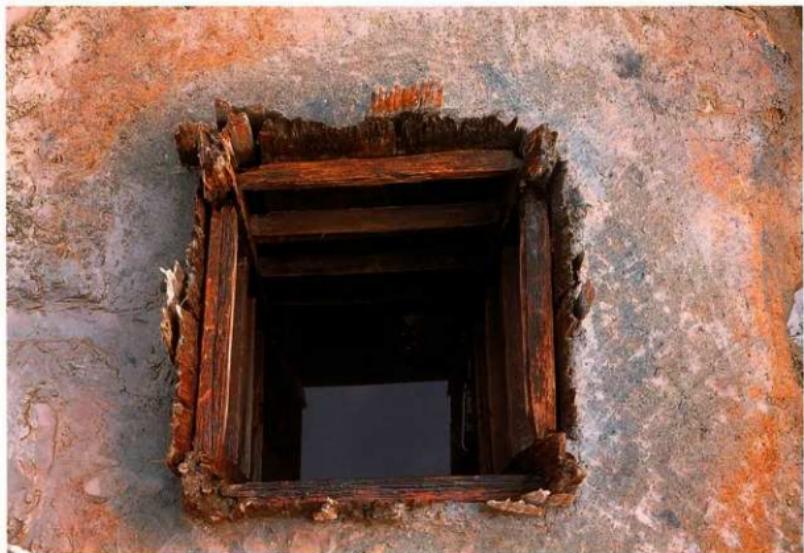


a B区全景（南から）



b SE1（西から）

巻頭図版 4



a SE 1 (西から)



b SE 1 出土土器



a SB11 (東から)



b SK4 土器出土状況 (南から)

卷頭図版 6



a 遺跡出土土器質土器



b 遺跡出土輸入磁器

例　　言

1. 本書は、平成12（2000）年度に実施した東本通地区土地区画整理事業に係る三太刀遺跡（豊田郡本郷町大字本郷所在）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、本郷町との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は梅本健治、原田圭介（現・三次市立三次中学校）が担当した。
4. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、梅本、原田が中心となって行った。
5. 本書は、梅本が執筆・編集した。
6. 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。
S B ; 堀立柱建物跡, S A ; 構造跡, S K ; 土坑, S E ; 井戸,
S X ; その他の遺構・性格不明の遺構, S D ; 溝状遺構, P ; 柱穴
7. 土器の断面については、須恵器・須恵質土器は黒ヌリ、そのほかは白ヌキである。
8. 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
9. 本書に使用した北方位は第1・2図を除いて、すべて磁北である。
10. 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（三原・垣内・河内・竹原）を使用した。

11. 柱穴の根石等の石材は、考古地質学研究所 柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

12. 土師質土器の分類について

本遺跡の土師質土器（小皿・杯・皿・椀）の法量（口径・器高・低平度）の傾向は別表のようになる。法量の値には器種間で部分的な重複がみられるので、法量値による明確な器種分類は難しい。その部分は主に体部と底部の形態的特徴などにより補った。

分類の大きな基準としては、

- ①椀と杯・皿；体部・底部の形状（丸みの強い椀と直線的な体部と平底をもつ杯・皿）による。
- ②小皿と杯・皿；口径の大小による。口径10cm未満を小皿、口径10cm以上を杯・皿とした。
- ③杯と皿；低平度による。低平度0.30未満を皿、0.30以上を杯とした。

表 三太刀遺跡出土土師質土器の法量

器種	口径cm	器高cm	低平度	
小皿	平均値 最小～最大	7.50 5.4～9.7	1.70 0.85～3.1	0.23 0.12～0.47
	集中域*	6.5～8.2	1.2～2.3	0.15～0.33
	平均値 最小～最大	11.10 8.7～14.3	3.60 2.9～4.4	0.32 0.25～0.40
杯	平均値 最小～最大	10.5～11.5	3.1～4.0	0.30～0.36
	平均値 最小～最大	12.39 9.8～20.5	2.99 2.05～4.1	0.25 0.17～0.29
	集中域*	10.9～13.0	2.5～3.2	0.20～0.29
皿	平均値 最小～最大	10.26 8.5～12.45	3.25 2.4～4.1	0.32 0.26～0.41
	平均値 集中域*	10.0～10.9	2.8～3.6	0.28～0.35
	平均値 最小～最大	10.26 8.5～12.45	3.25 2.4～4.1	0.32 0.26～0.41

* 点数が多い法量値の範囲。

目 次

Iはじめに	(1)
II位置と環境	(2)
III調査の概要	(8)
IV遺構と遺物	
1. A区の遺構.....	(13)
2. B区の遺構.....	(26)
3. C区の遺構.....	(53)
4. D区の遺構.....	(61)
5. 包含層出土の遺物	(71)
6. ③層出土の遺物	(91)
7. 調査区出土の遺物	(105)
Vまとめ	(127)

卷頭図版目次

卷頭図版 1 a A区全景（南から）	b A区全景（東から）
卷頭図版 2 a S A 3 P 4 柱根（南から）	b B区全景（北西から）
卷頭図版 3 a B区全景（南から）	b S E 1（西から）
卷頭図版 4 a S E 1（西から）	b S E 1出土土器
卷頭図版 5 a S B 11（東から）	b S K 4 土器出土状況（南から）
卷頭図版 6 a 遺跡出土土師質土器	b 遺跡出土輸入磁器

挿図目次

第1図 三太刀遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(3)
-----------------------------------	-----

第2図	周辺地形図 (1:2,000)	(9)
第3図	調査区遺構配置図 (1:200)	(折込み)
第4図	A区遺構配置図 (1:100)	(14)
第5図	A区SB1実測図 (1) (1:60)	(15)
第6図	A区SB1実測図 (2) (1:30, 1:60)	(15)
第7図	A区SB2実測図 (1:30, 1:60)	(17)
第8図	A区SB3実測図 (1) (1:60)	(折込み)
第9図	A区SB3実測図 (2) (1:30, 1:60)	(19)
第10図	A区横列跡実測図 (1:30, 1:60)	(22)
第11図	A区単独柱穴実測図 (1:30, 1:60)	(24)
第12図	A区遺構出土土器実測図 (1:3)	(25)
第13図	B区遺構配置図 (1:100)	(折込み)
第14図	B区SB4・SB5実測図 (1) (1:60)	(折込み)
第15図	B区SB4・SB5実測図 (2) (1:30)	(29)
第16図	B区SB6実測図 (1:30, 1:60)	(折込み)
第17図	B区SB7実測図 (1:30, 1:60)	(折込み)
第18図	B区SB8・SB9実測図 (1:30, 1:60)	(33)
第19図	B区SB10実測図 (1:60)	(34)
第20図	B区横列跡実測図 (1:60)	(35)
第21図	B区単独柱穴実測図 (1:30, 1:60)	(37)
第22図	B区遺構出土土器実測図 (1:3)	(38)
第23図	B区SX1実測図 (1:60)	(折込み)
第24図	B区SX1出土土器実測図 (1) (1:3)	(41)
第25図	B区SX1出土土器実測図 (2) (1:3)	(42)
第26図	B区SE1実測図 (1:30)	(44)
第27図	B区SE1出土土器実測図 (1:3)	(47)
第28図	B区SK1実測図 (1:30)	(48)
第29図	B区SK1出土土器実測図 (1:3)	(49)
第30図	B区SK1出土瓦・鉄製品実測図 (1:2, 1:4)	(50)
第31図	B区SK2・SK3実測図 (1:30)	(51)
第32図	C区遺構配置図 (1:100)	(54)
第33図	C区SB11・SB12実測図 (1:60)	(56)
第34図	C区単独柱穴実測図 (1:30, 1:60)	(57)
第35図	C区SK4実測図 (1:30)	(58)
第36図	C区遺構出土土器実測図 (1) (1:3)	(60)

第37図	C区遺構出土土器実測図（2）(1:3)	(61)
第38図	D区遺構配置図 (1:100)	(折込み)
第39図	D区S B 13実測図 (1:60)	(折込み)
第40図	D区S A 8・S A 9実測図 (1:30, 1:60)	(64)
第41図	D区S X 2実測図 (1:30)	(66)
第42図	D区遺構出土土器実測図（1）(1:3)	(67)
第43図	D区遺構出土土器実測図（2）(1:3)	(69)
第44図	D区遺構出土土器実測図（3）(1:3)	(70)
第45図	A区包含層出土土器実測図（1）(1:3)	(73)
第46図	A区包含層出土土器実測図（2）(1:3)	(74)
第47図	A区包含層出土土器実測図（3）(1:3)	(77)
第48図	A区包含層出土土器実測図（4）(1:3)	(78)
第49図	A区包含層出土土器実測図（5）(1:3)	(79)
第50図	A区包含層出土土器実測図（6）(1:3)	(80)
第51図	A区包含層出土土器実測図（7）(1:3)	(81)
第52図	A区包含層出土土器実測図（8）(1:3)	(82)
第53図	C区包含層出土土器実測図（1）(1:3)	(87)
第54図	C区包含層出土土器実測図（2）(1:3)	(88)
第55図	C区包含層出土土器実測図（3）(1:3)	(89)
第56図	A区③層出土土器実測図（1）(1:3)	(93)
第57図	A区③層出土土器実測図（2）(1:3)	(94)
第58図	A区③層出土土器実測図（3）(1:3)	(97)
第59図	A区③層出土土器実測図（4）(1:3)	(98)
第60図	B・C区③層出土土器実測図 (1:3)	(101)
第61図	C・D区③層出土土器実測図 (1:3)	(102)
第62図	調査区内出土土器実測図（1）(1:3)	(109)
第63図	調査区内出土土器実測図（2）(1:3)	(110)
第64図	調査区内出土土器実測図（3）(1:3)	(111)
第65図	出土土製品実測図 (1:2)	(113)
第66図	出土瓦実測図 (1:4)	(114)
第67図	出土石製品実測図 (1:2, 1:3)	(115)
第68図	出土鉄製品実測図 (1:2)	(116)
第69図	出土古錢拓影 (2:3)	(116)
第70図	出土木製品実測図 (1:4)	(116)

表目次

第1表 遺構一覧表	(11)
第2表 遺構別遺物一覧表	(折込み)
第3表 遺物一覧表	(117)

図版目次

図版 1	a 遺跡遠景（空中写真、南東から）	図版 6	a A区 S A 3 P 2（南西から）
	b 遺跡全景（空中写真、南東から）		b A区 S A 3 P 3（南から）
	c 遺跡近景（南東から）		c A区 S A 3 P 4（南から）
図版 2	a 遺跡全景（南西から）		d A区 S A 3 P 4（南から）
	b 遺跡全景（空中写真、南西から）		e A区 S A 4 P 1（北東から）
	c 遺跡全景（空中写真、北から）		f A・P 1（北東から）
図版 3	a A区全景（東から）		g A・P 4（東から）
	b A区 S B 1（北から）		h A・P 6（東から）
	c A区全景（南から）	図版 7	a A・P 7（南西から）
図版 4	a A区 S B 1 P 3（北東から）		b A・P 9（南から）
	b A区 S B 1 P 4（南東から）		c A・P 10（北西から）
	c A区 S B 2 P 2（西から）		d A・P 13（南西から）
	d A区 S B 2 P 4（南西から）		e B区全景（西から）
	e A区 S B 3 P 2（南東から）		f B区全景（北西から）
	f A区 S B 3 P 3（北東から）	図版 8	a B区全景（北西から）
	g A区 S B 3 P 4（北から）		b B区 S B 4・S B 5（南東から）
	h A区 S B 3 P 5（南東から）		c B区 S B 4・S B 5（南東から）
図版 5	a A区 S B 3 P 10（西から）	図版 9	a B区全景（南から）
	b A区 S B 3 P 11（東から）		b B区 S B 7～S B 9（北東から）
	c A区 S B 3 P 12（南東から）		c B区全景（北東から）
	d A区 S B 3 P 13（東から）	図版 10	a B区 S B 4 P 2（北から）
	e A区 S B 3 P 14（南から）		b B区 S B 4 P 3（南から）
	f A区 S B 3 P 17（南東から）		c B区 S B 4 P 4（東から）
	g A区 S B 3 P 18（南東から）		d B区 S B 4 P 5（南から）
	h A区 S B 3 P 19（南東から）		e B区 S B 5 P 4（東から）

図版10	f B区SB5P5 (東から) g B区SB5P10 (南東から) h B区SB6P8 (南東から)	図版14	a B区SX1 (北東から) b B区SE1 (南西から) c B区SE1 (南西から)	
図版11	a B区SB6P10 (南から) b B区SB7P1 (下石, 北東から) c B区SB7P2 (南東から) d B区SB7P3 (南東から) e B区SB7P5 (上石, 南から) f B区SB7P4 (南東から) g B区SB7P5 (下石, 南東から) h B区SB7P6 (北東から)	図版15	a B区SE1 (掘り下げ前, 北西から) b B区SE1 (方形高まり土層, 南西から) c B区SE1 (中層礫群, 南西から) d B区SE1 作業風景 (南西から) e B区SE1 作業風景 (西から) f B区SE1 (東側背後, 東から)	
図版12	a B区SB7P7 (北東から) b B区SB7P13 (北西から) c B区SB7P9 (北東から) d B区SB7P13 (北西から) e B区SB7P18 (北東から) f B・P1 (南東から) g B・P7 (北東から) h B・P10 (東から)	図版16	a C区全景 (北西から) b C区全景 (北から) c C区SK4 (南東から) d C区SK4 (南から) e D・P1 (北西から) f D区全景 (北西から) g D区SB13 (西から)	
図版13	a B区SK1 (北から) b B区SK1 (北から) c B区SK1 遺物出土状況 (南から) d B区SK1 遺物出土状況 (西から) e B区SK2 (北から) f B区SK3 (南から) g B区SA5・SD5 (東から) h B区SA6 (西から)	図版18	出土遺物 (1) 土器類 図版19 図版20 図版21 図版22 図版23 図版24 出土遺物 (2) 土器類 出土遺物 (3) 土器類 出土遺物 (4) 土器類 出土遺物 (5) 土器類 出土遺物 (6) 土器類 出土遺物 (7) 土器類・土製品・ 古錢 図版25 図版26	出土遺物 (8) 瓦 出土遺物 (9) 石製品・鉄製品

I はじめに

三太刀遺跡の発掘調査は東本通地区土地区画整理事業に係るものである。本事業は、広島空港をはじめとする空陸の交通条件に恵まれた本郷町市街に東接する利便性の高い東本通地区において、急速な宅地化に伴って防災面などの様々な問題が想定されるなかで、先行的な都市基盤整備や土地利用の増進を図り、ひいては広島県の空の玄関口に相応しい町づくりを進めようとするものである。

本郷町（都市計画課）は、平成5（1993）年7月20日付けて、当該事業地内の文化財等の有無及び取り扱いについて、本郷町教育委員会（以下、「町教委」という。）に協議した。町教委と広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）はこれを受けて現地踏査を行い、同年12月町教委から本郷町に、事業地内に試掘調査が必要な箇所が1か所（周知の遺跡である三太刀遺跡・三太刀城跡・みたち古墳群が存在する三太刀山及び周辺全体）存在する旨を回答した。その後、この要試掘箇所の一部について試掘調査を実施し、三太刀遺跡（1,940m²）及びみたち第2・3号古墳を確認した旨、平成6（1994）年9月県教委から町教委あてに回答があった。これらのうち、三太刀遺跡について、本郷町は平成11（1999）年11月10日付けて県教委に大字本郷3824, 3825-2の一部、3827, 3828, 3830, 3870（A・B・D区、1,465m²）の文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を提出した。また、南接する大字本郷3817-1, 3818, 3819, 3820-2, 3825-1, 3825-2（C区、400m²）については、平成12年8月県教委・町教委によって試掘調査が実施されて遺跡の確認が行われ、同年9月14日付けて本郷町は県教委に文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を提出した。これら三太刀遺跡（1,865m²）について、県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下、「センター」という。）が発掘調査を実施することが適当であるとし、これを受け本郷町はセンターと平成12（2000）年6月12日付けて委託契約を結び、同年8月28日から平成13（2001）年1月26日までの約5か月間発掘調査を行った。なお、平成12（2000）年12月16日には本郷町教育委員会と共に遺跡見学会を開催し、約180名の参加を得た。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、本郷町都市計画課、本郷町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

II 位置と環境

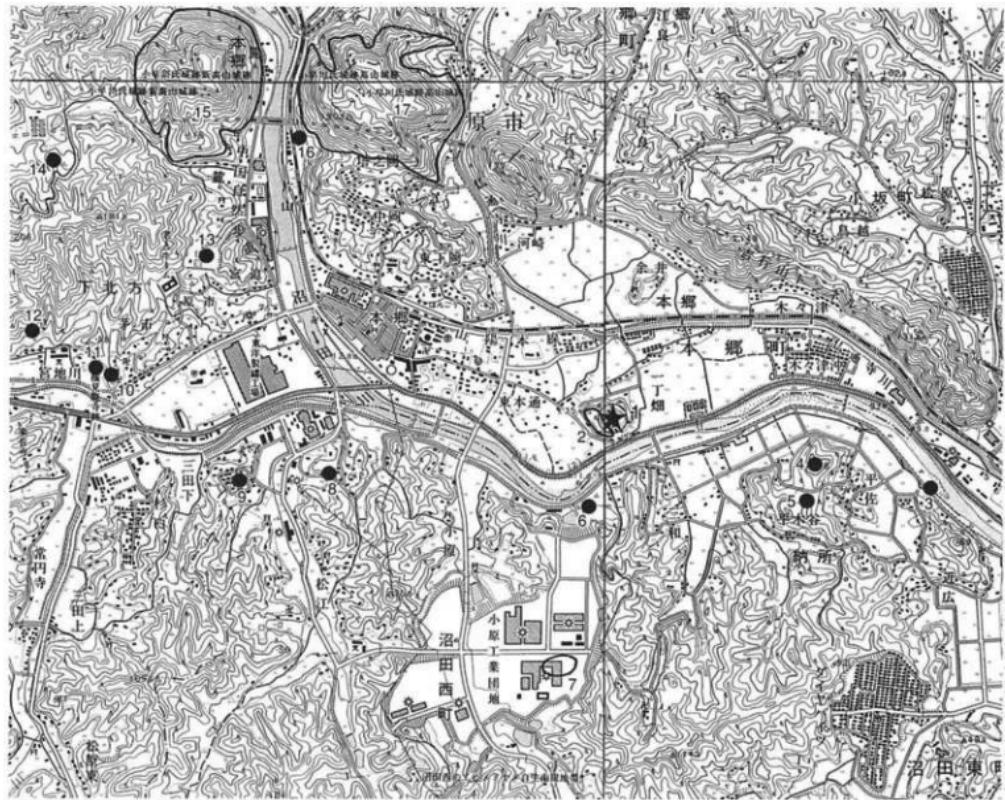
三太刀遺跡は豊田郡本郷町大字本郷に所在する。本郷町は広島県中央部の瀬戸内沿岸に近い町で、町域北半を北西から南東方向に沼田川が流れ、やがて瀬戸内海に注ぐ。沼田川以北と南岸の支流尾原川以西には町域の大半を占める標高300~400m台の低丘陵が広がり、尾原川の南東側には三原市沼田西町・沼田東町に連なる標高100m台の一段低い山地部が展開する。沼田川と尾原川沿いに狹小な谷底平野がみられ、なかでも、本郷町市街の東方に広がる平野が比較的広く、その沼田川沿いの一角に三太刀遺跡が存在する。この平野は氾濫原に起因しており、沼田川の旧河道や自然堤防を残す。本郷町は安芸国と備後国の国境に近く、瀬戸内海や旧山陽道に接するところからも、政治的、社会的に古来要衝の地であり、尾原川沿いの巨石墳や家形石棺をもつ古墳に代表されるように多くの遺跡や古墳が存在する。ここでは、調査された遺跡を中心に本郷町及び三原市西部の歴史的環境について見て行くこととする。

旧石器時代 沼田川河口から3kmほど沖合いの瀬戸内海に浮かぶ小島宿祢島で採集された貝岩製の搔器などがある。

縄文時代 縄文時代の遺跡の調査例は少なく、土器・石器などの採集例が大半を占める。早期の遺跡は海浜に面した標高10~20mの丘陵上に立地しており、三原市時貞遺跡、同古城遺跡がある。時貞遺跡では山形・楕円形の押型文土器のほか無文土器・条痕文土器や安山岩製のスクレイパーが、古城遺跡では条痕文土器・無文土器や安山岩製の石鎚・石錐が見つかっている。前・中期についてはよく分からぬが、後・晩期になると、沼田川下流域や三原湾岸の低地を望む丘陵の裾部に遺跡が立地し、低地への定着化が進む。後期の遺跡としては、三原市大串遺跡と本郷町宮地川遺跡がある。前者は磨消繩文や沈線文をもつ土器が主体で、その他に安山岩製の不定形刃器が出土した。後者は横見廃寺下層出土の無文土器を主体とする後期初頭の土器群である。三原市貝持貝塚は標高23mの丘陵裾部に立地する後・晩期の遺跡で、昭和37(1962)年に発掘調査が実施された。鹹水産や淡水産の貝類から成る貝塚が形成され、浅鉢形・鉢形・深鉢形の土器のほかに、石鎚や貝輪が出土している。

弥生時代 この時代の遺跡の調査例もそれほど多くない。前・中期の様子はよく分からぬが、後期の遺跡には調査を行われた本郷町陣べら遺跡群⁽¹⁾をはじめ、同じく舟木遺跡⁽²⁾や横見廃寺跡下層出土土器群⁽³⁾、陣開第3号古墳前面包含層出土土器群⁽⁴⁾などがある。

陣べら遺跡群は沼田川西岸の丘陵端部の尾根上に立地する集落跡・墳墓群で、竪穴住居跡2軒、土坑墓11基、壺棺墓2基などから成る。竪穴住居跡は弥生時代後期後半~末のもので、平面形は隅丸方形・方形で、4~8本柱である。4本柱の第2号住居は床面中央に深い柱穴状の掘り込みをもち、石鎚・砥石が出土している。墓坑群は10m四方の範囲に密集して営まれており、共同墓



第1図 三太刀遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

地的様相を呈している。その中で、第9号墓（木棺墓）は朱の副葬が見られ、指導者的人物の墓ではないかと考えられている。舟木遺跡は弥生時代後期の壺2個体分の胴下半部を合わせ口にして積石をしたもので、本来的には径約3m、高さ75cm程度の円墳状の積石塚であったと思われる。

横見廐寺跡下層出土土器群と陣開第3号古墳前面包含層出土土器群は、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての当地域の土器の変遷を探る上で貴重な資料である。器種的には壺・甕・鉢・高杯などから成り、壺などが在地的様相を示すのに対して、甕はタタキをもつ畿内第V様式のもので、畿内地域と当地域の密接な交流が考えられている。

古墳時代 この時代の遺跡としては古墳以外は分からぬ。

前期の古墳としては本郷町鍛冶屋追第4号古墳がある。全長21mの小型の前方後円墳で、後円部頂上の箱式石棺から中国・三国時代の画文帯神獸鏡や勾玉が出土している。4世紀末～5世紀初頭に築造されたと考えられている。三原市宮ノ谷第8号古墳は径10mの小型の円墳で、埋葬施設の木棺から内行花文鏡・鉄矛・刀子・碧玉製管玉が、棺外から鉄刀・鉄斧・土師器などが出土している。4世紀後半に築造時期が求められている。

中期の古墳には三原市鳩岡第1号古墳、同史跡兜山古墳などがある。両古墳は沼田川南岸に位置し、鳩岡古墳は径36.5mの大型の円墳で、粘土櫛を埋葬施設とする。この粘土櫛から土師器・高杯が出土し、墳丘には形象埴輪・円筒埴輪が廻る。時期は5世紀代に求められている。兜山古墳は径45mの県内最大級の円墳である。北側には方形の造り出しがあるが、埋葬施設は不明である。墳頂部と墳裾部に二重に円筒埴輪列が廻らされ、形象埴輪片も採集されている。5世紀後半代に築造されたと考えられている。この他、本郷町内では、箱式石棺を埋葬施設とする鍛冶屋追第1～3号古墳があり、5世紀代に築造されたと考えられている。福礼古墳は沼田川南岸の本郷町と三原市の境に位置する粘土櫛を埋葬施設とする径16～18mの円墳で、櫛内から鉄刀・刀子が、墳丘からは円筒埴輪が出土した。築造時期は5世紀中頃に求められている。本郷町陣開遺跡では5世紀代の箱式石棺2基がみつかっている。

後期になると横穴式石室が導入され、当地域でも6世紀後半以降、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が多く見られるようになる。陣べら第1号古墳⁽¹⁾は横穴式石室導入に先立つ古墳で、径8mの円墳である。木棺を埋葬施設とし、木棺内から鉄刀、周辺から須恵器・蓋杯、同・壺、土師器・壺が出土した。築造年代は6世紀前半に考えられている。

横穴式石室をもつ古墳で調査されたものとしては、三原市錢神古墳群（5基）、本郷町天高第1号古墳、同陣開古墳群⁽²⁾（4基）、同金壳古墳群⁽³⁾（2基）などがある。錢神古墳群は沼田川南岸の低丘陵の尾根線上や南斜面に築かれた古墳群で、石室背後に半円形の周溝を持つが、墳丘は明確ではない。いずれも石室内から棺台石や鉄釘が出土しており、木棺が納められていたと考えられる。土師器・須恵器のほかに鉄刀・刀子・耳環や馬具が出土している。第2号古墳の石室入口からは暗文の入った畿内系の土師器・杯が出土している。この古墳群は6世紀後半～7世紀代にかけて形成されたと考えられている。天高第1号古墳は比高15mほどの丘陵端部に築かれており、墳丘は不明確だが南方向に開口する石室内からは須恵器・高杯などが出土しており、7世紀代に

構築されたと考えられる。石室背後には小規模な周溝が存在し、周溝外から6世紀初頭頃の須恵器4点（杯身1・高杯3）と刀子1点がまとまって見つかっており、何らかの祭祀的意味合いが窺われる。陣開古墳群は沼田川右岸の隣接する2つの丘陵尾根上に立地する。西側の尾根の第1・2・4号古墳は尾根頂部に、第3号古墳は東側の尾根の西裾に築かれている。第2号古墳は現存長2.5m、幅・高さ1mの南に開口する横穴式石室を持ち、出土遺物は皆無に近い。構築年代は、石室の規模・構造から7世紀代に求められている。第3号古墳のみ立地が異なり、現存長3.3m、幅・高さ1.4mと規模の大きなほぼ南に開口する横穴式石室をもつ。石室内からは鉄釘・鉄刀・刀子・鎌のほかに、土師器・杯、同・皿、須恵器・杯蓋、同・高台付杯、同・台付長頸壺、同・台付短頸壺などの土器類が比較的まとまって出土している。ただ、これらの土器類は7世紀末～8世紀代に属するもので、本古墳に伴うというより再利用に際してのものと考えられ、本古墳の築造時期はその石室の規模や構造などから6世紀後半頃とみられる。金壳城跡内に存在する第4号古墳は後世の破壊により原状を殆ど留めず、ほぼ石室の床面のみが残存している。石室の長さは不明だが、幅1.4mと第3号古墳に近い規模とみられる。床面から杯蓋・杯身・堺・提瓶などの須恵器、刀子と滑石・ホルンフェルス製の紡錘車2点が出土しており、6世紀後葉～7世紀初頭の築造と考えられている。陣開第1・2・4号古墳が立地する尾根の西側の尾根急斜面に築かれた金壳第1・2号古墳は長さ3m、幅・高さ1m程度の小型の横穴式石室を持つもので、陣開第2号古墳同様、7世紀代に構築時期が求められている。

このように6世紀後半～7世紀代にかけて小・中規模の横穴式石室を埋葬施設とする径10m程度の古墳が盛んに営まれる一方で、尾原川左岸の丘陵裾を中心とした限られた地域では6世紀末～7世紀に史跡梅木平古墳、史跡御年代古墳、史跡貞丸第1・2号古墳、三原市溜箭古墳など巨石を用いた長大な横穴式石室をもつ古墳や石室内部に家形石棺を納める古墳など県内でも有数の規模・内容の古墳が築造されている。本郷町平坂古墳出土の台付鳥形瓶など沼田川流域を中心に特長的に分布する葬送儀礼用と考えられる異形須恵器などからも、その背後に在地の有力な勢力とは異なる、畿内政権と深い関わりをもつ官人的性格の強い豪族層がいるものと考えられる。

古代 10世紀に完成した倭名類聚抄によれば、律令制下当地域はほぼ沼田郡に該当し、のち北側の豊田郡に包括されるようになる。沼田郡域はのちの沼田荘域にはほぼ重なり、古代山陽道が北東から南西方向に貫き、現・三原市高坂町の馬井谷に比定される良駅と現・竹原市新庄町に所在したとされる都宇駅の中間の梨葉駅が現・本郷町下北方の茅ノ市に比定されている。この古代の遺跡としては、本郷町の毘沙門山下遺跡、史跡横見廃寺跡¹²、西野田経塚などがある。毘沙門山下遺跡は沼田川北岸の標高177mの毘沙門山南麓を造成中に県内最古とみられる素弁蓮華文の軒丸瓦片が見つかったもので、奈良県の奥山久米寺跡や豊浦寺跡出土瓦に類似することから飛鳥時代の寺院跡が存在する可能性が指摘されている。横見廃寺跡は沼田川南岸の尾原川と合流する地点の北側、茅ノ市近くの丘陵南麓に築かれた白鳳期の寺院跡で、7間×4間の講堂に比定される東方建物基壇、塔跡かとされる西方建物基壇、推定回廊跡、北辺築地跡が見つかっており、塔と講堂が東西に並ぶ西向きの四天王寺式伽藍配置をとるとされている。出土瓦に奈良県の山田寺や

法隆寺若草伽藍跡の瓦に類似したものがみられる一方、三次市寺町廃寺跡の水切りをもつ複弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、この寺院建立には中央の有力寺院や豪族と密接な関係をもつ地域の有力豪族の系譜を引く郡司層が深く関わっているとみられている。この横見廃寺跡周辺には西野田経塚・宮仕川経塚・法花行経塚などが集中する。西野田経塚は標高120mの丘陵先端に立地し、青銅製の經筒内から白銅製の瑞花双鳳八稜鏡、青銅製の秋草蝶鳥鏡、白磁・合子、ガラス製の小壺、古錢、金銅製金具、ガラス小玉、鐵製刀子が、また經筒を納めていた土坑内からは土師器、須恵器の杯・皿が出土した。平安時代末期のものと思われる。

中世 中世の当地域は、平安時代末期に成立する寄進地系荘園である沼田荘を舞台に地頭小早川氏の動向を中心に展開する。沼田荘は古代の豊田郡・沼田郡を主な荘域として成立し、開発領主である沼田氏が平氏系中央貴族に寄進したもので、沼田氏が平氏とともに滅亡後は平家没官領となつた。その後、京都蓮華王院が本家、西園寺家が領家となり、地頭には鎌倉御家人小早川氏が任命されて東国から西下した。特に、小早川茂平は有力御家人が任じられる在京奉公人として京に常駐し、荘園領主と結びつきを深めて在地支配力を強化した。嘉禎元（1235）年には三太刀遺跡の南方に不断念佛堂を建立し、同4（1238）年その仏龕灯油料田・修理田を得るために沼田川沿いの氾濫原である塩入荒野の開発を行うこととし、その許可を領家の西園寺家から得た。以後、室町時代にかけて干拓は進められ、「沼田千町田」ともいわれる広大な新田が完成した。

その後小早川氏は庶子家を多く分出しながら一族の統合・強化を図り、南北朝期の内乱を乗り切ると、室町時代には將軍奉公衆として將軍や幕府の権威を背景に一族の統合と領地の經營にあたり、小早川氏の大名領固化が進んだ。しかし、室町幕府の衰微とともにその勢力は陰りを見せ、惣領の相次ぐ若死にや内紛のために徐々に弱体化していった。そして、強大化した大内氏や尼子氏、やがては毛利氏などの圧力も加わり、最終的には中国一円領主である毛利氏に吸収されてその一族となる。

中世の遺跡としては、山城跡などがある。調査されたものとしては、本郷町の金壳城跡¹³、正広城跡があり、また小早川氏の本拠である史跡高山城跡・同新高山城跡をはじめ、永福寺城跡、小早川氏の一族梨羽氏の梨羽城跡、丸子山城跡、沼田氏の居城と伝えられる高木山城跡などがある。山城跡以外では、福礼古墳の墳丘の北裾で戦国期を中心とした時期の5基の中世墳墓（火葬1・土葬4）¹⁴が見つかっている。

註

- (1) 阵べら遺跡群発掘調査団「陣べら遺跡群発掘調査概報」 1971年
- (2) 潤見 浩「広島県豊田郡舟木遺跡」日本考古学協会編「日本考古学年報」9 1961年
- (3) 広島県教育委員会「安芸横見廃寺の調査」II 1973年
- (4) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第3号古墳」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(X) 1994年
- (5) 広島県教育委員会「福礼古墳発掘調査報告」 1973年
- (6) 豊田郡本郷町教育委員会「陣開遺跡」 1993年
- (7) 註(1)と同じ。
- (8) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「銭神第1・3号古墳発掘調査報告書」 1986年

- 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『錢神第2・4・5号古墳発掘調査報告書』 1987年
(9) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『天高第1号古墳』 1983年
(10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『陣開第2号古墳』『金壳・陣開』 1994年
註(4)と同じ。
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『陣開第4号古墳』『金壳・陣開』 1994年
(11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金壳古墳群』『金壳・陣開』 1994年
(12) 広島県教育委員会『安芸横見廬寺の調査』I～III 1972～1974年
(13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金壳城跡』『金壳・陣開』 1994年
(14) 本郷町教育委員会『正広城跡』 1992年
(15) 註(5)と同じ。

参考文献

- ・広島県『広島県史』中世 通史Ⅱ 1984年
- ・後藤陽一監修『広島県の地名』 平凡社 1982年
- ・本郷町史編纂委員会編『本郷町史』通史編 1996年
- ・石井 進『日本史の社会集団3 中世武士団』 小学館 1990年
- ・三原市役所編『三原市史』第一巻通史編一 1977年

III 調査の概要

三太刀遺跡は豊田郡本郷町東端の三原市との境付近に位置する中世集落跡である。本郷町市街の東側には東西2.5km、南北1.3kmの沼田川の氾濫原に起因する沖積平野が広がり、本遺跡はその中央部南端の独立丘陵（三太刀山）の一角に存在する。南100mに近接して沼田川が東流し、やがて瀬戸内海に注ぐ。

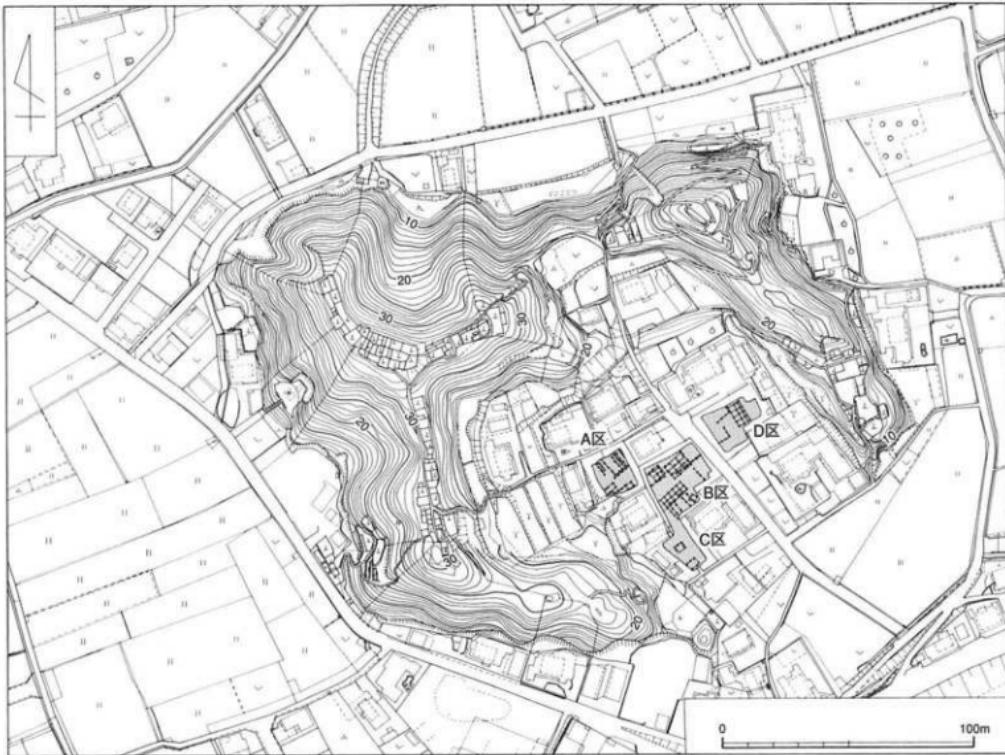
三太刀山（標高35.4m）は東西280m、南北200m、周囲の水田面からの比高20~30mの小丘陵で、内側に東西160m、南北120mの平坦地（標高は丘陵周囲の水田面と同じく、数~10m）が存在する。丘陵の南東側が幅10mほど途切れたコ字形の平面形をなす。

三太刀遺跡はこの三太刀山内部の平坦地を中心的存在する。現況は宅地と畑地から成っており、今回はその中央部の畑地10枚程度を対象に調査を実施した。調査区は大きく4か所に分かれ、便宜的に西から東にA~D区と呼称する。現地表面は北西から南あるいは東方向に緩やかに下っており、その高低差はおよそ2mである（標高8.2~10.5m）。現地表面から1~2mの深さにある遺構面が砂地で脆弱であり、堆積土も崩落しやすいため、調査区際から幅2~3mの安全帯を残し、またかなり緩やかな法面を設けて掘り下げを行った。遺構面間近まで重機（ミニバックホー）により掘り下げを行ったが、排土量が予想外に多く、調査計画の修正を余儀なくされた。

調査区の基本層序は上から、①耕作土（厚さ約30~40cm）、②床土（暗黄褐色砂質土・暗灰褐色砂質土、厚さ約20~50cm）、③暗灰色砂質土（以下、便宜的に③層とする。厚さ約20~50cm）で、遺構面に至る。遺構面の傾斜や高低差は地表面のそれと同じく、ほぼ北西から南東方向に緩やかに下傾している（標高6.5~8.5m）。遺構面は基本的に（茶）褐色砂質土・黄褐色砂質土層といったしまりの良い土層の上面であるが、概して調査区南寄りでは遺構面の形成が脆弱で、多くの場合下位の砂層に近い灰黄色砂質土などが露出しており、遺構は殆ど存在しない。また、湧水面がA区では遺構面と同じレベルかやや上位にあり、B区南東部やC区南東部、D区南半でも遺構面下の比較的浅いところに存在するため、遺構の残存状況は概して良くない。

A区北西部やC区北西部・南東部では、③層の暗灰色砂質土と遺構面の間に厚さ40cm程度の包含層（灰黒色砂質土・暗灰色砂質土層）が介在し、夥しい量の土師質土器が出土した。また、A区の③層からもかなり多くの遺物が出土した。A・C区包含層（283点・35.8%）とA~D区③層（185点・23.4%）からの遺物出土量は、報告遺物に限っても全体の6割に達する。一方で、柱穴など遺構に伴う遺物の出土量は241点・30.5%と1/3程度であるが、その多くは溝やS X 1からの出土で、建物などの柱穴から出土した遺物は71点・9%と全体の1割にも満たない。

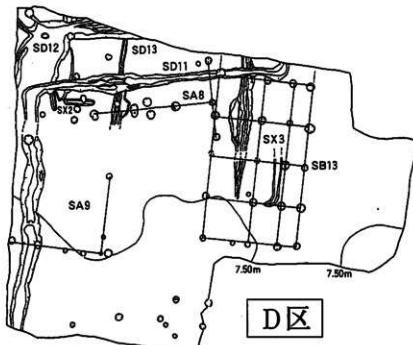
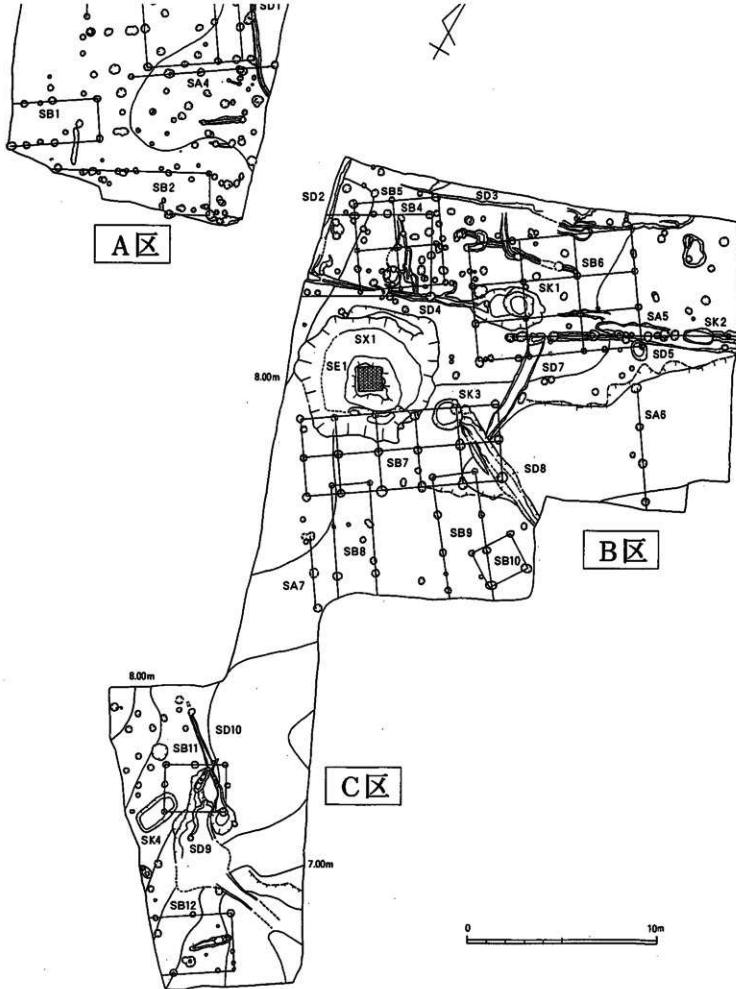
検出した遺構の内訳は、掘立柱建物跡13棟、柵列跡9条、土坑4基、池状遺構1基、井戸1基、鍛冶遺構1基、性格不明の遺構1基、溝状遺構14条で、そのほか無数のピットがある。ピットのうち、建物を構成しないものの、根石や柱根、遺物の出土が見られるものや、土層観察によって



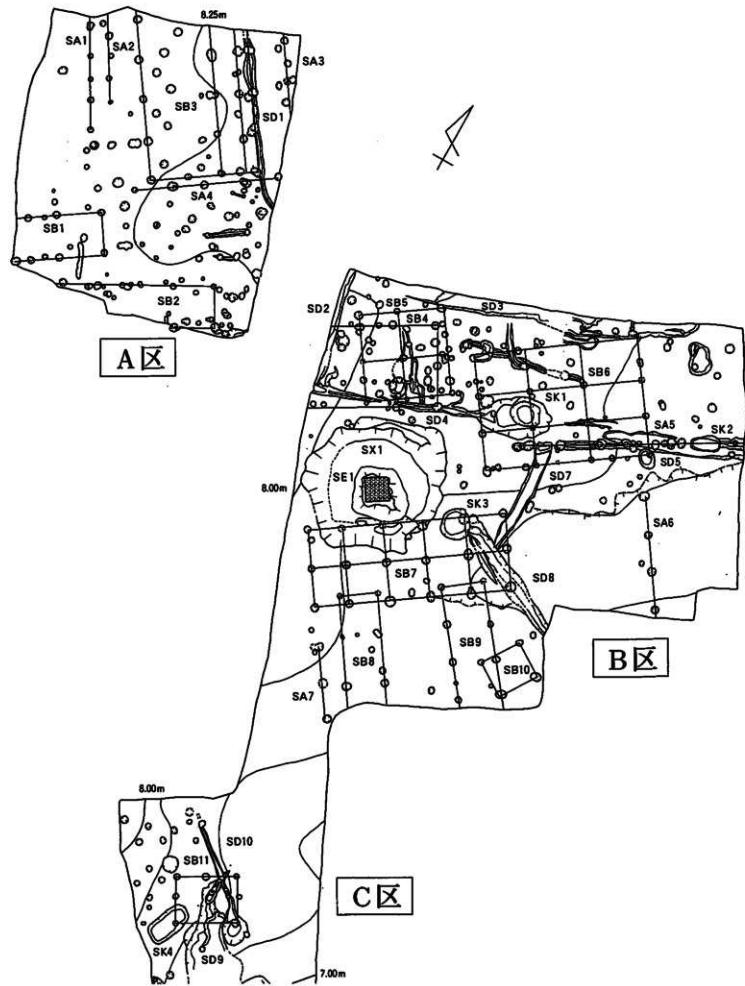
第2図 周辺地形図 (1:2,000) (アミ目は調査区を示す。)

柱痕跡が存在するものについては、単独柱穴として報告する（計32基）。

出土遺物の総量は大型コンテナ箱に満杯で20箱以上あるが、報告書では完形品及び1/2以上残存するものを中心に選び、計790点を掲載する。その内訳は、土師質土器（小皿・杯・皿・椀・鍋・擂鉢）、須恵質土器（椀・鍋・擂鉢）、瓦器（小皿・椀）、瓦質土器（鍋）、輸入磁器（青磁=皿・碗・合子蓋・香炉？、青白磁=皿・瓶？、白磁=皿・碗）、灰釉陶器（椀）、近世陶器（皿）、近世磁器（碗）、土師器（甕）、須恵器（杯蓋・杯身・杯・椀・皿・高杯）、土製品（管状土錘・有溝土錘・棒状土錘・輪羽口）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・瓦玉）、石製品（石鍋・硯・砥石・用途不明品）、鉄製品（斧・釘・刀子？・用途不明品）、古錢（嘉定通寶・紹聖元寶）、木製品である。



第3図 調査区観測配図 (1:200)



第1表 遺構一覧表

(1) 墓立柱建物跡 単位=「建物規模」・「柱間距離」; m, 「柱穴規模」・「柱根」・「柱痕跡」; cm, 「建物面積」; m² () ; 現存値

調査区	遺構No	主軸方位	間数	建物規模	建物面積	柱間距離			柱穴規模			根石	柱根	柱痕跡
						(桁行×梁行)	(桁行)	(長径)	(短径)	(深さ)				
A区	S B 1	N57° E	(2)間×1間	(4.9)×2.2	(10)	1.55~2.4	2.2	26~49	20~39	27~64	○	○柱6	○柱12~14	
	S B 2	N62° E	(4)間×(1)間	(8.0)×(2.0)	(10)	1.7~2.3	2.1	25~49	20~44	17~47	○			
	S B 3 身合	N34° W	(4)間×2間	(8.4)×3.7	(31)	1.9~2.2	1.7~1.9	26~62	25~43	20~57	○	○柱18	○柱14	
	S B 3 肥		(3)間×2間	(6.3)×1.8	(11)	1.9~2.3	0.8~1.0	26~62	24~50	10~73	○	○柱10	○柱10	
B区	S B 4	N59° E	(2)間×2間	(6.5)×4.2	(25)	1.6~2.3	2.1~2.2	30~48	29~41	15~50	○			
	S B 5	N54° E	(2)~(3)間×2間	(4.5)×(4.4)	(20)	2.0~2.3	1.1~2.6	23~50	20~42	12~49	○			
	S B 6	N55° E	3間×3間	8.5×6.1	52	2.2~3.1	1.9~2.3	26~53	25~45	11~60	○		○柱18	
	S B 7	N54° E	(5)間×2間	(10.2)×3.9	(40)	1.8~2.2	1.8~2.1	33~54	33~54	12~61	○		○柱12~17	
C区	S B 8	N33° W	(2)間×1間	(4.6)×1.9	(9)	2.2~2.5	1.9	26~48	19~42	18~74				
	S B 9	N37° W	(3)間×1間	(6.0)×2.2	(13)	1.9~2.3	2.2~2.3	30~51	26~38	15~38	○?			
	S B 10	N32° E	1間×1間	2.2×1.9	4	2.2	1.9	31~56	25~39	8~17				
	S B 11	N61° E	2間×2間	3.1×2.5	7.8	1.5~1.6	1.1~1.4	27~44	24~37	19~71				
D区	S B 12	N56° E	(2)間×(2)間	3.3~4×2.9	(10)	0.9~2.4	0.8~2.0	21~39	19~36	10~43				
	S B 13 身合	N23° W	(4)間×2間	(8.8)×3.9	(34)	2.1~2.2	1.4~2.5	24~50	24~43	13~52				
	S B 13 肥		(4)間×1間	(8.8)×0.9~1.0	(8)	1.9~2.1	0.9~1.0	31~48	30~48	11~61				

(2) 棚列跡 単位=「全長」・「柱間距離」; m, 「柱穴規模」・「柱根」・「柱痕跡」; cm, () ; 現存値

調査区	遺構No	主軸方位	間数	全長	柱間距離	柱穴規模			根石	柱根	柱痕跡
						(長径)	(短径)	(深さ)			
A区	S A 1	N28° W	4間	5.5	1.1~1.6	22~44	19~33	19~43			○柱3~4
	S A 2	N28° W	3間	3.4	1.0~1.3	20~36	15~36	22~41	○		
	S A 3	N30° W	3間	3.3	1.0~1.3	34~40	32~36	4~75	○	○柱16	
	S A 4	N46° E	4間	7.5	1.7~2.1	32~60	30~42	31~73			
B区	S A 5	N60° E	—	11.4	0.9~5.6	23~96	22~56	13~60			
	S A 6	N35° W	3間	5.8	1.9~2.0	38~46	33~46	18~28			
	S A 7	N35° W	2間	3.8	1.9	38~40	37~40	53~74			○柱12
D区	S A 8	N55° E	(3)間×(2)間	3.9, 6.2	1.8~2.2	30~44	28~44	19~67			
	S A 9	N66° E	4間×3間	4.0, 4.6	1.4~1.6	17~39	17~39	14~42			

(3) 墓独柱穴 単位cm *「土」; 土師質土器, 「瓦」; 瓦器 (数字は遺物番号)

調査区	遺構No	長径	短径	深さ	根石	柱根	柱痕跡	出土遺物*		
A区	A · P 1	30	—	52				○柱10		
	A · P 2	64	43	60				土·小皿(23)		
	A · P 3	52	47	29				土·小皿3(24~26)		
	A · P 4	44	40	19	○					
	A · P 5	42	38	21	○					
	A · P 6	40	34	32	○					
	A · P 7	36	34	28	○					
	A · P 8	22	20	7				土·小皿(27)		
	A · P 9	46	42	53	○					
	A · P 10	59	56	47				土·小皿3(28~30)		
	A · P 11	40	30	44				土·碗(31)		
	A · P 12	34	—	12				土·小皿(32)		
	A · P 13	46	—	21	○					
	A · P 14	47	42	13				土·小皿(33), 鉄釘(780)		
B区	B · P 1	38	36	36	○					
	B · P 2	68	—	37				土·小皿4(45~48), 同·皿(49), 同·椀(50), 瓦·椀(51)		
	B · P 3	24	—	28				鉄釘(766)		
	B · P 4	26	24	42				土·小皿(52)		
	B · P 5	28	—	23				鉄釘(777)		
	B · P 6	23	—	19				鉄釘(784)		
	B · P 7	70	60	40	○			土·小皿(53), 同·皿(54)		
	B · P 8	41	37	38				瓦·小皿(55)		
C区	B · P 9	39	32	51				○柱12		
	B · P 10	26	23	16	○					
	B · P 11	34	28	20				棒状土鍤(730)		
	B · P 12	69	54	17				土·杯(56)		
D区	D · P 1	35	33	29	○					

(4) 池状遺構 単位m

調査区	遺構No	長さ	幅	深さ	備考
B区	S X 1	7.40	7.00	1.65	S E 1に伴う、平面不整方形

(5) 井戸 単位m

調査区	遺構No	平面規模(内法)	深さ	備考
B区	S E 1	一辺1.0	2.4	擬板組隅柱構造型木組井戸

(6) 土坑 単位m

調査区	遺構No	長さ	幅	深さ	備考
B区	S K 1	3.80	2.20	1.10	井戸か
	S K 2	1.73	0.42~0.78	0.55	主軸方位N60° E、墓か
	S K 3	1.62	1.50	0.67	
C区	S K 4	2.42	1.10~1.25	0.08~0.22	主軸方位N20° E、墓

(7) 錫冶遺構 単位m, () ; 現存値

調査区	遺構No	長さ	幅	深さ	備考
D区	S X 2	炉穴 径0.32	0.09	溝状遺構には炭が充満。周辺から鉄滓・輪羽口・鉄斧出土	

(8) 性格不明の遺構 単位m

調査区	遺構No	長さ	幅	深さ	備考
D区	S X 3	2.60	0.42	0.16~0.24	

(9) 溝状遺構 単位m, () ; 現存値

調査区	遺構No	長さ	幅	深さ
A区	S D 1	9.00	0.20~0.50	0.01~0.04
	S D 2	6.20	(0.40)	0.16~0.23
	S D 3	15.20	(0.96)	0.01~0.15
	S D 4	8.40	0.04~0.52	0.04~0.32
	S D 5	12.20	0.20~1.10	0.03~0.13
	S D 6	2.40	0.18~0.40	0.01~0.06
	S D 7	5.80	0.32~0.86	0.01~0.12
	S D 8	6.80	0.54~1.16	0.15~0.46
C区	S D 9	11.00	0.50~2.00	0.20~0.30
	S D 10	6.50	0.15~0.30	0.01~0.09
D区	S D 11	26.60	0.35~1.06	0.07~0.40
	S D 12	6.20	1.10	0.10~0.19
	S D 13	4.40	0.15~0.47	0.01~0.07
	S D 14	7.40	0.12~1.22	0.01~0.18

第2表 遺構別遺物一覧表（数字は遺物番号）

調査区	由土制版・道標	路製品3点			古墳2点			木製品3点			小計				
		斧1点	打20点	刀子?2点	用途不明品7点	墓定遺寶1点	御室元寶1点	円板状1点	帽子型1点	柄子型1点	柄1点	土器類	中後	中後以外	
A区	伝令印	767.768(2点)			787(1点)							217	7	224	
	③ 破	773.775(2点)			761.762(2点)							128	12	140	
	S 8.1											1	5	6	
	擬立柱建物跡											3	3	3	
	S 9.2											13	13	13	
	S 9.3														
	假列席											1	1	1	
	S A 3											1	1	1	
	S A 4											1	1	1	
	A P 2											1	1	1	
	A P 3											3	3	3	
	A P 8											1	1	1	
	A P 10											3	3	3	
	单継往穴											1	1	1	
	A P 11											1	1	1	
B区	A P 12											1	1	1	
	A P 14	780(1点)										1	1	2	
	道 横	1		—		—		—				33	2	35	
	道標外	4		2		1						345	19	364	
	小 計	5		2		1						376	0	399	
	③ 破											4	1	5	
	S 8.4	774(1点)										1	1	1	
	擬立柱建物跡											4	2	6	
	S 8.5											2	1	3	
	S 8.7											1	1	1	
	S 8.9											3	3	3	
	假列席											3	3	3	
	S A 5											7	4	11	
	土 墓	S K 1	123(1点)									35	7	42	
	遺状遺物	S X 1	778(1点)	756(1点)								16	16	16	
	斧 戸											2	2	2	
C区	S D 2											1	1	1	
	S D 3											2	1	3	
	S D 5											2	1	3	
	S D 6											2	1	2	
	S D 8											1	1	1	
	B P 2											7	7	7	
	B P 3	766(1点)										1	1	1	
	B P 4											1	1	1	
	B P 5											1	1	1	
	单継往穴	B P 6	784(1点)									1	1	1	
	B P 7											2	1	2	
	B P 8											1	1	1	
	B P 9											1	1	1	
	B P 11											1	1	1	
	B P 12											1	1	1	
D区	小 計	5	1	1								79	7	82	
	道 横	—	—	—								4	—	1	
	道標外	—	—	—								43	7	43	
	斧 戸	5	1	1								82	7	93	
	台形											57	2	59	
	③ 破	779(1点)	784(1点)									25	1	24	
	④ 破	782(1点)			786(1点)							3	3	3	
	擬立柱建物跡	S B 11										6	1	6	
	土 墓	S K 4										2	1	2	
	遺状遺物	S D 9										19	2	21	
	木製品	S D 10	778.783(2点)									30	2	32	
	小 計	2	—	—								79	4	83	
	道 横	2	—	—								109	0	109	
	道標外	—	—	—								15	4	19	
	斧 戸	4	1	1								43	1	44	
	③ 破	785(1点)										53	9	62	
	擬立柱建物跡	S B 13										—	—	—	
	假列席	S A 8										1	1	1	
	地盤不明の遺物	S X 3													
D区	木製品	769~772													
	木製品	S D 11	787(1点)	781(5点)		785(1点)						53	9	62	
	道 横	1	5	1								95	10	95	
	道標外	—	—	—								12	4	16	
	斧 戸	1	6	1								68	0	68	
調査区		759(1点)	780.783(2点)			788(1点)	789(1点)	790(1点)				54	16	11	81
遺構外土		1	13	1	2	—	—	—	—	—		186	7	186	241
遺構外出土		—	7	1	5	1	1	1	1	1		494	16	494	549
B区		1	20	2	7	1	1	1	1	1		692	23	751	792

IV 遺構と遺物

1. A区の遺構（第4図、図版3）

A区は調査区の北西に位置し、東西13.6m、南北16mのほぼ正方形を呈する。南東側約5mにB区、南約25mには民家を介してC区が存在する。三太刀山の西側の丘陵裾から40mほどの距離にある。西・東・南の三方には民家が迫り、北側の丘陵南裾にも東西に延びる狭い生活道を挟んで複数の民家が存在する。現況は南北方向に長い畠が2枚段差をもって東西に並び、南西隅には3m×7mの広さの一段高い荒地がある。現地表面（標高9.5~10.5m）から遺構面までの深さは西側で2.1m、東側で1.5mと今回の調査区のなかでは最も深い。

基本層序は、上から①耕作土（厚さ15~40cm）、②床土（暗黄褐色砂質土、厚さ30~50cm）、③暗灰色（暗黃灰色）砂質土（厚さ40~75cm）、④包含層（灰黒色あるいは暗灰色砂質土、厚さ40cm）を経て、遺構面（黄褐色あるいは暗茶褐色砂質土層上面）に達する（西半では包含層の下に厚さ30cmの⑤暗青灰色砂質土が存在する）。湧水は、西半では④層と⑤層の境付近から、東半では遺構面付近から始まる。包含層は北半、特に北西部に顯著にみられ、南半では殆どみられない。遺構面は西半南側と東半全域を中心に存在する。包含層以外に③層でも多量の土師質土器が出土した。

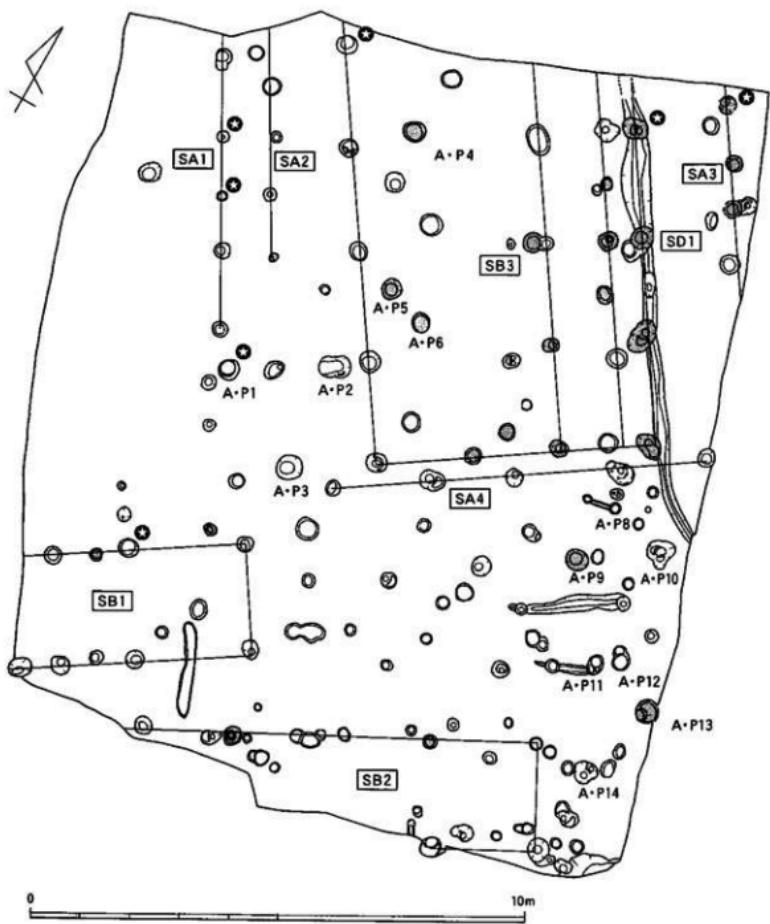
検出遺構は、掘立柱建物跡3棟（SB1~3）、柵列跡4条（SA1~4）、単独柱穴14基（A・P1~14）、溝状遺構1条（SD1）がある。南半のSB1・SB2は東西方向に主軸をもつ掘立柱建物跡で、北東側のSB3は南北方向に主軸をもつ大型の掘立柱建物跡である。柵列跡はいずれもこのSB3の周囲に沿うように存在することから、両者の関連性は強いと考えられる。SD1はSB3東面庇の東辺の柱穴列と重複して掘り込まれており、調査区外に延びている。

（1）掘立柱建物跡

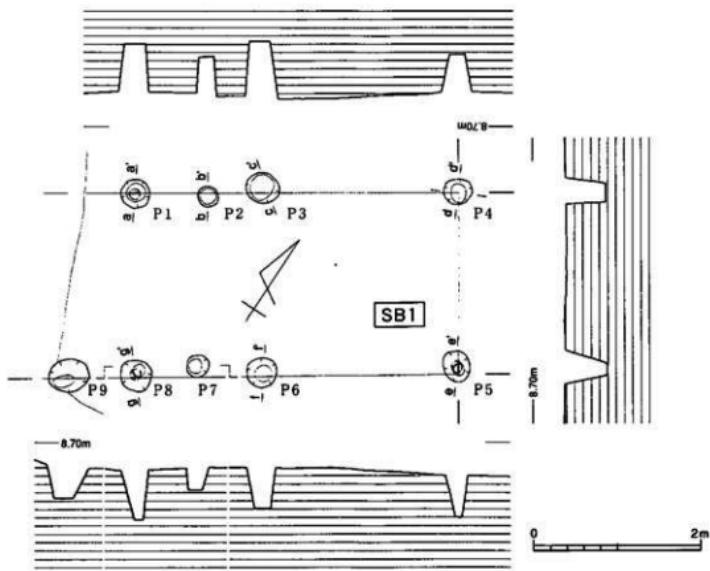
3棟を検出した。いずれも調査区外に延びており、その全容を窺うことはできないが、建物の主軸がほぼ東西方向を指す2棟（SB1・SB2）と南北方向を指す1棟（SB3）がある。

①SB1（第5・6図、図版3・4）

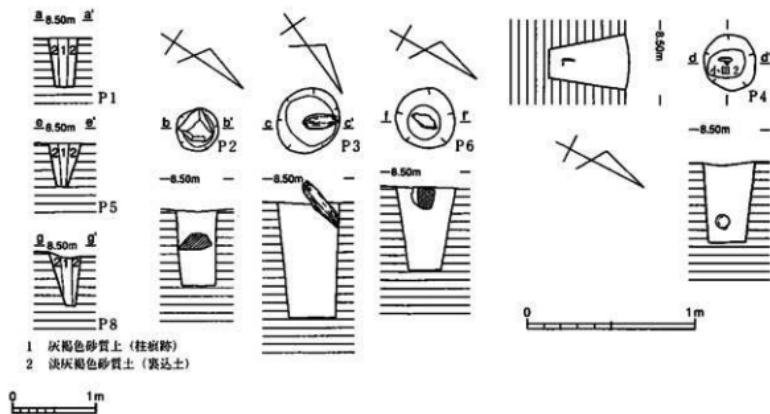
調査区南西隅で検出した桁行2間+α（北辺P1-（P2）-P3-P4、南辺（P9）-P8-（P7）-P6-P5）、梁行1間（P4-P5）の建物跡で、西端が調査区外に延びる。建物の主軸は西南西-東北東を指す（N57°E）。桁行方向（現存規模）4.9m、梁行方向2.2m、建物面積（現存規模）約10m²の平面長方形の建物跡である。各柱間距離は、桁行方向北辺のP1-P3間が1.55m（P1-P2間は0.9m、P2-P3間は0.65m）、P3-P4間が2.4m、南辺はP8-P6間が1.55m（P8-P7間は0.75m、P7-P6間は0.8m）、P9-P8間が0.9m、P6-P5間が2.4mであ



第4図 A区造構配置図(1:100)(アミ目は根石、星印は柱根をもつ柱穴を示す。)



第5図 A区SB1実測図(1) (1:60) (アミ目は柱痕跡を示す。)



第6図 A区SB1実測図(2) (1:30, 1:60) 柱穴土層断面、根石・柱根出土状況

る。桁行方向は南北辺とも西半が1.55m、東半が2.4mで、西半の柱穴間にあるP 2・P 7は規模も小さく間柱と考えられる。南辺西端のP 9は規模としては大きいが、東側のP 8との距離が短く、西面底の柱穴の可能性がある。各柱穴の規模は、P 1が径34cm、深さ59cm、P 2が径28cm、深さ48cm、P 3が長径42cm×短径36cm、深さ50cm、P 4が径34cm、深さ46cm、P 5が長径37cm×短径31cm、深さ51cm、P 6が径36cm、深さ50cm、P 7が径26cm、深さ27cm、P 8が径36cm、深さ64cm、P 9が長径49cm×短径39cm、深さ42cmである。多くは径30数cm、深さ50cm程度である。P 1・P 5・P 8では柱痕跡が認められた。その規模は、P 1が径12cm、P 5が径13cm、P 8が径14cmである。P 3では北西から南東方向に傾いた状態の柱根（長さ33cm）が出土した。その直径は8cmで、上記柱痕跡の例からみてもSB 1に使われた柱の太さは8~14cmと直径10cm前後とみられる。P 2・P 6では根石各1個を検出した。P 2が細粒凝灰岩、P 6の石材は不明である。

出土遺物（第12図1~4、第67図752、図版18・26） P 2・P 4から土師質土器・小皿（1・2）が、P 5から土師質土器・皿（3）が、P 6から石鍋片（752）が、P 7から土師質土器・椀（4）が各々出土している。2はP 4底面近くのやや西壁寄りで立った状態で出土した。

1・2は口径8.0~8.4cm、器高1.35~1.5cmの土師質土器・小皿で、1は底部糸切り離し痕と板目痕がみられる。2は糸切り離し痕については不明だが、板目痕は認められる。いずれも内外面回転ナデで、内底面には一定方向のナデつけが行われている。1の外面の体部下端には未調整部分がみられる。3は口径12.75cm、器高2.8cmの皿で、底部回転糸切り離し、体部内外面には回転ナデを施す。体部は内湾気味に外上方に延び、口縁端部はシャープに仕上げている。4は口径8.6cmの小型の椀で、高台部は失っている。体部内面に横方向のミガキ状の丁寧なナデを施す。胎土は黄白色の比較的砂粒を含むもので、焼成は良好である。

752は滑石製の石鍋の口縁部から鋸部分にかけての小破片である。復元口径24.8cmで、鋸部分は縱方向に削り取られており、転用を意図したものとみられる。鋸部分の上下には横方向のケズリが施されている。内面は下方からのケズリ、平坦な口縁端部にもケズリがみられる。

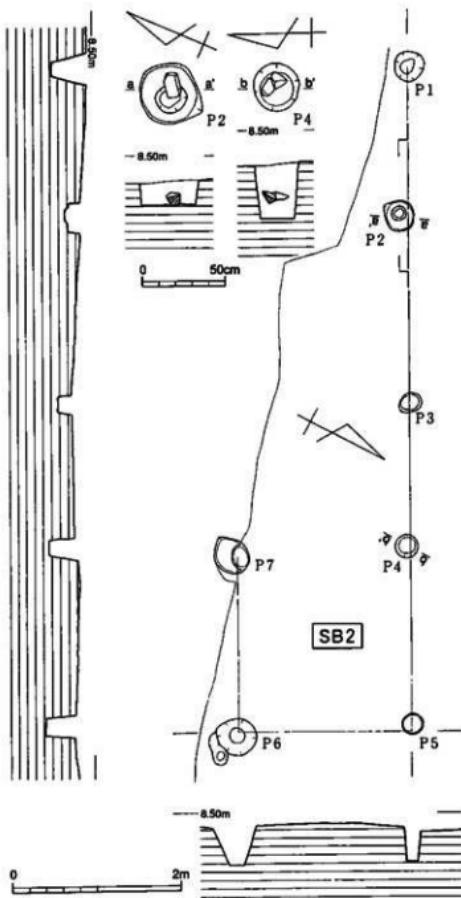
②SB 2（第7図、図版3・4）

調査区南端に存在する、現状で桁行4間+α（北辺P 1-P 2-P 3-P 4-P 5、南辺P 7-P 6）、梁行1間+α（P 5-P 6）の建物跡で、西端及び桁行南辺の大半が調査区外に延びる。建物の主軸は東北東-西南西を指す（N62°E）。桁行方向（現存規模）8.0m、梁行方向（現存規模）2.0m、建物面積（現存規模）約10m²の平面長方形とみられる建物跡である。各柱間距離は、桁行方向の北辺のP 1-P 2間が1.8m、P 2-P 3間が2.3m、P 3-P 4間が1.7m、P 4-P 5間が2.1m、南辺のP 7-P 8間が2.1m、梁行方向のP 5-P 6間が2.1mである。桁行・梁行ともに2.1mを主体に1.7~2.3mと幅がある。

各柱穴の規模は、P 1が径36cm、深さ41cm、P 2が長径42cm×短径36cm、深さ19cm、P 3が長径28cm×短径23cm、深さ17cm、P 4が径28cm、深さ31cm、P 5が径25cm、深さ36cm、P 6が長径49cm×短径44cm、深さ47cm、P 7が長径49cm×短径40cm、深さ27cmである。径23~49cm、深さ17

~47cmとやや小規模で比較的浅い柱穴が多く、このことは上記のように柱の並びや柱間距離の不定とも相まって、SB2の建物としてのやや不安定さを示すと思われる。P2・P4では10~15cm大の比較的小さな石を用いて根石としている。P2の石材は不明で、P6は珪長岩である。

出土遺物（第12図5~7、図版18） P1から土師質土器・杯（5）、楕（6・7）が出土した。5は口径11.95cm、器高3.6cmで、内底面に一部回転ナデがみられる。6は口径10.65cm、器高2.2~3.6cmの楕で、口縁が大きく傾斜している。細い粘土紐をごく乱雑に貼り付けた低い輪状高



第7図 A区SB2実測図 (1:30, 1:60)

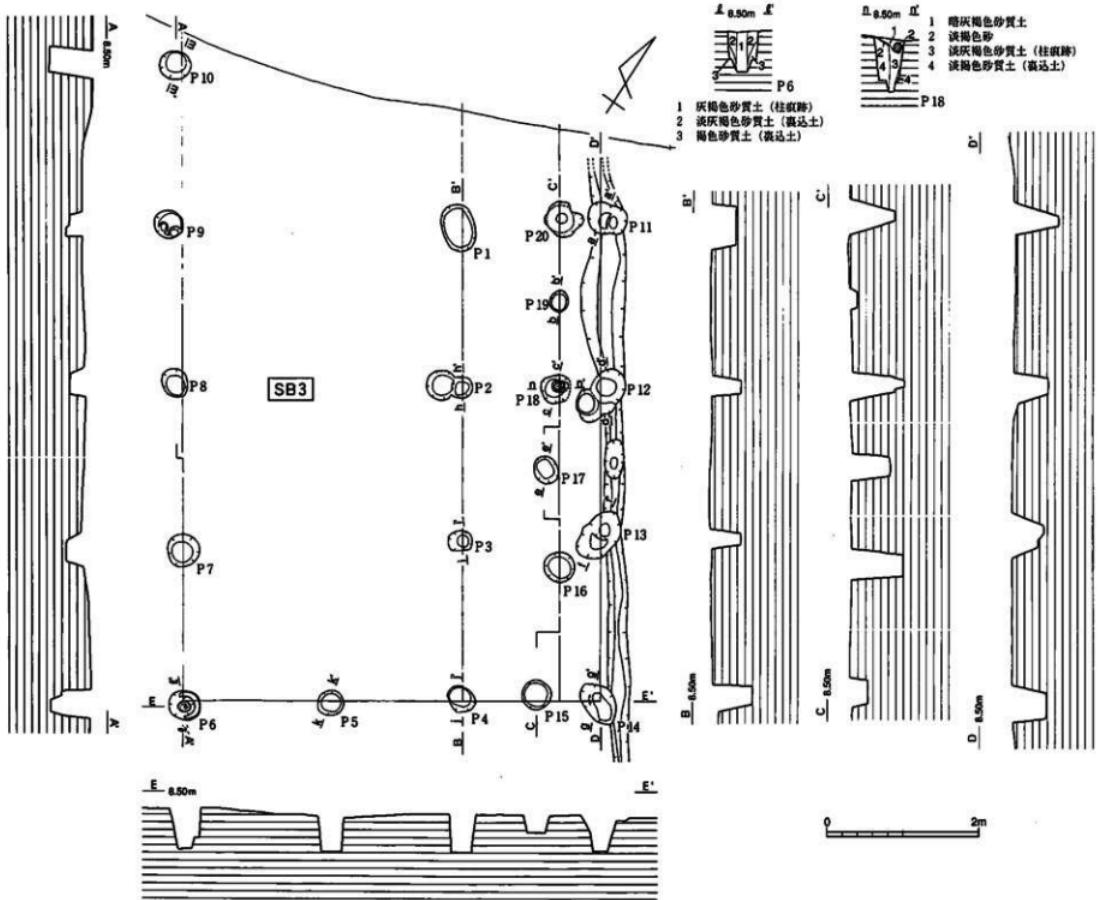
台をもち、調整は内面がミガキ状の丁寧なナデ、外面体部の上方2/3が回転ナデ、下方1/3は未調整である。黄白色を呈し、砂粒をやや多く含む胎土で、焼成も良好である。7は椀の高台部片であるが、高台はより高く踏ん張る形態のしっかりしたもので、胎土や焼成は6とは異なり杯や小皿と同じである。

③SB3（第8・9図、図版3～5）

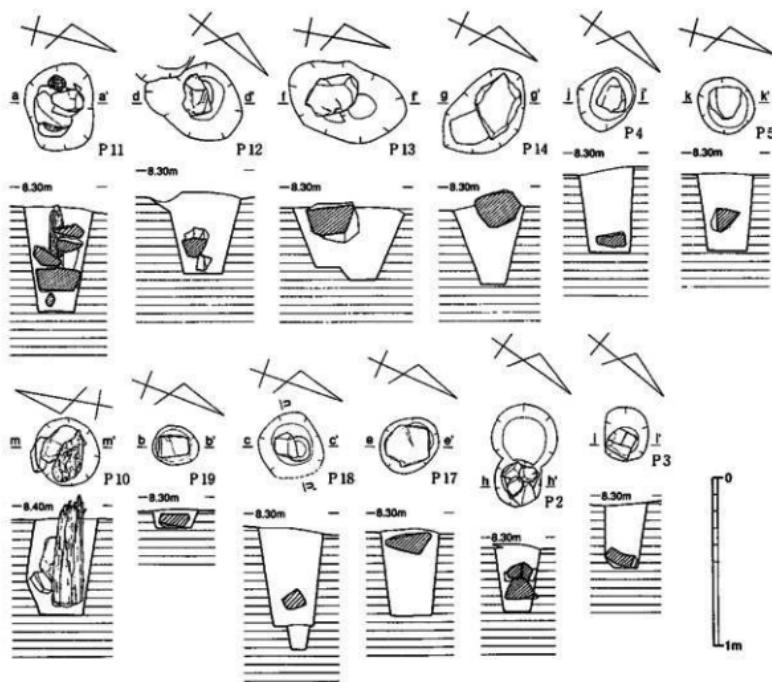
SB3はA区北東側にある大型の建物跡で、周囲に建物に伴う可能性の高い構造跡4条が存在する。建物の北端は調査区外に延びており全容は不明だが、桁行4間+α（東辺P1-P2-P3-P4、西辺P10-P9-P8-P7-P6）、梁行2間（P4-P5-P6）の身舎の桁行東辺に桁行3間+α（P11-P12-P13-P14）、梁行2間（P14-P15-P4）の東面する庇が付く。建物の主軸は北北西-南南東を指す（N34°W）。建物面積（現存規模）は、桁行方向8.4m、梁行方向5.5mの約42m²である。身舎部分は桁行方向8.4m、梁行方向3.7mの約31m²、東面庇部分が桁行方向6.3m、梁行方向1.8mの約11m²である。西側の身舎部分の各柱間距離は、桁行方向東辺のP1-P2間が2.1m、P2-P3間が2.0m、P3-P4間が2.0m、西辺のP10-P9間が2.0m、P9-P8間が2.1m、P8-P7間が2.2m、P7-P6間が1.9mである。梁行はP4-P5間が1.7m、P5-P6間が1.9mである。桁行方向が1.9～2.2m（2.0～2.1mが主）、梁行方向は桁行方向に較べて若干短く1.7～1.9mである。東側の庇部分は梁行が2間あるが、中央の桁行は柱の並びが悪く、柱間距離も全体に短く不統一で、柱穴の大きさや形もやや不揃いであることから、庇桁行の間柱的性のものかもしれない。この東面庇部分の各柱間距離は、桁行方向東辺のP11-P12間が2.2m、P12-P13間が1.9m、P13-P14間が2.3mである。間柱的性格が考えられる部分については、P19-P20・P18-P19間が1.1m、P17-P18間が1.2m、P16-P17間が1.3m、P16-P15間が1.7mと短い。なお、梁行方向のP4-P15間は1.0m、P14-P15間は0.8mである。

各柱穴の規模は、身舎の柱穴はP1が長径62cm×短径43cm、深さ31cm、P2が径28cm、深さ38cm、P3が長径32cm×短径26cm、深さ39cm、P4が長径40cm×短径34cm、深さ51cm、P5が長径36cm×短径33cm、深さ46cm、P6が長径42cm×短径38cm、深さ53cm、P7が長径44cm×短径42cm、深さ22cm、P8が長径40cm×短径32cm、深さ20cm、P9が長径40cm×短径36cm、深さ22cm、P10が長径40cm×短径36cm、深さ57cmである。径28～62cmと幅があるがほぼ40cm程度、深さは桁行西辺のP7～P9が深さ20cm前後と浅いが、ほかは40～50cm程度と比較的深い。P11では直径18cm、現存長67cmの柱根が残存する。柱根の北側には20cm前後の大きさの角礫3個が裏込めとして入れられている（半花崗岩・花崗斑岩・珪質凝灰岩）。P6では土層観察により径14cmの柱痕跡が看取された。P2～P5には根石が存在する。P3～P5は各1枚の角礫を根石としているが、P2では20cm大の角礫の上にやや小振りな10～20cmの大きさの角礫3個を置いている。根石の石材は、P2の上の石が粗粒黒雲母花崗岩、下の石が庄碎黒雲母花崗岩、P3が凝灰岩、P4が球顆状流紋岩、P5が庄碎黒雲母花崗岩である。

東面庇の柱穴の規模は、P11が長径51cm×短径40cm、深さ67cm、P12が長径48cm×短径43cm、



深さ49cm, P 13が径40cm, 深さ41cm, P 14が長径62cm×短径40cm, 深さ48cm, P 15が径40cm, 深さ23cm, P 16が径40cm, 深さ69cm, P 17が長径37cm×短径32cm, 深さ52cm, P 18が長径40cm×短径36cm, 深さ73cm, P 19が長径28cm×短径24cm, 深さ10cm, P 20が径50cm, 深さ60cmである。径はP 19を除いてほぼ40~50cm台, 深さはP 15・P 19が23cm, 10cmと浅いが他は41~73cmと深く、身舎部分の柱穴よりも深い傾向にある。P 11では柱穴西壁寄りに立つ径10cm, 現存長40cmの柱根の東側に10~20cm大の裏込石4個（黒雲母花崗岩・珪質凝灰岩2・結晶凝灰岩）が詰め込まれている。柱根は23cm×26cm, 厚さ13cmの分厚い板状の石（黒雲母花崗岩）の下に10数cm大の小礫2個（結晶凝灰岩・石英）を入れて根石とした上に立っていた。P 15では径10cmの柱痕跡を検出した。P 12~P 14・P 17~P 19では根石が存在した。P 12で2個の小角礫を用いる以外は角礫あるいは板状の石各1個を用いて根石としている。P 12・P 18は10数cmの大きさの小角礫, P 13・P 14は20~30cm大, 厚さ20cmの角礫, P 17・P 19は10~20cm大, 厚さ10cm前後の板状の石を用いる。P 14・P 17では柱穴の底からかなり浮いているが, 根石の上面はほぼ平坦である。石材は, P 12が珪長岩・压碎黑雲母花崗岩, P 13・P 14が細粒黑雲母花崗岩, P 17・P 18が珪質凝灰岩, P 19



第9図 A区S B 3実測図(2)(1:30, 1:60) 柱穴内根石・柱根出土状況

が粗粒黒雲母花崗岩である。

柱根（2例）・柱痕跡（2例）の存在から、SB3の身舎部分では径14cm（P6）、径18cm（P10）の、東面庇部分では径10cm（P11・P15）の柱の存在が確認できた。また、根石は身舎部分では4例、東面庇部分では7例検出したが、石材的には（資料数19）、圧碎黒雲母花崗岩・細粒黒雲母花崗岩・粗粒黒雲母花崗岩といった黒雲母花崗岩が9例、珪質凝灰岩・結晶凝灰岩の凝灰岩が8例と主体である。

出土遺物（第12図8～20、図版18） 東面庇部分の柱穴6基から土器類14点が出土した。P11から土師質土器・小皿（8）、皿（17）が、P12から土師質土器・杯（14）、瓦器・椀（18）、青磁・碗（19）が、P13から土師質土器・小皿（12）、杯（15）が、P14から土師質土器・杯（13）が、P17から白磁・皿（20）が、P20から土師質土器・小皿（9～11）、皿（16）が出土した。

8～12は土師質土器・小皿で、口径7.05～8.35cm、器高1.15～1.4cmである。平坦な底部から外上方に直線的に延びる形態が主だが、最も口徑の大きい12はやや丸味のある底部で、口縁の立ち上がりがやや短い。底部は、10以外は回転糸切り離し痕が、8・9ではその上に縦目状の板目痕が認められる。調整は基本的に体部内外面とも回転ナデで、8・9の内底面には一定方向のナデつけが施されている。11の外面体部中央付近には明確な稜が認められる。13～15は土師質土器・杯である。口径12.05cm、13.0cm、器高3.1～3.3cmで、直線的に外上方に延びる口縁をもつ。底部は14では回転糸切り離し痕が認められる。調整は、回転ナデである。16・17は土師質土器・皿で、口径12.15～12.4cm、器高2.95～3.1cmである。形態的には杯と酷似しており、口縁は外上方に直線的に延びる。底部はいずれも回転糸切り離しで、17はその上に板目痕が認められる。体部の調整は回転ナデである。

18は須恵質に近い硬質の瓦器・椀で、口径14.55cm、器高3.4cmである。断面逆台形のごく低い輪状高台を貼り付ける。体部はやや内湾気味に外上方に延び、口縁端部を丸く納めている。調整は、内面には横方向主体の暗文が、外面は口縁部から体部上半にかけて強く回転ナデを施しており、そのために体部中央に緩やかな稜が形成されている。外面体部下半は未調整である。口縁部から体部上半にかけての内外面には暗褐色から黒褐色のスス状の付着物がみられる。

19・20は輸入磁器で、19が青磁・碗、20は白磁・皿である。青磁・碗は底部片で、浅い削り出し高台の端面外縁を面取りし、その部分まで薄く施釉されている。白磁・皿は復元口径14.45cmで、外上方に直線的に延びた体部をわずかに外反させた口縁端部を尖り気味に丸く納める。比較的厚く施釉しているが、口縁端部の釉を削り取って口禿げとしている。口縁部内面には1条のごく細い沈線を施す。

（2）柵列跡

柵列跡は、北東部のSB3の周囲で南北方向の3条と東西方向の1条の計4条を検出した。SB3の西側に南北走のSA1・SA2、東側に同じく南北走のSA3、そして南側に東西走のSA4がSB3から0.4～3.0mの距離をおいて存在する。SB3の桁行あるいは梁行には平行に

走ることから、SB3に伴うかあるいはその建物の一部をなす柱穴列の可能性が考えられる。

① SA1（第10図、図版3）

SB3の西側に2.6~3.0m離れて存在する柵列跡で、SB3の西辺平行方向にはほぼ平行に走る。北側調査区外に延び、現状では4間（長さ5.5m）分が認められる。北北西-南南東方向（N28°W）を指す。柱間距離は、P1-P2間が1.5m、P2-P3間が1.1m、P3-P4間が1.2m、P4-P5間が1.6mと、1.1~1.6mで南北両端が1.5~1.6mとやや広く、中央の2間が1.1~1.2mと幾分狭くなっている。各柱穴の規模は、P1が径30cm、深さ21cm、P2が径32cm、深さ38cm、P3が長径22cm×短径19cm、深さ19cm、P4が長径25cm×短径23cm、深さ30cm、P5が長径44cm×短径33cm、深さ43cmである。径19~44cm、深さ19~43cmで、径30cm、深さ30cmの辺りに中心がある。

P3・P4では柱根が出土した。P3の柱根は径3cm、現存長22cm、P4のそれは径4cm、現存長25cmで、いずれもやや北北西側に倒れていた。推定される柱の太さは径3~4cm程度であろう。根石・遺物の出土はみられない。

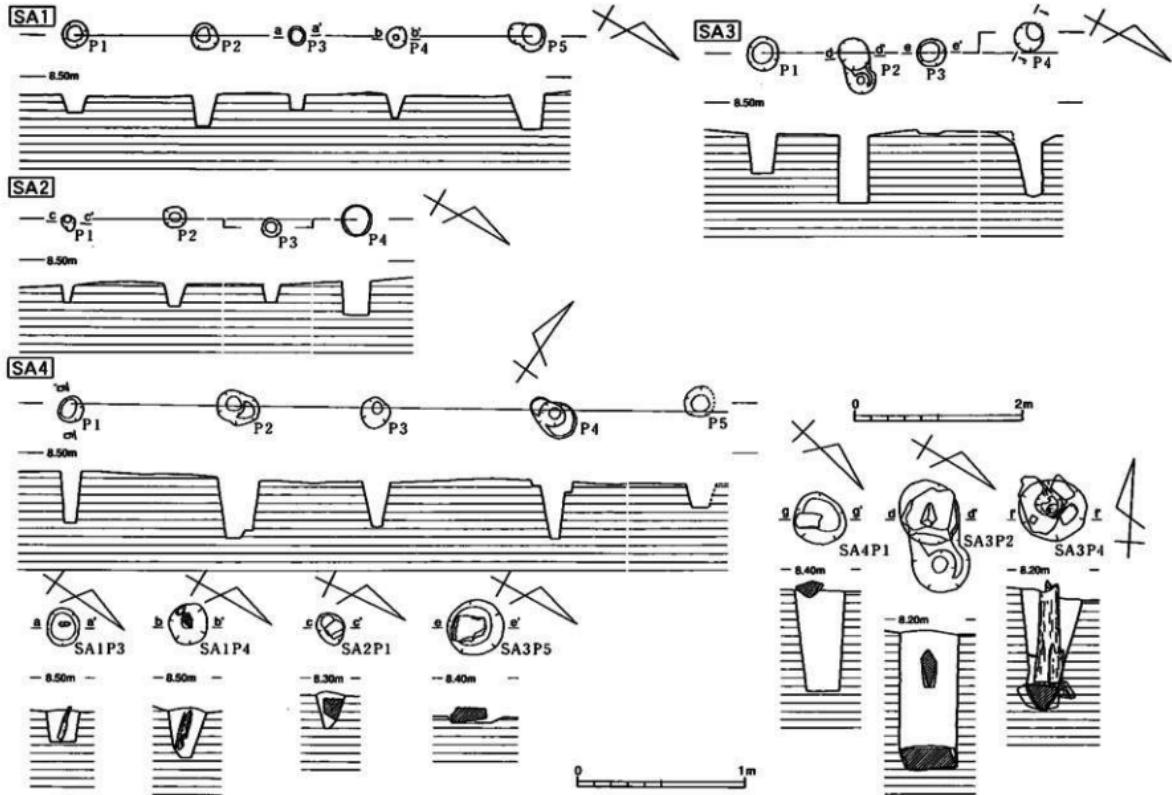
② SA2（第10図、図版3）

SA1とSB3の間に存在し、SB3の西1.4~1.8mの距離にある。SA1・SB3の主軸にはほぼ平行する（N28°W）。調査区内で3間（長さ3.4m）分みられ、北側調査区外に延びる。柱間距離は、P1-P2間が1.3m、P2-P3間が1.2m、P3-P4間が1.0mで1.0~1.3mと比較的狭い。各柱穴の規模は、P1が長径20cm×短径15cm、深さ22cm、P2が径26cm、深さ27cm、P3が径22cm、深さ22cm、P4が径36cm、深さ41cmである。径15~36cm、深さ22~41cmで、ほぼ径20cm台、深さ20~30cmが中心の小型の柱穴である。P1では10cm四方、厚さ13cmの方形の小蝶（粗粒黒雲母花崗岩）の根石が出土した。遺物の出土はない。

③ SA3（第10図、図版3・6）

SB3の東側に1.8m離れて存在する柵列跡で、SB3の東面庇の平行方向にはほぼ平行して走る。北側と南側が調査区外に延び、現状で3間（長さ3.3m）分認められる。北北西-南南東方向（N30°W）を指す。柱間距離は、P1-P2が1.1m、P2-P3が1.0m、P3-P4が1.3mで、1.0~1.3mである。各柱穴の規模は、P1が長径40cm×短径36cm、深さ50cm、P2が径36cm、深さ75cm、P3が長径34cm×短径32cm、深さ4cm、P4が径34cm、深さ71cmである。

P2・P3で根石を、P4では根石と柱根を検出した。P2では柱穴内のほぼ中位で15cm×23cm、厚さ9cmの板状の小蝶が立った状態で、底面では30cm×33cm、厚さ13cmの分厚い板石を各々検出した。P3ではごく浅い柱穴の底面に15cm×21cm、厚さ8cmの板石を置いている。P4では柱穴底面に置かれた20cm×36cm、厚さ14cmの分厚い板石の上に径16cm、現存長61cmの柱根が立った状態で見つかった。分厚い根石の周囲には10cm大、厚さ3~4cmの小型の板石が置かれる一方で、やや傾いた根石の上面を水平にするためか、この根石と柱根の間に数cm大の小蝶数個を詰め



第10圖 A區柱列跡實測圖 (1:30, 1:60) 柱穴內模石・柱根出土狀況

ている。P 2 の上方の小礫は压碎黒雲母花崗岩、根石は珪長岩、P 3・P 4 の根石などはすべて粗粒黒雲母花崗岩である。

出土遺物（第12図21、図版18）

P 3 から須恵質土器・碗（21）が出土した。口径12.85cmで、内湾気味に外上方に延びた体部に短く外反する口縁が付く。調整は内外面とも回転ナデである。

④ S A 4（第10図、図版3・6）

S B 3 の南側0.5mに近接して、唯一東西走る柵列跡で、S B 3 の梁行方向にはほぼ平行する。現状で4間（長さ7.5m）分認められ、東側調査区外に延びる。ほぼ南西-北東方向（N46°E）を指す。柱間距離は、P 1-P 2 間が1.9m、P 2-P 3 間が1.7m、P 3-P 4 間が2.1m、P 4-P 5 間が1.7mで、1.7~2.1mと比較的広い。各柱穴の規模は、P 1 が長径32cm×短径30cm、深さ62cm、P 2 が長径50cm×短径38cm、深さ73cm、P 3 が長径36cm×短径34cm、深さ56cm、P 4 が長径60cm×短径42cm、深さ70cm、P 5 が径36cm、深さ31cmで、径30~60cm、深さ31~73cmである。径はほぼ30cm台、深さは60~70cm台が中心ではかの柵列跡の柱穴と比べると大きく、掘立柱建物跡のそれに近い。P 1 では上面の南壁寄りで10cm大の小角礫が出土したが、裏込石と思われる。石材は不明である。

出土遺物（第12図22、図版18）

P 3 から青磁・碗（22）が出土した。外面に複弁の鎬蓮弁を配する龍泉窯系青磁の小片である。

（3）単独柱穴（第4・11図、図版6・7）

A・P 1~A・P 14の計14基で、柱根を検出した柱穴1基（A・P 1）、根石を検出した柱穴6基（A・P 4~A・P 7、A・P 9、A・P 13）、報告遺物が出土した柱穴7基（A・P 2、A・P 3、A・P 8、A・P 10~A・P 12、A・P 14）である。

A・P 1 は調査区西半中央にあり、S A 1 P 1 の南0.5mに近接して存在する。径30cm、深さ52cmの柱穴で、径10cm、現存長50cmの柱根を検出した。柱材は南側にやや傾いていた。

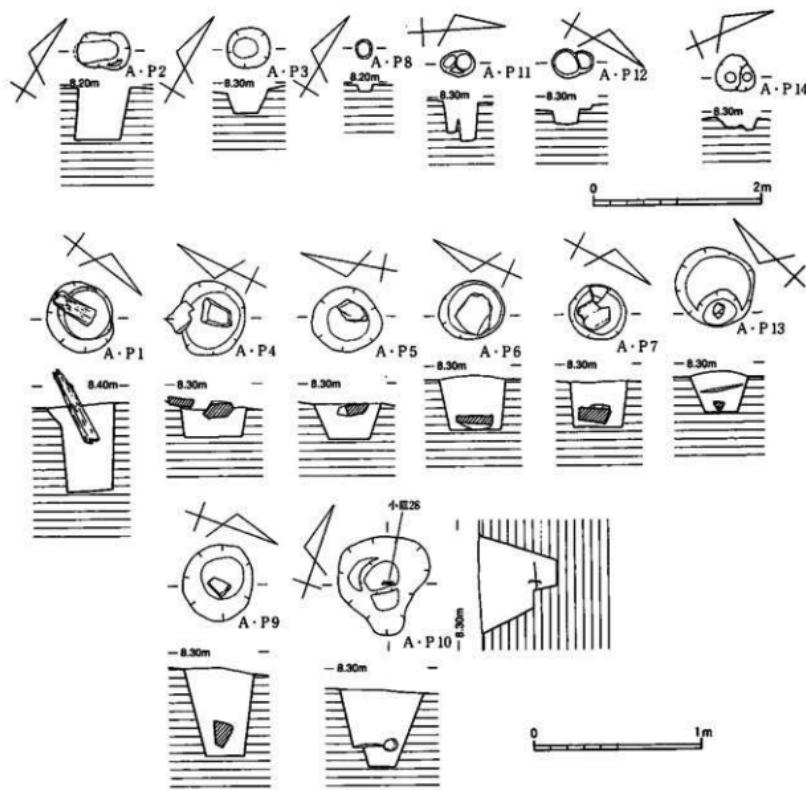
根石を検出した柱穴の内、A・P 4~A・P 7 は調査区北東側のS B 3 身舎内に存在する。A・P 4 はS B 3 身舎桁行西辺P 9 の東側1mにあり、長径44cm×短径40cm、深さ19cmと浅い。10数cmの大きさの板石2枚を検出した（珪質凝灰岩・珪長岩）。A・P 5 はS B 3 身舎桁行西辺P 8 の南東0.6mにあり、長径42cm×短径38cm、深さ21cmの規模の柱穴で、20cm×40cm、厚さ6cmの小型の板石を検出した（珪質凝灰岩）。A・P 6 はこのA・P 5 の南東0.5mにあり、長径40cm×短径34cm、深さ32cmである。42cm×46cm、厚さ8cmの板石を底面に置く（粗粒黒雲母花崗岩）。A・P 7 はS B 3 身舎梁行南辺P 5 の北東側0.5mにある、長径36cm×短径34cm、深さ28cmの柱穴で、底面に10cm大、厚さ5cmと30cm大、厚さ8cmの小型の板石2枚を置いて根石としている（いずれも輝緑凝灰岩）。A・P 9 はS B 3 身舎南東隅のP 4 の南1.9mにある、長径46cm×短径42cm、深さ53cmの柱穴で、底面上数cmのところで立った状態の10cm大、厚さ7cmの小角礫を検出

した（圧碎黒雲母花崗岩）。A・P13は調査区南東隅から北側2.8mの東辺調査区際にある、径46cm、深さ21cmの柱穴である。数cm大のごく小さな砾で根石ではない可能性もある（細粒黒雲母花崗岩）。

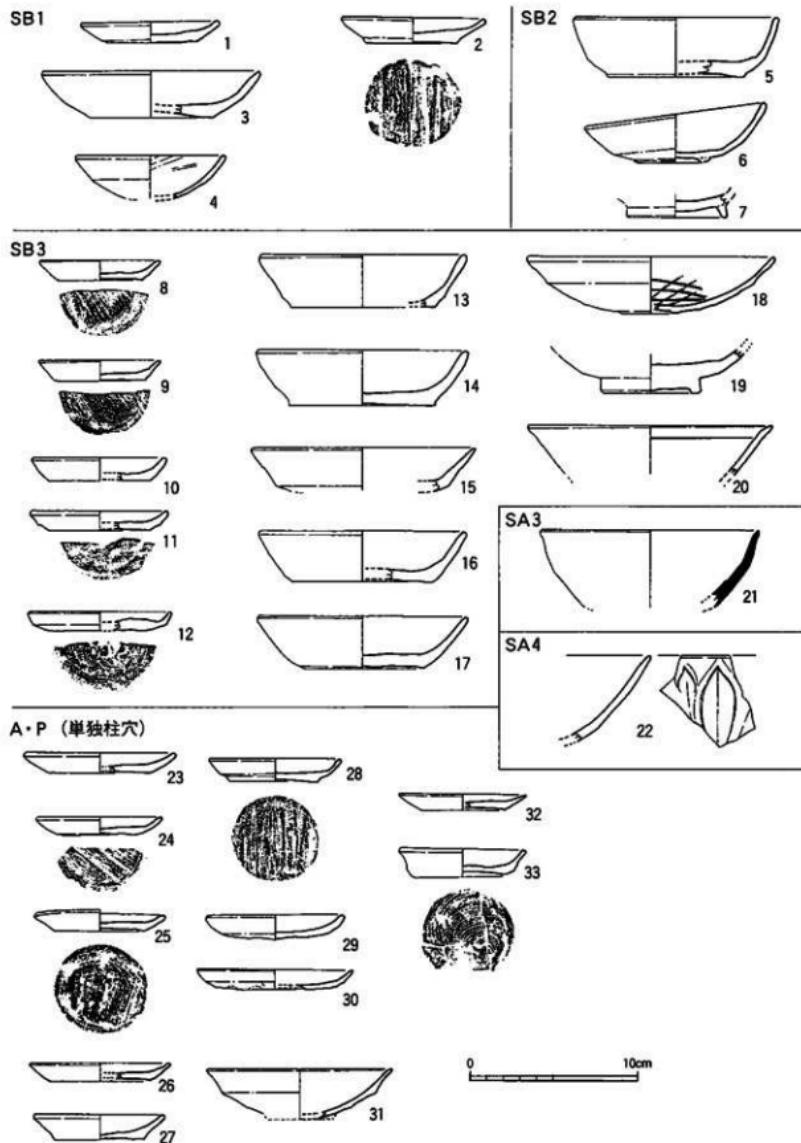
報告遺物が出土した柱穴は、A・P2、A・P3が調査区中央のSB3南西隅付近、ほかの柱穴は調査区南東部に存在する。A・P10ではSB1P4同様、柱穴底面付近の南側壁際に土師質土器・小皿（28）が立った状態で出土した。これらの柱穴は径20~64cm、深さ7~60cmだが、A・P2、A・P10、A・P11以外は、径・深さともに小規模である。

出土遺物（第12図23~33、第68図780、図版18）

これら単独柱穴からの出土遺物は土師質土器・小皿が主体を占め、ほかには土師質土器・碗、



第11図 A区単独柱穴実測図（1:30, 1:60） 柱穴内根石・柱根・土器出土状況



第12図 A区遺構出土土器実測図 (1:3)

鉄釘各1点があるにすぎない。小皿（10点、23~30・32・33）は、A・P2（23）、A・P3（24~26）、A・P8（27）、A・P10（28~30）、A・P12（32）、A・P14（33）から、椀（31）はA・P11から、鉄釘（780）はA・P14から各々出土している。

小皿は口径7.2~9.25cm、器高0.95~1.7cmで、主体は口径7.2~7.65cm、器高1.1~1.35cmである。形態的には平底から直線的に外上方に延びる口縁をもつものが主体である。底部は回転糸切り離しで、24~26・28・32では板目痕がみられる（24・32は縫目状）。調整は、体部内外面が回転ナデ、内底面には多くの場合一定方向のナデつけを行っている。このようなある程度通有な小皿群のなかにあって、A・P10出土の一群（28~30、特に29・30）やA・P14出土の33はある程度特徴的である。28は外面体部下端に未調整部分がみられる以外はほかのものとほぼ共通する。29・30は丸味の強い底部に回転糸切り離し痕はみられず、29が未調整、30は指頭によるナデを行っている。体部内外面は回転ナデを施す。33は底部及び調整はほかのものと共通だが、口縁が底部から垂直に近く立ち上がり、やや外反させている点や器高の高さ（1.7cm）が特徴的である。

椀（31）は口径11.0cmである。高台部は不明だが、輪状高台がはずれた痕跡が観察できる。体部外面の口縁端部から上位1/3の辺りに比較的明瞭に稜が認められる。調整は、この外面の稜より下方は未調整、上方から内面全体にかけて丁寧な横方向のナデかミガキ状の調整がなされている。また、口縁端部内面には浅い凹線が施されており、段状をなす。胎土はほかの椀とも杯や小皿とも異なり、口縁のみ明橙色で、ほかは淡黄褐色を呈する。

780はA・P14で出土した鉄釘で、頭部・尖端とも失っている。断面方形である。

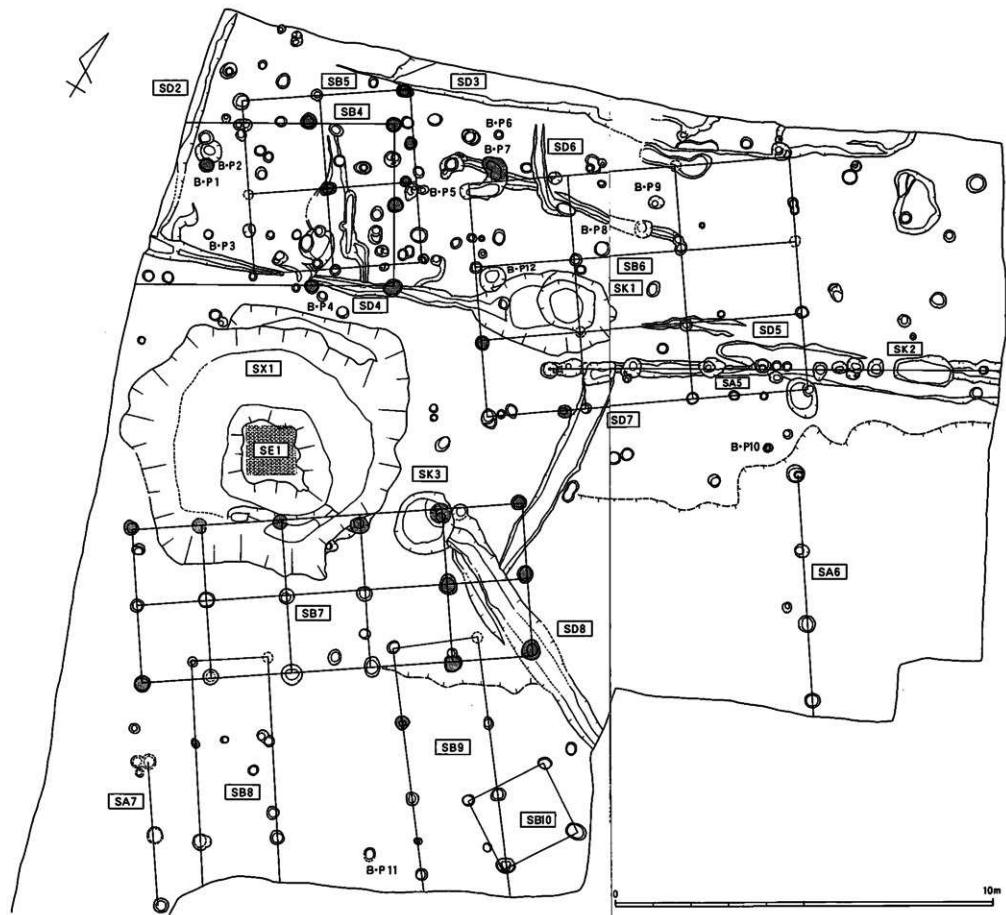
（4）溝状造構（第4図、図版3）

S D 1はA区北東側にあり、S B 3 東面庇の東辺桁行の柱穴列とほぼ完全に重複している。一部の柱穴との重複関係の観察によれば、S B 3 柱穴の方がS D 1より新しい可能性があるが、明確ではない。造構検出時の観察では、S D 1はS B 3 東面庇南東隅のP14及びS A 4 P 4の南東側で南西方向に曲がっていた。このこととS B 3 東面庇の東辺桁行の柱穴列との重複状況から考えて、S D 1はS B 3 及びS A 4との密接な関連性を窺うことができ、S B 3 の東辺から南東隅にかけて画する溝状造構の可能性が考えられよう。S D 1の現存規模は、長さ9m、幅0.2~0.5m、深さ1~4cmと細くごく浅いものである。

このS D 1以外にA区南西部及び南東部に計3条の短い溝状造構が存在する。いずれも長さ1~2.3m、幅0.18~0.32m、深さ1~5cmとごく小規模なもので、機能・時期等については不明である。

2. B区の造構（第13図、図版7~9）

B区は調査区の中央に位置し、東西23.6m、南北23.0mと最も面積が大きく、平面形は南東側が方形に窪んだし字形をなす。北西約5mにA区、幅4mの道路を挟んで東側にD区、南西側に隣接してC区が存在する。北・西・南の三方を民家に囲まれている。現況は3枚の畠からなって



第13図 B区造構配図 (1:100) (アミ目は根石をもつ柱穴を示す。)

いる。段差はなく水平である。現地表面（標高8.1～8.8m）から遺構面までの深さは0.8～1.1m程度で、A区に較べるとやや浅い。

基本層序は、上から①耕作土（厚さ30～40cm）、②床土（暗灰色砂質土、厚さ20～50cm）、③暗灰色砂質土（厚さ40～50cm）を経て、遺構面（暗褐色砂質土層上面）に至る。B区での湧水は遺構面より1m程度深い位置からであるものの、南東側では遺構面は未発達か脆弱で砂層に近く、降雨後などは冠水によって遺構面の崩壊・削平が顕著にみられた。遺構面が比較的しっかりしていたのはSX1の北側、SB4・SB5や多くの柱穴を検出した調査区北西部で、調査区北東部や南西部も遺構面は脆弱なもの遺構はある程度存在する。包含層は存在しない。

検出した遺構は、掘立柱建物跡7棟（SB4～10）、槽列跡3条（SA5～7）、単独柱穴12基（B・P1～12）、池状遺構1基（SX1）、井戸1基（SE1）、土坑3基（SK1～3）、溝状遺構7条（SD2～8）がある。掘立柱建物跡は調査区の北半に大小の総柱建物跡2棟（SB5・SB6）と東西方向に主軸をもつ個柱建物跡1棟（SB4）、西半中央に池状遺構とその中に掘り込まれていた木組井戸があり、その南側に東西方向を指す大型の総柱建物跡1棟（SB7）と南北方向に主軸をもつ掘立柱建物跡2棟（SB8・SB9）がある。槽列跡は南北走するものが2条と東西走のものが1条ある。前者の内、SA7はSB7西辺梁行の延長線とはほぼ合致し、何らかの関連性が窺える。SA5は基本的にSD5内部に掘り込まれている。SA6は砂層が露出し、遺構面が未発達な調査区南東部に存在する南北走の槽列跡である。

（1）掘立柱建物跡

7棟を検出した。SX1・SE1を挟んで、北半のSB4～6と南半のSB7～10に分かれる。総柱建物が3棟存在する（SB5～7）。建物の主軸はほぼ揃うが、SB10のみ様相が異なる。

①SB4（第14・15図、図版7～10）

B区北東隅に存在する建物跡で、西端は調査区外に延びる。桁行2～3間+α（北辺P1-P2-P3、南辺P7-O-P6-P5）、梁行2間（P3-P4-P5）の規模をもつ。建物の主軸はほぼ東北東～西南西方向を指す（N59°E）。建物面積（現存規模）は、桁行方向6.5m、梁行方向4.2mの約25m²である。各柱間距離は、桁行方向北辺のP1-P2間が1.6m、P2-P3間が2.3m、南辺のP7-P6間が4.3m（2間分）、P6-P5間が2.2m、梁行方向東辺のP3-P4間が2.1m、P4-P5間が2.2mである。P1-P2間が短く、2間分とみられるP7-P6間が長いが、1あたりはほぼ2.1～2.3mと一定の柱間距離を保っている。

各柱穴の規模は、P1が長径31cm×短径29cm、深さ42cm、P2が径41cm、深さ39cm、P3が長径40cm、深さ15cm、P4が長径40cm×短径37cm、深さ21cm、P5が長径48cm×短径40cm、深さ24cm、P6が径36cm、深さ27cm、P7が径30cm、深さ50cmである。径29～48cm、深さ15～50cmで、径30～40cmに主体があり、深さは20cm前後の浅い柱穴と40～50cmの深い柱穴に分かれる。

P2～P6の5個の柱穴で根石を検出した。P2の根石は底面より10数cm浮いているが、ほか

はいずれも柱穴の底面に置かれており、石の大きさや形状の面でも20~30cm大、厚さ10数cmの分厚い長方形・不整方形の板石1枚を用いている（P 6のみ厚さ7cmといくらか薄い板石を用いている）。石材はP 6のみ珪長岩で、ほかは粗粒黒雲母花崗岩（P 4・P 5）、細粒黒雲母花崗岩（P 2）、圧碎黒雲母花崗岩（P 3）、斑状黒雲母花崗岩（P 4の小砾）といずれも黒雲母花崗岩を使用している。

出土遺物（第68図774、図版26） P 2から鉄釘（774）1点が出土した。

774は現存長5.0cmの鉄釘で、釘頭の正面観は左右両端をやや引き出し、側面観は背面側に下傾している。

②S B 5（第14・15図、図版7~10）

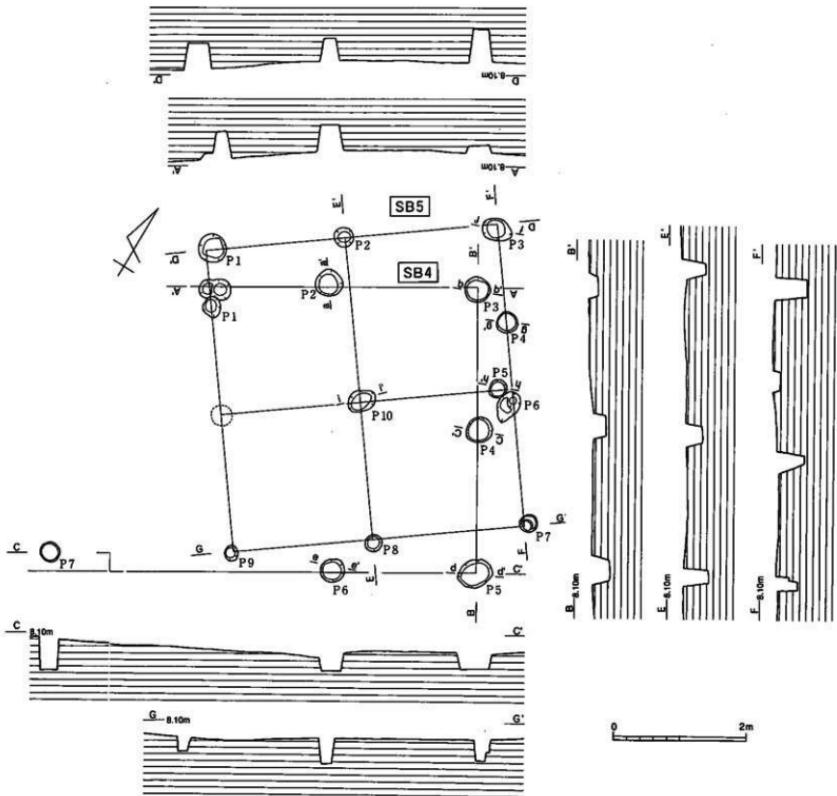
S B 5はB区北西隅にあり、S B 4と位置的に重複する建物跡である。現状では東西2間×南北2~3間の小型の縦柱状建物であるが、北あるいは西へ延びる可能性は残されている。S B 4との先後関係については明確ではない。北辺P 1-P 2-P 3、南辺P 9-P 8-P 7、西辺P 1-O-O-P 9、東辺P 3-P 4-P 6-P 7で、建物の主軸はほぼ北東-南西を指している（N54°E）。建物面積（現存規模）は、東西方向4.4m、南北方向4.5mの約20m²である。各柱間距離は、北辺のP 1-P 2が2.0m、P 2-P 3が2.3m、南辺のP 9-P 8が2.2m、P 8-P 7が2.3m、西辺（2間分）が4.4m（1間あたり2.2m）、東辺のP 3-P 4が1.5m、P 4-P 6が1.1m、P 6-P 7が1.8m、南北方向中央のP 2-P 10が2.5m、P 10-P 8が2.1m、東西方向中央のP 10-P 5（P 6）が2.3mで、東西方向2.0~2.3m、南北方向1.1~2.6mと南北方向の柱間数・柱間距離に不明確な部分が残るもの、ほぼ2.2~2.3mと一定している。

各柱穴の規模は、P 1が径42cm、深さ40cm、P 2が長径30cm×短径28cm、深さ36cm、P 3が長径46cm×短径32cm、深さ49cm、P 4が径32cm、深さ12cm、P 5が長径28cm×短径26cm、深さ19cm、P 6が長径50cm×短径32cm、深さ42cm、P 7が径26cm、深さ34cm、P 8が径26cm、深さ38cm、P 9が長径23cm×短径20cm、深さ23cm、P 10が長径44cm×短径32cm、深さ25cmである。径20~50cm、深さ12~49cmと幅があるが、主体はほぼ径30cm、深さ20~40cm程度である。北辺及び東辺南半から南辺東半の柱穴が比較的規模が大きく深い。東辺北半のP 4及び中央のP 10、南辺西半などの柱穴はやや小規模で比較的浅い。

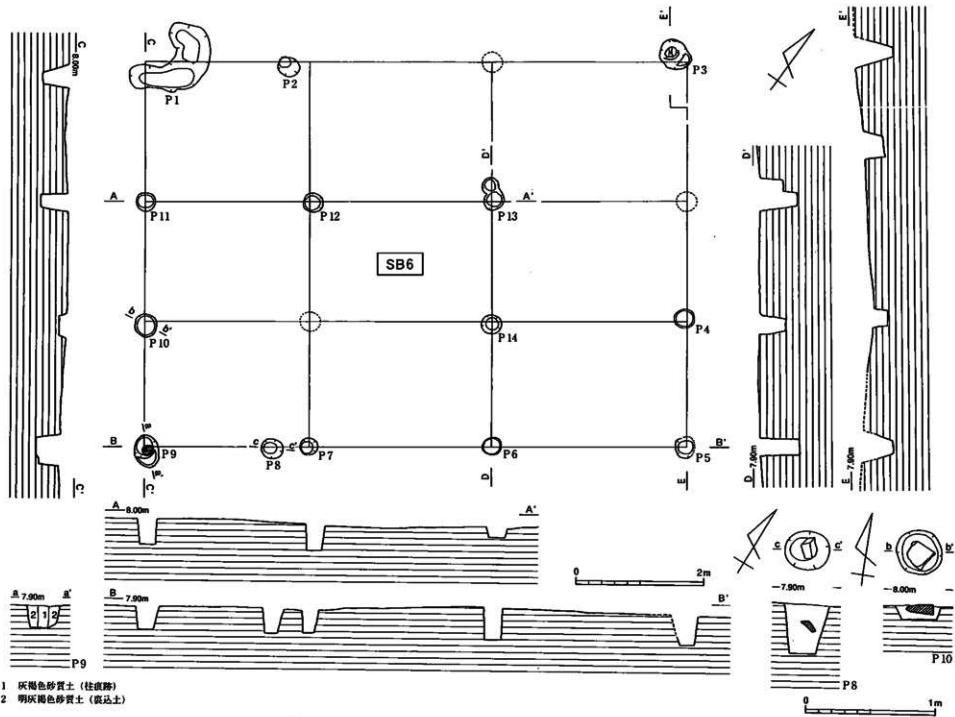
東辺北半のP 3・P 4・P 5と中央のP 10で根石を検出した。P 3の根石は辺15cm、厚さ6cmの板石、P 4は25cm×13cm、厚さ13cmの、P 5は15cm大の、P 10は12cm×8cm、厚さ5cmのいずれも角礫を使用している。石材はP 3・P 10が石英、P 4・P 5が暗青色の圧碎泥質岩である。

出土遺物（第22図34~37、第65図729、第67図753、図版18・24） 北辺西端のP 1から土師質土器・小皿（35）が、東辺中央のP 6から棒状土錐（729）と滑石製石鍋片（753）が、南辺西端のP 9からは土師質土器・小皿（34）、杯（36）、椀（37）がそれぞれ出土している。

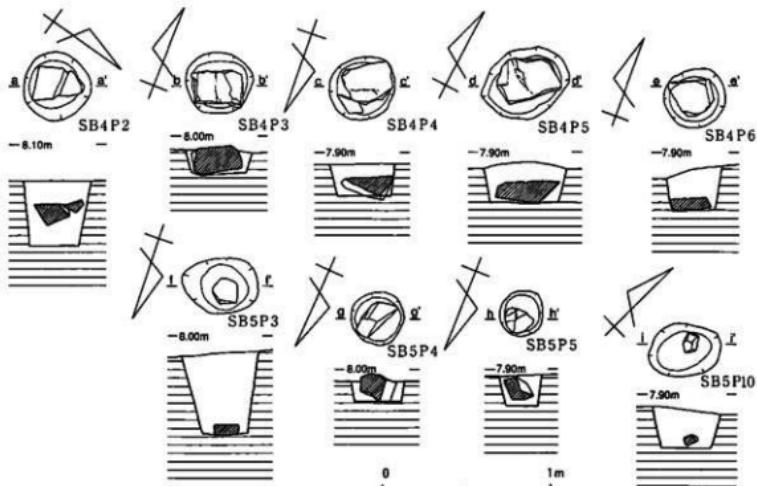
34・35は土師質土器・小皿で、口径8.1~8.6cm、器高1.5~1.8cmである。平坦な底部から外上方に短く直線的に延びる口縁が付く形態だが、35は底部・体部ともにかなり分厚いのに対して、34



第14図 B区 SB4・SB5実測図(1) (1:6)



第16図 B区SB6実測図 (1:30, 1:60) (アミ目は柱痕跡を示す。)



第15図 B区SB4・SB5実測図(2)(1:30) 柱穴内根石出土状況

は全体に薄い。底部はいずれも回転糸切り離しで、体部の調整は不明である。34の内底面には一定方向のナデつけが行われている。36は口径11.0cmの土師質土器・杯で、体部内外面回転ナデである。37は全体に器壁が薄い土師質土器・椀で、焼成が非常に良好なものである。外方にハの字に強く踏ん張る形態の輪状高台は縁が鋭く、造りも丁寧である。体部はやや内湾しながら外上方に直線的に延び、口縁の端部を丸く納めている。調整は、内面は丁寧なナデ、外面は横ナデで、高台内側の外底面には板目痕が残る。色調は淡黄白色を呈し、搬入品と思われる。

729は棒状土錐で1/2を欠失する。現存長5.15cm、幅(穿孔部)2.2cm、幅(中央)1.9cm、厚さ(穿孔部)1.6cm、厚さ(中央)1.85cmである。断面形はほぼ円形だが、上端近くの穿孔部は指頭により押されたためか、断面形がやや扁円形を呈している。穿孔は上→下方向におこなっており、径0.7cmの円孔である。上端面の中央には幅4mm、深さ0.5mmほどのごく浅い溝状の凹部がみられる。色調は表面が橙色、胎土は淡灰黒色である。753は滑石製石鍋の底部小片で、灰白色を呈する。下方の破断面には鋸状の工具による横方向の切削痕とその下に縱方向のケズリによると思われる再加工痕がみられる。体部外面には縱方向のケズリが施されている。また、体部外面から外底面にかけてススの付着が顕著である。

③SB6(第16図、図版7~11)

SB6はB区北半ば中央に位置する大型の掘立柱建物跡で、SB4・SB5の南東1.3mに近接する。3間四方の縦柱建物だが、東西方向が南北方向に較べていくらか長い(東西方向を桁行方向、南北方向を梁行方向とする)。桁行の北辺P1-P2-O-P3、北側から2列目P11-P12-

P 13-○, 3列目P 10-○-P 14-P 4, 南辺P 9-P 7-P 6-P 5, 梁行の西辺P 9-P 10-P 11-P 1, 西側から2列目P 7-○-P 12-P 2, 3列目P 6-P 14-P 13-○, 東辺P 5-P 4-○-P 3で, 建物の主軸はほぼ北東・南西を指す(N55°E)。建物面積は, 衍行方向8.5m, 梁行方向6.1mの約52m²である。各柱間距離は, 衍行方向北辺のP 1-P 2間が2.2m, P 2-○-P 3間は1間あたり3.1m, 同じく北側から2列目のP 11-P 12間は2.6m, P 12-P 13間が2.6m, P 13-○が3.1m, 同じく北側から3列目のP 10-○-P 14間は1間あたり2.7m, P 14-P 4間は3.1m, 衍行方向南辺のP 9-P 7間は2.6m, P 7-P 6間は2.9m, P 6-P 5間は3.1mである。梁行方向は西側から2列目・3列目の北側のP 12-P 2間, P 13-○間が2.2m, 同じく東辺北側の○-P 3間が2.3m, ほかはすべて1.9mである。衍行方向の柱間距離は2.2~3.1mであるが, 概ね西側・中央が2.6m・2.7mで, 東側が3.1mと0.4~0.5mほど広い。これに対して, 梁行方向の柱間距離は北側が概ね2.2mであるが, 中央・南側が1.9mとやや狭い。全体に衍行方向が梁行方向よりも0.7~0.9m程度広い。そして, 衍行方向の東側の柱間距離が西側・中央のそれよりも広く, 梁行方向も南側・中央に較べて北側が広く造られている。

各柱穴の規模は, P 1が径38cm, 深さ51cm, P 2が長径34cm×短径30cm, 深さ36cm, P 3が長径53cm×短径45cm, 深さ60cm, P 4が径41cm, 深さ30cm, P 5が径33cm, 深さ48cm, P 6が長径31cm×短径28cm, 深さ51cm, P 7が径28cm, 深さ30cm, P 8が長径34cm×短径31cm, 深さ40cm, P 9が長径51cm×短径39cm, 深さ36cm, P 10が長径38cm×短径35cm, 深さ11cm, P 11が径30cm, 深さ41cm, P 12が径30cm, 深さ42cm, P 13が長径36cm×短径30cm, 深さ58cm, P 14が長径52cm×短径29cm, 深さ41cmである。径は28~53cm, 深さ11~60cmと幅があるが, 径30~40cm, 深さ40~50cmが主体である。

P 9では径18cmの柱痕跡を検出した。また, 根石はP 3・P 8・P 10で検出した。P 3の根石は17cm×14cm, 厚さ10cmの板状のもので, P 10のものは18cm四方, 厚さ8cmの板石である。石材はP 3のものは不明だが, P 8が压碎砂岩, P 10は花崗斑岩である。

遺物は出土していない。

④SB 7(第17図, 図版7・9・11・12)

SB 7はB区南西側にある大型の総柱建物跡で, 北側でSX 1と重複し, 南側ではSB 8・SB 9と重複する。西側調査区外に延びる可能性がある。SB 4・SB 5の南側6m, SB 6の南西2mに位置する。衍行5間+α(北辺P 1-P 2-P 3-P 4-P 5-P 6, 中央P 14-P 15-P 16-P 17-P 18-P 7, 南辺P 13-P 12-P 11-P 10-P 9-P 8), 梁行2間(西辺P 1-P 14-P 13, 西側から2列目P 2-P 15-P 12, 3列目P 3-P 16-P 11, 4列目P 4-P 17-P 10, 5列目P 5-P 18-P 9, 東辺P 6-P 7-P 8)の規模である。建物の主軸はほぼ北東・南西方向を指す(N54°E)。建物面積(現存規模)は, 衍行方向10.2m, 梁行方向3.9mの約40m²である。各柱間距離は, 衍行方向北辺のP 1-P 2間が1.8m, P 2-P 3間・P 3-P 4間が2.1m, P 4-P 5間が2.2m, P 5-P 6間が2.1m, 同じく中央のP 14-P 15間が1.8m, P 15-P 16間・P 16-P 17間が2.1m, P 17-P 18間が

2.2m, P 18-P 7 間が2.1m, 南辺のP 13-P 12間が1.8m, P 12-P 11間・P 11-P 10間・P 10-P 9間・P 9-P 8 間がいずれも2.1mである。桁行方向の西端はいずれも1.8m, 東端から2間目は2.2m, ほかはすべて2.1mの柱間距離であり, 規則的である。梁行方向の柱間距離については, 西辺のP 1-P 14間が2.0m, P 14-P 13間が2.1m, 西側から2列目のP 15-P 12間が2.0m, 4列目のP 4-P 17間・5列目のP 5-P 18間が1.8m, P 18-P 9間が2.1mであることを除けば, ほかは1.9mである。一部に1.8m, 2.0m, 2.1mが存在するが大半は1.9mということになる。つまり, 桁行方向は1.8~2.2mで主体は2.1m, 梁行方向は1.8~2.1mで主体は1.9mである。

各柱穴の規模は, P 1が長径39cm×短径37cm, 深さ42cmである。P 2・P 3はS X 1の覆土に掘り込まれており, 柱穴の掘方は検出できなかったが, 根石の存在から柱穴を確認した。よって, 柱穴の規模は不明であるが, ほぼ径30~40cm, 深さ40~50cm程度と考えられる。P 4は径44cm, 深さ59cm, P 5が径54cm, 深さ47cm, P 6が径41cm, 深さ38cm, P 7が長径44cm×短径41cm, 深さ14cm, P 8が長径51cm×短径49cm, 深さ12cm, P 9が径44cm, 深さ22cm, P 10が長径52cm×短径39cm, 深さ27cm, P 11が長径54cm×短径52cm, 深さ42cm, P 12が径40cm, 深さ61cm, P 13が径42cm, 深さ57cm, P 14が径33cm, 深さ57cm, P 15が長径41cm×短径39cm, 深さ29cm, P 16が径39cm, 深さ30cm, P 17が長径40cm×短径37cm, 深さ29cm, P 18が長径53cm×短径45cm, 深さ25cmである。径33~54cm, 深さ12~61cmと幅があるが, 主体は径40~50cm, 深さは東半の柱穴は大きく削平を受けており, 西半の柱穴でみれば, ほぼ40~60cm程度とみられる。

土層断面の観察によって柱痕跡を検出した柱穴が3基(梁行方向の西辺P 1・P 13・P 14)ある。それによれば, 径12cm(P 1・P 14)と径17cm(P 13)の柱が存在した可能性が考えられる。根石は11個の柱穴で検出した(P 1~P 9・P 13・P 18)。全体の6割以上の柱穴に根石が存在することになる。S X 1側の桁行方向北辺すべての柱穴と同じく中央及び南辺の東側2列分の柱穴, そして南辺西端のP 13に根石が置かれており, 建物の北辺と東側の地盤(遺構面)が特に脆弱であることの証左であろう。根石には, 10数cmから20数cm大, 厚さ数~10数cmの分厚い板石や角礫を用いている。P 5では17cm×30cm, 厚さ23cmの角礫の上に19cm×23cm, 厚さ8cmの小型の板石を置いている。P 5はS K 3の覆土に掘り込まれており, あるいは2つの柱穴が部分的に重複し, それぞれの根石である可能性もある。P 9では20cm×30cm, 厚さ13cmの分厚い板石と16cm×25cm, 厚さ6cmの板石を重ねて用いている。P 13の上方の石は裏込めとみられる。P 18では大小の石計3個を同じ高さに置いている。石材は, 粒粗黒雲母花崗岩が主体で(P 2・P 3・P 5・P 6・P 9・P 13・P 18), ほかに半花崗岩(P 1・P 4・P 7)・凝灰岩(P 1)・泥質岩ホルンフェルス(P 4)・珪質凝灰岩(P 4)・圧碎泥質岩(P 5)・斑状黒雲母花崗岩(P 7)・圧碎岩(P 8)などがみられる。

出土遺物(第22図38~40, 図版18) 桁行方向北辺中央のP 4から青磁・碗(40)が, 同じく南辺中央のP 11からは土師質土器・小皿2点(38・39)が出土した。

38・39は土師質土器・小皿で, 口径8.1~8.55cm, 器高1.2~1.3cmである。ほぼ同じ大きさだが, 38の口縁がやや外反気味に外上方に延びるのに対し, 39は内湾気味に立ち上がる。いずれも底部

回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。40は青磁・碗の底部片で、直立するやや深い削り出し高台の疊付まで全体にやや厚く施釉されている。疊付の外縁には面取りがなされている。全体に貫入が顕著である。

⑤ S B 8 (第18図、図版7・9)

B区南西隅に存在する1間×2間+αの建物跡で、南端が調査区外に延びる可能性がある。梁行方向北辺がS B 7と重複するが、その新旧は不明である。桁行2間(西辺P 1-P 2-P 3、東辺P 5-P 4-O)、梁行1間(北辺P 3-O)の規模で、建物の主軸はほぼ北西-南東方向を指す(N33°W)。建物面積(現存部分)は、桁行方向4.6m、梁行方向1.9mの約9m²である。各柱間距離は、桁行方向西辺のP 1-P 2間が2.5m、P 2-P 3間が2.2m、東辺のP 5-P 4間が2.5m、P 4-O間が2.2m、梁行方向北辺のP 3-O間が1.9mである。桁行方向の南半が2.5m、北半が2.2mと南半の方がやや広い。

各柱穴の規模は、P 1が長径48cm×短径42cm、深さ74cm、P 2が長径26cm×短径19cm、深さ18cm、P 3が径26cm、深さ39cm、P 4が径29cm、深さ70cm、P 5が径37cm、深さ60cmである。径19~48cm、深さ18~74cmと全体に小型だが深い柱穴が多い。P 2・P 3・P 4が比較的小規模だが、P 4はかなり深い。径20~40cm、深さ60~70cm程度が主体である。

P 1のかなり浮いた位置で裏込めと思われる10cm大の角礫を検出した。

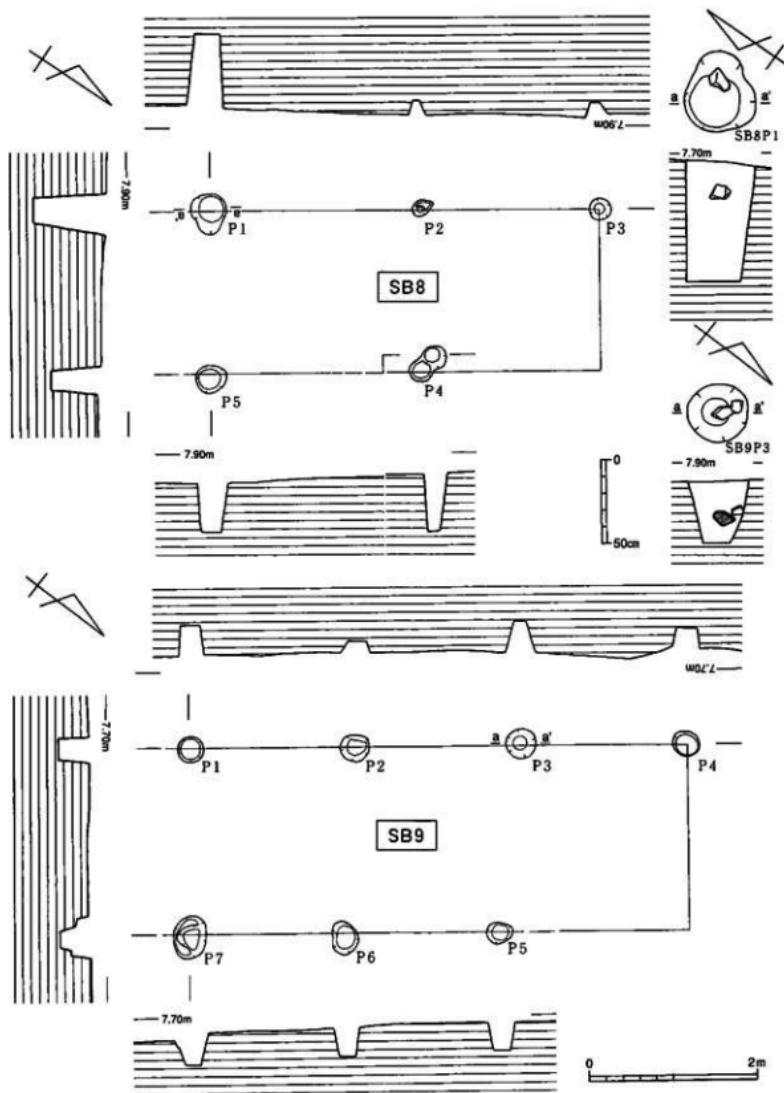
出土遺物はない。

⑥ S B 9 (第18図、図版7・9)

S B 8の3m余り東にはほぼ平行して存在する建物跡で、やはり梁行方向北辺がS B 7と重複する。その先後関係については不明である。南側調査区外に延びる可能性がある。現状で、桁行3間(西辺P 1-P 2-P 3-P 4、東辺P 7-P 6-P 5-O)、梁行1間(北辺P 4-O)の規模をもつ。建物の主軸はほぼ北西-南東方向を指す(N37°W)。建物面積(現存部分)は、桁行方向6.0m、梁行方向2.2mの約13m²である。各柱間距離は、桁行方向西辺のP 1-P 2間が2.0m、P 2-P 3間が1.9m、P 3-P 4間が2.0m、同じく東辺のP 7-P 6間・P 6-P 5間が1.9m、P 5-O間が2.3m、梁行方向北辺のP 4-O間が2.2mである。1.9~2.3mで、主体は1.9~2.0mである。

各柱穴の規模は、P 1が径30cm、深さ37cm、P 2が長径34cm×短径32cm、深さ15cm、P 3が径36cm、深さ38cm、P 4が長径33cm×短径28cm、深さ24cm、P 5が長径32cm×短径26cm、深さ34cm、P 6が長径40cm×短径30cm、深さ34cm、P 7が長径51cm×短径38cm、深さ37cmである。径26~51cm、深さ15~38cmでP 2がやや浅いが、径・深さとともにほぼ30数cm程度が主体である。P 3で10cm大の角礫が出土しており根石とみられるが、裏込石の可能性も考えられる(結晶凝灰岩・粗粒白雲母花崗岩)。

出土遺物(第22図41) 桁行方向西辺南端のP 1から土師質土器・小皿(41)が出土した。径7.4cm、器高1.15cmとかなり低平な器形で、直線的に外上方に延びる口縁部の端部を丸く納めてい



第18図 B区 SB8・SB9実測図 (1:30, 1:60)

る。調整は、底部回転糸切り離しのあと板目痕、内底面には一定方向のナデつけを施している。体部内外面は回転ナデである。

⑦ SB 10 (第19図、図版7・9)

B区南西部の南東隅に存在する1間四方の小型の建物跡であるが、東側あるいは南側の調査区外に延びる可能性がある。この建物跡はほかの建物跡と主軸方位が大きく異なり、柱穴も規模が小さく不安定で、性格・時期的な差異があるものと考えられる。建物の主軸はほぼ北東-南西方向を指す(N32°E)。建物面積(現存規模)は、桁行方向2.2m、梁行方向1.9mで約4m²である。各柱穴の規模は、P1が長径31cm×短径28cm、深さ8cm、P2が長径33cm×短径30cm、深さ8cm、P3が長径56cm×短径39cm、深さ17cm、P4はSB9P7と重複しており、深さ17cmとみられる。

根石・出土遺物等はみられない。

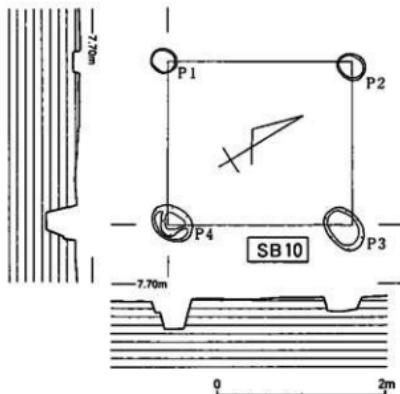
(2) 構列跡

B区北半で東西方向の構列跡1条(SA5)、南半で南北方向の構列跡2条(SA6・SA7)を検出した。SA5はSD5と一体のものとみられ、SB6と重複する。SA6はB区南東部の殆ど遺構の存在しない場所に存在する。南西隅のSA7はSB7あるいはSB8・SB9などとの関連性が考えられる。

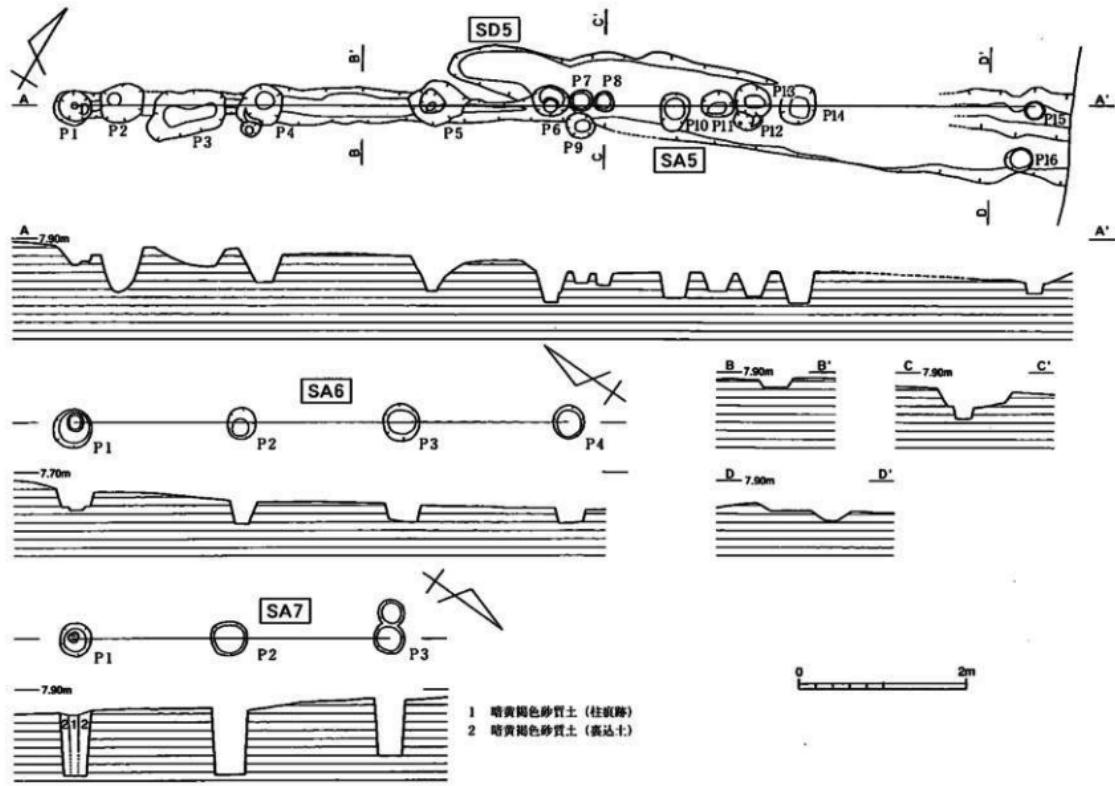
① SA5・SD5 (第20図、図版9・13)

B区東半中央部に位置する柱穴列で、SD5底面から掘り込まれており、両者は一体のものである。SD5はほぼ東西方向に延びる溝状遺構で、西端は恐らくSK1に流れ込んでいたであろうSD4と重複し、これに壊されており不明である。途中で二股に分岐するが東端は調査区外に延びる。SD5の現存規模は途中で削平を受けているが、ほぼ長さ12.2m、幅0.2~1.1m、深さ3~13cmと比較的浅い。この溝状遺構の底面に大小16個の柱穴が掘り込まれている(長さ11.4m)。柱間距離は0.9~5.6mと一定ではない。柱穴の規模は、径22~96cm、深さ13~60cmと幅があるが、ほぼ径30~50cm、深さ20~40cmと比較的浅いものが主体である。SA5の主軸方位は東北東-西南西方向を指す(N60°E)。

出土遺物(第22図42~44、図版18) 西半のP4から土師質土器・杯(42)、椀(44)が、中央のP9から土師質土器・椀(43)がそれぞれ出土した。



第19図 B区SB10実測図(1:60)



第20図 B区横列跡実測図 (1:60) (アミ目は柱痕跡を示す。)

42は口径12.0cm、器高3.85cmの杯で、平底の底部からやや外反気味に外上方に延びる体部をもつ。43・44は椀で、口径10.0cm、器高3.3cm(43)である。44は底部を失っているので明確でないが、いずれも無高台のものとみられる。44は体部の中位あたりに明確な稜をもつ。調整は、体部内面が横方向あるいは斜め方向の丁寧なナデ、体部外面上半は43が回転ナデ(一指頭押圧)、44は指頭押圧を施し、44の下半は未調整である。43の外底面は指頭押圧により平坦な底部を作出し、中央は強く凹ませている。色調は43が黄白色、44が淡黄褐色である。

② S A 6 (第20図、図版7・13)

B区南東部に存在する南北方向の柵列跡で、南側調査区外に延びる可能性がある。周辺は砂地で遺構面が形成されず、ほかに明確な遺構は存在しない。主軸は北西-南東を指し(N35°W)、現状で3間分(長さ5.8m)が認められた。各柱間距離は、P1-P2間・P2-P3間が1.9m、P3-P4間が2.0mである。各柱穴の規模は、P1が径46cm、深さ26cm、P2が長径38cm×短径33cm、深さ28cm、P3が径44cm、深さ22cm、P4が長径40cm×短径38cm、深さ18cmである。径33~46cm、深さ18~28cmと削平のためか径は比較的大きいものの浅い。根石・出土遺物などはない。

③ S A 7 (第20図、図版7・9)

B区南西部に存在する柵列跡で、S B 7 梁行方向西辺P1-P14-P13のほぼ延長線上に位置するが、その関連性については不明確である。主軸方位はほぼ北西-南東方向を指す(N35°W)。現状で2間分(長さ3.8m)を確認したが、南側調査区外に延びる可能性がある。付近の遺構面は厚さ10cm程度と比較的厚いものの、その下に分厚い砂層が存在するため比較的脆弱で、柱穴の崩落や損壊がかなり顕著にみられた。各柱間距離はいずれも1.9mである。各柱穴の規模は、P1が長径40cm×短径37cm、深さ74cm、P2が径40cm、深さ67cm、P3が径38cm、深さ53cmで、径40cm、深さ50~70cm程度と比較的規模が大きく、深い。

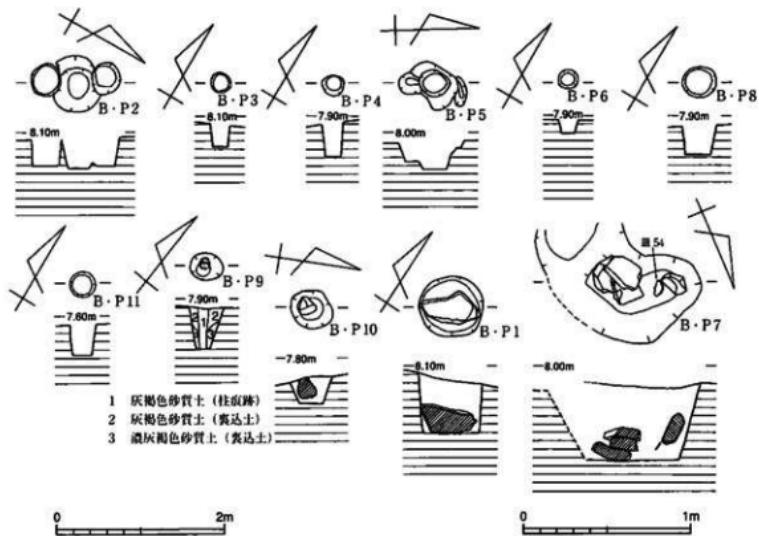
根石や出土遺物はみられないが、P1で径12cmの柱痕跡を検出した。

(3) 単独柱穴(第13・21図、図版12)

計12基存在する。根石をもつ柱穴3基(B・P1、B・P7、B・P10)、柱痕跡を検出した柱穴1基(B・P9)、報告遺物が出土した柱穴9基(B・P2~8、B・P11、B・P12)である。B・P1~9・12はB区北西部のS B 4~S B 6周辺に点在し、B・P10はS A 5・S D 5中央付近の南側に、B・P11はB区南半のS B 8とS B 9の間に存在する。

根石をもつ柱穴は、B・P1が長径38cm×短径36cm、深さ36cmの規模で、19cm×37cm、厚さ16cmの角礫(珪質凝灰岩)を置く。B・P7は径60~70cm、深さ40cmの柱穴の底に10数~20cm大、厚さ6~8cmの板石3枚を重ね根石としている(すべて黒雲母花崗岩)。B・P10は長径26cm×短径23cm、深さ16cmの柱穴のなかに10cm大の亜角礫を置いていた。

B・P9は長径39cm×短径32cm、深さ51cmの柱穴で、径12cmの柱痕跡を検出した。



第21図 B区単独柱穴実測図 (1:30, 1:60) (アミ目は柱痕跡を示す。)

報告遺物が出土した柱穴の規模は、径23~70cm、深さ16~42cmで、主体は径20~30cm、深さ20~40cmと比較的小さい。土師質土器などの土器類を出土する柱穴 (B・P2, B・P4, B・P7, B・P8, B・P12) と釘のみを出土する柱穴 (B・P3, B・P5, B・P6) が主である。ほかに、棒状土錐を出土した柱穴 (B・P11) がある。土器を出土する柱穴は多くは土器片1~2点の出土であるが、B・P2では小皿4点、皿・椀・瓦器椀各1点の計7点が出土した。

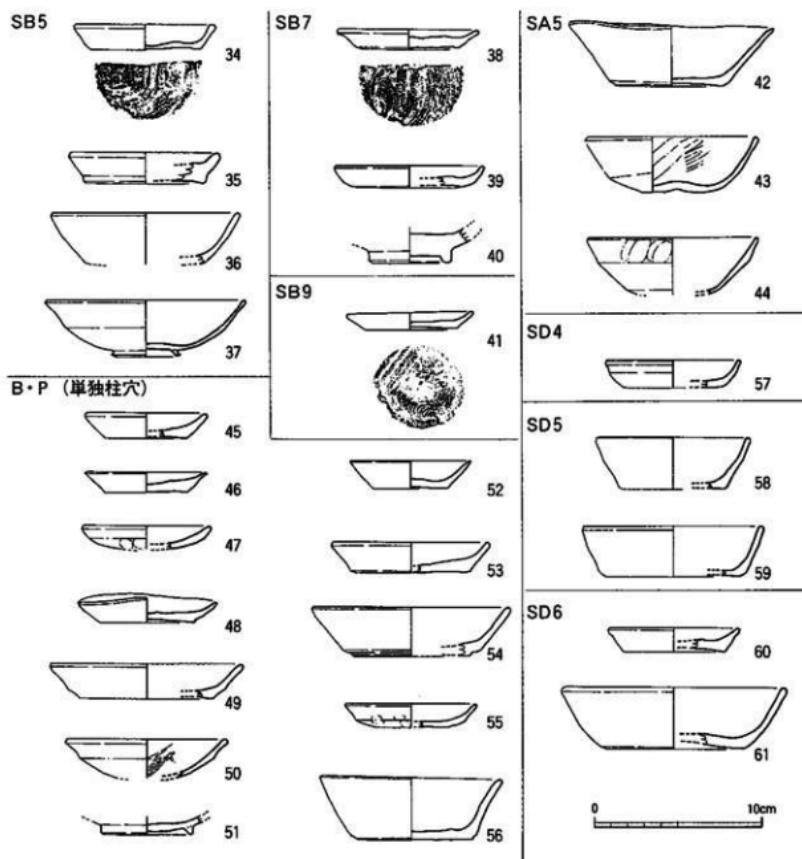
出土遺物 (第22図45~56, 第65図730, 第68図766・777・784, 図版18・24・26)

土師質土器・小皿6点、杯1点、皿2点、椀1点、瓦器・椀1点、小皿1点、土製品・棒状土錐1点、鉄製品・釘3点が出土した。B・P2からは土師質土器・小皿4点(45~48)、皿(49)、椀(50)、瓦器・椀(51)が、B・P4からは土師質土器・小皿(52)が、B・P7からは土師質土器・小皿(53)と皿(54)が、B・P8からは瓦器・小皿(55)が、B・P12からは土師質土器・杯(56)が出土した。また、B・P11からは棒状土錐(730)、B・P3, B・P5, B・P6からは釘各1点が出土している(766・777・784)。

45~48・52・53は土師質土器・小皿である。45~47は、口径6.85~7.4cm、器高1.2~1.5cmの小型品である。45は底部回転糸切り離し、46は底部回転糸切り離しのち板目痕、内底面に一定方向のナデつけ、体部内外面は回転ナデである。47は形態的に45・46とやや異なり、丸味の強い外底面には指頭押圧を施す。48は口径8.1cm、器高1.75cmと一回り大きく、底部は回転糸切り離しの後に縫目状の板目痕が顕著にみられる。内底面は一定方向のナデつけ、体部内外面は回転ナデである。52は口径7.15cm、器高1.65cmで、調整は底部回転糸切り離し、内底面は未調整、体部内外

面は回転ナデを施す。体部外面にはススが付着する。53は口径9.05cm、器高1.75cmの大型品で、底部は回転糸切り離しである。47以外は平底から外上方に直線的に延びる体部をもち、底部回転糸切り離し（46では板目痕、48では庭目状の板目痕が看取される）である。体部内外面回転ナデで、内底面が未調整のもの（52）や一定方向のナデつけを加えているもの（46・48）がある。

56は口径10.7cm、器高3.75cmの土師質土器・杯で、平底から緩やかに外反しながら外上方に延びる。底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデを施す。49・54は皿で、口径11.2cm・11.6cm、器高2.05cm・2.9cmである。外上方に直線的に延びる体部の内外面には回転ナデを施す。49の外側体部下半は未調整で、上半の回転ナデを施している部分との間が稜となっている。54の底部は



第22図 B区造構出土土器実測図 (1:3)

回転糸切り離してある。50は椀で、口径9.4cmの小型品である。体部内面は斜め方向のミガキ状の丁寧なナデ、体部外面の上半は強く窪んで下半の未調整部分との間に稜を形成しており、回転ナデかと考えられる。色調は黄白色である。51・55は瓦器で、前者が椀の高台部片、後者は口径7.6cm、器高1.4cmの小皿である。51は未調整の外面に断面逆台形の輪状高台を貼り付ける。高台部のみ横ナデを施す。内底面は一定方向のナデつけ、その外側にミガキ状の調整を施している。55の体部外面は丁寧なミガキ状のナデ、内底面は横ナデ、外底面は指頭によるナデ調整を施しており、この指頭ナデ部分と上半の丁寧なナデ部分との境は稜をなしている。

730は土製品・棒状土錘片で、現存長5.2cm、穿孔部分の推定幅1.9cm、厚さ1.5cm、中央部の幅・厚さともに1.6cmである。穿孔部分の断面形は扁円形状であり、中央部のそれはほぼ正円形である。孔径6mmで上方からを主に上下両方向から穿孔がなされている。上端面の中央には幅3~4mm、深さ1mmの縦方向に浅い溝がみられる。

766・777・784は鉄釘である。766のみ頭部を残し、折頭形である。先端は失っており、現存長6.35cmである。後2者はいずれも頭部を失っている。766・784は断面方形だが、777は円形の可能性が高い。

(4) SX 1・SE 1

B区西半中央に存在する池状遺構（SX 1）とその中に掘り込まれた木組井戸（SE 1）で、一体のものと考えられるので、一括して述べる。

① SX 1（第23図、図版7・8・14）

東西方向7.4m×南北方向7.0m、深さ（最大）1.65mの規模をもつ、平面形不整方形の池状遺構で、底面は中央に平面不整方形、断面台形の高まりが存在した。この高まりは木組井戸SE 1をSX 1の地山に酷似した淡橙色～明黄褐色砂質土で被覆した固く締まったもので、このことから、SX 1はSE 1に伴う掘り込みと考えられる。しかし、SE 1廃絶に伴って井戸を被覆したあと、例えば池などほかの機能を持った施設として再利用されたかどうかについては定かでない。ただ、SX 1埋没後にすぐ南側に東西方向に主軸をもつ大型の掘立柱建物跡SB 7が構築されている。そして、その北辺の平行方向の少なくとも2個の柱穴（P 2・P 3）がSX 1の覆土（暗灰褐色砂質土）を掘り込んでおり、このことからSX 1・SE 1はSB 7に先行することが明らかである。

出土遺物（第24図・第25図62~96、第65図720・723、第66図736・738・748、第68図758・778、図版18・24~26）

SX 1の覆土からは比較的多くの遺物が出土している（土器類35点、土製品2点、瓦3点、鉄製品2点）。土師質土器・小皿11点（62~72）、杯4点（73~76）、皿5点（77~81）、椀2点（82・83）、鍋1点（84）、須恵質土器・椀1点（86）、瓦器・椀1点（85）、青磁・皿2点（90・91）、青磁・碗3点（87~89）、青磁・合子蓋1点（92）、青白磁・皿1点（96）、白磁・皿

1点(95)、白磁・碗2点(93・94)、土製品・管状土錐2点(720・723)、軒平瓦1点(736)、丸瓦1点(738)、平瓦1点(748)、鉄製品・刀子1点(758)、釘1点(778)である。

a. 土師質土器 小皿・杯・皿・椀・鍋がある。

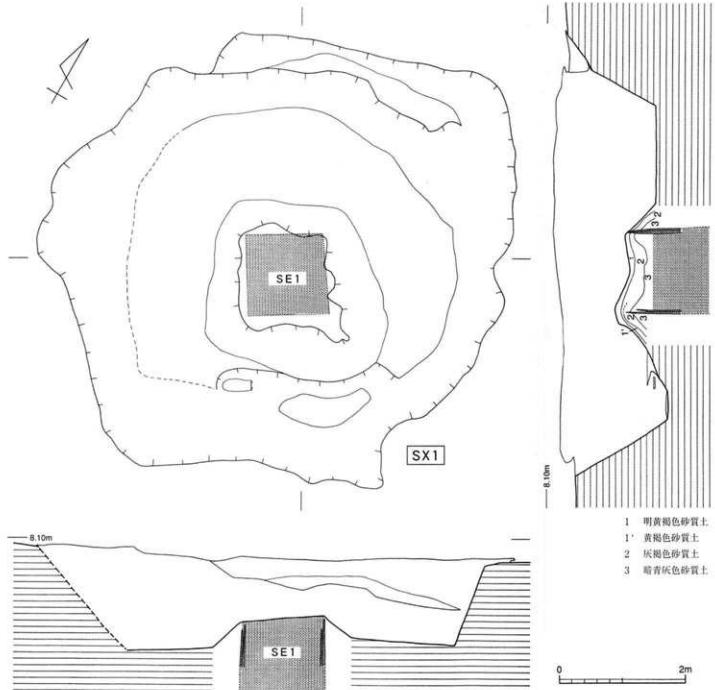
62~72は小皿である。口径5.4~8.6cm、器高0.85~2.15cmで、法量的には口径5.4cm、器高0.85cmの62、口径7.2~7.4cm、器高1.2~1.35cmの63~65・67、口径7.8~8.6cm、器高1.15~2.15cmの66・68~72に分けられる。形態的には主に体部から口縁にかけて、若干内湾気味に外上方に延びるもののが主体だが、64は多少外側に反り気味で、62は口縁端部が尖り、67は全体に分厚い。多くは平底だが、71は丸味の強い底部に短い口縁がつく。調整は、底部回転糸切り離し(63・65・66・68はその後板目痕)、体部内外面回転ナデを施す。内底面は一定方向のナデつけを施すもの(63・66)と未調整のもの(62・64・65・69)がある。また、体部外面の下端付近が未調整のものがある(63・65)。62は口縁がごく一部残存するが、意図的に口縁を打ち欠いて、多角形の平面形を作り出している可能性がある。64は底部回転ヘラ切りである。71は丸味の強い外底面に指頭によるとと思われる丁寧なナデを施している。

73~76は杯である。口径10.2~13.1cm、器高3.2~3.75cmで、73~75は外上方にほぼ直線的に延びる体部をもつ。76は口径が大きくやや低平な皿状の器形で、体部中位で屈曲する。調整は、底部回転糸切り離し(76はその後板目痕)で、体部内外面回転ナデである。73の体部外面下端、74・75の内底面、76の内底面・体部外面下半は未調整である。

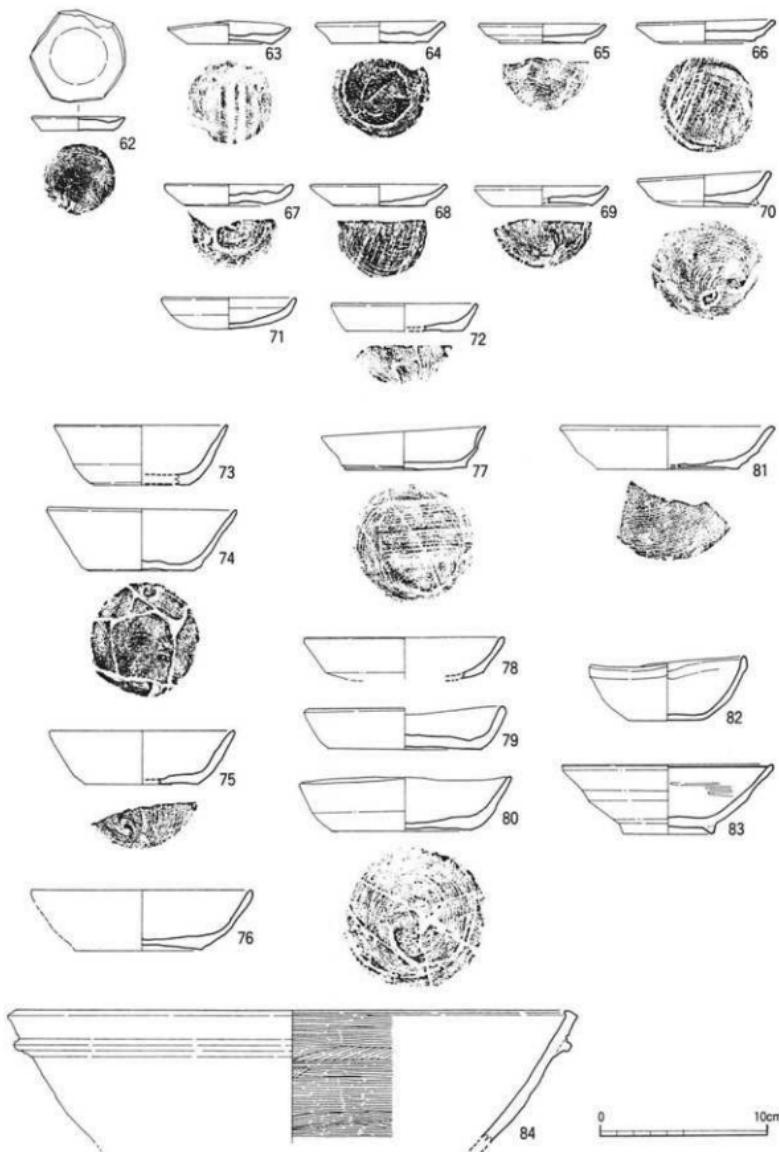
77~81は皿で、口径9.8~12.5cm、器高2.55~3.2cmである。小型の77を除けば、口径11.7~12.5cmである。77は体部中央で屈曲し、形態的にやや81に似ているものの、法量的に小型であることとともに、胎土精良、焼成非常に良好であるために全体に硬質で、ほかの皿と一線を画す。平底から外上方に直線的に延びる体部をもつ。79・81は若干内湾気味で、81の体部外面中位には稜がつく。調整は底部回転糸切り離し(77・80はその後板目痕)、体部内外面回転ナデである。78の底部は丸味をもち、丁寧なナデを施す。79は底部回転ヘラ切りである。79の内底面、80の内底面・体部外面下半は未調整で、77の内底面には乱雑なナデを行っている。

82・83は椀である。82は口径9.4cm、器高3.9cmの小型の椀で、平底気味の底部からやや内湾気味に立ち上がり、端部をやや肥厚させる。胎土はあまり精良ではないが、焼成はかなり良好である。内面は横方向主体のミガキ状の丁寧なナデ、口縁部内外面は横ナデ、体部外面から外底面にかけては未調整である。外底面中央はやや凹む。淡黄褐色を呈する。83は断面三角形の比較的高い輪状高台をもつ椀で、外上方にほぼ直線的に延びる口縁の端部を丸く納める。体部外面の回転ナデと未調整部分の境が稜をなしている。調整は、内底面未調整、体部内面は横方向主体のミガキ状の調整、口縁部横ナデ、外面体部上半は強い回転ナデで凹む。体部下半から外底面にかけては未調整で、高台とその周囲のみ横ナデを施している。胎土はかなり精良だが、焼成はやや不良である。口径12.45cm、器高4.1cmである。

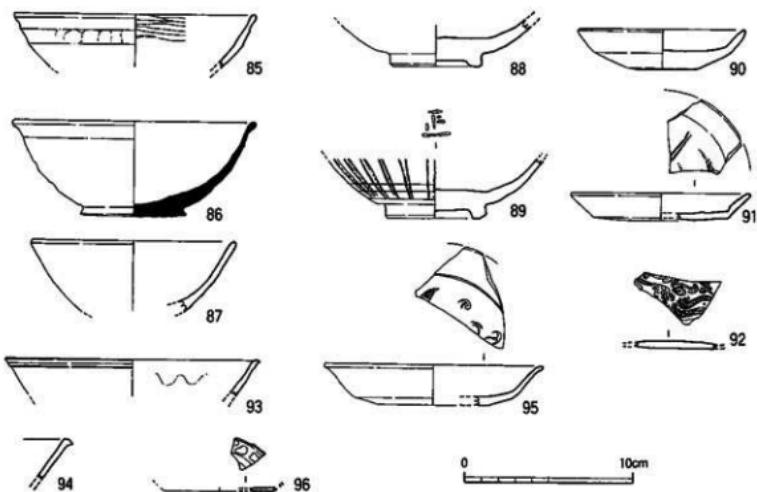
84は口縁部直下に断面三角形の貼り付け突帯が巡る鍋で、口径33.2cmである。調整は、内面横方



第23図 B区 SX1 実測図 (1:60) (アミ目は SE1 を示す。)



第24図 B区S X 1出土土器実測図(1) (1:3)



第25図 B区SX1出土土器実測図(2)(1:3)

- 向の浅いハケ目、外面上半は横ナデ、口縁端部は平坦である。外面全体にススがこびりついている。
- b. 須恵質土器 86は椀で、口径14.2cm、器高5.8cmである。縄高台の底部から外上方に内湾気味に立ち上がり、やや外反させた口縁部の端部を丸く納める。調整は、底部回転ヘラ切り、口縁部内外面回転ナデで体部の外面は未調整である。全体に丸味の強い深い椀である。
- c. 瓦器 85は、口径14.2cmの椀で、高台部を失う。若干内湾気味に外上方に延びる体部片で、調整は、内面が横方向主体のミガキ調整、口縁部外面が横ナデで強く凹み、その下位には横方向のミガキか粗いナデの後に指頭押圧を行う。体部下半は未調整である。
- d. 輸入磁器 青磁(皿・碗・合子蓋)、青白磁(皿)、白磁(皿・碗)がある。
- イ. 青磁(87~92) 皿(90・91)・碗(87~89)・合子蓋(92)がある。90は龍泉窯系の皿で、分厚い平底から強く屈曲して短く外上方に立ち上がった体部の端部を尖り気味に納める折腰の器形である。灰色の生地に施釉して灰緑色をなし、外底面は露胎である。口径9.7cm、器高2.4cmである。91は同安窯系の皿で、口径10.35cm、器高1.65cmである。平底から若干外反気味に外上方に延びる体部がつくもので、体部内面の見込みとの境には段を有する。底部は薄手である。内底面にはヘラ状工具による片刃彫りの割花文と櫛歯状工具による刺突文(雷光文)が施されている。施釉後外底面の釉は削り取られている。
- 87~89は碗である。87は口径11.9cmで比較的薄手の体部であるが、灰白色の生地に施釉しており、淡緑色をなす。88・89は分厚い削り出し高台片で、疊付外縁を面取りし、施釉もこの部位までである。88は高台径5.0cmで高台の削り出しがやや浅い。生地が灰褐色、施釉部分は暗灰緑色である。89は高台径4.5cmでやや高台の削り出しが88に較べて深い。内底面の中央に「正」字を

陽刻している。体部外面には浅い片刃彫りによる蓮弁文が施されている。明灰色の生地に施釉しており、暗灰緑色を呈する。88・89ともに龍泉窯系と考えられる。92は鳳凰の印花文を配する合子蓋と考えられるもので、内面の中央に一定方向のナデを、その周囲に回転ナデが施されている。胎土白色、施釉部分はごく薄い淡灰緑色で、白磁あるいは青白磁の可能性もある。

ロ. 青白磁 96は底径6.6cmの皿と考えられるもので、ごく薄い底部の内面に印花文が表されている。施釉部分は淡青色の部分と白色の部分がある。

ハ. 白磁 皿(95)と碗(93・94)がある。95は口径12.8cm、器高2.4cmの皿で、内底面に陰刻文が施されている。平底から水平に近く外方に延び、途中で強く屈曲して斜めに立ち上がり、緩やかに外反させた口縁の端部を丸く納めている。外底面露胎、ほかは薄く施釉している。内底面の周縁には浅い削り込みによる円圏がある。93は口径14.6cmの碗で、短く外反し水平に延びた口縁直下に浅い段がつく。94も短く外反するが、上端面は丸味を帯びる。いずれも灰白色の生地に透明釉を施す。

エ. 土製品 管状土鍤2点(720・723)がある。720は小型筋鉤形のもので、長さ3.7cm、径0.55~1.1cm、孔径0.4cmである。色調は暗褐色~赤褐色で、焼成は良好である。723は筒形の大型品の小片である。色調は淡黄褐色で、復元径4.4cmである。

フ. 瓦 軒平瓦(736)・丸瓦(738)・平瓦(748)各1点がある。

736は唐草文を瓦当に配する軒平瓦で、瓦当部の縱幅約4cm、厚さ1.4~2.5cm、瓦当面の内区幅2.6cm、外縁幅0.6~0.8cm、高さ0.3cmである。胎土は1~2mmの砂粒を多く含み、焼成は良好で、灰色を呈する。凹面布目痕、瓦当の裏面は指頭による調整、凸面には指頭押圧がみられる。738は端部付近の破片だが、瓦以外の可能性がある。748は側端面を部分的に残す平瓦片で、凹面には横方向のヘラ調整が認められる。また、側端面には縱方向の深い擦痕がみられる。

ギ. 鉄製品 刀子状鉄製品(758)・釘(778)各1点がある。

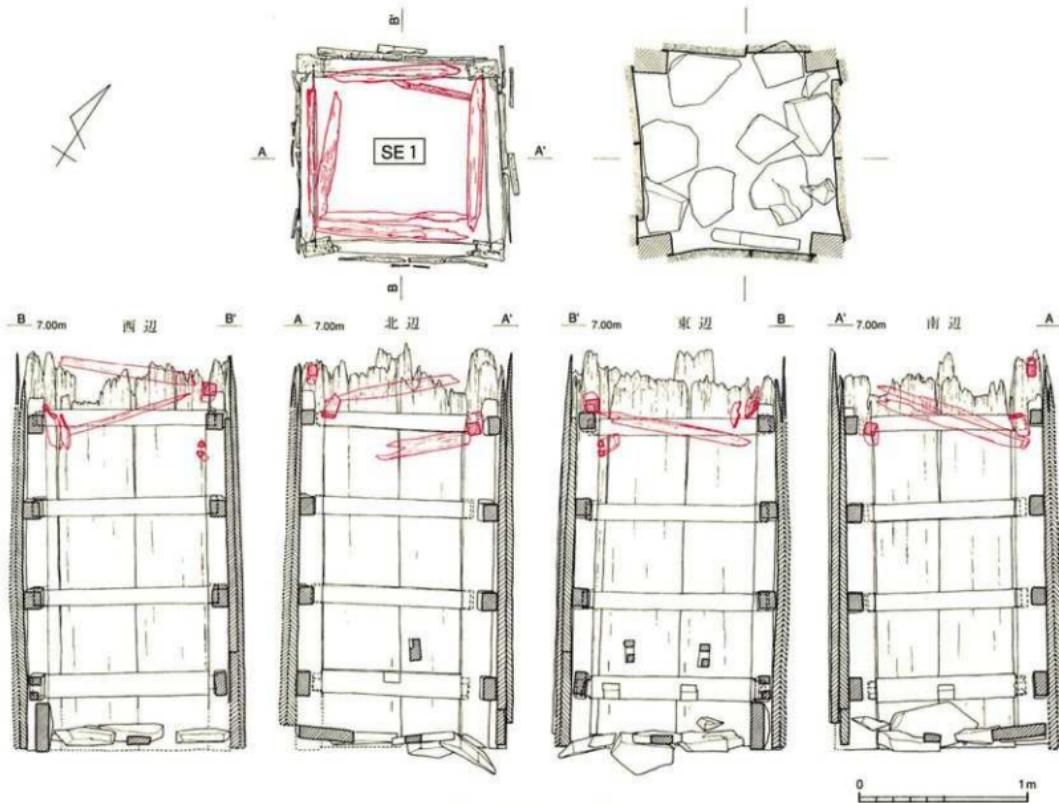
758は刀子の刃部の末端から茎部にかけての破片とみられるもので、茎部端を若干折り曲げている。現存長7.1cm、幅1.0~1.3cm、厚さ0.4cmである。778は現存長4.5cmの釘片で、頭部を失っている。断面方形で、幅3~6mm、厚さ4~5mmである。

②SE1 (第26図、図版14・15)

S X 1 のなかで検出した縦板組隅柱横棧型の木組井戸である。廃絶後埋め戻されたのち、地山上に酷似した土によって被覆され、南北2.7m×東西2.9m、高さ0.45~0.59mの方形の高まりを形成していた。掘方は不明確だが、土層断面の観察によれば井戸縦板の背後30cm余りに土層の違いがみられ、一辺2m程度の掘方が存在した可能性がある。

井戸の規模は、平面が横棧の内側で一辺1.0m、縦板の内側で一辺1.2mの正方形をなし、深さ(縦板上端から石敷きの上面まで)は2.4mである(石敷き上面の標高4.5m)。

構造的には、隅柱を長辺が東西方向を指すように立て、隅柱の二側面に4段分穿たれた納穴に横棧を渡して井戸の木組みとする。木組みの外側に縦板・添板を立てる。縦板は井戸の東西辺は



第26図 B区 SE 1 実測図 (1:30)

大型の縦板2枚と小型の縦板1枚を並べて立て、隙間の背後には2枚の添板を立てる。南北辺は大型の縦板2枚を並べて立て、隙間を添板1枚で塞ぐ。即ち、SE1は隅柱4、横桟16、縦板(大)8、同(小)2、添板6で構成されていた。東西辺の縦板は西辺が北から大・大・小と並ぶのに対し、東辺は逆に南から大・大・小と並ぶ。隅柱と横桟の組み方は、隅柱の広い方の側面の奥側に寄せて縦16cm、横9cm、奥行5cmの長方形の枘穴を掘り込み、この枘穴に隅相欠き枘の裏面が井戸の内側になるように差し込み、隅柱の狭い方の側面の手前に寄せて縦12cm、横8cm、奥行5cmの長方形の枘穴を掘り込み、横桟を同じように差し込む。特に西辺と東辺では横桟の側面が縦板とぴったり合うように横桟を渡している。各部材の大きさは、縦板(大)が長さ240cm、幅55cm、厚さ6cm、縦板(小)と添板が長さ240cm、幅30cm、厚さ4cm、隅柱が長さ240cm、幅20cm、厚さ10cmである。横桟は長短があり、東辺・西辺が長さ109cm、北辺・南辺が長さ92cmで、高さ・奥行は上から1~3段目は断面ほぼ正方形を呈し、高さ10cm、奥行9cmであるが、最下段の横桟は断面が高さ14cm、奥行7cmの長方形の板状を呈する。なお、横桟の両端の納については、3段目まではいずれも隅相欠き枘であるが、最下段のものは西辺と北辺の両小口及び東辺の両小口が平納、東辺北小口は留形相欠き枘、南辺は両小口ともに二重納で、不統一である。

これらSE1の井戸材には手斧等によると思われるハツリ痕が部分的にみられるが、大半は打ち割りによるもので、木口部分には鋸による切断痕跡が明瞭にみられる。また、井戸の西辺を除く三辺の4段目の横桟には枘穴が1~2か所みられ、鉄釘が打ち込まれた横桟(北辺最下段・東辺3段目)もある。これらは井戸材として詫えられたものではなく、比較的大規模な建物などからの転用材と考えられる。井戸の底面には上面を揃えて30~40cm大、厚さ数cmの板石10枚程度が敷かれていた。敷石の下は砂層で湧水が顯著であった。なお、井戸底から1.2m上方には厚さ10cm程度の木の葉・草・竹などの堆積がみられた。また、その20cm上には30~40cm大の角礫10個程度が投げ込まれていた。

今回検出したものは井戸の本体である井側であるが、井筒は存在しない。井桁についても明確ではない。ただ、井側最上層で検出した各辺1~2本ずつの長さ90cm、幅10cm、厚さ2~10cmの板材や角材が井桁状のものを構成していた可能性がある。

出土遺物(第27図97~112、図版19)

井戸内部からはそれほど多くの遺物が出土したわけではない。覆土上層で土器片が一定程度出土したが、下層では出土点数も少ない。しかし、底面及び底面近くで数は少ないものの、完形に近いものがややまとまって出土している(97~101~105・107)。98~100・106・108~112は覆土上層(中位の角礫層まで)からの出土である。土師質土器・小皿4点(97~100)、杯6点(101~106)、皿5点(108~112)、碗1点(107)がある。これらはほかの土師質土器と較べて、顯著な違いがみられる。全体に焼成が非常に良好な点が特徴で、胎土は非常に精良なものとそうでないものとがあるものの、これらの土師質土器は全体に硬質で、本遺跡のほかの土師質土器とは異質である。これらを、焼成・色調・胎土などの点で大きく3つに分けると、

- (1) 胎土は精良ではなく、焼成のみ非常に良好で、色調は様々なもの(97~100・102・

(2) 胎土が精良で、焼成も非常に良好。色調は淡褐色。(101・104~106)

(3) 胎土が精良で、焼成も非常に良好。色調は白褐色。(108~112)

特にこの(3)については、いわゆる白色土器系とみられる。

97~100は小皿で、口径7.4~8.5cm、器高1.0~1.8cmである。97は直線的に延びる短い口縁、98は若干内湾気味に外上方に延びる短い口縁、99・100は器高がやや高く、内湾気味に立ち上がる体部中位で緩やかに外反して口縁に繋がる。いずれも底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。内底面は99が一定方向のナデつけ、97・98は未調整である。99の外面体部下半にも未調整部分がある。101~106は杯で、103~105が口径11.0~11.3cm、器高3.9cm、106が口径14.3cm、器高4.2cmである。106は大型でやや皿状だが、103~105は平底から外上方に直線的に立ち上がる器形である。いずれも底部回転糸切り離しで、体部内外面回転ナデである。101・102・103は内底面(103は内面口縁付近まで)及び外面体部下端に未調整部分がある。

108~111は白色土器系の皿で、口径10.9~11.1cm、器高2.75~3.5cmである。平底の底部から外上方に直線的に立ち上がる。底部切り離しは明確な糸切り離しではなく、109は回転ヘラ切り後板目痕を、110も明確ではないが回転ヘラ切りの可能性がある。108は筵目状板目痕の周縁をナデ調整し、111は外底面全体に粗くナデ調整しているためにいずれも底部切り離しについては不明である。体部内外面回転ナデで、109以外は内底面に一定方向のナデつけを行っている。109の外面体部下端に未調整部分がある。108がやや褐色味が強いが、色調は白褐色である。112は白色土器系の大型の皿である。口径15.2cm、器高4.1cmで、丸味の強い底部は体部との境が不明瞭である。底部から弱く屈曲して外上方に直線的に延びた口縁の端部をごく僅かに直立させる。器壁が全体的にやや薄いが、体部は比較的厚い。内底面は継方向の細かいナデ、体部内面から口縁部外面にかけて回転ナデ、外面体部から外底面は指頭による比較的丁寧なナデ調整を施す。外底面はかなり丁寧だが、体部は比較的粗く未調整気味である。ほかの白色土器系のものよりも白味が強い。

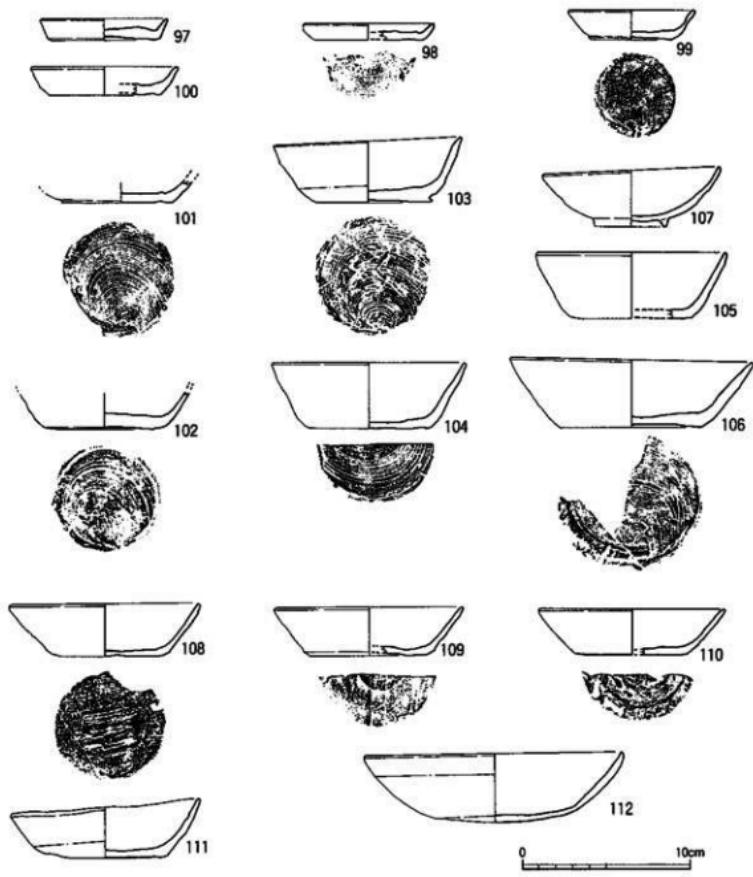
107は断面逆台形の比較的しっかりした貼付輪状高台をもつ、口径10.5cm、器高3.65cmの碗である。胎土は比較的精良だが1~3mm大の粗砂粒を含む。口縁端部を面取り状にし、内面全体に丁寧なナデ調整を施す。外面は、高台周辺を回転ナデしている以外は指頭によるナデ調整である。色調は淡灰色を呈する。

(5) 土坑

B区では3基の土坑を検出した。SK1はB区北半中央、SK2は北半東端、SK3は西半中央に存在する。SK1からはやまとまって近世陶磁器・瓦が出土している。SK2は墓坑状、SK1・SK3は井戸状を呈する。

① SK1 (第28図、図版13)

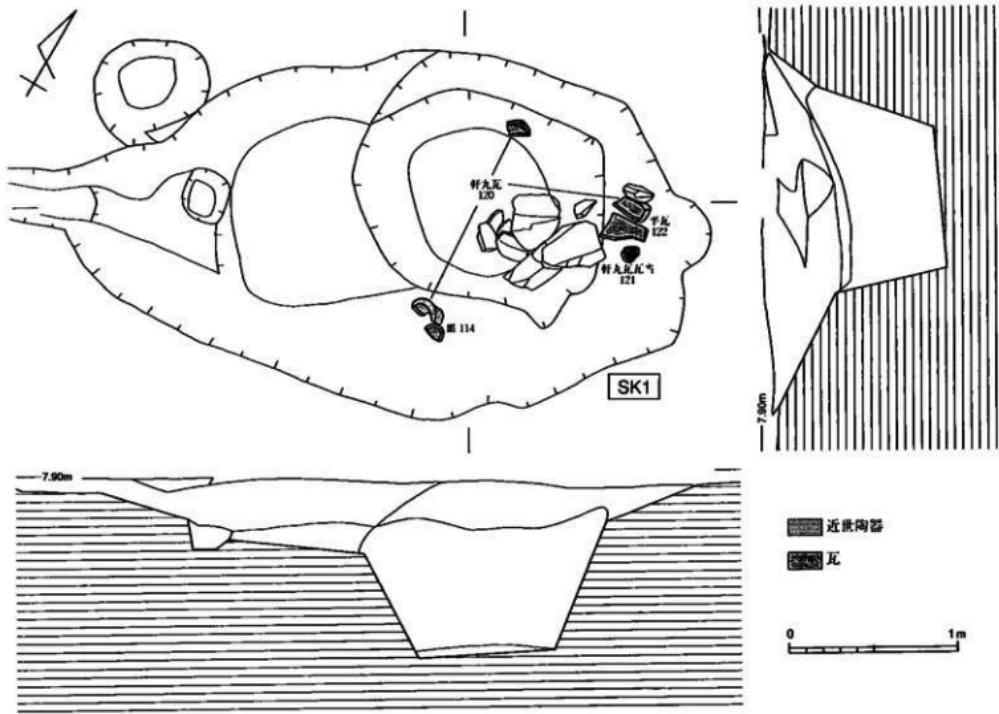
B区北半中央に掘り込まれた大型土坑で、SB6西半やSD5と重複する。SB6との新旧は



第27図 B区SE1出土土器実測図 (1:3)

不明だが、SD 5に後出する。西側ではSD 4と繋がるが、その先後関係は不明である。平面形態は東西に長い不整梢円形で、長径3.8m×短径2.2m、深さ0.47mのやや深い土坑の東側に偏して、平面不整円形、長径1.6m×短径1.2m、深さ0.63mの深い土坑を掘っている。底面はほぼ平坦である。東側の上段土坑の底面から下段土坑の上層にかけて10~40cm大の角礫数個と瓦片3個体分、近世陶器・皿が下段土坑に落ち込むようにして出土している。瓦片や近世陶磁器片は下段土坑内部からも出土している。

SK 1の性格については明確にはしがたいが、SD 4との関連性やその形態などから集水施設



第28図 B区SK1実測図 (1:30)

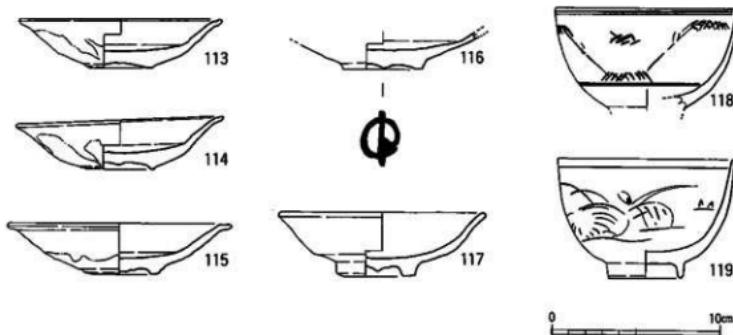
あるいは井戸的なものを考えることができよう。

出土遺物（第29図・第30図113～123、図版25）

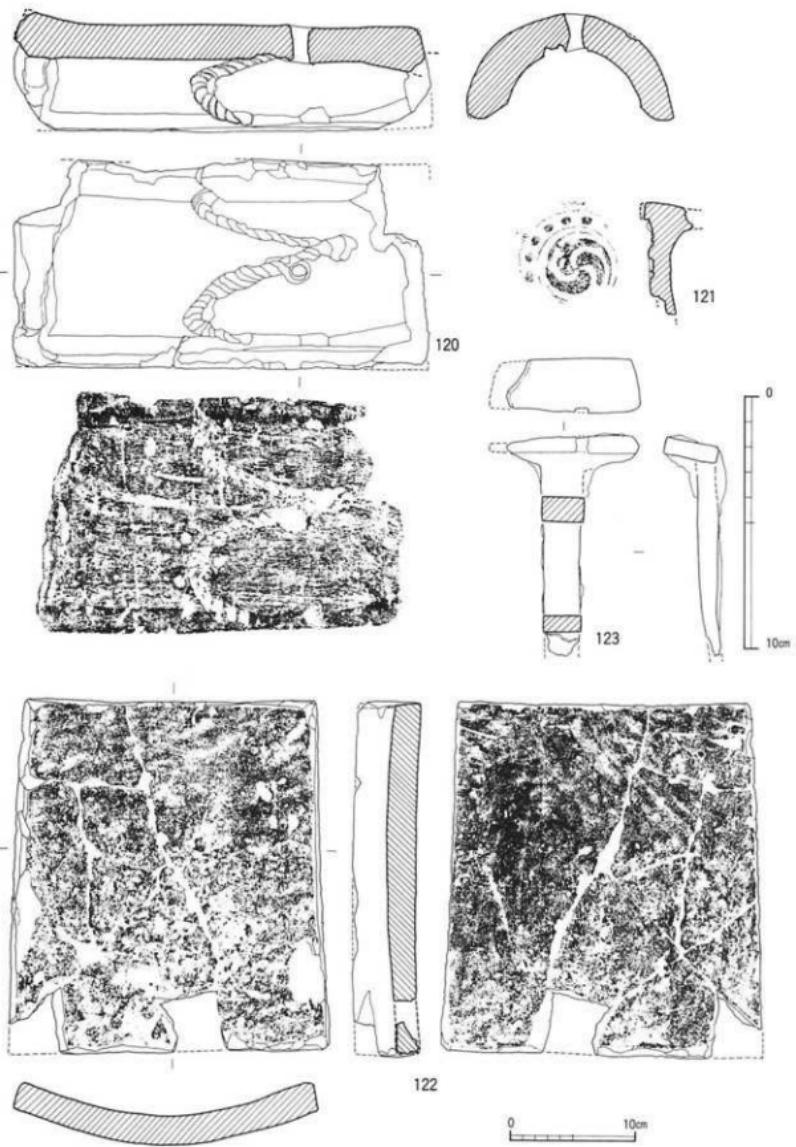
近世陶器・皿5点（113～117）、近世磁器・碗2点（118・119）、軒丸瓦2点（120・121）、平瓦1点（122）、用途不明の鉄製品1点（123）が出土した。

113～117は陶器・皿で、113～116は溝縁皿である。113・114、115・116はそれぞれ類似した器形・法量・色調のものである。前者は口径11.9～12.1cm、器高2.9～3.2cmで、ごく浅い削り出し高台をもつ。色調は露胎部分が暗灰色、施釉部分が灰緑色である。後者は口径13.05cm、器高3.0cmとやや径の大きなもので、高台の削り出もしやや深い。色調は露胎部分が濃茶褐色～暗褐色、施釉部分は暗灰緑色・濃緑色である。115・116の体部外面下半に回転ヘラケズリがみられる。115の疊付を中心に3か所に砂目が付着する。116の高台内には「中」と思われる墨書がおこなわれている。117は内外面ほぼ全面に白化粧土を塗った上に施釉している。ひび割れ状の貫入が著しい。やや深い削り出し高台の疊付部分は露胎である。口径12.1cm、器高3.8cmである。118・119は磁器・碗である。ほぼ同形態・同法量のもので、口径10.4～10.8cm、器高7.0cmである。直立する深い体部をもつ。118は白色胎土に透明釉を施すもので、体部外面の上に2条、下に1条の淡青色の圈線間に同じ色調の竹の文様が描かれている。119は直立する高台をもち、灰白色・橙色の胎土の上に白化粧土を塗り、その上に透明釉を施している。疊付は露胎である。体部外面の上方に1条のくすんだ青灰色の圈線を描き、その下方には同じ色の草花文を描く。

120～122は瓦である。表面黒色、胎土暗灰色で、120は軒丸瓦の瓦当部分が外れ、また玉縁部分も失っている。よって、凹面側の小口における面取りの有無やその角度及び玉縁の取り付き角度については明確にし得ないが、凹面の両側端面には深い角度で広い面取りが行われている。筒部後端から1/3程度（10cm）瓦当側に寄った辺りの中央に1.6cm×1.8cmの方形の孔（釘穴）が穿たれている。凹面中央には長く垂らされた状態の吊り紐の痕跡が縄目も明らかに残されている。調整は、凹面が縱方向の薙状のものを編んだものの痕跡及び瓦当側から1/3のあたりに5cm間隔で

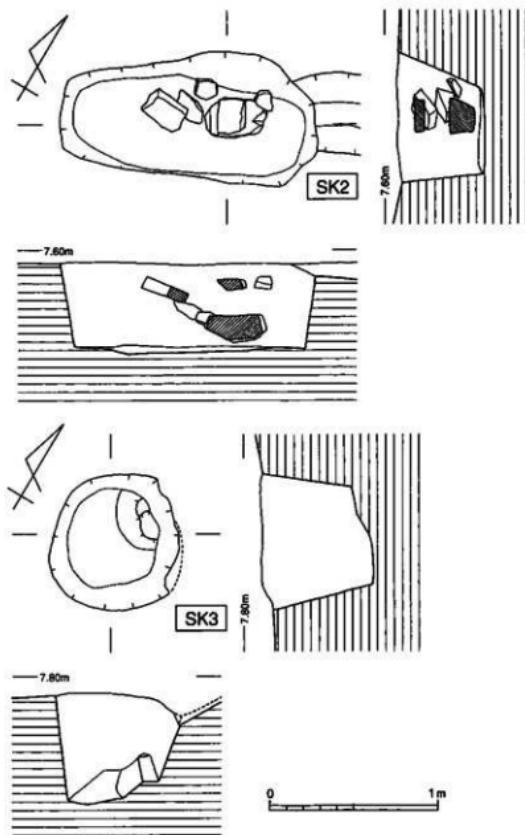


第29図 B区SK1出土土器実測図（1:3）



第30図 B区SK 1出土瓦・鉄製品実測図 (1:2, 1:4)

2条と1条のこれに直交する沈線状の調整がなされている。凸面は全体に光沢があり、縦方向のナデ調整が行われている。現存長33.3cm、丸瓦部幅16.3~16.7cm、同高さ8.2~9.3cm、厚さ2.4~3.2cmである。12Iは軒丸瓦の瓦当片で、巴文を配す。周縁は殆ど失い、珠文帯は1/2程度残存、巴部分は一部の尾を失うがほぼ原状を留める。巴は右三巴で頭部の丸味は弱く尾との区別は明確ではない。3つの頭部の先端がごく部分的に結合している。尾は1/2回転以上、2/3回転程度である。珠文は径7~8mm、高さ2mm程度のやや扁円形のもので、16~17個程度配されていたものと推定される。珠文帯内側の圈線は認められる。周縁幅約1.2cm、同高さ0.6cmである。なお、完存するひとつの巴ともうひとつの巴が細い線で繋がっており、范型の傷と思われる。また、上端の



第31図 B区 SK2・SK3実測図 (1:30)

瓦当面から2cm程度のところに比較的大きな穿孔の痕跡が認められる。復元径約11.0cmである。122は平瓦で、部分的な欠失はみられるが、ほぼ原形を留めている。長さ28.35cm、狭端面幅23.2cm、広端面幅25.55cm、高さ5.4cm、厚さ1.8~2.5cmである。凹面側端面に浅く狭い面取りが行われている。調整は、凹面がやや斜位気味のナデ調整、凸面は斜め方向のヘラケズリが看取される。なお、広端面は瓦当が剥がれたような痕跡が窺え、軒平瓦の可能性がある。

123は、現存長5.3cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmの長方形の頭部に幅1.4~1.7cm、厚さ0.6~1.0cm、現存長7.7cmの断面長方形の柄を付けた形態の用途不明の鉄製品である。柄の下端は欠失しているが、柄の断面形や大きさが120の釘穴のそれに近く、瓦を留める鉄釘の可能性が考えられる。

② S K 2 (第31図、図版13)

B区東端中央のSD 5内部にある平面不整隅丸長方形の土坑で、主軸はほぼ東北東-西南西を指し(N60°E)、SD 5やSA 5の主軸方位とほぼ一致する。長さ1.73m、幅0.42~0.78m、深さ(最大)0.55mの規模をもち、内部には10~30cm大の角礫数個が落ち込んでいた。底面はほぼ水平で、墓坑の可能性がある。SD 5との新旧は明確ではないが、同時存在か先行する。出土遺物はない。

③ S K 3 (第31図、図版13)

B区西半中央のSX 1南東に隣接して存在する土坑で、平面形やや南北方向に長い不整円形で、規模は長径1.62m×短径1.50m、深さ(最大)0.67mである。覆土上面からSB 7 P 5が掘り込まれ、南東方向に流れるSD 8の起点となっている。底面は北東側の壁面が乱れており、その機能等については明確にしえない。出土遺物はない。

(6) 溝状遺構 (第13図、図版13)

B区では溝状遺構を7条検出した。北辺の調査区際を走るSD 3、このSD 3と北西隅で合流する可能性のあるSD 2、B区中央を東西方向に走るSD 4・SD 5、同じくB区中央を南北に走るSD 6~8がある。遺構の詳細については、建物との関連性が明確でないので触れないが、出土遺物について以下に述べたい。

① SD 2 出土遺物 (第65図722・733)

土製品・管状土錐(722)と棒状土錐(733)があり、いずれも破片である。722は縱に半裁された状態のもので、長さ5.65cm、復元径3.5cm、孔径約1cmである。733は径1.45~1.75cmで、上端に穿孔がみられる。断面形は穿孔部分が扁円形で、そのほかは正円形である。

② SD 4 出土遺物 (第22図57)

土師質土器・小皿(57)で、口径7.7cm、器高1.65cmである。口縁部外面に回転ナデがみられる

が、そのほかの調整は不明である。平底の底部から外上方に内湾気味に延びて途中で屈曲し、やや開き気味に直立する形態である。

③ S D 5 出土遺物（第22図58・59、第67図755、図版26）

土師質土器・杯2点（58・59）がある。口径に差がみられるが、いずれも平底の底部から外上方に若干内湾気味に立ち上がる器形である。口径は58が8.7cm、59が10.6cm、器高は3.0～3.05cmである。調整は、底部が回転糸切り離し、体部内外面は回転ナデである。59の口縁端部には条線の細かい横ナデが施されている。

755は現存規模が5.9cm×5.4cm×5.3cmのほぼ方形の砥石片で、4面に擦痕が認められる。下面には自然面が残る。石材は不明であるが、暗白色を呈する。

④ S D 6 出土遺物（第22図60・61）

土師質土器・小皿（60）と杯（61）がある。60は口径7.5cm、器高1.45cmで、平底の底部から外上方に直線的に短く延びる口縁の端部をやや尖り気味に納める。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。61は平底の底部から内湾気味に外上方に延びる体部をもつ。口径12.9cm、器高3.6cmである。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。

⑤ S D 8 出土遺物（第65図721、図版24）

土製品・管状土錐（721）で、下半を失っている。現存長6.2cm、径3.8cm、孔径1.6cmである。

3. C区の遺構（第32図、図版16）

C区はB区の南西隅から続く調査区である。南北16m、東西6.8～10.5mの、南北に長い長方形をなし、今回の調査区のなかでは最も面積が小さい。北、東、南には民家が隣接し、西にはみたち古墳群が存在する丘陵裾が迫る。調査前の状況は、北にある民家の進入路が調査区の中央を走り、その両側に畑3枚が存在する状況であった。現地表面（標高8.2～9.0m）から遺構面までの深さは0.6～1.4mで、北に浅く南東端が深くなる。

基本層序は、①耕作土、②床土（暗黄褐色粗砂質土）、③褐色粘質土、④灰褐色粗砂質土（包含層）を経て、遺構面（淡橙褐色～暗黄灰色砂質土層上面）に続く。③層と包含層はC区全体には存在せず、北西部と南東部を中心にみられる。層厚は場所によって大きく違う。北側（特に北西部）では、①②が20～30cmの厚さで、南側（特に南東部）ではともに厚さ50cm程度と厚い。遺構は西半に集中してみられ、溝状遺構を挟んで東側及びB区南西端にかけて遺構面の形成は脆弱で砂層が露出しており、明確な遺構はみられない。

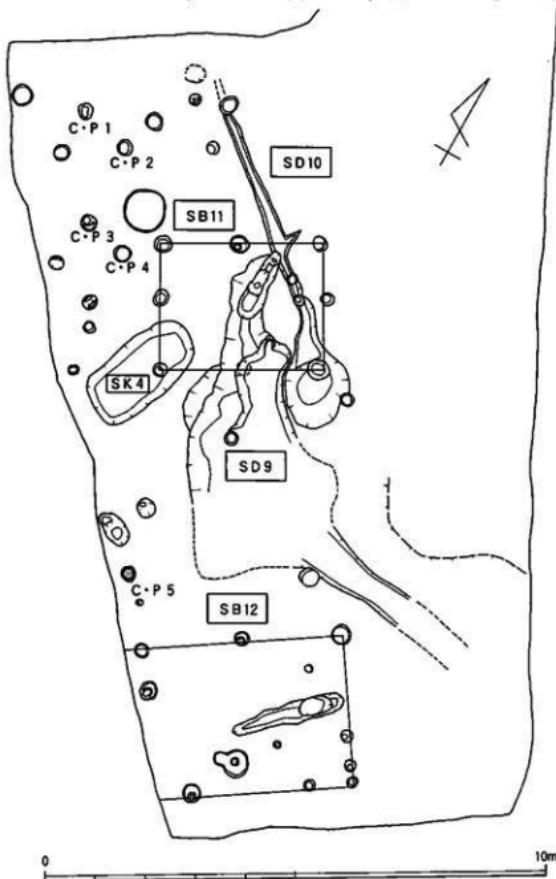
検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟（S B11・12）、単独柱穴5基（C・P1～5）、土坑1基（S K4）、溝状遺構2条（S D9・10）である。掘立柱建物跡は北半と南半に各1棟存在する。S K4はC区西半中央に位置する墓坑とみられるものである。

(1) 据立柱建物跡

2棟 (SB11・SB12) を検出した。建物の主軸はいずれもほぼ東西方向を指す。

① SB11 (第33図、図版16)

C区北半に存在する建物跡で、桁行2間（北辺P1-P2-P3、南辺P6-O-P5）、梁行2間（西辺P1-P7-P6、東辺P3-P4-P5）の規模である。建物の主軸はほぼ東北東-西南西方向を指す (N61°E)。建物面積は、桁行方向3.1m、梁行方向2.5mの約7.8m²である。各柱間距離は、桁行方向北辺のP1-P2間が1.5m、P2-P3間が1.6m、南辺のP6-O-P5間が3.1m（1間あ



第32図 C区造構配位置図 (1:100) (アミ目は根石をもつ柱穴を示す。)

たり1.55m), 梁行方向西辺のP 1-P 7 間が1.1m, P 7-P 6 間が1.4m, 東辺のP 3-P 4 間が1.2m, P 4-P 5 間が1.4mである。桁行方向は1間が1.5~1.6m, 梁行方向は北半が1.1~1.2m, 南半が1.4mと、桁行方向の柱間は広くほぼ均一的であるのに対して、梁行方向の柱間は不統一で南半は広いが、北半は狭い。

各柱穴の規模は、P 1 が長径36cm×短径33cm, 深さ32cm, P 2 が長径38cm×短径34cm, 深さ53cm, P 3 が長径28cm×短径26cm, 深さ52cm, P 4 が長径27cm×短径24cm, 深さ71cm, P 5 が長径44cm×短径37cm, 深さ36cm, P 6 が長径30cm×短径27cm, 深さ20cm, P 7 が長径37cm×短径34cm, 深さ19cmである。径24~44cm, 深さ19~71cmで、主体は径30cm台, 深さ(平均)40cmである。径はそれほど大きくないが、深い柱穴が目立つ。標高の高い梁行西辺の柱穴(P 1・P 7・P 6)が深さ19~32cmと浅く、標高の低い東半のP 2・P 3・P 4が52~71cmと深い。標高の低い側の柱穴が深く掘られているのは、造構面が脆弱であることと関わりがあるろう。

根石・出土遺物はない。

②S B 12 (第33図、図版16)

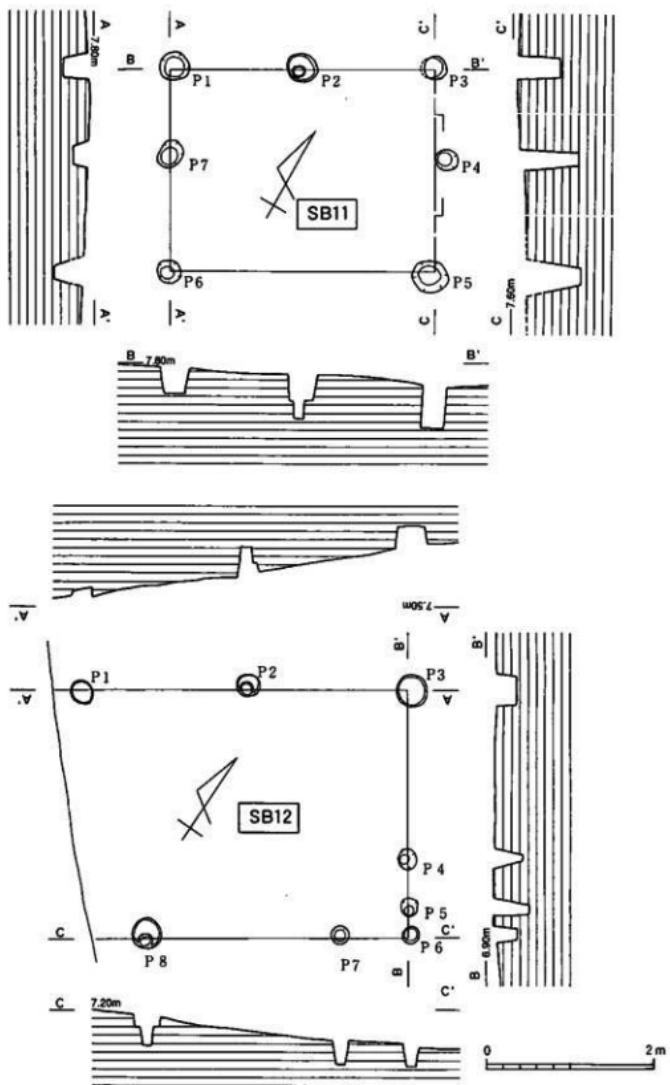
C区南半に位置する建物跡で、西端が調査区外に延びる。東辺と南辺では柱間距離が一定せず、柱穴の径は小さいが深い。建物としてはやや小規模で仮設的なものであろう。桁行方向(現存部分)2間、梁行方向(東辺)2間程度の規模をもつ。建物の主軸は、ほぼ北東-南西方向を指す(N56°E)。建物面積(現存部分)は、桁行方向3.3~4m、梁行方向2.9mの約10m²である。各柱間距離は、桁行方向北辺のP 1-P 2間・P 2-P 3間が各2.0m、南辺のP 8-P 7間が2.4m、P 7-P 6間が0.9m、梁行方向東辺のP 3-P 4間が2.0m、P 4-P 5-P 6間が0.9mである。桁行方向北辺と梁行方向東辺の北半が2.0mと一定だが、桁行方向南辺の「2間」分及び梁行方向東辺の南半は0.9m、2.4mと一定でない。

各柱穴の規模は、P 1 が長径30cm×短径26cm, 深さ10cm, P 2 が長径29cm×短径26cm, 深さ37cm, P 3 が長径39cm×短径36cm, 深さ25cm, P 4 が長径24cm×短径21cm, 深さ36cm, P 5 が径21cm, 深さ43cm, P 6 が長径22cm×短径19cm, 深さ26cm, P 7 が径22cm, 深さ29cm, P 8 が径36cm, 深さ37cmである。径19~39cm, 深さ10~43cmで、主体は径20~30cm, 深さ25~40cmと比較的小規模である。

出土遺物(第36図124~126) 北東隅のP 3から土師質土器・小皿(124)と瓦器・椀(125)が、南辺のP 7から土師質土器・杯(126)が出土した。

124は口径7.75cm、器高1.2cmで、調整は底部回転糸切り離し、体部外面回転ナデである。126は口径10.3cm、器高3.8cmの比較的小型の杯で、調整は底部回転糸切り離し、体部外面は回転ナデで下端に未調整部分を残す。

125は口径15.7cmの瓦器・椀で、体部内面及び外面上半は回転ナデ(内面上半は粗い)、外面下半は未調整である。



第33図 C区 S B11・S B12実測図 (1:60)

(2) 単独柱穴 (第34図、図版16)

土層観察により柱痕跡が看取された柱穴4基 (C・P 1～4), 根石を検出した柱穴1基 (C・P 5) の計5基がある。C・P 1～4はいずれもC区北西部に集中しており、径9～13cm (主体は11cm) の柱の存在が推定される。柱穴の大きさは径30～35cm, 深さ22～28cmとほぼ同一である。遺物の出土はない。

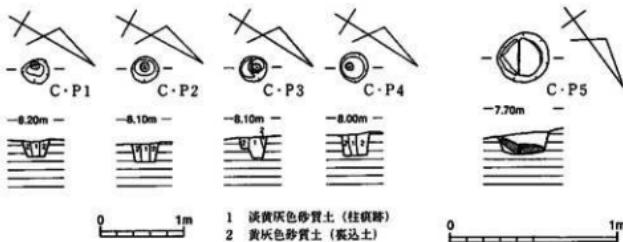
唯一根石が出土したC・P 5はC区西辺際の中央やや南寄りのところにあり、長径31cm×短径29cm, 深さ14cmの柱穴のなかに28cm×22cm, 厚さ5cmの平面不整円形の板石を真ん中で割って使用している。石材は压碎黒雲母花崗岩である。

(3) 土坑 (第35図、図版16・17)

S K 4はC区西辺ほぼ中央で検出した土坑で、墓坑と考えられる。長軸はほぼ北北東-南南西を指す (N20°E)。平面形は丸味の強い不整長方形で、長さ2.42m, 幅1.1～1.25m, 深さ8～22cmである。幅が広く底面がやや高い南小口側が頭位と考えられる。北半の西側辺寄りで土師質土器4点 (小皿1・杯1・皿2) が出土した。北から、小皿(127), 皿(132), 皿(131), 杯(130)と並び、小皿と杯は仰向に、皿はいずれも伏せて置かれていた。なお、東側辺際ほぼ中央の底面ではS B 11南西隅のP 6を検出しており、SK 4に先行する。

出土遺物 (第36図127～132、図版19) 土師質土器・小皿3点 (127～129), 杯1点 (130), 皿2点 (131・132) が出土した。

127～129は小皿で、127は口径6.4cm, 器高1.3cmのやや小型のもので、器壁も薄い。外底面中央がやや凹む平底の底部から外上方に直線的に延びた口縁端部は比較的鋭い。底部は回転ヘラ切りのち延目状の板目痕が残る。体部内外面は回転ナデを施す。128・129は器高は2.0cm, 1.6cmと差があるが、口径はいずれも7.6cmである。いずれも器壁は127に較べると厚く、平底の底部から外上方に直線的に延びた口縁の端部を丸く納める。調整は、底部回転糸切り離し、128の体部内外面は回転ナデ、内底面には一定方向のナデつけを施している。130は口径11.8cm, 器高3.9cmの杯で、平底の底部から外上方に直線的に延びる体部からやや外反気味に延びた口縁の端部を尖り



第34図 C区単独柱穴実測図 (1:30, 1:60) (アミ目は柱痕跡を示す。)

気味に納める。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面及び内底面は回転ナデである。内底面は中央が強く凹み、体部外面下端には未調整部分がみられる。

131・132は皿で、131が口径12.2cm、器高2.6cm、132は口径15.1cm、器高2.55cmである。131は器壁が薄く、平底の底部から外上方に直線的に延びた口縁の端部を丸く納める。底部は板目痕で覆われ、縁辺には丁寧なナデが施されている。内底面には一定方向のナデつけが行われ、体部内外面は回転ナデを施している。132はやや分厚い平底の底部から外上方に外反気味に延びた口縁の端部を丸く納める。底面に板目痕がみられるが、残りは良くない。体部内外面は回転ナデである。131・132は低平でやや外反気味の体部をもち、本集落跡に通有な皿と一線を画し、時期的に後出的と考えられる。

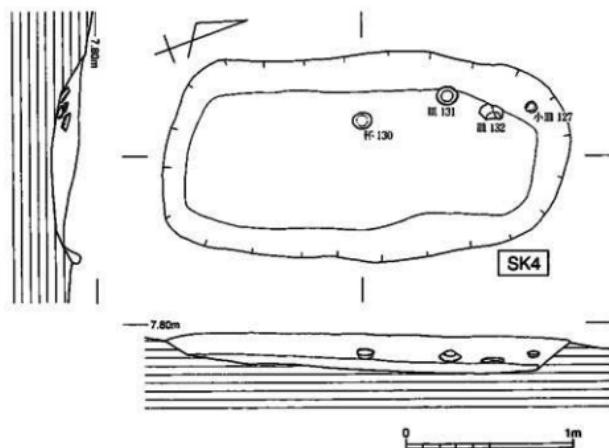
(4) 溝状遺構（第32図、図版16）

C区中央を北から南に流れる2条の溝状遺構がある（SD9・SD10）。両者はC区北半で交わり、SD9は途中で大きく膨らんで南東隅に消え、SD10は北側調査区外に延びる。

① SD9

SD10の中央付近で交差してその西側を流れ、やがて大きく膨らみながら南へ流下する。底面は凹凸が著しい。現存規模は、長さ11m、幅0.5~2.0m、深さ20~30cmである。

出土遺物（第36図・第37図133~151、第68図776・783、図版19） 土師質土器・小皿7点（133~140）、杯2点（141・142）、皿8点（143~150）、瓦器・椀1点（151）、鉄製品・釘2点



第35図 C区SK4実測図(1:30)

(776・783) が出土した。

133～140は土師質土器・小皿である。口径7.2～8.65cm, 器高1.2～1.8cmで、①口径7.2～7.8cm, 器高1.2～1.3cm (133～135) ②口径8.1～8.2cm, 器高1.45～1.8cm (136・137・139・140) ③口径8.65cm, 器高1.7cm (138) の3つのグループに分けることができる。形態的には、平底の底部から外上方に若干内湾気味に立ち上がり、端部をやや尖り気味に納めるものが主体を占める。これも細分すれば、ほぼ直線的に短く延びるもの (134・135・137) とやや内湾して体部外面がいくらか丸味をもつもの (133・136・138) とに分かれる。139は底部から直線的に、また140はやや外反して外上方に延びる。調整面では、底部は133に回転ヘラ切りの可能性があるが、ほかはいずれも回転糸切り離しで、140にはそのあと縫目状の板目痕が残る。大半が器壁の磨耗が激しく体部の調整については不明な点が多い。134・135・137・140では回転ナデが看取され、134・137の内底面には一定方向のナデつけが、135の内底面は未調整である。

141・142は杯で、口径11.8～11.85cm, 器高3.1～3.3cmとほぼ同規模である。形態的には低平である点以外は異なり、141は平底の底部から外上方にほぼ直線的に立ち上がり、口縁部をやや外反させる。142は底部から一旦直線的に延びて体部中位でやや強く屈曲し、それから直線的に外上方に延びて端部を尖り気味に納める。調整は、いずれも底部回転糸切り離しで、142では板目痕が認められる。141は体部内面の中位よりやや上方まで未調整部分がみられるが、142は内底面のみが未調整である。体部のほかの部分は回転ナデを施している。141は焼成が非常によく、内面橙褐色、外面淡黄褐色である。

143～150は皿で、口径11.3～14.25cm, 器高2.85～3.25cmである。形態的には平底の底部から外上方にやや内湾しながら開き気味に延びるもの (144・146・148・149) とやや直立気味に延びるもの (143・145・147・150) とに分かれる。後者は本遺跡で通有の形態のもので、前者がやや特徴的である。前者のなかには焼成が非常に良好なものが存在する (144・149)。後者は比較的直線的に体部が延びるが、143は途中でやや強く内方に屈曲して直立に近く立ち上がる。147は若干外反気味である。調整は、底部回転糸切り離しで板目痕が残るものもある (143・144・146・147・149)。体部内外面は基本的に回転ナデを行うが、143・147・150では外面下半に未調整部分がある。また、内底面に一定方向のナデつけを行うもの (143・144・149) がある。147の内底面中央には内面側→外面側に穿孔された径4～5mmの円孔が存在する。なお、149の体部外面中央付近には沈線1条がみられる。

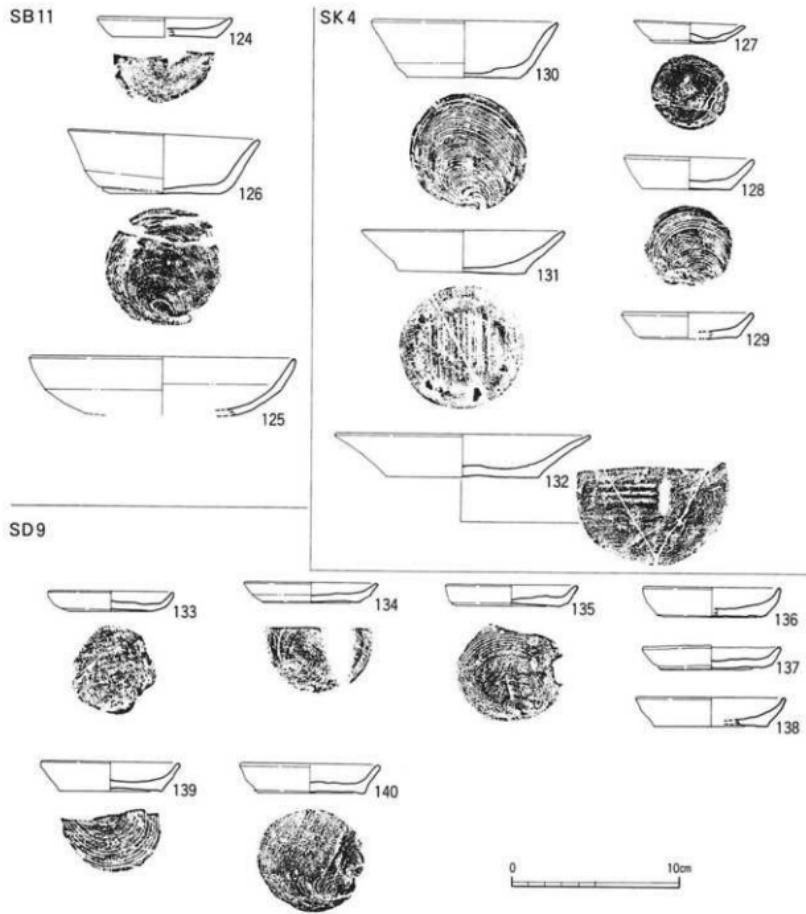
151は瓦器・椀で、口径15.0cm, 器高3.65cmである。底部から若干内湾気味ながらほぼ直線的に外上方に延びる体部をもつ。底部には断面台形の粗雑な輪状高台を貼付けている。調整は、口縁部内外面が回転ナデ、体部から底部にかけての内面には横方向主体の暗文を施し、部分的に一定方向のナデ調整を行っている。体部から底部にかけての外面には指頭によるナデ調整を施している。776・783は鉄製品・釘で、いずれも頭部を欠失している。776の断面は方形だが、784は円形をしており、別の用途をもった鉄製品の破片である可能性もある。

② S D10

S D10は現存長6.5m、幅15~30cm、深さ1~9cmと狭く浅い溝状遺構である。南端で1.28m×1.6m、深さ25cm程の楕円形の落ち込みに流れ込む。

出土遺物（第37図152・153、図版19） 瓦器・椀（153）、青磁・碗（152）各1点が出土した。

153は口径13.9cm、器高3.4cmの瓦器・椀で、ごく低い断面三角形の輪状高台の底部からやや内湾気味に外上方に延びる体部をもつ。内底面を中心にして直線状の暗文がみられ、体部内面から外面



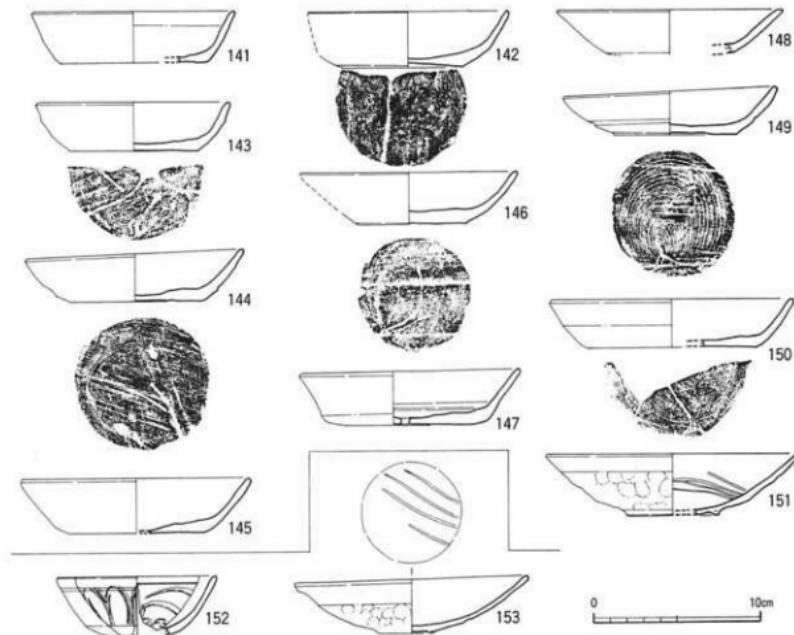
第36図 C区遺構出土土器実測図（1）(1:3)

の上半にかけて回転ナデ、体部外面下半から高台部にかけて指頭によるナデ調整が行われている。152は龍泉窯系の青磁・碗である。口径9.45cmとやや小型で、体部外面には片刃彫りによる丸味の強い蓮弁文が施されている。内面の口縁直下には1条の沈線が巡り、その下には片刃彫りによる花文様のものを施す。外面の口縁直下には蓮弁文の尖端を浅く削った緩い段が付く。施釉部分の色調は淡灰緑色で、胎土は灰白色である。

4. D区の遺構（第38図、図版17）

最東端にある調査区で、道路を挟んで西側にはB区が存在する。東西方向20.4m、南北方向17.2mの南東部が凹むL字形の平面形をしている。B区に次いで調査面積が多い調査区である。調査区東端から24mで丘陵裾に至り、北側を民家に、南側も畠地を介して民家に隣接する。現況は北側には庭木が植えられ、南半は畠地である。現地表面（標高8.4～9.0m）はほぼ水平で、遺構面までの深さは0.7～1m程度とほぼB区と同じである。

基本層序は、①耕作土（厚さ40cm）、②床土（暗黄褐色粘質土、厚さ12～25cm）、③暗灰色砂質土（厚さ20～35cm）を経て、遺構面（暗褐色砂質土層上面）に至る。湧水点は遺構面下20～65



第37図 C区遺構出土土器実測図（2）(1:3)

cmのあたりにあり、造構面が湧水によって覆われるようなことはないが、降雨時には最も標高の低い南辺付近が冠水することはある。造構面の高低差は45cmで北が高く南が低いものの、ほぼ平坦である。造構面は北側1/3程度に主に形成され、南側あるいは西側、東側に向かって脆弱になり、消失する。北半の造構集中部、つまりSX2周辺とSB13周辺に主な造構面の形成があり、両者の間はごく浅く谷状を呈する。D区南半及び西端（SD13が屈曲するあたり）やSB13の東側では砂層が露出しており、造構の存在は殆ど認められない。西縁における造構面の消失はB区東端の造構面の脆弱さと繋がるもので、B区とD区の間（現道路部分）に比較的広い谷筋が存在することを示唆している。

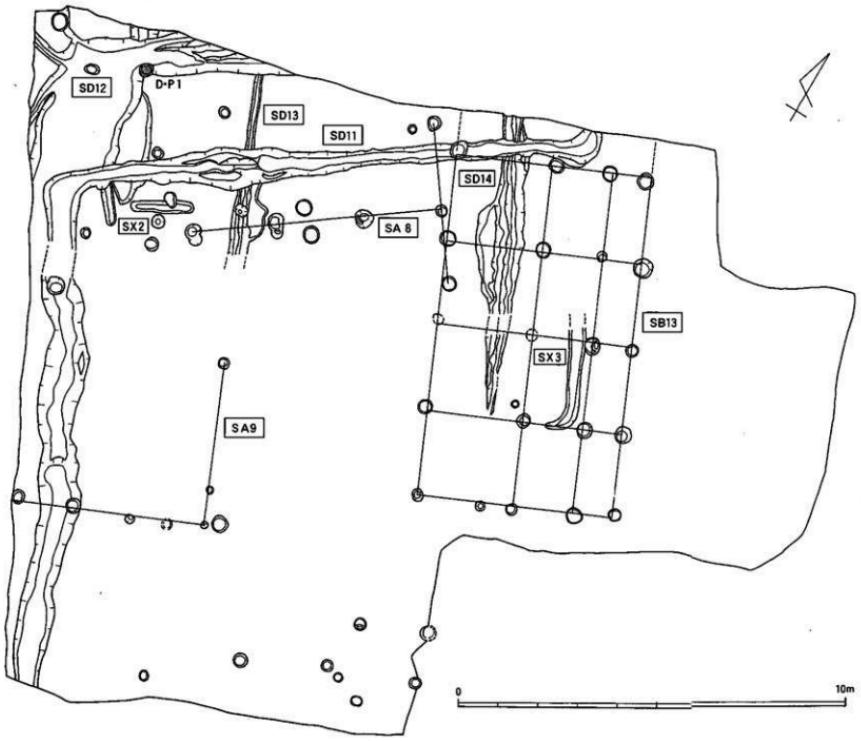
検出した造構は、掘立柱建物跡1棟（SB13）、横列跡2条（SA8・9）、単独柱穴1基（D・P1）、鍛冶造構1基（SX2）、溝状造構4条（SD11～14）、性格不明の造構1基（SX3）である。掘立柱建物跡は東半に存在する大型の総柱建物である。横列跡はT字形のものとL字形のものがある。鍛冶造構は鍛冶炉と炭の集中部からなる。

（1）掘立柱建物跡（第39図、図版17）

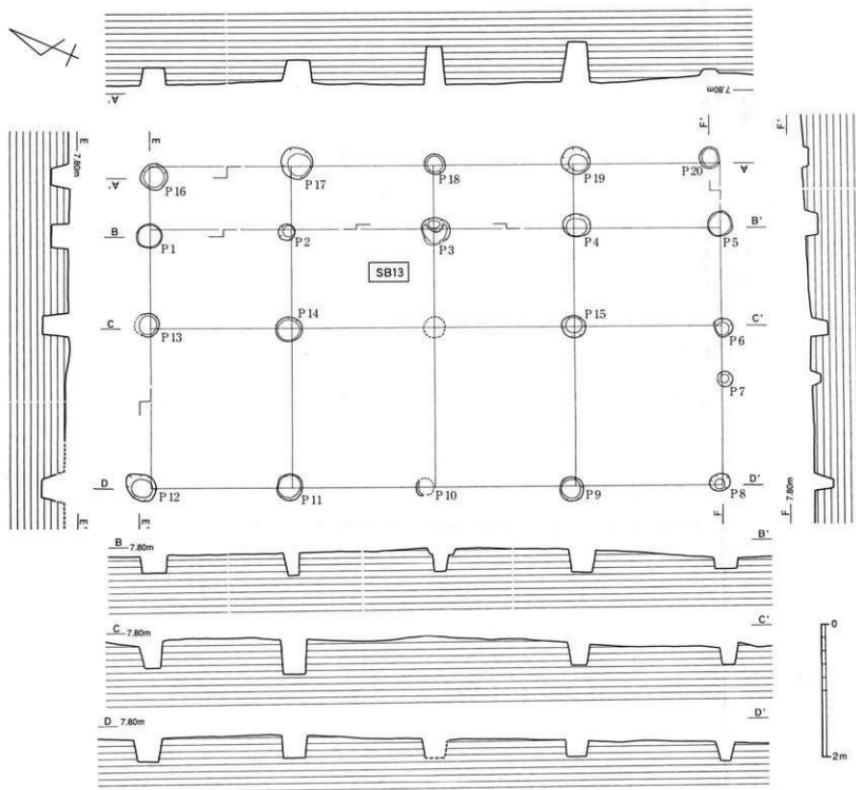
1棟（SB13）を検出した。SB13はD区東半で検出した大型の総柱建物跡で、北側調査区外に延びる可能性がある。現状は、桁行4間+α（東辺P1-P2-P3-P4-P5、中央P13-P14-O-P15-P6、西辺P12-P11-P10-P9-P8）、梁行2間（南辺P5-P6-P8）の身舎に桁行4間+α（P16-P17-P18-P19-P20）、梁行1間（南辺P5-P20）の東面庇が付く。建物の主軸はほぼ北北西・南南東を指す（N23°W）。建物面積（現存規模）は、桁行方向8.8m、梁行方向4.9mの約43m²である。建物の身舎部分の面積は桁行方向8.8m、梁行方向3.9mで34m²、庇部分は桁行方向8.8m、梁行0.9～1.0mの約8m²である。各柱間距離は、身舎の桁行方向は2.1～2.2mと均一的だが、梁行方向は西側の1間が2.3～2.5mであるのに対して、東側は1.4～1.6mと1m近くも狭くなっている。東面庇の梁行方向は0.9～1.0mで身舎の梁行方向東側の柱間距離と較べて50～60cm狭い。桁行方向は南端のP19-P20間のみ1.9mとやや狭いものの、ほかは2.1mと身舎の桁行と同じである。柱穴の並びや深さなどは比較的揃っているが、身舎・東面庇南辺の梁行方向の柱穴がほかのものと較べてやや浅い。

身舎の柱穴の規模は、P1が長径38cm×短径36cm、深さ27cm、P2が長径26cm×短径24cm、深さ35cm、P3が径43cm、深さ35cm、P4が長径41cm×短径36cm、深さ35cm、P5が長径40cm×短径38cm、深さ18cm、P6が径30cm、深さ25cm、P7が径24cm、深さ13cm、P8が長径31cm×短径26cm、深さ29cm、P9が長径36cm×短径34cm、深さ26cm、P10が推定径30cm、深さ28cm、P11が長径40cm×短径37cm、深さ35cm、P12が長径50cm×短径40cm、深さ35cm、P13が径36cm、深さ40cm、P14が長径39cm×短径36cm、深さ52cm、P15が長径36cm×短径32cm、深さ36cmである。径24～50cm、深さ13～52cmで、主体は径30～40cm、深さ25～40cmである。

東面庇の柱穴の規模は、P16が径41cm、深さ28cm、P17が径48cm、深さ35cm、P18が径31cm、深さ60cm、P19が長径42cm×短径40cm、深さ61cm、P20が長径32cm×短径30cm、深さ11cmである。



第38図 D区造構配置図 (1:100) (アミ目は横石をもつ柱穴を示す。)



第39図 D区 S B13実測図 (1:60)

径24~50cm, 深さ11~61cmで、主体は径30~40cm, 深さ25~40cmである。径30~48cm, 深さ11~61cmで、主体は径30~40cm, 深さは30cm台と60cm前後に分かれる。

根石の検出はみられなかった。

出土遺物（第42図154・155） 身舎の桁行方向西辺のP 11から、土師質土器・小皿2点（154・155）が出土した。

両者は法量・形態的にかなり異なる。154は比較的分厚い器壁をもち、平底の底部から外上方に短く直線的に延びる。体部の調整は不明だが、底部は回転糸切り離しである。口縁端部を失っており、推定値で口径7.6cm、器高1.4cm程度である。155は薄い器壁をもち、平底の底部から外上方に直線的に延びた口縁部の端部を丸く納める。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。体部外面下端には未調整部分が残る。口径9.7cm、器高1.8cmである。

（2）柵列跡

2条の柵列跡を検出した。T字形のもの（SA 8）とL字形のもの（SA 9）で、SA 8は北西部、SA 9は南西部に存在する。いずれも掘立柱建物跡を形成する可能性もある。SA 8の主軸はほかの建物跡のそれに比較的合い、SA 9の主軸はSB 13のそれに近い。

① SA 8（第40図、図版17）

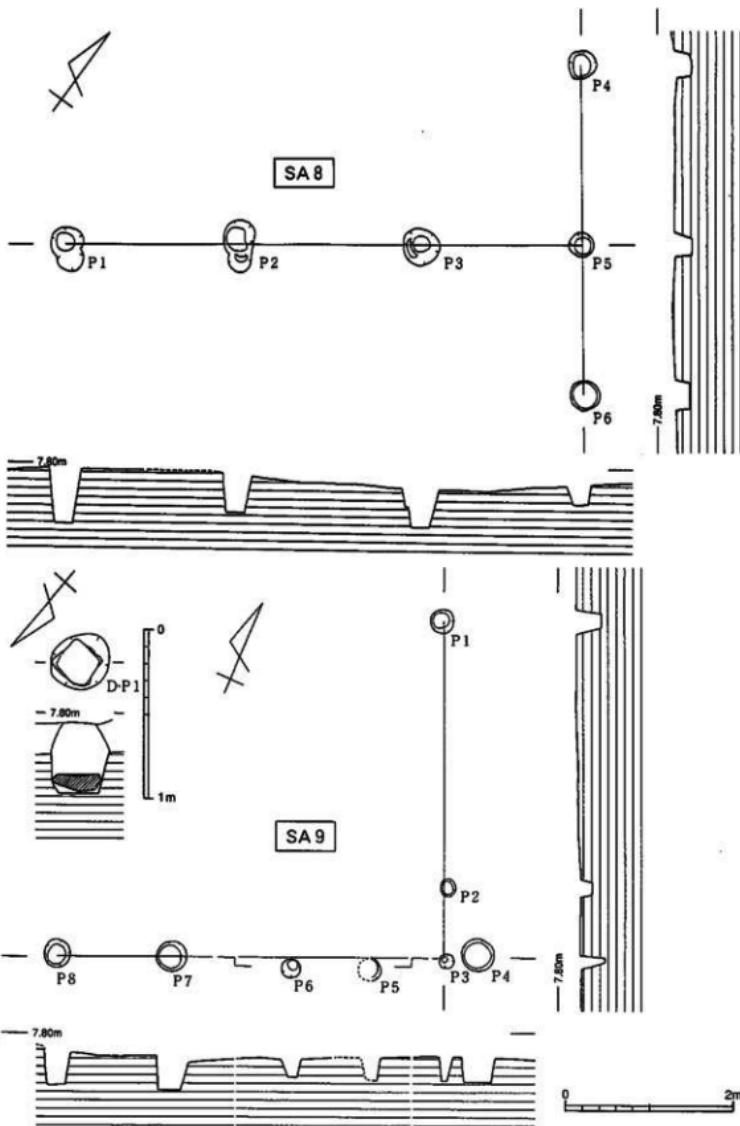
現状で東西方向3間+α（P 1-P 2-P 3-P 5）、南北方向2間+α（P 4-P 5-P 6）の柵列跡で、P 5で交差する。規模は現状で、東西6.2m、南北3.9mである。SA 8西半では柱穴が比較的多くあり、また北調査区外への造構の広がりを考えれば、建物跡を構成する可能性もある。東西方向のラインを主軸とすると、SA 8はほぼ北東-南西方向を指す（N55°E）。各柱间距離は、東西方向のP 1-P 2間が2.1m、P 2-P 3間が2.2m、P 3-P 5間が1.9m、南北方向のP 4-P 5間が2.1m、P 5-P 6間が1.8mである。1.8~2.2mで、主体は2.1mである。各柱穴の規模は、P 1が径30cm、深さ67cm、P 2が長径42cm×短径37cm、深さ48cm、P 3が径44cm、深さ47cm、P 4が長径37cm×短径34cm、深さ21cm、P 5が長径30cm×短径28cm、P 6が径35cm、深さ19cmである。径28~44cm、深さ19~67cmで、主体は径30~40cm程度だが、深さは東西方向の柱穴（P 1~P 3）が47~67cmと全体に深いものの、南北方向の柱穴（P 4~P 6）は19~23cmと浅い。

出土遺物（第42図156、図版19） 東西方向の柱穴列と南北方向の柱穴列が交差するP 5から土師質土器・杯1点（156）が出土した。

156は上げ底気味の底部から直線的に開き気味に立ち上がる。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面は回転ナデである。

② SA 9（第40図、図版17）

D区南西部に存在するL字形の柵列跡で、東西方向4間（P 8-P 7-P 6-P 5-P 3）、南北方向3間（P 1-O-P 2-P 3）である。現存規模は、東西4.6m、南北4mで、西側は調査区外に



第40図 C区 SA 8・SA 9実測図 (1:30, 1:60)

延びる。東西方向の軸を主軸とすれば、ほぼ東北東-西南西を指す（N66° E）。各柱間距離は、東西方向のP 8-P 7間が1.4m, P 7-P 6間が1.5m, P 6-P 5・P 5-P 3間が0.9mで、南北方向のP 1-O-P 2間が3.2m（1間あたり1.6m）、P 2-P 3間が0.9mである。南東隅に小規模な柱穴が0.9mの柱間距離で並んでいるが、そのほかはほぼ1.4~1.6mの柱間距離である。

各柱穴の規模は、P 1が径28cm、深さ30cm, P 2が長径20cm×短径17cm、深さ14cm, P 3が径17cm、深さ30cm, P 4が径39cm、深さ31cm, P 5が推定径28cm、深さ27cm, P 6が径23cm、深さ21cm, P 7が径36cm、深さ42cm, P 8が長径34cm×短径31cm、深さ40cmである。径17~39cm、深さ14~42cmで、径20~30cm、深さ30cm程度が主体である。遺物の出土はない。

(3) 単独柱穴（第40図、図版17）

根石を検出した柱穴1基（D・P 1）がある。D区北西隅付近のS D12が屈曲する部分の南岸に掘り込まれている。長径35cm×短径33cm、深さ29cmの柱穴の底に22cm×24cm、厚さ9cmの方形の板石を置いている。石材は細粒黒雲母花崗岩である。

(4) 錫冶遺構（S X 2）（第41図）

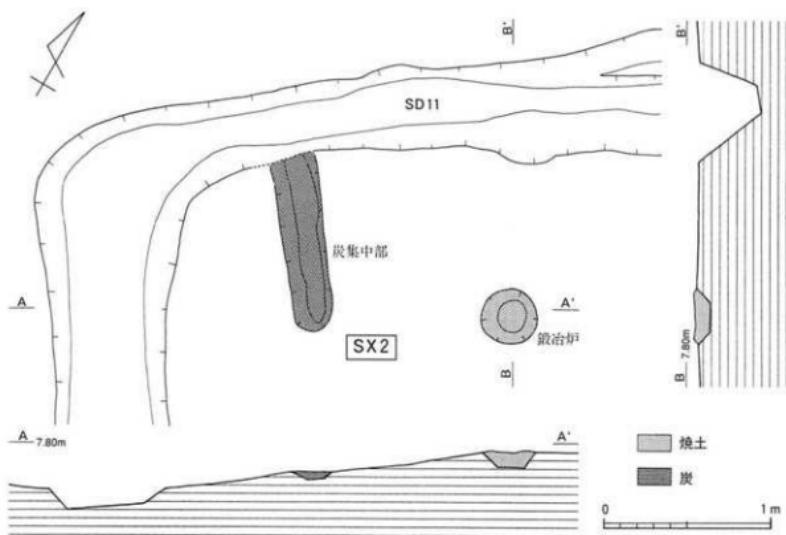
D区北西部に存在する炉穴と炭が充满する溝状遺構からなる。D区北辺から西辺際にかけて流れるS D11が屈曲する部分の南岸に位置する。炉穴は径32cm、深さ9cmの浅い円形ピットで、内部には黒っぽい焼土が充满していた。この炉穴の西0.9mにある南北方向の短い溝状遺構は北端がS D11の覆土を掘り込んでおり、S D11に後出することが分かる。現存長1.06m、幅26cm、深さ4cmとごく浅い。炉穴とこの溝状遺構が一体のものかどうかは明確ではないが、距離的にも近く、何らかの関連性はあると考えられる。なお、炉穴北側付近のS D11覆土から鉄滓数点と繡羽口（第65図734）、鉄製品・斧（第68図757）が出土しており、何らかの関連性が考えられる。

(5) 溝状遺構（第38図、図版17）

計4条の溝状遺構（S D11~14）を検出した。最も大きなS D11はD区の北辺から西辺にかけて流れるもので、区画的な機能が考えられる。そのほかの溝状遺構としては、北西隅にあるS D12、S D11に後出し南北方向に流れるS D13、S D11に先行し南北方向に流れるS D14がある。ここでは、S D11についてのみ触れる。

S D11はD区北辺から西辺にかけて流れる溝状遺構で、調査区で最大規模である。北東部から南西隅に流下し、長さ（総延長）26.6m、幅35~106cm、深さ7~40cmの現存規模をもつ。北辺西半が幅106cm、深さ40cmと最も深さ・幅が大きく、この部分と溝が南へ屈曲する箇所が土師質土器・杯を中心とした遺物の集中出土箇所である。特に前者の出土量が多く、土器類のほかに鉄滓、繡羽口片や鉄斧が出土しており、南側に接して存在する錫冶遺構S X 2との関連が窺われる。

出土遺物（第42~44図157~209、第65図724・734、第68図757・765・769~772・781、図版19・20・24・26） 北辺西半中央付近（S D13との交差箇所付近）及び南へ直角に近く屈曲する



第41図 D区 SX 2 実測図 (1:30)

部分の覆土内を中心に多くの遺物が出土した。内訳は、土師質土器・小皿5点(157・158・169～171)、杯35点(159～166・172～190・199～206)、椀13点(167・168・191～198・207～209)、土製品・有溝土錘1点(724)、輪羽口1点(734)、鉄製品・斧1点(757)、釘5点(769～772・781)、用途不明品1点(765)である。

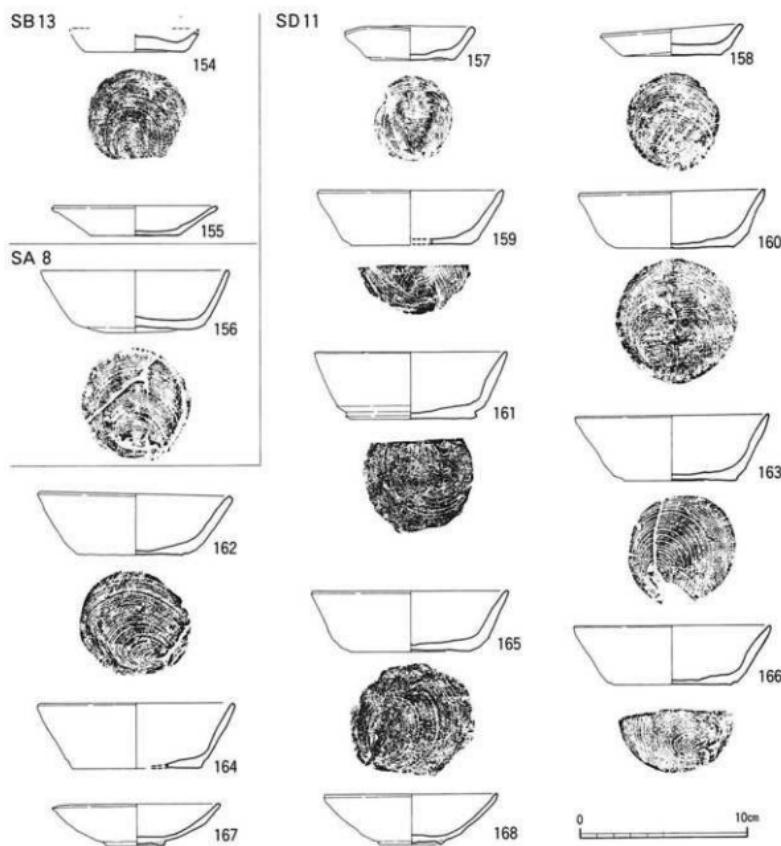
a. 土師質土器 小皿・杯・椀がある。皿はない。

157・158・169～171は小皿である。口径7.4～8.3cm、器高1.6～2.0cmで、形態的には平底の底部からほぼ直線的に外上方に延びる体部をもつ157、平底の底部からやや内湾気味に外上方に延び体部中位で直線的かやや外反気味に延びる158・169、内底面中央が強く凹み、平底の底部から直線的に延びる体部に尖り気味の口縁が付く170・171がある。調整は、171以外はいずれも底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデで、内底面には一定方向のナデつけを行う。

159～166・172～190・199～206は杯である。口径10.4～11.7cm、器高3.3～4.1cmで、主体は口径10.9～11.4cm、器高3.6～3.9cmである。形態的には均一的で、平底の底部から直線的に外上方に延びる体部をもつものが大半である。ただ、やや細かくみると、底部から明確に屈曲して体部が直線的に延びるものと、底部から体部に丸味をもって曲るものとがある(160・161・165・176・178・180・181・183・184・186・201・202・203・205など)。また、内底面中央及び内面の体部下半が強く凹むものがある(内底面が凹むもの; 166・177・179・184・186・189・200・203。体部下半が凹むもの; 161・163・164・166・172～174・176・177・179・181・182・188・189・

199・200・202・203・205)。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが主である。板目痕はあまり認められず、160で筵目状の板目痕が、206で板目痕がみられるほかは、180・190で板目痕の可能性が考えられる程度である。また、内底面への調整では、159・160で一定方向のナデつけがみられ、163・173・174・181・184・186・187は未調整である。また、165・178・180・181・185・186・188・201～203の体部外面下端は未調整である。なお、焼成が非常によく硬質なものが比較的目立つ(159・163・173・174・183・186・201・202)。

167・168・191～198・207～209は低平な体部に粗雑な輪状高台を貼り付けた椀である。口径9.65～10.5cm、器高2.5～4.0cmで、主体は口径10.1～10.4cm、器高2.9～3.3cmである。形態的には、



第42図 D区遺構出土土器実測図(1)

浅いボウル状をなし、丸底に径数mm程度のごく細い粘土紐を雜に貼り付けて径3.0~4.6cmの輪状高台としている。高台の断面形は三角形・逆台形である。調整は、体部内面はほぼ全面的にミガキ状の丁寧なナデを、体部外面上半に回転ナデ、体部下半から外底面にかけては未調整のもの(167・168・191・194・196)と指頭によるナデ調整を施すもの(193・197・198)がある。高台内部に回転ナデを施すもの(168)、ややミガキ状の調整を施すもの(191)、やや丁寧なナデがみられるもの(198)がある。なお、192は分厚い器壁で、体部内面は粗い横ナデ、体部外面から外底面にかけては指頭によるナデ調整を施しており、凹凸が著しい。また、195の口縁部内面は横ナデ、197の口縁部内面は粗い横ナデをそれぞれ施している。これらの椀はその多くが色調・胎土が同一であり、搬入品と思われる。色調は黄白色、胎土は1~2mmの大砂粒を比較的多く含む。ただ、167・168・193の胎土はこれらと異なり、精良ながらもほかの杯などと同じ淡黄褐色の胎土であり、搬入品を模倣した在地産と考えられる。

b. 土製品 有溝土錐(724)と輔羽口(734)がある。

724は長さ7.5cm、幅(最大)3.7cm、厚さ(最大)3.2cm、溝の深さ1.0~1.2cmの有溝土錐である。734は輔羽口片で、復元径7.6cm、復元孔径1.5cmである。

c. 鉄製品 斧(757)、釘(769~772・781)、用途不明品(765)がある。

757は全長6.1cm、幅2.6cm、厚さ1.3cmの斧である。横断面形は長方形である。下端に鈍い刃部をもつ。769~772・781は鉄釘で、769~772の頭部はごく小さな折頭形である。いずれも尖端部を失っており、現存長3.1~4.5cm、幅0.35~0.6cm、厚さ0.45~0.7cmである。身部の断面形は方形である。781は頭部側を欠失した尖端部の破片である。断面は方形である。

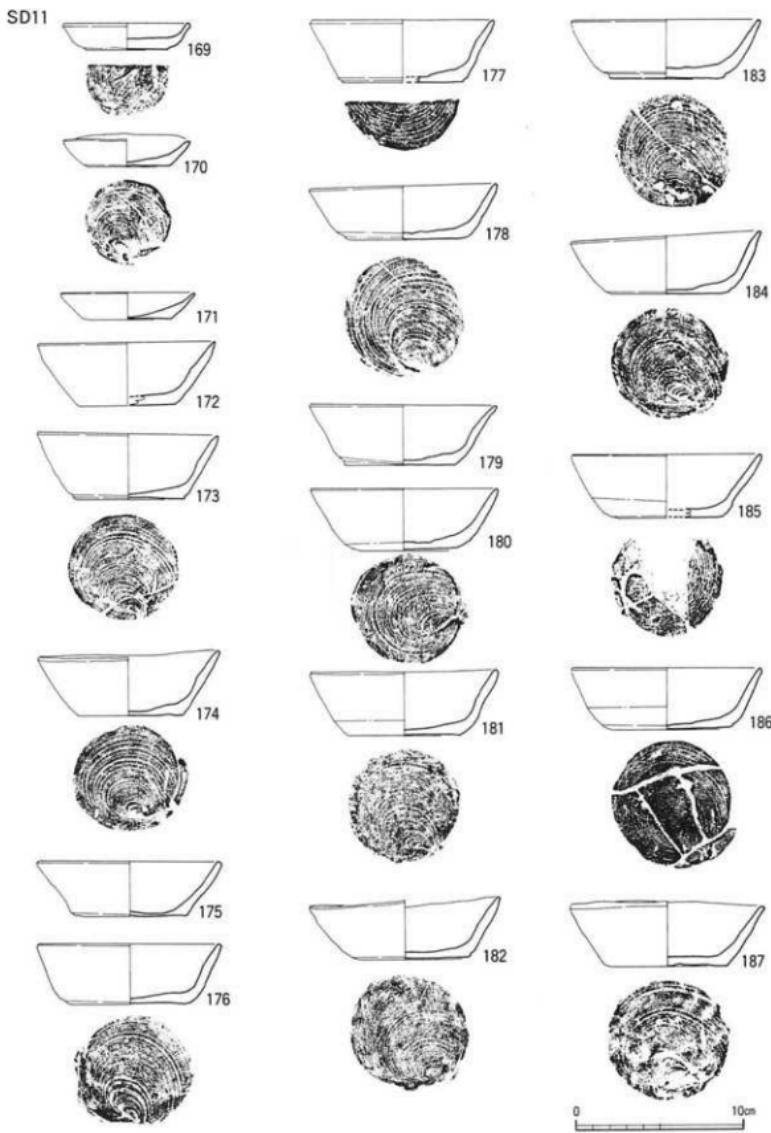
765は長さ5.9cm、幅0.9~1.5cm、厚さ0.8~0.95cmの用途不明の鉄製品である。断面は丸味を帯びた長方形である。

(6) 性格不明の遺構(第38図、図版17)

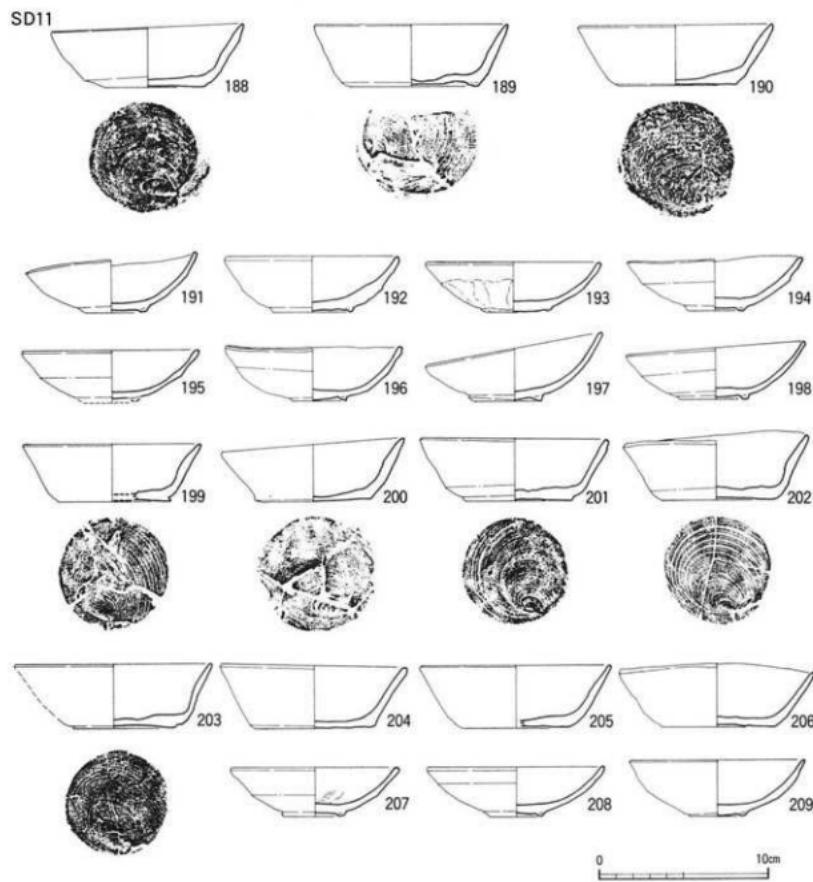
S X 3はD区東半で検出した溝状の遺構で、現存長2.6m、最大幅42cm、深さ16~24cmである。

出土遺物(第65図726) 覆土中から有溝土錐1点(726)が出土した。

726は表裏面に深さ0.8~1.4cmの溝を入れたもので、1/2を失っている。現存規模は長さ7.6cm、幅(最大)2.1cm、厚さ(最大)3.2cmである。



第43図 D区造構出土土器実測図（2）(1:3)



第44図 D区遺構出土土器実測図（3）(1:3)

5. 包含層出土の遺物

(1) A区包含層出土遺物 (第45~52図210~426, 第66図739・740・746, 第67図754, 第68図767・768, 第69図787, 図版20~23・25・26)

A区北西隅を中心に堆積する包含層出土の遺物群で、内訳は土師質土器・小皿87点(210~296), 杯78点(298~375), 盆26点(376~401), 梗12点(297・402~412), 鍋1点(414), 須恵質土器・鍋1点(415), 瓦質土器・鍋1点(413), 青磁・盆1点(422), 碗7点(416~421・425), 香炉片? 1点(423), 白磁・碗1点(424), 灰釉陶器・梗1点(426), 平瓦3点(739・740・746), 石製硯1点(754), 鉄釘2点(767・768), 古銭1点(787)である。

①土器類

a. 土師質土器 (210~412・414) 計204点で、小皿・杯・盆・梗・鍋があるが、小皿・杯が8割以上を占める。

210~296は小皿である(総点数87点)。口径6.1~8.8cm, 器高1.15~3.1cmで、主体は口径6.5~8.0cm, 器高1.3~2.2cmである。低平度0.14~0.47で、0.18~0.32に中心がある。つまり、口径が器高の2~7倍で、3~5.6倍程度のものが主体をなすことを示している。形態的には体部の形状が中心で、A;直線的に延びるもの、B;外反気味に延びるもの、C;内湾気味に延びるもの、D;内湾気味に外上方に延びた後に体部中位付近で外反あるいは直線的に延びるもの、の4つのタイプがみられる。次いで、体部の傾きで、a;45°くらいを中心とする通常の傾きのもの、b;直立気味のもの、c;水平に近く開くもの、がある。そして、最後に、低平度すなわち器高/口径値で、I;低平度0.23~0.33で一般的な低平度のもの、II;低平度0.34以上で器高が高い感じを与えるもの、III;低平度0.22以下で低平なもの、がある。以上、3つの形態的要素を組み合わせることで各個体の形態的特徴を抽出し、類型化した。

体部の形状ではA(56点/87点・64.4%)が最も多く、C(19点・21.8%), D(9点), B(3点)となる。低平度ではI(46点/87点・52.9%)が最も多く、III(32点・36.8%), II(9点)となる。体部の傾きではa(73点/87点・83.9%)が最も多く、c(9点), b(5点)となる。総合的には、A a I(29点/87点・33.3%)が最も多く、A a III(13点・14.9%), C a III(9点・10.3%), C a I(7点), A c III・A a II・D a I(各5点)となる。その他、A b I・A b II・B a I・B c III・C c III・D a II・D a III・D b I(各1~3点)が見られる。斜め上方に直線的に延びる通有の形態のものが最も多く、同形態で低平なものも比較的存在する。口縁が内湾気味のものが低平な器形を含めて19点とやや目立つ。内湾→外反とS字状の体部・口縁のものは9点とそれほど多くはない。低平度が高いもの(II)は9点と少なく、低平度が低いもの(III)32点に遠く及ばない。

調整面ではそれほど違いはなく、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが基本である。260は回転ヘラ切りで、板目痕がみられる。胎土は比較的精良で、色調も白っぽい淡黄褐色である。245・250はほぼ同一タイプの小皿で、底部ヘラ切りとみられる。外底面の周縁に強く丁寧なナデ

調整を行っている。

板目痕は18点（20.7%）に認められ、252・273は筵目状の板目痕である。これを上記の形態別にみてみると、体部の形状の点ではC（7点／19点・36.8%）・D（4点／9点・44.4%）で頻度が高く、A（6点／56点・10.7%）では低い。体部の傾きの点では、aではある程度みられるが（13点／73点・17.8%）、b・cでは各1点と皆無に近い。低平度ではⅢ（13点／32点・40.6%）で頻度が高く、I（4点）・II（1点）はあまりみられない。つまり、A区包含層出土の土師質土器・小皿における外底面の板目痕は、体部の形状の面ではC・D、すなわち内湾するものや内湾→外反のものに多くみられ、低平度の点ではⅢ、即ち低平な感じを与えるものに多くみられる。そして、AやIなど大勢を占めるタイプでは板目痕は殆ど認められないことがわかる。総合的には、A c Ⅲ（3点／5点）・C a Ⅲ（5点／9点）・D a I～Ⅲ（4点／8点）の形状のものに板目痕が多くみられるようである。

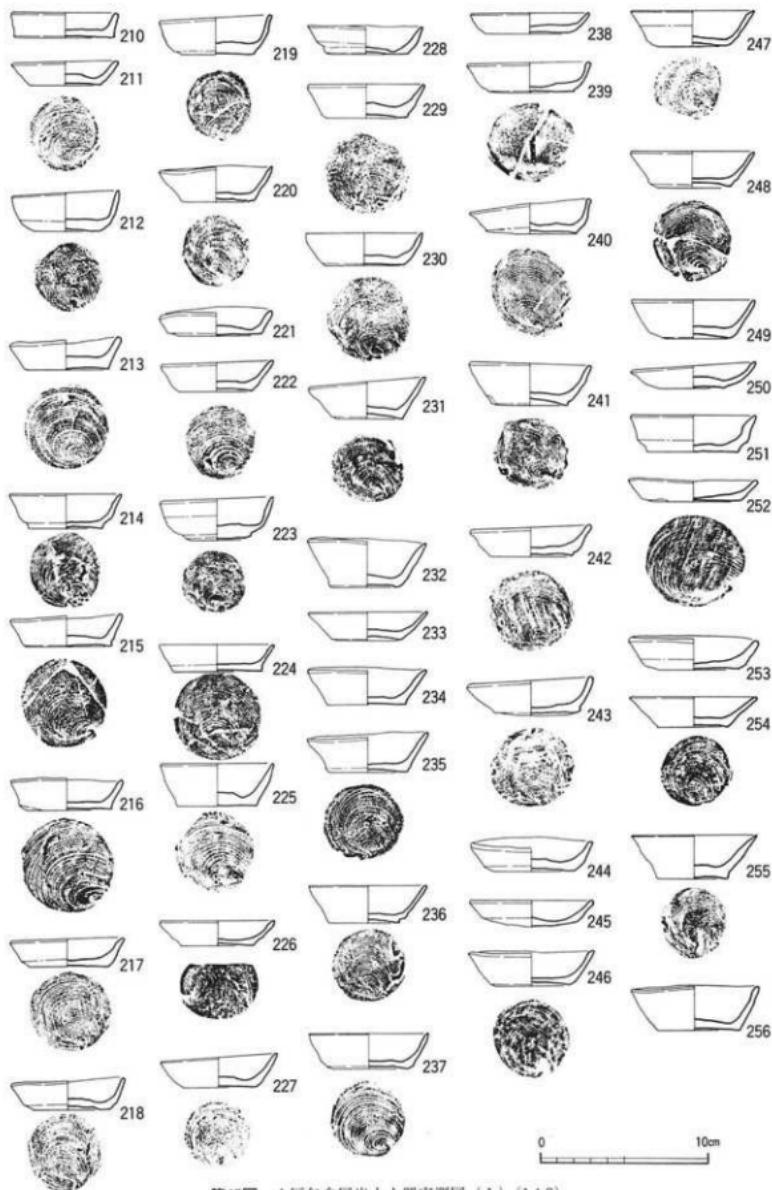
内底面中央には一定方向のナデつけや未調整部分がみられるものがある。未調整部分は体部外面下端にもみられることがある。未調整部分が内底面中央と体部外面下端の両方に見られるものや、内底面には一定方向のナデつけ、体部外面下端には未調整部分が見られるものもあり、大きく5つのタイプがみられる。即ち、

- ①内底面のみに未調整部分があるもの=15点（A a I・7点ほか）
- ②外面体部下端のみ未調整部分があるもの=3点（A a I・2点ほか）
- ③内底面・外面体部下端の両方に未調整部分があるもの=11点（A a I・6点ほか）
- ④内底面に一定方向のナデつけを施すもの=15点（C a Ⅲ・4点ほか）
- ⑤④+②=6点（D a I・2点ほか）

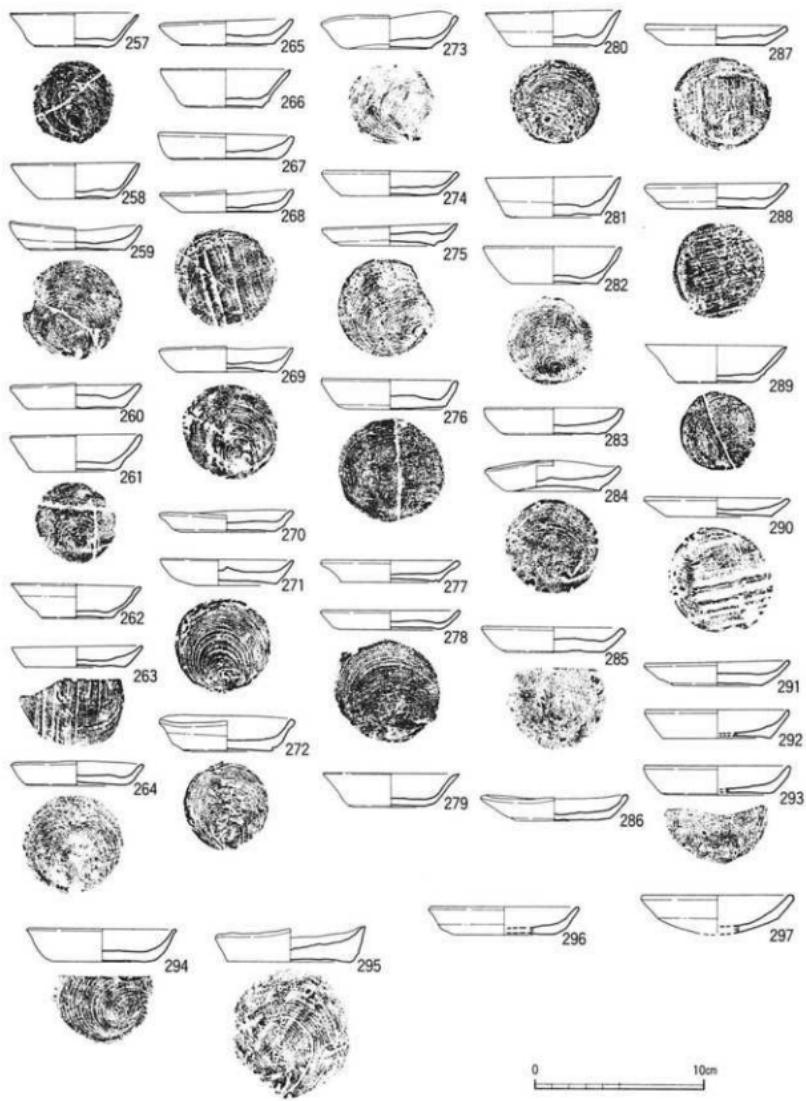
①～③を未調整、④⑤を一定方向のナデつけとすれば、体部の形状ではAが未調整の頻度が高く（未調整19点・一定方向ナデつけ6点）、Dは一定方向のナデつけの頻度が高い（未調整2点・一定方向のナデつけ6点）。そして、Cは未調整（7点）、一定方向ナデつけ（8点）いずれの頻度も高いといえる。低平度の点では、Iが未調整の頻度が高く（未調整22点・一定方向のナデつけ7点）、Ⅲが一定方向のナデつけの頻度が高い（未調整6点・一定方向のナデつけ12点）といえる。総合的には、A a Iが圧倒的に未調整の頻度が高い（15点／29点）が、一定方向のナデつけは特定の類型への偏りはあまりみられない。

225の体部内面は丁寧なナデ調整を行っている。211・280の内面を中心にスス状の付着がみられ、293の内底面を中心に暗褐色の付着物がみられる。一定の割合で非常に焼成が良好で硬質のものがみられる（214・219・243・248・273・275）。色調は淡黄褐色・淡橙褐色・淡橙色などが多い。

298～375は杯である（総点数78点）。口径9.8～12.0cm、器高2.9～4.3cmで、主体は口径10.5～10.7cm、11.2～11.6cm、器高3.1～4.0cmである。低平度0.25～0.40で、0.30～0.33及び0.35に集中する。即ち、A区包含層出土の杯は口径が器高の2.5～4倍の大きさで、口径が器高の3倍程度のものが主体であることを示している。



第45図 A区包含層出土土器実測図(1)(1:3)



第46図 A区包含層出土土器実測図（2）（1:3）

形態的には、体部が直線的に延びる A が最も多いが（37点／78点・39.7%）、内湾からやがて外反する D（22点・28.2%）、体部が外反する B（15点・19.2%）、内湾する C（10点・12.8%）も比較的みられ、各類が比較的拮抗する。B・Dは見分けの付きにくいものもある。体部の傾きでは大半が a で（73点／78点・93.6%）、体部が内湾気味の C に直立気味の b がやや目立つ（5点）程度で、水平に近く開く c は皆無である。低平度では、0.37以上を高い感じ（II）、0.31～0.36を通常（I）、0.30以下を低い感じ（III）と捉えた。I（44点／78点・56.4%）が最も多く、III（26点・33.3%）、II（8点）と続く。総合的には A a I（16点／78点・20.5%）が多いが、それほど優勢ではない。次いで、D a I（11点・14.1%）、A a III・D a III（10点・12.8%）、B a I（9点・11.5%）となる。その他、A a II・A b III・B a II・B a III・C a I・C a III・C b I・D a II（各1～4点）がある。体部が直線的に延びる通常の傾きで通有の低平度のものが比較的優勢だが、体部の形状の面では B～D、さらには低平な器形も比較的見られ、形態的に多様である。

調整面では、基本的には底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデで、後者は内底面にまで及ぶものが多々ある。回転ヘラ切りは皆無で、板目痕の頻度も低い（7点）。板目痕は D a I（3点）、A a III・B a I（各2点）にのみ見られ、形態的にやや偏っている。

未調整部分が残るものについては、

- ①未調整部分が内底面のみに残るもの = 8点（B a Iほか）
- ②未調整部分が体部外面下端のみに残るもの = 9点（A a I・D a Iほか）
- ③内底面と体部外面下端の両方に未調整部分が残るもの = 5点（C a I・C b Iほか）

となる。内底面のみ未調整のものは特定の形態とは結びつかない。体部外面下端のみ未調整のものは A a I に多いがほかは散在的である。内底面と体部外面下端の両方に未調整部分がみられるものは A には皆無で、C に集中している。つまり、②は体部が直線的に延びる器形と結びつき、③は内湾気味に体部が立ち上がる器形と結びつくといえよう。

次に、内底面に一定方向のナデつけを行うものは、

- ①内底面に一定方向のナデつけを施すのみのもの = 9点（A a III・D a Iほか）
- ②内底面に一定方向のナデつけ+体部外面下端未調整 = 5点（D a IIIほか）

となる。これは特定の形態との結びつきが強いように思われる。一定方向のナデつけを施すものは A a III・D a I・D a III の3形態のものにしかみられない。①は3形態、②は D a III のほぼ1形態のみにみられる。内底面に一定方向のナデつけのみを行うものは直線的な体部をもつ器形のうちの低平なもの及び内湾→直線・外反の器形との結びつきが強く（20～40%の出現頻度；A a III=4/10、D a I=3/11、D a III=2/10）、一定方向のナデつけ+体部外面下端の未調整部分が両方みられるものはほぼ内湾→直線・外反の低平な器形とのみ結びつく（D a III=4/10）。

316では内底面に丁寧なナデ調整を行っている。345では内底面・体部内面全体に丁寧なナデ、体部外面に回転ナデを施すが、体部外面下端には未調整部分が残る。

焼成が非常に良好なものが21点存在する。形態的には、A a I（7点）、D a III（4点）が多い。色調は、淡黄褐色（34点・43.6%）・淡橙色（29点・37.2%）が大勢を占める。

310の体部外面から口縁部内面にかけてスヌの付着が、369では口縁部内外に淡褐色のスヌ状の付着物がみられる。

376～401は皿である（計26点）。口径10.5～13.2cm、器高2.35～3.6cmで、主体は口径12.2～12.7cm、器高2.8～3.2cmである。低平度は0.19～0.29で、0.24と0.27～0.29に中心がある。即ち、口径が器高の3～5倍の大きさで、3～4倍程度のものが主体を占める。

体部の形状の面では内湾気味のC（19点／26点・73.1%）が大半を占め、直線的なAは7点・26.9%に止まる。体部の傾きの点では、直立気味のbはみられず、通有のa（19点／26点・73.1%）が多く、c（7点）もいくらくみられる。低平度については、0.19～0.25を低平度が低い器形（III）、0.26～0.29を低平度が普通の器形（I）とし、両者が各13点と半々を占めた。総合的には、内湾気味に延びる通有の傾きと低平度のC a I（8点／26点・30.8%）が最も多いが、C a III（6点・23.1%）、A a I・C c III（5点）と比較的拮抗する。

調整の点では、底部回転糸切り離し、体部内外回転ナデが基本である。板目痕は10点（38.5%）と比較的多くみられる。筵目状の板目痕は2点みられる。

未調整部分については、

①内底面のみに未調整部分を残すもの = 4点（C a I・C a IIIほか）

②体部外面下端のみに未調整部分を残すもの = 2点（C c III）

③内底面と体部外面下端の両方に未調整部分を残すもの = 1点（C a I）

で、Cのみにみられる。一定方向のナデつけについては、

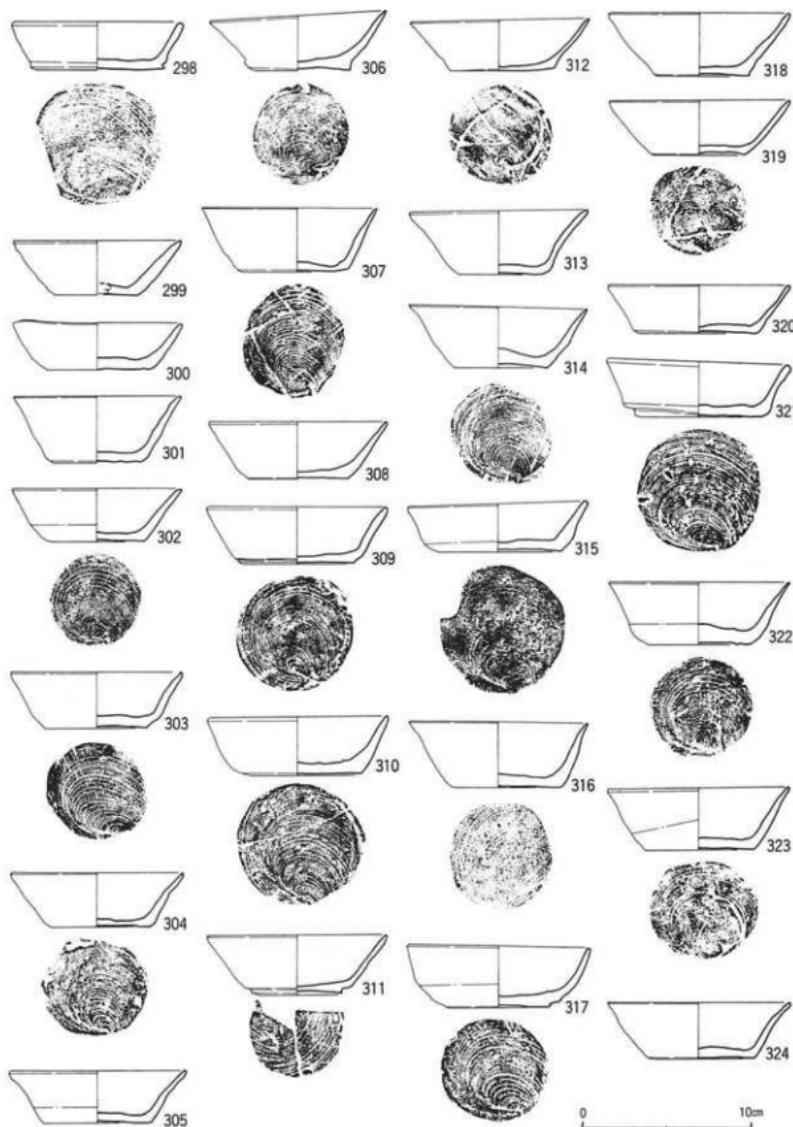
①内底面のみに一定方向のナデつけを行うもの = 5点（C a I・C a IIIほか）

②内底面に一定方向のナデつけ、体部外面下端に未調整部分を残すもの = 1点（C c III）
同じくCのみである。

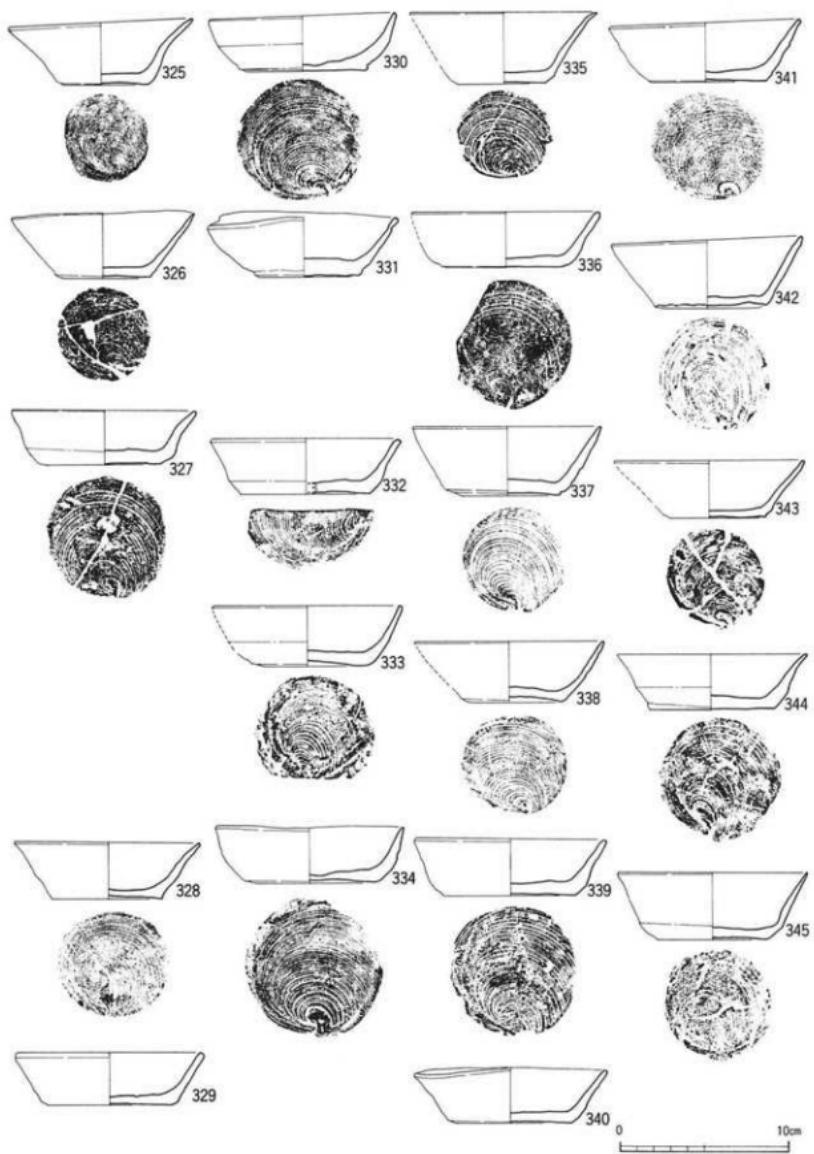
焼成が非常に良好な個体は9点ある。C a I・C a III・C c III各3点で、Aはみられない。このように、板目痕をはじめ、内底面及び体部外面下端の未調整部分の残存、内底面への一定方向のナデつけといった細部の調整については、Cの器形についてはかなりの頻度でみられるものの、Aの器形では皆無に近いことが分かる。

392は胎土が精良で、色調も白っぽい淡黄褐色を呈し、ほかの個体と明確な違いがみられる。底部を失っているので明確でないが、体部内面に横方向・斜め方向のナデ調整が加えられている。386は外底面から体部外面下半にかけて黒褐色のスヌ状の付着がみられる。

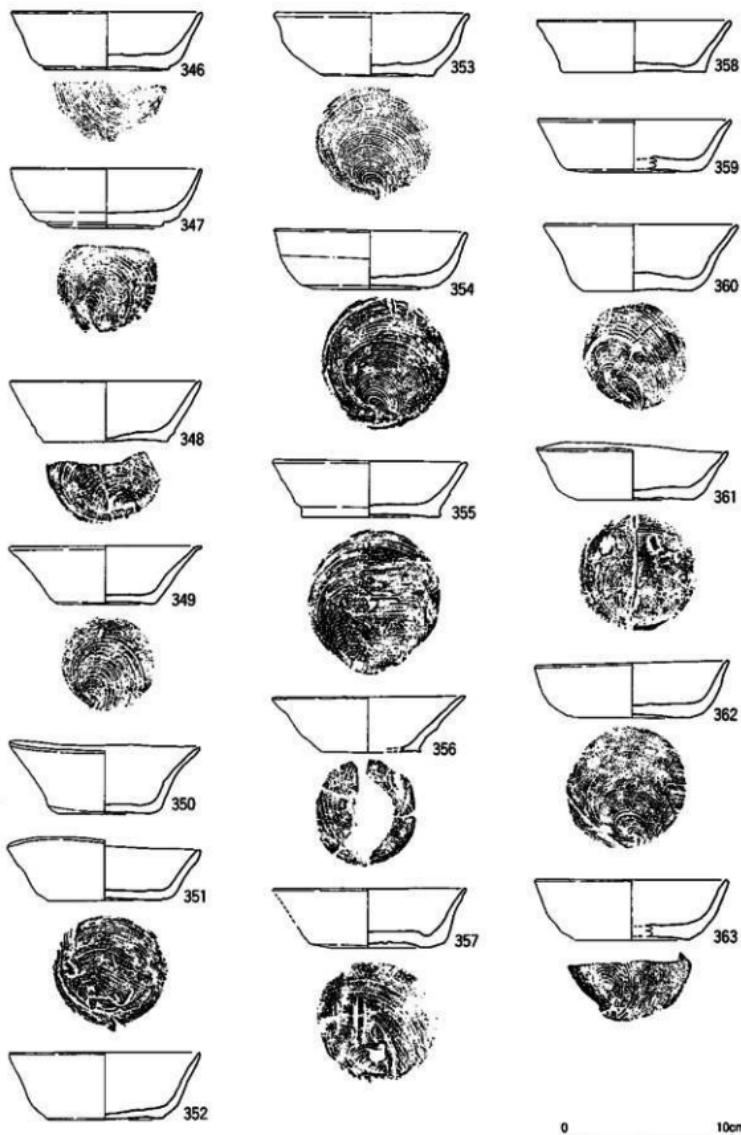
皿については、低平度を除けば杯との形態的な差違が見出だしにくい。ただ、上記の分析の如く、内湾気味の体部をもつ器形を本遺跡の皿のひとつの特徴とみることができよう。ただ、この器形は低平度を除けば杯の内湾気味で低平な体部をもつ器形の中に類似するものが存在し（C = 317・330・333・334・347・354・362・363・368）、これらとの区別あるいは関連性を含めた検討が必要であろう。



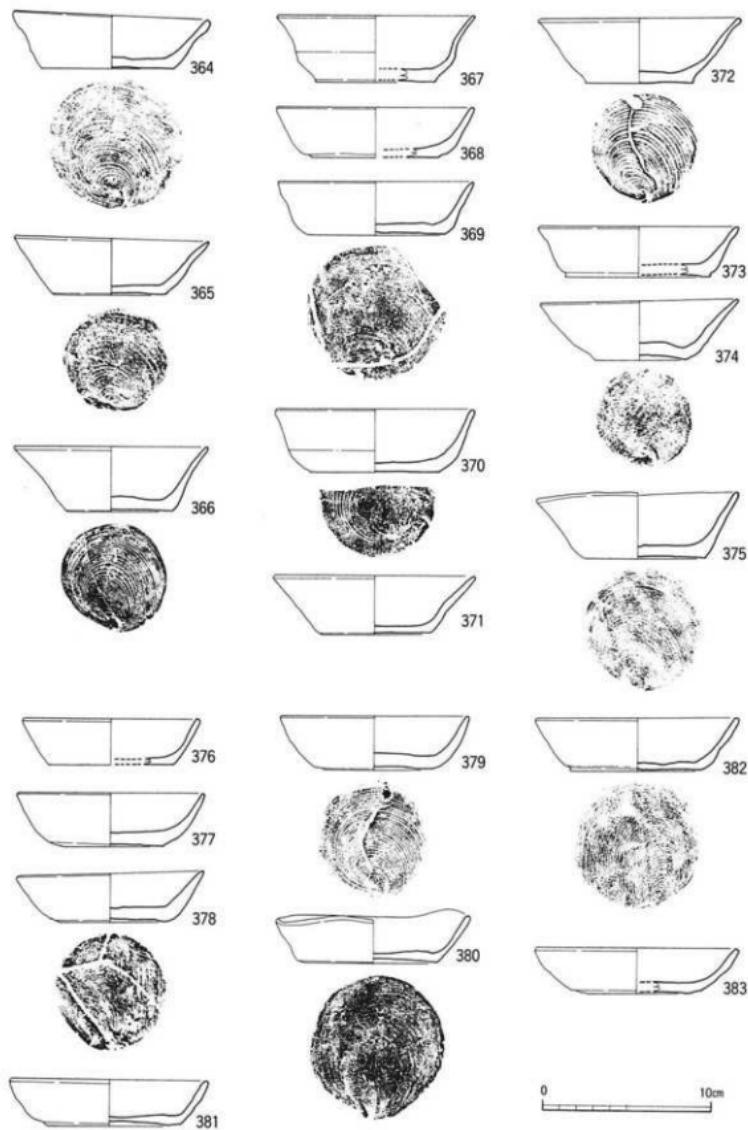
第47図 A区包含層出土土器実測図（3）（1:3）



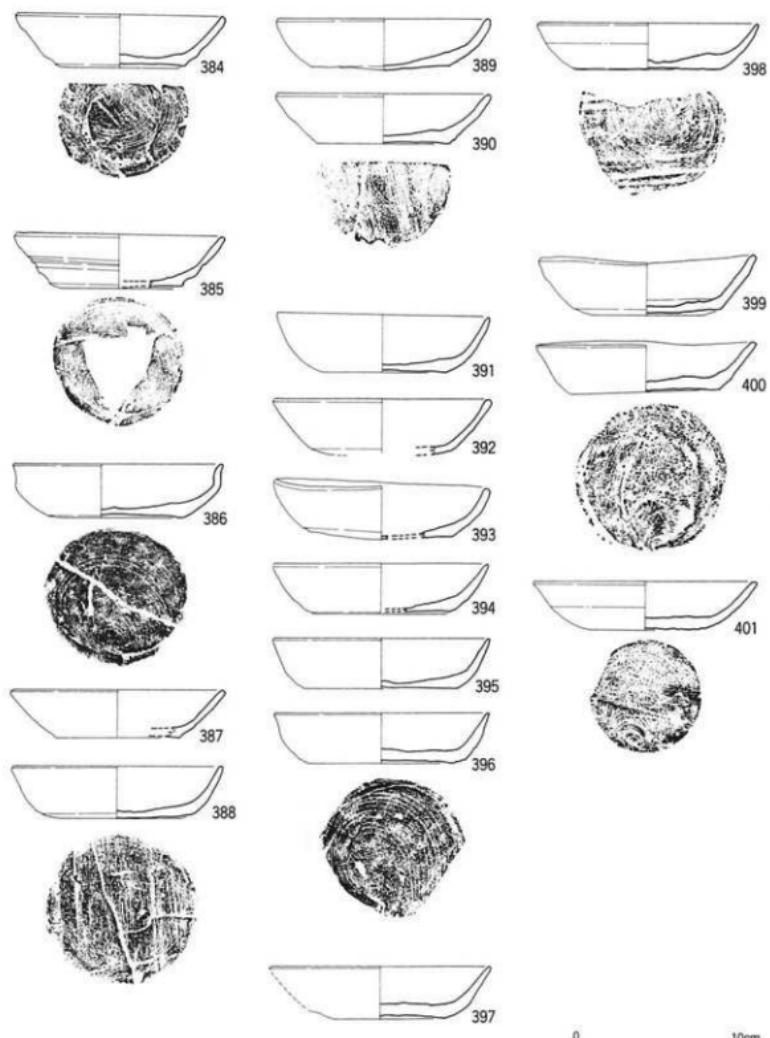
第48図 A区包含層出土土器実測図(4)(1:3)



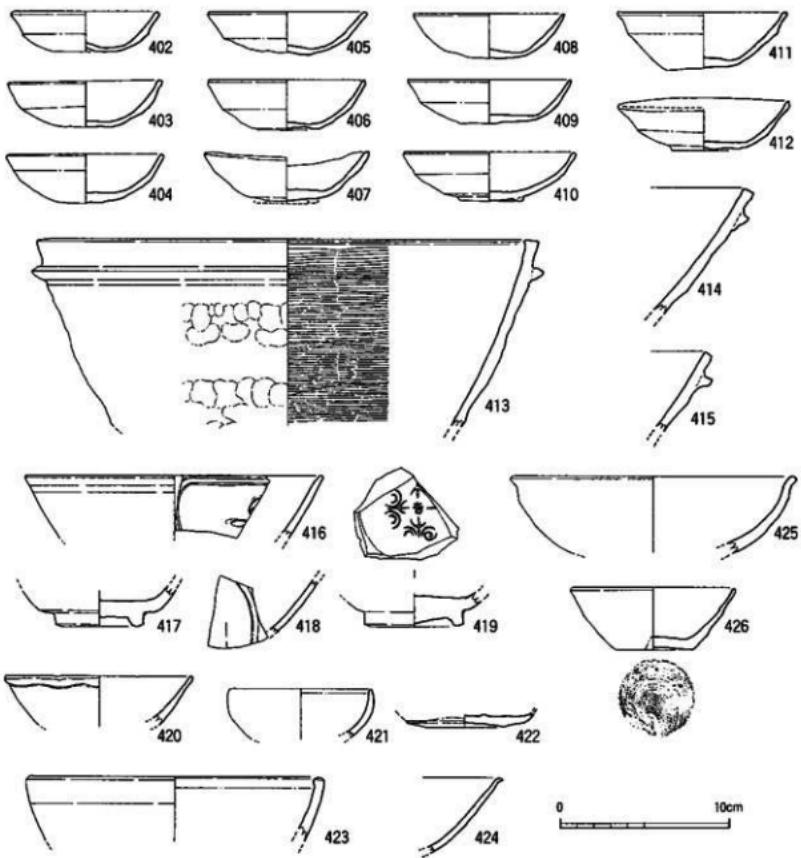
第49図 A区包含層出土土器実測図(5)(1:3)



第50圖 A區包含層出土土器實測圖（6）（1:3）



第51図 A区包含層出土土器実測図（7）(1:3)



第52図 A区包含層出土土器実測図（8）（1:3）

297・402～412は椀である（計12点）。407・410・412は輪状高台をもつが、そのほかは基本的には無高台のものとみられる。口径8.5～10.1cm、器高2.4～3.45cmで、主体は口径9.1～10.0cm、器高2.6～2.95cmである。低平度は0.27～0.35で、主体は0.29～0.32である。高台はいずれも雑なもので、幅8mm、厚さ1～2mmの細く扁平な粘土紐を輪状にして外底面に貼付している。412は粘土紐の端部が離れて「の」字状をしている。高台の径は3.8～4.1cm、高さ1～3mmで、断面は三角形ないしは逆台形である。体部との接合面は概して体部側はナデ消しているが、高台内側は未調整で接合面が明瞭である。

形態的には、内湾気味に外上方に延びる浅い器形を中心で、底部は概して丸味を帯びるもののがよく狭い平坦面がみられる（402では外底面がやや凹み気味）。外面の体部中位あたりに緩やかな稜が存在する。これは体部外面上半に施される回転ナデに伴うもので、ナデ調整が施された部分は緩やかに凹むものの、不明瞭な場合も多い。412はほかのものとやや異なり、器高が高く、底面がややいびつである。

調整面では、特に体部外面の調整が器壁の損耗のため不明確なことが多いが、基本的には内面が横方向主体の丁寧なナデ、体部外面上半が回転ナデ、稜を介して下半が未調整あるいは指頭によるナデ調整である。405の体部下半は横方向主体の雑な条線が多くみられ、何らかの硬質なものによるナデと考えられる。402の内底面には一定方向のナデつけが施されている。412の口縁の内外面には黒褐色のススが付着している。406の内面は赤褐色を呈しており、顔料などの使用が考えられる。

焼成は概して良好で、非常に良好なものも多い（6点）。色調は淡黄褐色のもの（7点、406～412）のほかに黄白色のものがやや目立つ（5点、297・402～405）。

414は端部が平坦な口縁部直下に断面三角形の貼付凸帯が巡る鍋で、凸帯下にはススが分厚く付着している。体部は直線的に外上方に延びるもので、内面下半に横方向の細かいハケ目、口縁部内外面には丁寧な横ナデが施されている。

b. 須恵質土器（415）　鍋1点が出土している。

415は直線的に外上方に延び、端面が平坦な口縁部直下に断面方形の貼付凸帯が付く。調整は、内面横方向のハケ目、口縁部端面から外面にかけて横ナデ、外面体部下半に粗い横ナデを施している。外面暗灰色、内面淡灰色を呈す。

c. 瓦質土器（413）　鍋1点が出土している。

413は口径28.2cmで、外面口縁部直下に断面三角形の貼付凸帯が巡る。口縁部内面が僅かに凹み、端面は平坦である。調整は、内面は横方向の浅いハケ目を、口縁端面から外面凸帯にかけて横ナデ、凸帯下の体部外面には上下2か所に2段を単位とする指頭押圧が行われ、部分的にススが付着している。外面灰黒色、内面・胎土灰色～黄灰色を呈する。

d. 輸入磁器 青磁・白磁がある。

イ. 青磁 皿1点(422), 碗7点(416~421・425), 香炉? 1点(423)がある。

皿(422) 422は皿の底部片で、見込み及び外面の稜付近から上方に施釉し、外底面及びその周囲は露胎である。外底面は回転ヘラケズリを行い、中央に向かって緩やかに凹む。施釉部分は淡灰緑色、露胎部分は灰色である。

碗(416~421・425) 416は口径17.4cmの龍泉窯系の碗で、体部下半を失っている。内外面に施釉し、内面には2条の沈線で画された中に片刃彫りによる蓮花折枝文を描く。口縁内面は沈線のためやや先細り、端部は丸い。口縁部外面には片刃彫りで浅く段を削り出している。施釉部分は暗灰緑色、胎土灰色を呈する。417は断面台形の削り出し高台で、外縁を面取りした高台疊付に部分的に施釉が及ぶ。見込みの外縁には片刃彫りにより円圏が施される。施釉は厚く、貫入が顯著である。施釉部分は灰緑色、胎土暗灰色を呈す。418は外面に鑄蓮弁文を描く龍泉窯系の碗である。施釉部分暗灰青色、胎土暗灰色である。419は断面台形の削り出し高台片で、底部は分厚い。施釉は高台疊付の外縁まで及び、施釉部分灰緑色、露胎部分・胎土淡橙色~灰色である。平坦な見込みの中央には2~3重の渦巻き(あるいは同心円)2個とその間に樹木状のものを置いて1単位としたものを四方に配し、中央には「吉」字をいずれも陰刻で描いている。420は薄く先細りの器壁をもつ浅い小碗で、口縁に刻みを入れて輪花としている。外面口縁部には釉溜まりがみられる。施釉は厚く、色調は施釉部分淡灰青色、胎土灰色である。口径11.0cmである。421は内湾気味に延びて直立する丸味の強い小碗で、口径8.2cmである。尖り気味に納める口縁端部の釉を削り取って口禿としている。口禿の部分は淡褐色・褐色を呈し、顔料の塗布の可能性がある。施釉は厚く、色調は施釉部分が淡灰青色、胎土灰色である。425は内湾気味に外上方に延びる体部から短く外反する口縁部のいわゆる曲口碗で、口径16.4cmである。灰白色~灰色の素地に白化粧土を塗り、その上に淡青色の釉薬を施したもので、貫入が著しい。

香炉?(423) 香炉の可能性があるもので、やや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部をやや内方に肥厚させている。施釉は口縁部内面から体部外面にかけて比較的厚く行われている。体部内面は露胎である。若干中央が凹む口縁端面における施釉は厚く、丸味の強い口縁端部となっている。外面口縁直下には段が形成されている。色調は、施釉部分灰緑色、胎土・露胎部分灰白色である。口径17.05cmである。

ロ. 白磁 碗1点(424)が出土した。内湾気味に外上方に延びた体部から短く外反する口縁部の端部を尖り気味に納める。ごく薄く透明釉を施すが、外面下端は露胎である。色調は灰白色を呈する。

e. 灰釉陶器 小型の椀1点(426)が出土した。

426は口径9.65cm、器高3.7cmである。厚い平底から斜め上方にほぼ直線的に延びた体部に若干端部を内側に肥厚させて丸く納めた口縁が付く。内面及び外面体部下端まで薄い透明釉を施す。調整は、底部回転糸切り離し、体部外面は回転ナデである。施釉部分は淡灰緑色、露胎部分・胎

土は淡黄褐色を呈する。古瀬戸中Ⅳ期の平底末広椀である。

②瓦

平瓦3点(739・740・746)が出土した。739は狭端部と側端部を残し、凹面に布目痕、凸面に斜格子目叩きが見られる。狭端面には直線状の刻線が認められる。740は恐らく側端面を残す。断面形が直線的であることや側端面が表裏面に対して斜交すること、側端面付近の表裏面が若干肥厚することなどから面戸瓦の可能性も考えられる。表面には径4cmほどの巴文のスタンプが3つ縱方向に並べて押されている。上2つは明瞭だが、下端のものは削り取られたものか、不明確である。巴文は尾が長く1/2回転以上し、頭部は丸味が強く尾部との境界が明瞭である。三つの巴の頭部はほぼ接しているが繋がらず境は明確である。巴の外側に圓線が2重に巡り、その外側に珠文帯(珠文28個)、圓線1を挟み、最も外側には劍先を外側に向けた幅広の劍頭文24個が配されている。裏面には縱方向のヘラミガキが密に施されている。746は側端面を残す小破片で、凹面に布目痕がみられる。

③石製品

硯1点(754)がある。754は長さ9.2cm、最大幅6.8cm、高さ0.65cm~0.8cmで、平面楕円形の硯である。陸部は中央やや下寄りにあり、上方にはやや狭い海部がある。陸部の左右・下には断面V字の浅い溝が巡る。上及び右側の縁が大きく欠損している。側面・裏面とも平滑に仕上げられている。石材は黒色の粘板岩である。

④鉄製品

釘2点(767・768)がある。767は折頭形の、768は正面觀の両端が広がる頭巻形の頭部をもつもので、いずれも尖端を失っている。現存長は4.8~5.5cmで、断面形はいずれも方形である。

⑤古銭

中国・北宋の紹聖元(1094)年初鑄の紹聖元寶1点(787)が出土した。

(2) C区包含層出土遺物(第53~55図427~483、第68図764・779、図版23・26)

C区北西隅・同南東隅を中心に堆積する包含層出土の遺物群で、内訳は土師質土器・小皿14点(427~440)、杯31点(441~471)、皿1点(472)、椀10点(473~482)、青磁・碗1点(483)、鉄製品・釘1点(779)、用途不明品1点(764)である。

①土器類

a. 土師質土器(427~482) 計56点で、小皿・杯・皿・椀がある。皿は1点と少なく、杯31点(55.4%)を中心とし小皿14点(25.0%)、椀10点(17.9%)である。

427~440は小皿である。口径6.5~8.1cm、器高1.3~2.0cmである。低平度は0.20~0.29で、主体は0.20~0.25である(0.22以下をⅢ、0.23以上をⅠとする)。形態的には、底部から直線的か内湾気味に外上方に延びる体部をもつもののみで、体部の傾きがやや開き気味のものがみられる。体部が内湾するものも430・434を除けば直線的に近い。つまり、形態差は法量の差も含めてあまり大きなものではない。総合的には、A a I (5点)、C a I (3点)などがやや多い。

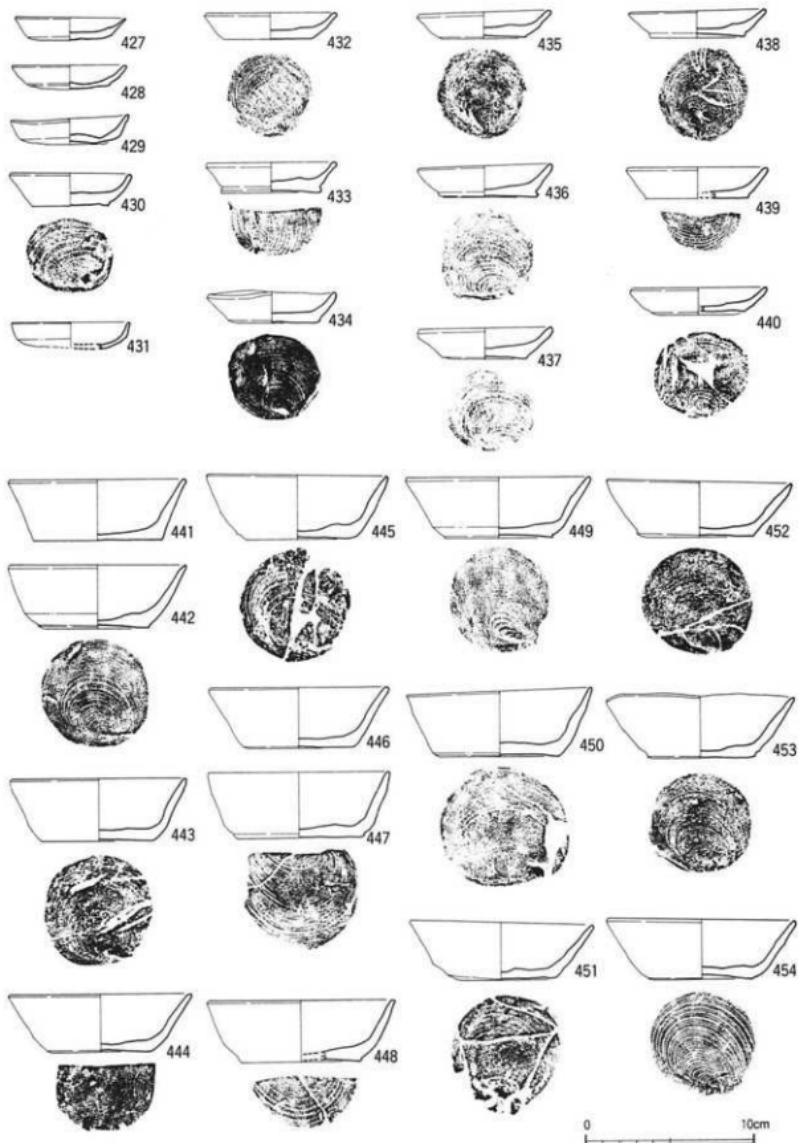
調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが主である。432で縦目状の板目痕がみられるが、ほかに板目痕が観察される個体はない。内底面に一定方向のナデつけを行うものが9点と多い。434の焼成はかなり良好だがほかは普通である。色調は、淡黄褐色が主体である。427~429・431の4点は底部が丸味をもつ器形で法量的に他のものに較べて小さい(口径6.5~7.0cm、器高1.3~1.75cm)。いずれも底部ヘラ切り後周縁をナデ調整している。直立気味の体部は内外面とも回転ナデで、一定方向のナデつけや未調整部分などはみられない。色調は淡橙色・橙褐色が主である。

441~471は杯である(総点数31点)。口径10.4~13.7cm、器高3.25~4.1cmで、主体は口径10.4~10.6cm、10.9~11.8cm、器高3.45~4.1cmである。低平度は0.28~0.38で、0.30~0.33~0.34~0.37に集中する(特に、0.33~0.34)。口径が器高の3倍程度のものが主体であることを示している。

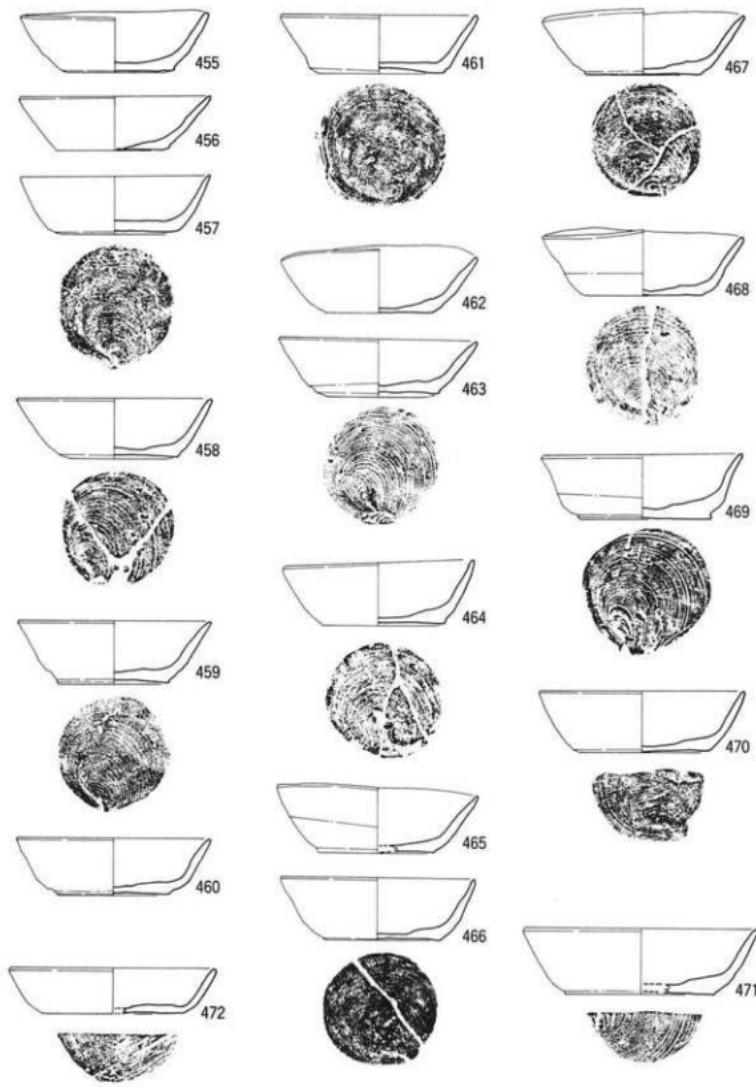
形態的には、底部から内湾気味に立ち上がり、体部中位辺りから直線的或いは外反気味に外上方に延びるD(11点/31点=35.5%)が最も多く、内湾気味のC(9点・29.0%)、直線的に延びるA(8点・25.8%)と続き、外反気味のB(3点)は少ない。ただ、D・Cは内湾の度合いはそれほど大きくなく、Aとの区別はややつきにくい。Bの外反の度合いもそれほど大きくはない。体部の傾きはやはり通常のaが大半を占め(26点/31点=83.9%)、直立気味のb(4点)、開き気味のc(1点)はあまりみられない。低平度は通有のI(0.31~0.36)が最も多く(21点/31点=67.7%)、低平なⅢ(0.30以下、7点・22.6%)、高い感じのⅡ(0.37以上、3点)となる。総合的には、内湾→直線・外反の体部をもつ通有な低平度のD a I(8点/31点=25.8%)をはじめ、やや内湾気味の体部や直線的な体部で通有な低平度のC a I(6点)・A a I(4点)が主体を占める。その他に、A a Ⅲ・A b Ⅱ・A c Ⅲ・B a I・B a Ⅲ・B b I・C a Ⅱ・C a Ⅲ・D a Ⅲ・D b I・D b Ⅱ(各1~2点)がある。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが主体で、ヘラ切りや板目痕は全くみられない。体部外面下半のみに未調整部分がみられるものが7点とやや多く、内底面のみに未調整部分を残すもの(1点)や内底面+体部外面下半に未調整部分を残すもの(2点)は殆どみられない。内底面に一定方向のナデつけのみを行うものではなく、体部外面下半に未調整部分を併せ持つものが1点存在する。このほか、内面に丁寧なナデ調整、外面体部下半未調整のものが1点ある。

内底面の中央が強く凹むものが13点と多くみられる。類型別では、D a I(4点)・A a I(3点)などに多くみられる。

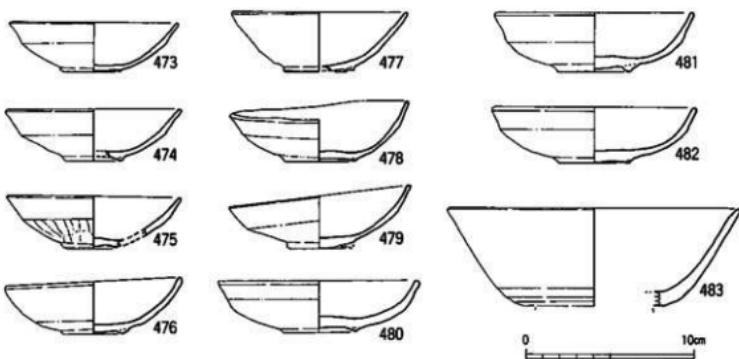


第53図 C区包含層出土土器実測図(1) (1:3)



0 10cm

第54図 C区包含層出土土器実測図（2）(1:3)



第55図 C区包含層出土土器実測図（3）(1:3)

焼成が非常に良好なものは1点と少ない。色調は淡黄褐色（14点・45.2%）、黄褐色（9点・29.0%）、淡橙色（8点・25.8%）がある。

472は皿である。口径12.1cm、器高2.7cm、低平度0.22で、類型はA a IIIである。口径は平均的だが、器高が低い器形である。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデで、内底面と体部外面下端に未調整部分が残る。色調は淡黄褐色である。

473～482は椀で、いずれも輪状高台をもつものである（総点数10点）。口径10.0～12.3cm、器高2.9～3.8cm、低平度0.26～0.36である。平底の底部から内清気味に外上方に立ち上がり、口縁端部を丸く納める。底部には幅4.5～12mm、厚さ1～4mmの細く扁平な粘土紐を貼り付けて粗雑な輪状高台としている。高台の高さは2～5mmで、断面形は外面が直立気味の三角形あるいは逆台形である。

形態的には低平な椀形で、外面の口縁部直下に強い回転ナデによる緩やかな稜がつくり出されている。473～479は口径10.0～10.7cm、器高2.9～3.8cmとやや小型で、淡黄褐色の478を除いて黄白色の色調と良好な焼成のもので、搬入品と考えられる。これらに較べて、480～482は口径11.7～12.3cm、器高3.3～3.8cmと大型で、形態的にも体部の湾曲が強く、外面の稜が体部のかなり低い位置にあるなど差異が顕著である。これら4点は色調（淡黄褐色）・胎土・焼成や高台・体部の形態など様々な点で酷似しており、478を含めて搬入品を模倣した在地産の可能性が考えられる。

調整面では、内面はいずれも丁寧なナデ、外面口縁部回転ナデで、外面体部下半（稜より下位）は明確ではないが指頭によるナデ調整が主体と考えられる。高台周辺には横ナデが施され、高台の接合面は基本的に外側は丁寧にナデ消され、内側はナデ消されることなく接合面が露呈する例が多い。ただ、C区包含層出土例はほかのものに較べて内・外側とも丁寧にナデ消されている。

476は外面口縁直下の稜がみられず、底部近くまで硬質の工具によると思われる回転ナデが施され、底部近くのごく緩やかな稜を介して体部下端から外底面にかけて、硬質な工具による比較的丁寧なナデつけが行われている。478は内面全体及び外面口縁部に赤色顔料状の塗布がみられる。

b. 輸入磁器 青磁・碗 (483) がある。

483は口径17.3cmの大型で重量感のある碗である。底部から湾曲して外上方に直線的に立ち上がり、若干開き気味の口縁端部を丸く納める。内面の口縁直下に細い沈線1条を施し、内底面の外縁に浅く片刃彫りによる円圏を作り出している。薄く施釉しており、施釉部分が暗灰緑色、素地が暗灰色である。

②鉄製品 鉤1点(779)と用途不明品1点(764)がある。

779は鉤の身部片で、頭部側と尖端部を失っている。断面は丸味をもつ方形である。現存長3.7cmである。764は用途不明品で上端を失っている。断面不整隅丸方形で、現存長5.9cmである。

6. ③層出土の遺物

床土層と包含層或いは遺構面との間に介在する③層（主として暗灰色砂質土層）からはA区を始め、C・D区からもまとまった量の遺物が出土している。

- (1) A区③層出土遺物（第56～59図484～611, 第65図725, 第66図735・743・744・749～751, 第67図756, 第68図761・762・773・775, 図版24・26）

A区の③層（暗灰色～暗黄灰色砂質土）は厚さ40～75cmと厚く、A区全体に安定して存在する。出土遺物の総点数は140点とA区包含層に次ぐ多さである。その内訳は、土師質土器・小皿75点（484～558）、杯28点（559～586）、皿7点（587～593）、椀13点（594～606）、鍋1点（607）、擂鉢1点（608）、須恵質土器・擂鉢1点（609）、青磁・碗1点（610）、青白磁・瓶？1点（611）、有溝土錘1点（725）、瓦玉1点（735）、平瓦5点（743・744・749～751）、石製品・用途不明品1点（756）、鐵製品・用途不明品2点（761・762）、釘2点（773・775）である。

①土器類

a. 土師質土器（484～608） 計125点で、小皿・杯・皿・椀・鍋・擂鉢がある。小皿が6割を占め、杯が2割強、椀が1割を占める。

484～558は小皿で、計75点ある。口径5.8～8.8cm、器高0.9～2.8cmで、主体は口径6.5～8.0cm、器高1.4～2.3cmである。低平度は0.13～0.37で、0.18～0.32に主体がある。形態的には、体部の形状は直線的に外上方に延びるA（34点／75点=45.3%）と内湾気味に立ち上がるC（25点／75点=33.3%）が多く、外反気味の体部をもつB（7点）や体部が内湾気味に立ち上がり中位から外反あるいは直線的に延びるD（9点）は少ない。体部の傾きの点では、一般的に45°を中心とした通常の傾きのa（57点／75点=76.0%）が圧倒的に多く、直立気味のb（4点）や水平気味のc（14点）は少ない。低平度（0.22以下をⅢ、0.23～0.33をⅠ、0.34以上をⅡとする）の点では、通有のⅠが最も多く（44点／75点=58.7%）、低平なⅢ（25点・33.3%）も比較的多い。高い感じのⅡ（6点）は少ない。類型別では、A a I（15点・20.0%）、C a I（11点・14.7%）、A a III・D a I（各8点・10.7%）をはじめ、A c III（6点）、B a I・C a III・C c III（各5点）、A a II（3点）などが比較的多く、その他にA b II・A c I・B a III・B b I・C a II・C b I・C b II・C c I・D c I（各1点）がある。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデのものが大半である。488（A c III）・499（A c I）はヘラ切りと思われる。外底面の周縁を強くナデしており、そのために外底面は丸味を帯びる。524は静止糸切り離しと考えられる。板目痕が残るものは11点で、2点が縫目状の板目痕である。類型的には、A c IIIが板目痕の出現頻度が高い（5点／6点=83.3%）。体部の形状の面ではA（6点／34点=17.6%）における頻度がいくらか高く、C（3点）・D（2点）となり、Bは皆無である。体部の傾きの点ではc（7点／14点=50.0%）での頻度が高く、a（4点）もみられるが、bは存在しない。低平度の点ではⅢ（8点／25点=32.0%）で多くみられ、I（3点）もみられるが、Ⅱではみられない。基本的に、開き気味で浅い器形に板目

痕の出現頻度が高く、また、c・Ⅲのような優勢でない形態的特徴をもつ器形に板目痕が比較的よくみられる。

内底面・体部外面下端にみられる未調整部分や内底面にみられる一定方向のナデつけについては、前者が25点／75点=33.3%、後者が10点／75点=13.3%と比較的頻度が高い。未調整部分について、

①内底面のみに未調整部分がみられるもの=8点 (B a I・C a Iほか)

②外面体部下端のみに未調整部分がみられるもの=8点 (A a I・C a Iほか)

③内底面及び外面体部下端の両方に未調整部分がみられるもの=9点 (D a Iほか)

類型別では、①はB a I、②はA a I・C a I、③はD a Iで各々出現頻度が高い。形態的には、体部の形状の面でC (9点)、A (8点)、D (5点)、B (3点)と分散するが、体部の傾きの面ではa (22点／57点=38.6%)に、低平度の点ではI (20点／44点=45.5%)と各々出土点数が最も多いa・Iに集中している。一定方向のナデつけについては、

①内底面に一定方向のナデつけのみを行うもの=7点 (A c Ⅲ・C a Iほか)

②内底面の一定方向のナデつけと外面体部下端に未調整部分がみられるもの=3点 (A a Ⅲほか)

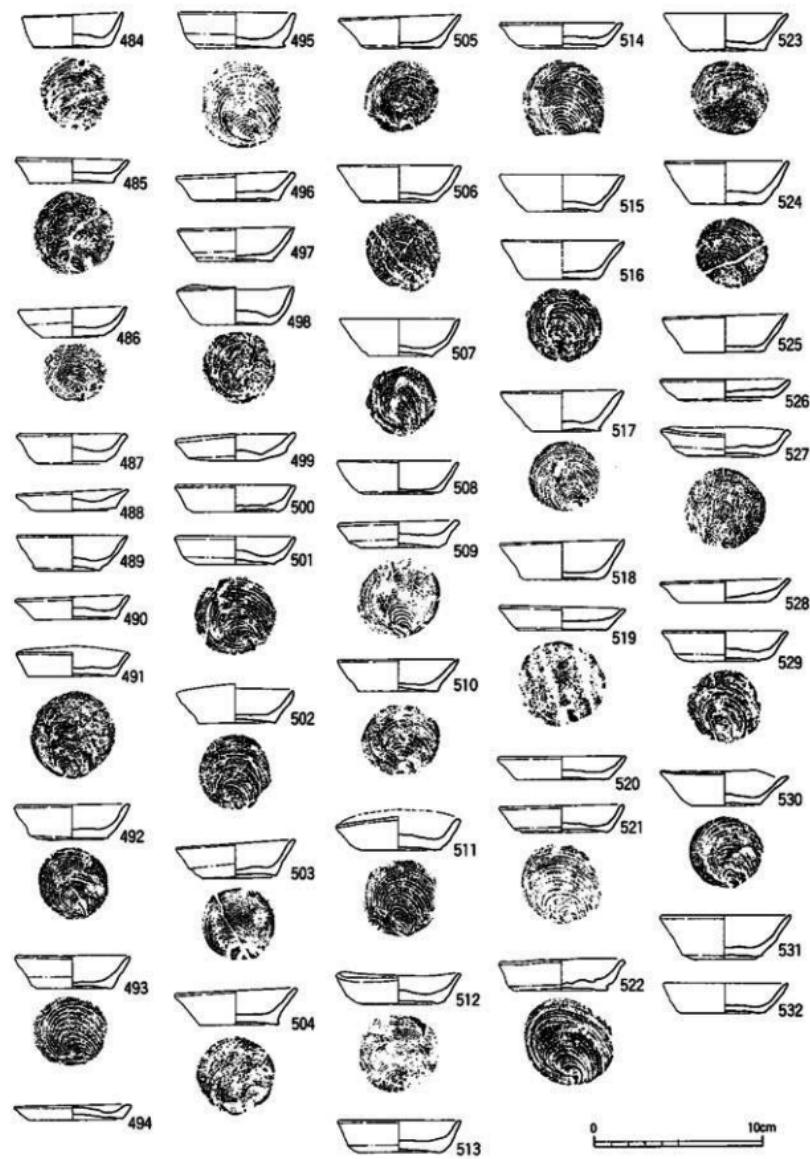
点数的に少なく、特定の傾向を抽出することは難しいが、体部の形状では内湾的なC・D、低平度の点では低平なⅢとの関連性がみられる。

色調は、淡黄褐色 (33点・44.0%)、淡橙色 (22点・29.3%)が主体で、ほかに橙色 (9点)、橙褐色・淡褐色 (各3点)などがある。焼成が特に良好なものが12点あるが、特定の色調とは結びつかない。ただ、黄白色のもの2点 (494・548=A a Ⅲ)はいずれも焼成が非常に良好である。550の外面体部には暗褐色部分があり、スヌの可能性がある。

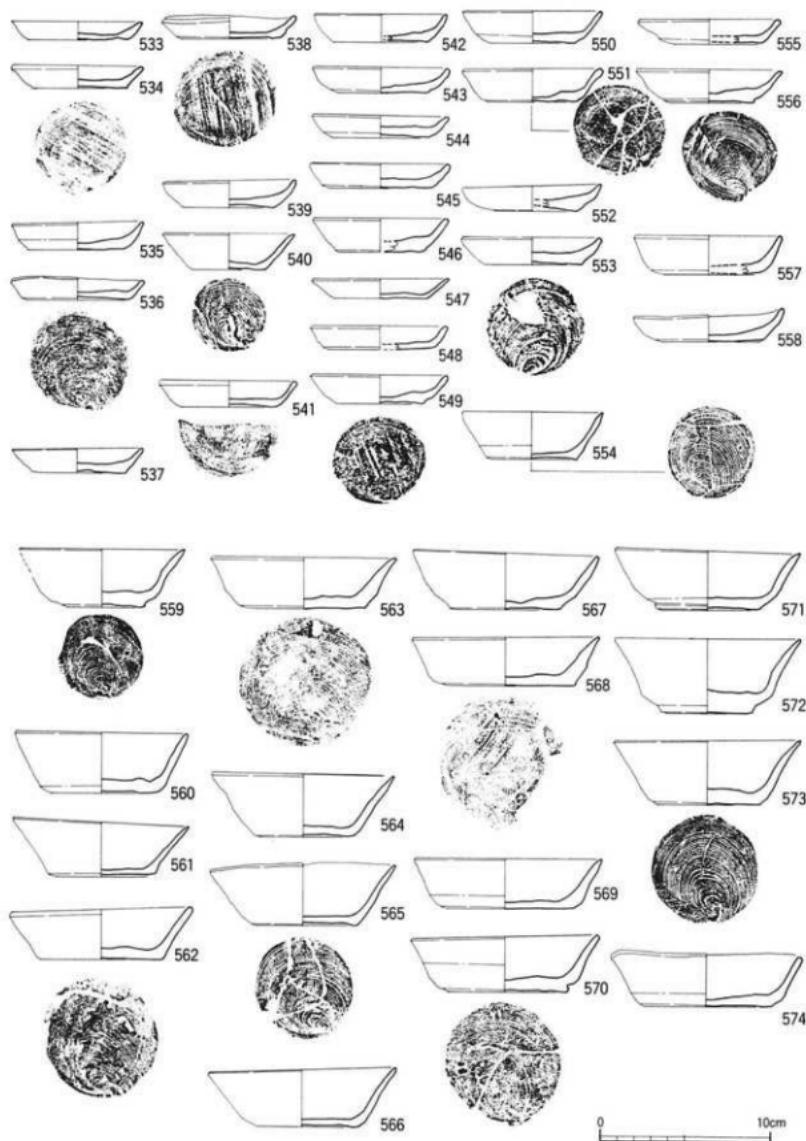
559～586は杯である。計28点で、口径9.8～12.6cm、器高2.9～4.4cmである。主体は口径10.7～11.3cm、器高3.2～3.8cmである。低平度は0.27～0.40で、0.27～0.36にやや集中する。口径が器高の2.5～4倍の大きさであることを示す。

形態的には、底部からやや分厚く内湾気味に外上方に立ち上がり、体部中位付近から緩やかに外反ないしは直線的に延びるD (13点／28点=46.4%)が最も多く、次いで比較的薄手の器壁が外反気味に外上方に延びるB (9点・32.1%)で、A・C (各3点)は少ない。体部の傾きの点ではcが1点存在する以外はaである。低平度では、通有な低平度0.31～0.36のI (16点／28点=57.1%)が多いが、低平な低平度0.30以下のⅢ (11点・39.3%)も比較的多く、高い感じがする低平度0.37以上のⅡは1点と皆無に近い。通有なあるいは低平で外反気味の器形が主体を占め、直線的な体部や内湾気味の体部をもつ器形は少ない。類型的には、B a I (9点・32.1%)、D a Ⅲ (7点・25.0%)が多く、その他にA a I・A a Ⅲ・C a I・C a Ⅲ・D a II・D c Ⅲ (各1～4点)がある。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが主体である。回転ヘラ切りは皆無で、板目痕は4点でみられる。類型的には、内湾→外反・直線の体部を持ち、低平なD a Ⅲに集中し



第56図 A区③層出土土器実測図(1) (1:3)



第57図 A区③層出土土器実測図(2)(1:3)

ている。

未調整部分（8点／28点=28.6%）については、内底面のみに未調整部分を残すもの（1点）や内底面・体部外面下半の両方に未調整部分を残すもの（2点）は少なく、体部外面下半のみに未調整部分を残すもの（5点）が比較的多い。類型的には分散的だが、D類やI・III類への集中傾向がみられる。一定方向のナデつけを残すもの（9点／28点=32.1%）については、内底面にナデつけのみを行うもの（5点）とナデつけに体部外面下端の未調整が加わるもの（4点）があるが、類型的にはほぼD類で占められている。即ち、Da IIIが各3点と大勢を占め、残る2点もDa Iである。未調整・一定方向のナデつけともにD類での出現頻度が高い点が注意される。

色調は淡黄褐色（14点・50.0%）、淡橙色（9点・32.1%）が主で、ほかに橙色・橙褐色・淡褐色があるが、黄白色のものはみられない。類型的には、淡黄褐色がD類（9点）に集中する一方で、淡橙色のものがBa I（4点）に比較的集中する傾向がある。焼成が非常に良好な575（Da III）・581（Da I）はいずれも淡黄褐色である。

587～593は皿で、計7点である。口径10.2～13.4cm、器高2.45～3.1cmで、口径にかなりのばらつきがある。低平度は0.23～0.28とほぼ一定の範囲に集まるが、0.25以下をIII（低い感じ）、0.26以上をI（通有）とした。器高・低平度をほぼ同じくし、口径が10cm台、11cm台、13cm台のもののが存在する。体部の形状では直線的なA、内湾気味のC、内湾→外反のDが同程度存在する。Bはない。Cはやや小さな底部から水平気味の体部が内湾しながら外上方に延びる特徴的な器形で、Dは内湾気味に底部から立ち上がった体部中位で屈曲気味に変化して外反気味に延びる器形で、体部中位に稜ができる。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが主体で、ヘラ切りはみられない。板目痕は4点である。未調整部分と一定方向のナデつけについては、内底面・体部外面下半が未調整のもの1点と内底面に一定方向のナデつけ+体部外面下半の未調整のもの3点がみられる。

焼成が非常に良好なもの2点（592・593）で、色調は淡黄褐色・黄褐色・淡橙色・橙褐色・黄白色・淡褐色がある。焼成が非常に良い592は淡橙色、593は黄白色である。

594～606は椀である（計13点）。口径9.4～11.45cm、器高2.80～4.00cmで、口径9.9～10.9cm、器高3.4～3.7cmが主体である。低平度は0.26～0.38で、主体は0.30～0.35で、A区包含層出土椀に較べてやや高い感じがあり、C区包含層出土椀の低平度の傾向に近い。いずれも輪状高台を持つと考えられる。高台はいずれも幅5～9mm、厚さ1～3mmの細く扁平な粘土紐を輪状にして貼り付けている。断面は三角形を主体に台形・長方形などがある。高台の高さは1.5～4mmと低く、多くの場合丸味を帯びた外底面の中央が接地する。高台の貼付は全体に粗雑で、その平面形は整美な円形を描かず、梢円形や不整円形を描くものや粘土紐の両端が離れて「の」字状をなすものなどがある。接合面の外側は丁寧にナデ消しているが、内面側の接合面は未調整か雑な調整を加えているに止まり、多くの場合接合面を露呈している。

形態は浅い椀形を呈するが、一部を除いて体部は湾曲の度合いは小さく、ほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部外面は回転ナデにより凹み、体部中位に緩い稜が形成される。594・604ではこの稜が比較的明瞭で、複合口縁状をなしている。

調整面では、内面は横方向主体の丁寧なナデ、体部外面上半が回転ナデ、稜を介して体部下半は不明瞭であることが多いが、指頭によるナデ調整が主体と考えられる。一部にはヘラなど硬質の工具によると思われる場合がある。595の体部外面にはかなり明確に縦方向の皺状の稜がみられ、成形時の縦方向の強いナデ調整にともなうものかと考えられる。602では体部の内外面に部分的に赤色顔料状の付着がみられる。

色調は黄白色（7点）・淡黄褐色（5点）・黄褐色（1点）がある。淡黄褐色・黄褐色のものは胎土や色調が杯や小皿などと同じであり、黄白色のものは焼成が後者に較べて良く、また全体にやや軽い。

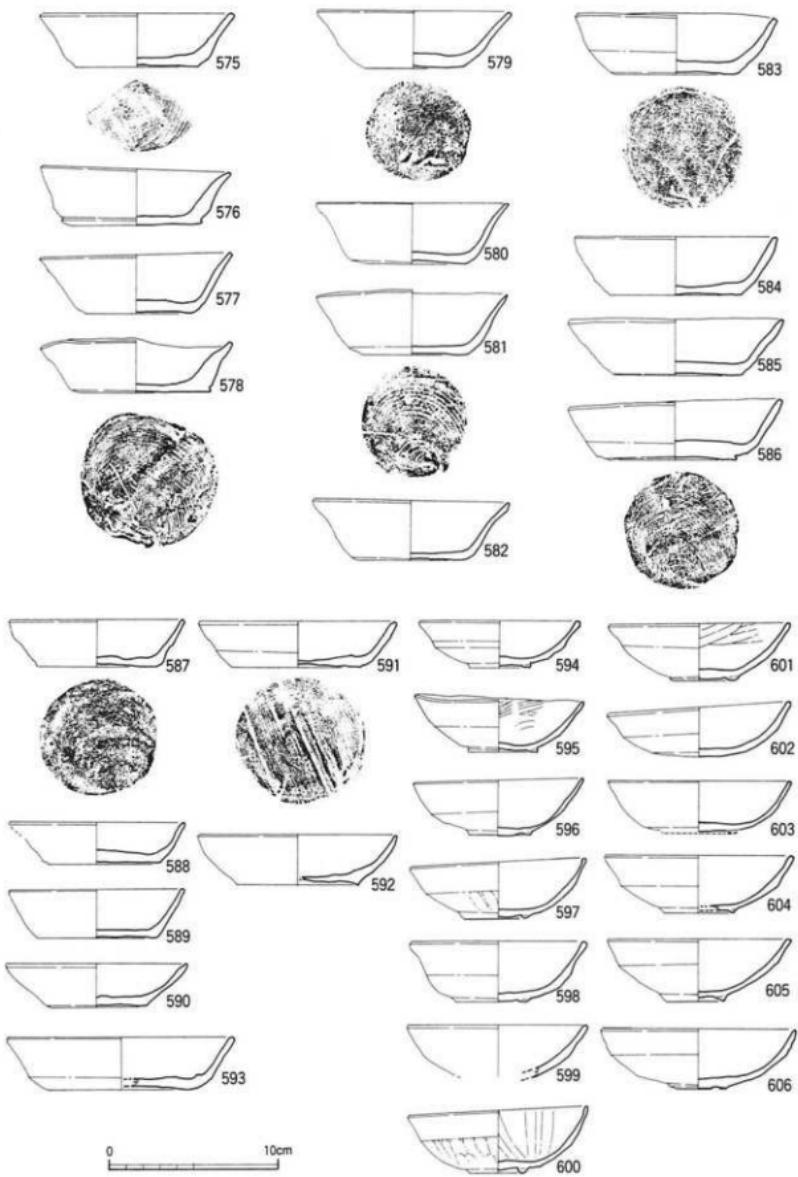
607は鍋で、口径37.4cmである。底部から水平気味に外方に延び、体部中位付近で屈曲してやや開き気味に直立する体部に緩く外反し端部を平坦に納める口縁部が付く。外面全体に分厚く黒色のススが付着する。調整は、内面の体部下半が横方向主体のやや雑なハケ目、体部上半が横方向の比較的整然としたハケ目、口縁部が横ナデで、外面は口縁部から体部上端にかけて指頭によるナデ調整状、体部中位から下半にかけて左上がりのやや強い斜位ハケ目を施している。色調は、外面が暗褐色、内面及び胎土が淡茶褐色を呈す。608は口径34.8cmの擂鉢で、浅い片口を作り出している。底部からやや内湾気味に外方に立ち上がり、口縁端部を平坦に納める。調整は、内面が全体的に横方向の密で浅いハケ目、体部下半に縦方向の4～6本を単位とする擂目がみられる。外面は指頭押圧かと思われるが不明確である。色調は、器表が淡黄褐色、胎土が灰黒色である。

b. 須恵質土器（609） 擂鉢1点がある。口径23.4cmで、底部から直線的に伸びた体部に、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部が付く。調整は、内面の体部下半が斜位ナデ、体部上端から口縁部にかけて横ナデ、口縁部の外面には部分的に浅い横ナデ、体部外面は縦方向のナデのち横ナデを施すが、凹凸が顯著である。色調は灰色である。

c. 輸入磁器（610・611） 青磁・碗（610）、青白磁・瓶？（611）各1点がある。

610は龍泉窯系の碗で、やや内湾気味に立ち上がる外面に片刃彫りによる蓮弁を配す。施釉は厚く、素地は暗灰色、施釉部分は暗灰青色を呈す。611は内面に横方向の凹凸の顯著な削り、外面には渦巻文を陰刻して青灰色とし、全体的には透明釉を施す。素地は灰白色である。瓶の可能性がある。

②土製品（725）



第58圖 A區③層出土土器實測圖（3）（1:3）

725は有溝土錐である。1/2を失っており、現存規模は長さ6.65cm、幅3.2cm、厚さ2.9cmで、溝の深さは5.5mmである。

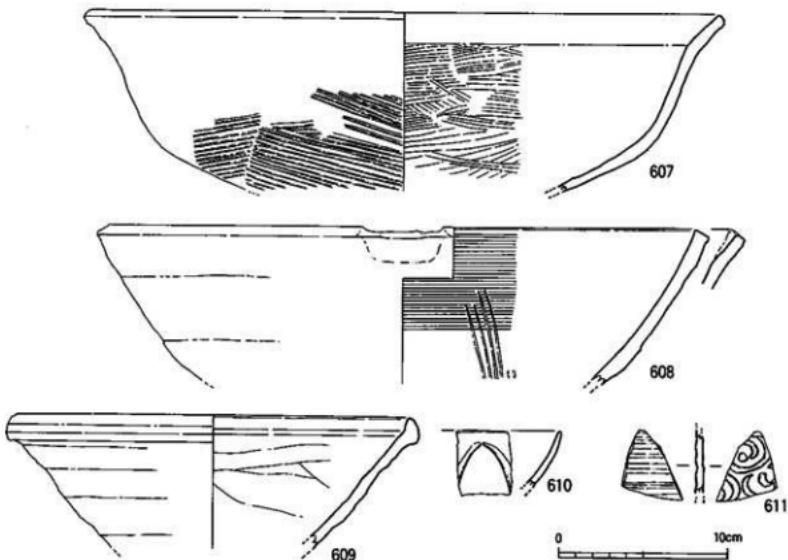
③瓦

a. 瓦玉（735） 瓦を打ち欠いて円盤状にしたものである。4.2cm×4.5cm、厚さ1.7~1.8cmで、左側に側端面、表面に凸面、裏面に凹面を残している。

b. 平瓦（743・744・749~751） いずれも小破片で、計5点が出土している。743・744は凹面布目痕、凸面格子目叩きが残る。750は凹面縦方向のヘラケズリ、凸面縦方向の縄目痕で側端面に3条程度の擦痕がみられる。751は凹面の側端面寄りに部分的にナデ調整がみられる。

749は須恵質のもので、転用品の可能性がある。明灰色の色調で、厚さも1.35cmと他のものに較べてやや薄い。凹面は布目痕の後に縦方向のヘラケズリで、その大半を削り取っている。凸面も縦方向の縄目痕の大半を横方向の板ナデで消している。

④石製品（756） 石鍋を転用した用途不明品1点がある。上半が折れしており、現存規模は8.0cm×6.5cm、厚さ（最大）0.9cmで、不整円形の薄い板状をしている。下縁は丸く整った曲線を描き、縁辺部は表裏とも面取りを行っている。表裏面とも縦方向主体の擦痕が多くみられる。折断



第59図 A区③層出土土器実測図(4)(1:3)

面の左半には穿孔の痕跡がある。石材は灰白色の滑石である。

⑤鉄製品 釘 2 点 (773・775) と用途不明品 2 点 (761・762) がある。

773・775は正面観が方形、側面観が背面側に下傾する矩形の頭部をもつもので、尖端を失っている。現存長は、773が 5.1cm、774が 5.0cm である。断面は 773 が ほぼ正方形、774 が 横長の長方形である。761 は 鉤形の板状品で、長さ 5.1cm、幅 0.5~1.45cm、厚さ 0.4~0.6cm である。断面は 横長の長方形である。762 は 三角形の用途不明品で、現存規模は 2.7cm × 2.0cm、厚さ 0.2cm である。

(2) B 区③層出土遺物 (第60図612~615、第65図732、図版24)

B 区の③層 (暗灰色砂質土) は 厚さ 40~50cm と 安定しているが、遺物の出土量は多くない。図示したものは 5 点で、土師質土器・小皿 (612)、皿 (613)、青磁・碗 (614)、灰釉陶器・椀 (615)、棒状土錐 (732) 各 1 点である。

612・613 は 土師質土器で、612 は 小皿である。口径 7.9cm、器高 1.4cm で、低平度は 0.18 と 低い。やや内湾気味に延びる体部で、類型は C c III である。調整は、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデで、内底面には一定方向のナデつけ、外底面には 板目痕が顕著に残る。色調は 淡黄褐色で、焼成は 非常に 良好である。613 は 口径 13.0cm、器高 3.1cm、低平度 0.24 の 皿である。底部から直線的に外上方に延びて 口縁部で 短く 外反する。類型は D a III で、色調は 淡黄褐色を呈する。調整は、底部回転糸切り離し痕の上に 顕著な 板目痕が 残る。体部内外面は やや粗い 回転ナデを、内底面には 一定方向の ナデつけを 施す。

614 は 青磁・碗の小破片である。口径 16.5cm で、体部外面に 片刃彫りによる 鑄蓮弁文を配す。体部は 直線的に 延び、口縁端部を 尖り 気味に 納める。素地灰白色、施釉部分 淡青色である。

615 は 灰釉陶器・椀である。口径 14.0cm、器高 6.55cm、高台径 6.4cm の 平椀で、低い貼付高台をもつ。高台の断面は 横長の長方形で、高台及び接合部周辺を 橫ナデしている。体部は 底部から やや内湾気味に 外上方に 延び、尖り 気味に 口縁端部を 納める。高台内中央には 糸切り離し痕(静止か)が 残る。内面全体と 体部外面上位 2/3 が 施釉され、体部外面下位 1/3 から 高台にかけて 露胎である。色調は 施釉部分が 灰緑色、素地が 暗灰白色である。古瀬戸後期 I 期と思われる。

732 は 1/2程度が 残存する 棒状土錐で、現存規模は 長さ 4.3cm、幅 2.0~2.2cm、厚さ 1.5~1.7cm である。下端の表面を 少し 凹ませた部分に 径 6~7mm の 円孔を 穿つ (上→下)。横断面は 横長の 扁円形である。色調は 淡黄褐色~淡灰黒色である。

(3) C 区③層出土遺物 (第60・61図616~637、第68図782、第69図786、図版24)

C 区の③層は 褐色粘質土 (厚さ 20cm) で、土師質土器・小皿 7 点 (616~622)、杯 7 点 (623~629)、皿 4 点 (630~633)、椀 4 点 (634~637)、鉄製品・釘 1 点 (782)、嘉定通寶 1 点 (786) の 計 24 点が 出土している。

a. 土師質土器 (616~637) 小皿・杯・皿・椀がある。

616~622は小皿である（計7点）。口径7.3~8.3cm, 器高1.35~2.15cmである。低平度は0.17~0.27で、通有な0.26~0.27（I）と低平な0.17~0.21（III）に分かれる。形態的には、直線的な体部のA（3点）、内湾気味の体部のC（3点）、内湾→直線的に延びる体部のD（1点）がある。体部の傾きは、直立気味のbが1点存在するが、基本的には通常のa（3点）と水平気味のc（3点）が主体である。低平度の点では高い感じのものは皆無で、通有なIは2点に止まり、低い感じのIII（5点）が多い。類型別では分散的で、特定の類型には集中しない。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが基本で、板目痕を残すものが4点存在する。内底面に一定方向のナデつけを行うものが5点／7点=71.4%と多く、内底面に一定方向のナデつけ+体部外面下半に未調整部分を残すものは1点に止まる。色調は淡黄褐色（5点）が主体で、他に黄褐色・淡橙色のものが各1点ある。620は焼成が非常に良好である。

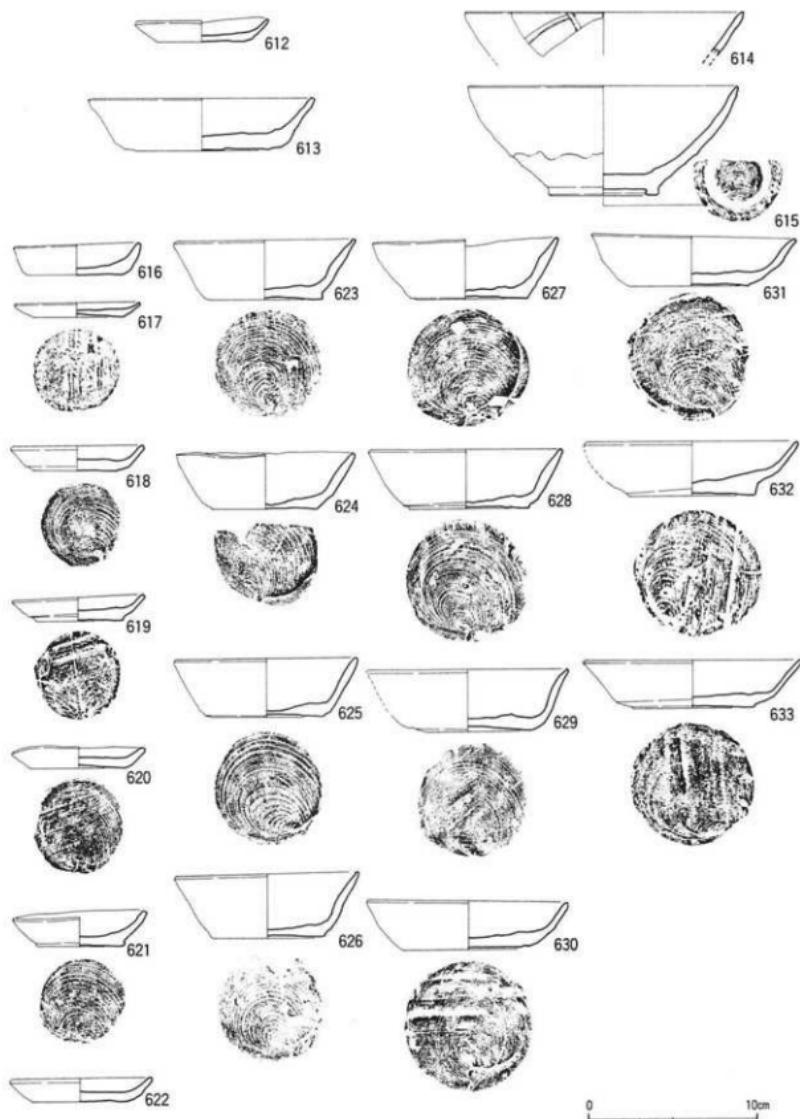
623~629は杯である（計7点）。口径10.5~11.8cm, 器高3.3~3.9cmで、口径10.5~10.9cm, 器高3.5~3.7cmが中心である。低平度は0.31~0.36で、いずれも通有なIである。体部の形状としては、直線的なA（5点、いずれもA a I）と内湾→外反のD（2点、いずれもD a I）のみで、外反するB類や内湾気味のC類は皆無である。A類のものは内面体部中位に稜をもち、この部分から窄まり口縁端部を尖り気味に納め、外側が直線的になるものが目立つ（4点）。

調整の点では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが基本である。内底面全体に回転ナデを行う例が多く、629のみ内底面中央に一定方向のナデつけを行っている。A類の中には内底面中央が強く凹むもの2点がみられる。板目痕が残るものは2点存在する。色調は淡黄褐色（3点）・淡橙色（2点）のほかに橙色・暗橙色がある。624・629の2点は焼成が非常に良好である。

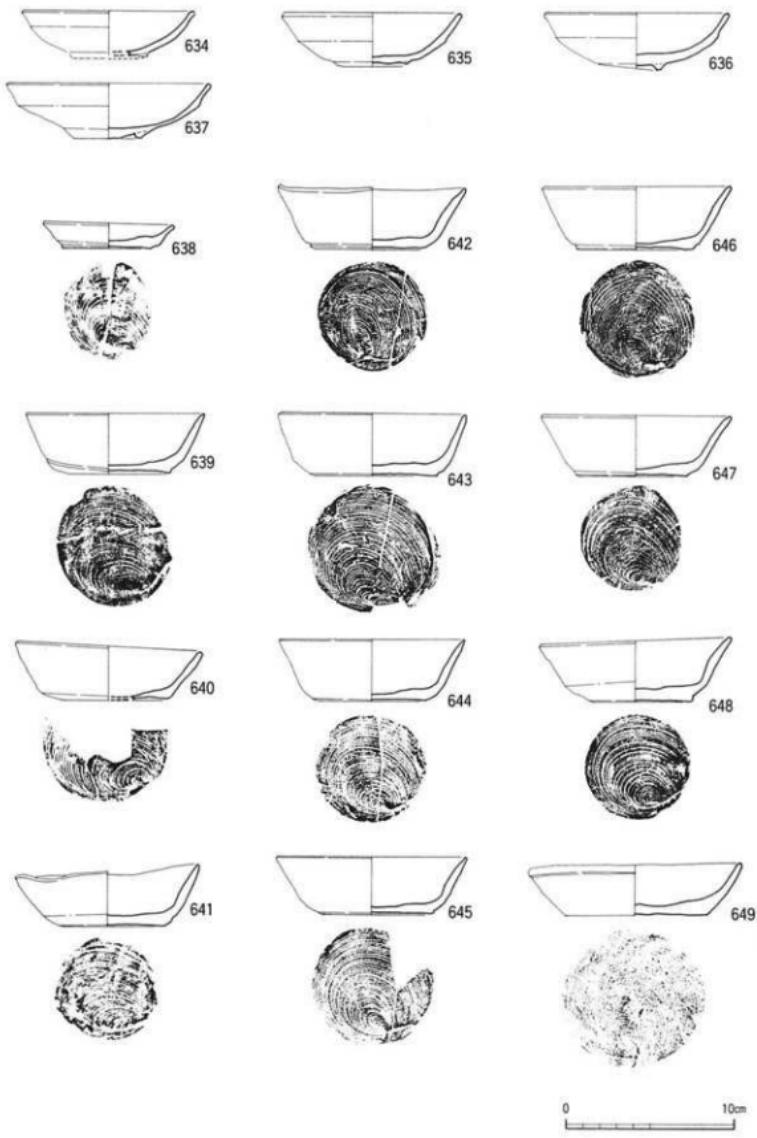
630~633は皿である（計4点）。口径11.8~12.6cm, 器高2.9~3.2cmで、低平度は0.23~0.26である。形態的には、体部中位で屈曲気味に内湾して直線的に延びるC類（2点、いずれもC c III）と同じく内湾気味に屈曲した後外反気味に延びるD類（2点、D c I・D c III）のみで、直線的なA類や外反するB類は皆無である。全体にやや低平な器形である。C・D類とも体部下半は良く似た器形で、631~633の底部はやや縦高台状に突出気味である。

調整は、基本的には底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。632は内面全体に丁寧なナデを行う。633の内底面の中央には一定方向のナデつけがみられる。板目痕が3点でみられる。631の内底面には黒褐色の付着物がこびり着いていた。色調はすべて淡黄褐色である。

634~637は椀である（計4点）。口径10.2~12.0cm, 器高3.2~4.0cmである。低平度は0.31~0.33である。いずれも高台をもつ浅い椀形の器形で、体部外面中位付近に比較的明瞭な稜をもつ。平坦な底部に幅7~12mm、厚さ1.5~3.5mmの細く扁平な粘土紐を貼り付けて輪状高台を作り出している。高台径4.1~4.2cm、高さ3~5mmと低く、断面は三角形ないしは逆台形状を呈する。634は



第60図 B・C区③層出土土器実測図 (1:3)



第61図 C・D区③層出土土器実測図 (1:3)

高台が剥がれた痕跡が明瞭で、635はかなり雑なつくりの高台である。636・637は比較的丁寧に高台を貼り付けている。高台の表面及び外側の接合面は丁寧にナデ調整しているが、内側の接合面は637に顕著なように殆ど調整は加えておらず、明瞭に接合面が窺える。634～636は比較的平坦な外底面に高台を貼り付けているが、637は丸味の強い外底面に高台を貼り付けており、外底面中央が接地する。体部外面上半は強い横ナデにより凹み、体部中位に稜を形成するが、634・635の稜はあまり明瞭ではない。636・637はこの稜より上方の器壁が薄くなっている。

調整は、内面が全体に丁寧なナデ、外面の上半は横ナデ、稜より下方は指頭によるナデ調整である。636の外底面には一定方向のナデつけが、また637の外底面中央にはヘラ切り状の痕跡と板目痕が看取される。色調は淡黄褐色が主体で、焼成が非常に良好な635は淡橙色～淡黄褐色である。634・636は体部下半の胎土が灰黒色で、焼成がやや不良である。胎土は全体に他の器種に近く、いずれも在地産と考えられる。

b. 鉄製品 (782) 釘1点がある。

782は上半と尖端部を失った釘片で、現存長2.5cm、幅・厚さ0.4cmである。断面は方形である。

c. 古銭 (786) 嘉定通寶1点がある。

嘉定通寶は中国・南宋の嘉定元(1208)年初鑄で、銭径2.4cmである。背面上方には「元」銘がみられる。

(4) D区③層出土遺物 (第61図638～649、第66図737・741・742、第68図785)

D区の③層は暗灰色砂質土(厚さ20～35cm)で、土師質土器・小皿1点(638)、杯10点(639～648)、皿1点(649)、丸瓦1点(737)、平瓦2点(741・742)、鉄製品・釘1点(785)の計16点が出土している。

a. 土師質土器 (638～649) 小皿・杯・皿が出土している。椀はない。

638は唯一の小皿である。口径7.7cm、器高1.6cm、低平度0.21で、類型はD c Ⅲである。中央がやや強く凹む比較的分厚い底部から緩やかに屈曲して外上方に伸び短く外反する薄手の体部である。調整は、底部回転糸切り離し後、縫目状の板目痕を残す。内底面中央に一定方向のナデつけ、体部内外面回転ナデ、外面体部下端に未調整部分が残る。色調は黄褐色である。

639～648は杯である(計10点)。口径10.55～11.15cm、器高3.45～3.85cm、低平度0.31～0.35である。体部の形状では、内湾→外反のD類が半数を占め、直線的な体部のA類が3点、内湾気味の体部をもつC類が2点で、外反気味の体部をもつB類は皆無である。体部の傾きでは通常のaが9点と大半を占める。低平度はすべて通有のI類である。類型的には、A a I(3点)をはじめ、C a I・C b I・D a I各1点がある。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデで、板目痕を残すものはない。内底面

のみ未調整のものが4点で、類型別ではD a I（3点）の頻度が高い。内底面及び外面体部下端が未調整のものは2点である。640は内底面に一定方向のナデつけを行っている。色調は、淡橙色（7点、D a I・4点ほか）が大半を占め、その多くは焼成が非常に良好なものである（643～647、646のみ橙色）。

649は口径12.5cm、器高3.1cm、低平度0.25の皿である。平底の底部から内湾気味に外上方に延びるC a IIIの類型で、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。内底面は未調整である。淡橙色を呈し、焼成は非常に良好である。

b. 瓦（737・741・742） 丸瓦1点（737）と平瓦2点（741・742）がある。

737は丸瓦の筒部から玉縁にかけての小破片である。側端面を残し、凹面には布目状の痕跡がみられる。741・742は平瓦の小破片である。いずれも側端面を残し、凹面に布目痕、凸面に斜格子目の叩きを行う。742は端面に向かって薄くなり、凹面・凸面が曲線を描かず直線的であり、平瓦以外の可能性もある。

c. 鉄製品（785） 釘1点がある。

785は現存長3.85cmの釘で、断面方形である。上半と尖端部を失っている。

7. 調査区出土の遺物（第62～64図650～719、第65図727・728・731、第66図745・747、第68図759・760・763、第70図788～790、図版24・26）

ここでは遺構・包含層・③層以外の調査区内から出土した遺物及び出土遺構や出土位置・地点を特定できない遺物を一括して記述する。

総点数81点で、その内訳は、土師質土器・小皿25点(650～674)、杯15点(675～689)、皿6点(691～696)、椀1点(690)、青磁・皿1点(711)、碗5点(712～716)、白磁・碗1点(717)、近世陶器・皿1点(718)、椀1点(719)、土師器・甕2点(697・698)、須恵器・杯蓋2点(699・700)、杯身1点(701)、杯5点(702～705・707)、椀1点(706)、皿2点(709・710)、高杯1点(708)、棒状土錐3点(727・728・731)、平瓦2点(745・747)、鉄製品・刀子1点(759)、用途不明品2点(760・763)、円板状木製品1点(788)、羽子板状木製品1点(789)、柄1点(790)である。

①土器類

a. 土師質土器(650～696) 計47点で、小皿・杯・皿・椀がある。小皿と杯が中心で、全体の8割以上を占める。

650～674は小皿である(計25点)。口径6.3～8.7cm、器高1.1～2.4cmで、口径7.0～7.8cmに比較的集まる。器高は散在的で、1.9～2.0cmが比較的多い。低平度は0.13～0.37で、0.16～0.26に比較的集中する。形態的には、体部の形状では内湾気味のC類(14点)が過半数を占め、外反気味のB類(5点)、直線的なA類(4点)、内湾→外反のD類(2点)となる。体部の傾きでは通常のa(13点)や開き気味のc(9点)が多く、直立気味のbは3点と少ない。低平度では通有なI(0.23～0.33)と低平なIII(0.22以下)が各12点と大半を占め、高い感じのII(1点)は殆どみられない。類型別では、Ca I(5点)・Cc III(4点)が比較的多く、内湾気味で低平度が通有か低平な器形が主体を占める。

調整面では、基本的には底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。底部ヘラ切りのものが3点(664・667・674)存在する。類型的にはBa I・Ba III・Bc IIIといずれも外反気味の体部をもつB類である。板目痕は11点でみられ、庭目状の板目痕がCc IIIの2点でみられる。板目痕はCa I(3点/5点)、Cc III(3点/4点)で点数・頻度ともに高い。未調整部分を残すもの(7点/25点=28.0%)は、①内底面のみに未調整部分が残るもの=3点、②体部外面下半のみに未調整部分を残すもの=3点、③両方に未調整部分を残すもの=1点である。類型的には分散的である。内底面に一定方向のナデつけを行うもの(13点/25点=52.0%)は出現頻度が高い。①内底面に一定方向のナデつけのみを行うもの=6点(Ac III・Ca Iほか)、②内底面の一定方向のナデつけ+体部外面下半の未調整=7点(Cc IIIほか)で、①がA類との結びつきが強く、②ではCc・Ca類との関わりがみられる。

色調は淡黄褐色(18点)が大半を占め、ほかに橙褐色・黄褐色・橙色・黄白色のものがみられる。一部を除いて特定の類型と色調の関わりがみられる。即ち、Aa I・Ac III・Ba I・Bc

III・C a III・C c I・C c III・D a Iはいずれも淡黄褐色、A a IIIは橙色、B a IIIが黄白色、B b IIが橙褐色、C b Iが黄褐色・橙褐色である。653・655・657・661の4点は焼成が非常に良好である。

675～689は杯である（計15点）。口径10.2～12.1cm、器高3.15～4.2cmで、主体は口径10.8～11.3cm、器高3.6～3.8cmである。低平度は0.28～0.39で、0.30～0.35に中心がある。形態的には、体部の形状は体部が直線的に延びるA類（11点）が多く、ほかに内湾→外反のD類（4点）がある。A類の多くは体部内面の中位付近に稜をもち、それより下位の器壁が直立気味で、そこからすばまりながら口縁に移行し、口縁端部をやや尖り気味に納める器形である。体部内面の同様な特徴はD類でもみられる。体部の傾きでは通常のa（11点）が大半で、c（3点）、b（1点）と続く。低平度（I；0.31～0.36、II；0.37以上、III；0.30以下）では、通有なI（11点）が多く、III（3点）、II（1点）と続く。類型別では、A a I（7点／15点＝46.7%）が多く、ほかもA・D類に限られる。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが基本である。底部ヘラ切りはみられない。板目痕はA a Iの2点にみられる。未調整・一定方向のナデつけは、内底面のみに未調整部分が残るもののが5点存在する。内底面と体部外面下半に未調整部分が残るものと内底面に一定方向のナデつけを行うものは各1点（いずれもA a I）存在する。

色調は淡黄褐色のものが5点（A a I・4点ほか）が多いが、黄褐色（3点）、淡橙色（3点）、淡橙褐色（2点）、橙色・淡褐色各1点と全体的にばらつきが大きい。焼成が非常に良好なもののが1点存在する（684）。

691～696は皿である（計6点）。口径12.3～20.5cm、器高2.8～3.5cm、低平度0.21～0.27である。691～694と695・696の間には差異がみられる。前者は本遺跡に通有なもので、口径12.3～13.3cm、器高2.8～3.5cmである。形態的には、体部が直線的に延びる692（A a III）・693（A c I）、内湾気味に延びる694（C c III）、内湾→外反気味の691（D a III）がある。調整は、いずれも底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデで、693・694は底部切り離し後に板目痕を残している。691は内底面と体部外面下半に未調整部分を残し、694は内底面に一定方向のナデつけを行っている。色調は、691が淡黄褐色、692が黄褐色～橙褐色、693が橙褐色、694が淡橙色である。

695・696はこれらと形態的に異なり、丸味を帯びた底部から外上方に立ち上がり、口縁近くで緩く外反して、水平に近く窄まりながら延びて口縁端部をやや尖り気味に納める。696は内面口縁端部直下が緩く凹む。いずれも小破片で、法量の復元値には誤差が考えられるが、695が口径17.1cm、696は口径20.5cmである。調整面では、体部内面から外面上半にかけて細かい横ナデ、体部外面下半には指頭によるナデを行う。胎土はいずれも比較的精良、色調淡黄褐色で、696の内面下半は大きく灰黒色を呈している。この695・696は京都系の白色土器皿の大型品と考えられる。696の内面にはごく部分的に暗赤褐色の部分があり、赤色顔料を塗布したものかと思われる。

690は口径9.2cm、器高2.5cmの無高台の椀である。底部を失っているので明確ではないが、底部は比較的平坦ではないかと考えられる。体部は底部から内湾気味に外上方に立ち上がる。低平度は0.27と低平である。調整は、内面の口縁部はやや雑な横方向のナデ、体部は丁寧なナデで、外面の体部上半がナデ、下半が指頭によるナデと思われる。色調は黄褐色である。

b. 土師器 (697・698) 壺片 2点がある。

697は口径13.65cmの壺で、緩くすぼまる頸部で強く水平に近く屈曲し、外上方に短く延びた口縁部の端部を上方に僅かに拡張している。調整は、内面の体部が横方向及び斜め方向の板ナデ状、口縁部～頸部は横ナデ、口縁部端面に2条の細い凹線、外面の口縁部は横ナデ、体部は器壁の剥落が著しいが、縦位のハケ目（幅広と幅狭のものの2単位あり）を施している。色調は、内面黒褐色、外面・胎土は暗赤褐色である。698は口径17.8cmで、緩く縮まった頸部から外上方にややすぼまりながら延びて端部を平坦に納める。調整は、内面の体部が縦位ヘラケズリ、頸部は斜位ハケ目（4条/cm程度）、口縁部は横位ハケ目（6条/cm程度）、口縁部端面には凹線1条を、外面の口縁部は未調整、体部は縦位ハケ目（5条/cm程度）をそれぞれ施している。色調は、内面暗赤褐色、外面・胎土は暗茶褐色である。

c. 須恵器 (699～710) 計12点で、杯蓋・杯身・杯・椀・高杯・皿がある。

699・700は杯蓋である。699は口径10.2cmの丸味の強い杯蓋で、受部をもつ。内面から受部外面にかけて回転ナデ、体部外面は未調整かと考えられる。700は口径17.8cmの杯蓋で、平坦な天井部から幾分外反気味に外下方に下る体部の端部をほぼ直角に屈曲させてごく短い口縁を垂下させる。口縁の外面は垂直な面を形成し、端部は丸く納める。調整は、天井部は不明だが、他は内外面ともに回転ナデである。701は受部をもつ杯身で、口径10.25cm、器高2.95cmである。ほぼ平坦な底部から内湾気味に外上方に立ち上がり、やや外反させて水平気味の受部のやや内側に内傾する断面三角形の立ち上がり部を形成する。外底面は回転ヘラ切り、口縁部・受部の周辺のみ回転ナデを施し、そのほかは未調整である。立ち上がり部の内面側体部との接合部は明瞭である。702・703は平坦な底部から外上方に直線的に延びた端部を若干内方に屈曲させて丸く納める同形態の杯で、口径13.15～13.7cm、器高2.9～3.1cmである。底部回転ヘラ切りで、703は雑なナデを施す。体部内外面は回転ナデである。704も杯だが、体部がより直立気味で、口縁端部は外反せず、尖り気味に丸く納める。底部は回転ヘラ切り未調整、体部内外面回転ナデで、内底面中央に不定方向のナデを行う。705は輪状高台をもつ杯で、外底面の縁のやや内側に断面方形で直立する高台を貼り付けている。高台の端面の内方には浅い凹線を施す。体部はやや外反しながら開き気味に直立するが、口縁部を失っている。調整は、外底面は回転ヘラ切り、体部内外面は回転ナデ、内底面は未調整である。706は平底の小さな底部から強く内湾しながら外上方に立ち上がる椀で、口縁部を失っている。調整は、底部回転ヘラ切り後ナデつけ、体部内外面は回転ナデを施す。707は口径7.7cm、器高3.85cmの小型の杯で、平底の底部から外上方に体部が直線的に延び、口縁

端部を丸く納める。調整は、底部回転ヘラ切り、体部内外面は回転ナデである。708は高杯の杯部で、丸味の強い体部が直立し、口縁端部を丸く納める。口径14.2cmで、口縁外面は強い回転ナデで凹む。外面下端が回転ナデ、その上位に幅狭の回転ヘラケズリ、そして体部内外面は全面的に回転ナデを施している。709・710は皿で、709は口径9.0cm、器高2.0cmである。丸味を帯びた底部から開き気味に外上方に延び、端部を丸く納める。口縁部外面は回転ナデ、体部内面は横方向のナデ、体部外面は指頭によるナデ調整である。色調は器表が灰黒色、胎土は淡灰色で硬質の瓦器状を呈している。710は口径12.0cmで、丸味の強い底部からやや内湾気味に外上方に延びて口縁端部を丸く納める。調整は、内面はミガキ状の丁寧なナデ、口縁端部横ナデ、体部外面は未調整、外底面は指頭によるナデ調整を行っている。色調は淡灰色～淡灰黄色である。

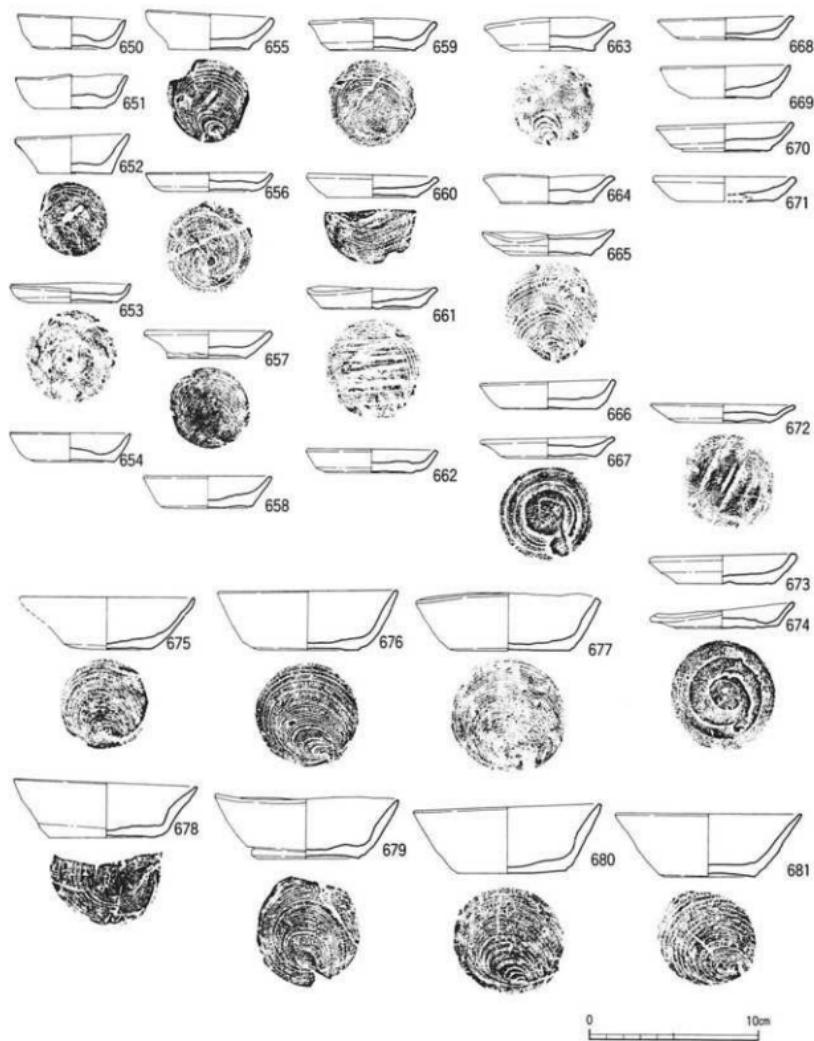
d. 輸入磁器 計7点で、青磁（皿・碗）、白磁（碗）がある。

711～716は青磁である。711は同安窯系の皿で、平底の底部から直線的に延びた体部中位で屈曲して外反気味に立ち上がり口縁部に統く。底部回転ヘラ切り、外面の体部下端回転ヘラケズリで、体部内外面に薄く施釉している。外底面は無釉、見込みには片刃彫りによるS字文と周囲に櫛歯状工具の刺突による横M形の雷光文を配している。色調は、素地が灰色、施釉部分は淡灰緑色である。底径4.8cmである。712～716は龍泉窯系の碗である。712～715は体部外面に片刃彫りによる蓮弁文を配する。715は疊付がやや内傾する断面方形の浅い削り出し高台を有する。高台疊付の外縁は面取りされ、施釉はこの辺りまで行われている。712・714は浅い碗で、713は深い。716は体部内面に2重沈線による区画の中に飛雲文を配する割花碗である。712～714・716の口径は13.1～16.0cmである。色調は、施釉部分は712が淡青色、713～715が暗灰緑色、716が淡灰緑色で、素地は712・714・716が灰白色、713が暗灰色、715が暗灰黄色である。

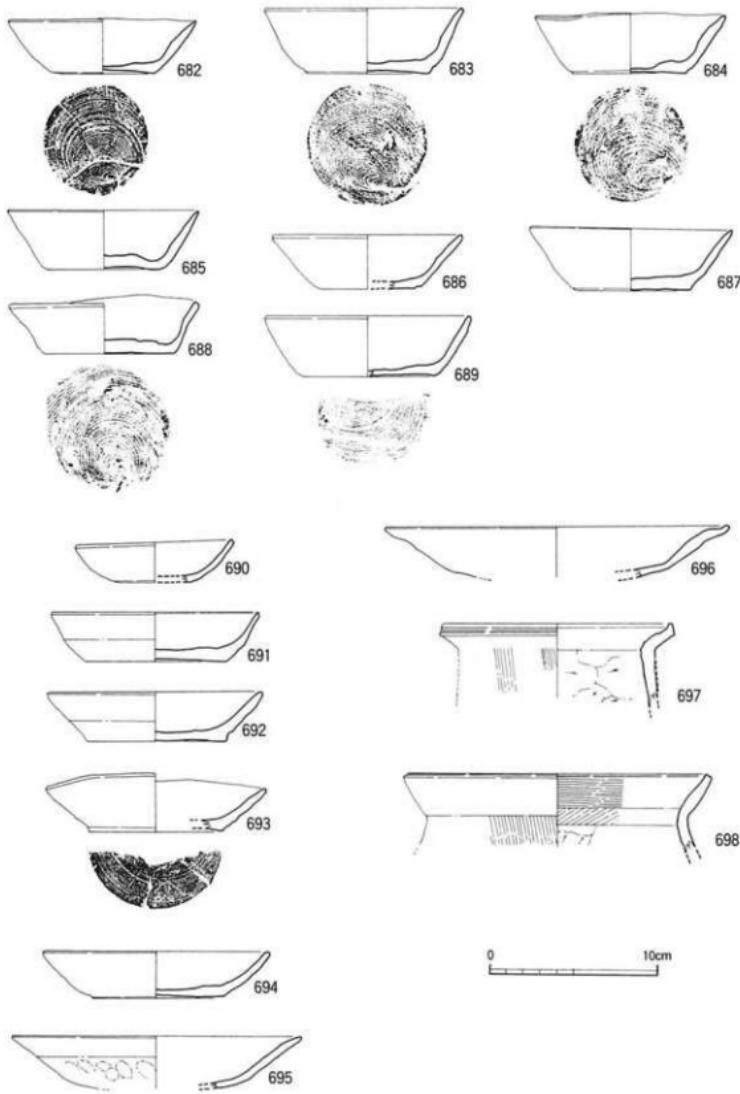
717は口縁が短く水平に屈曲する白磁・碗で、高台内の外底面に高台に寄せて墨書がなされている。解読できないが、「進」「達」など部首が「しんにゅう」のものかとみられる。直立する深い削り出し高台をもち、内面には体部と丸味の強い内底面の境に削り出しによる円圈を設けている。外面の体部下端には縱位のケズリが顕著に認められる。外面は体部の比較的の上方まで露胎で、内面にはごく薄く透明釉が施されている。高台径6.05cmである。色調は、素地が灰白色、施釉部分が明灰白色である。

e. 近世陶器 皿（718）・椀（719）各1点がある。

718は口径13.0cm、器高3.45cmの溝縁皿である。ごく浅い削り出し高台をもち、内底面には重ね積みの痕跡がみられる。内面全体から口縁外面にかけて白色の長石釉が施されている。外面の体部から高台にかけては露胎である。この露胎の外底面を中心に黒褐色のススが付着している。素地の色調は淡黄褐色である。719は口径14.1cmの椀で、外上方にやや内湾気味に延びた口縁部の外面を凹ませて端部を丸く納めている。内面から外面口縁部にかけて白化粧土を塗布した上から淡緑色の釉薬を施している。外面体部下半の露胎部分には回転ナデ、その下位には回転ヘラケズ



第62図 調査区内出土土器実測図（1）(1:3)

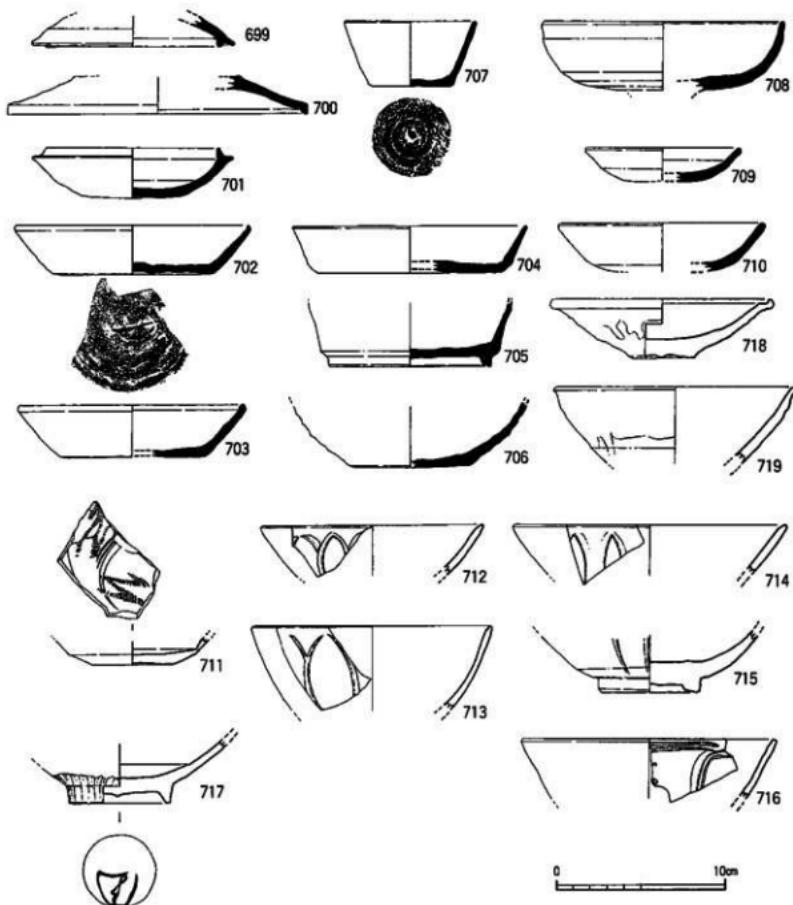


第63図 調査区内出土土器実測図（2）(1:3)

りが観察される。露胎部分の色調は淡黄褐色である。

②土製品（727・728・731） 棒状土錘 3 点がある。

727・728は棒状土錘の完形品である。細長い円柱状の両端をやや凹ませて円孔を穿ち、上端面の中央に浅い溝状の凹みがみられる。穿孔部分の断面形は扁円形、ほかはほぼ正円形である。727は長さ9.2cm、穿孔部分の径 1.6×1.9 cm、ほかの部分の径1.9~2.0cmで、孔径0.6~0.7cmである。



第64図 調査区内出土土器実測図（3）(1:3)

色調は淡橙色である。728は長さ8.8cm, 穿孔部分の径1.35cm×1.9cm, ほかの部分の径1.6cm, 孔径0.6cmで、727よりもやや小振りである。色調は淡黄褐色～橙色である。731はこれらと同一形態の約1/2の破片で、現存長6.5cm, 穿孔部分の径1.8cm×2.1cm, 孔径0.5～0.7cmで、色調は淡橙色～灰黒色を呈する。法量は727に近いが、全体に磨滅が著しい。

③瓦（745・747） 平瓦2点がある。

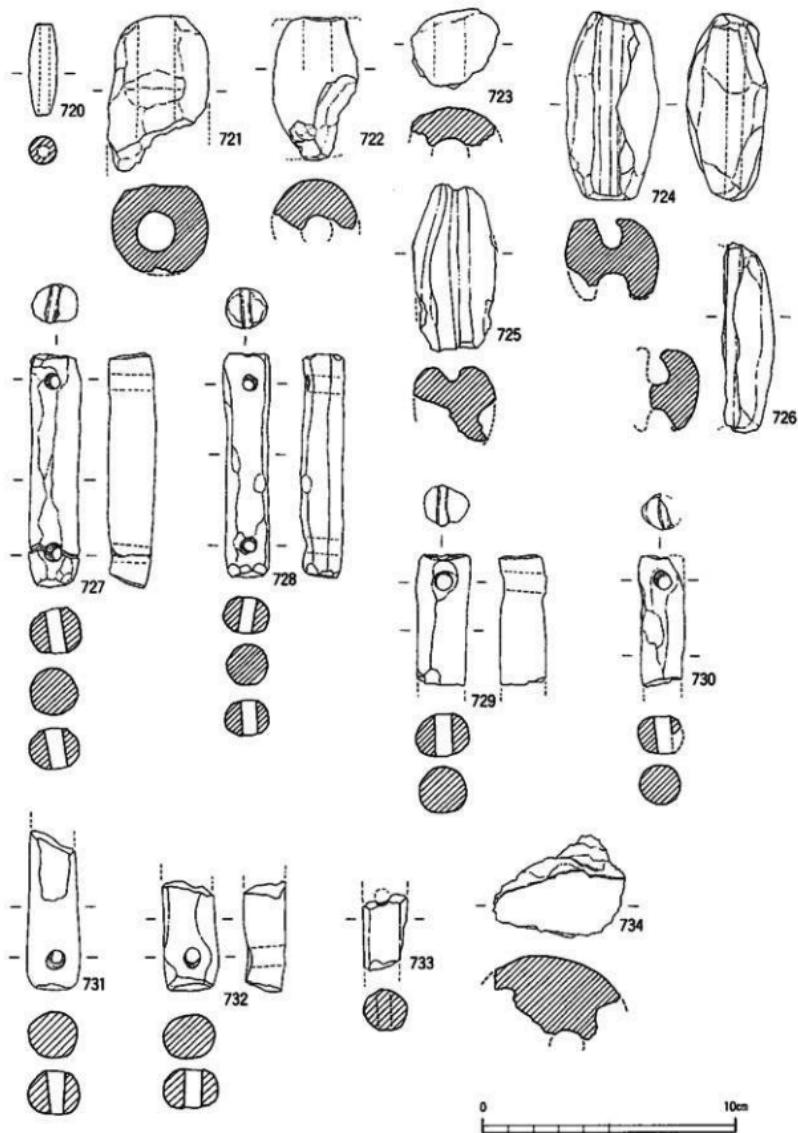
いずれも小破片で、745は凹面布目痕、凸面格子目叩きで、側端面には横方向の擦痕がみられる。747は凹面布目痕、凸面は凹凸が顕著で手づくね調整かとみられる。

④鉄製品（759・760・763） 刀子状鉄製品1点と用途不明品2点がある。

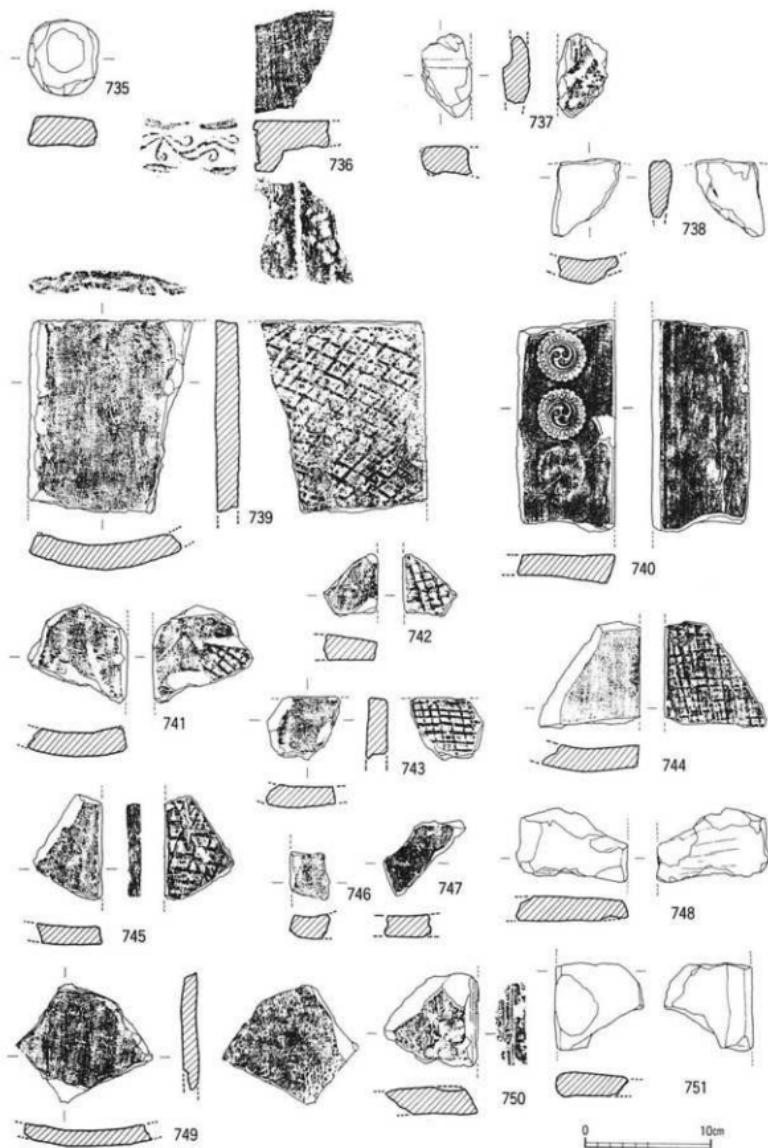
759は刀子状のもので、現存長5.3cm、幅0.5～1.3cm、厚さ（背部）0.3cmで、切先と茎部を失っている。760は径4.7cm×4.8cm、厚さ0.2～0.3cmの円板状の用途不明品である。763は太い釘状のものが曲がったものかと考えられる。上がほぼ方形の頭部、下が丸味の強い尖端と思われる。現存規模は、長さ4.1cm、幅2.4cm、厚さ（最大）1.45cmで、身部の断面はほぼ方形とみられる。

⑤木製品（788～790） 円板状木製品、羽子板状木製品、柄の3点がある。

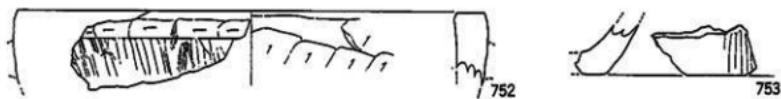
788は23.45cm×11.0cm、厚さ0.8～0.9cmの半円形の板状製品で、径23～24cm程度の円板状品であったと思われる。縁辺には表裏両面とも面取りがなされている。789は羽子板状製品で、現存規模は長さ26.6cm、幅2.1～6.7cm、厚さ0.5cmで、左側辺下半の表裏両面には面取りがなされている。上辺と下端に原状が窺われ、これらから少なくとも縁辺が曲線を描く板状品を転用したものとみられるものの、左側辺下半の面取りを除けば特に二次的な加工はみられない。左側辺上半と右側辺は割れ面を残す。左側辺上半近くには桜のものと思われる樹皮による縦じがみられ、この製品が元来は曲物の底板であったことを窺わせる。790は製品の柄の部分で本体部分は殆ど失われている。現存規模は、全長17.1cm、柄の長さ11.1cm、本体下端径3.4cm、柄根元径2.6cm、柄先端径3.4cmである。いずれも横断面形は不整円形である。本体部分も柄も表面を縱方向に削り丸味をもたせている。柄先端の端面は細かい面取りをしている。



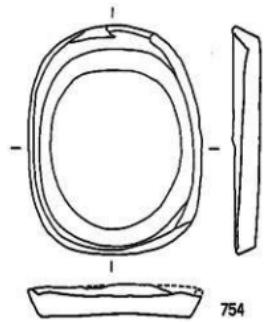
第65図 出土土製品実測図 (1:2)



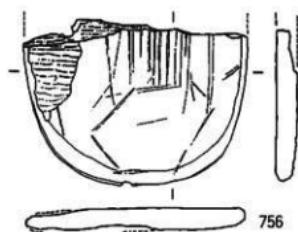
第66図 出土瓦実測図 (1:4)



0 10cm

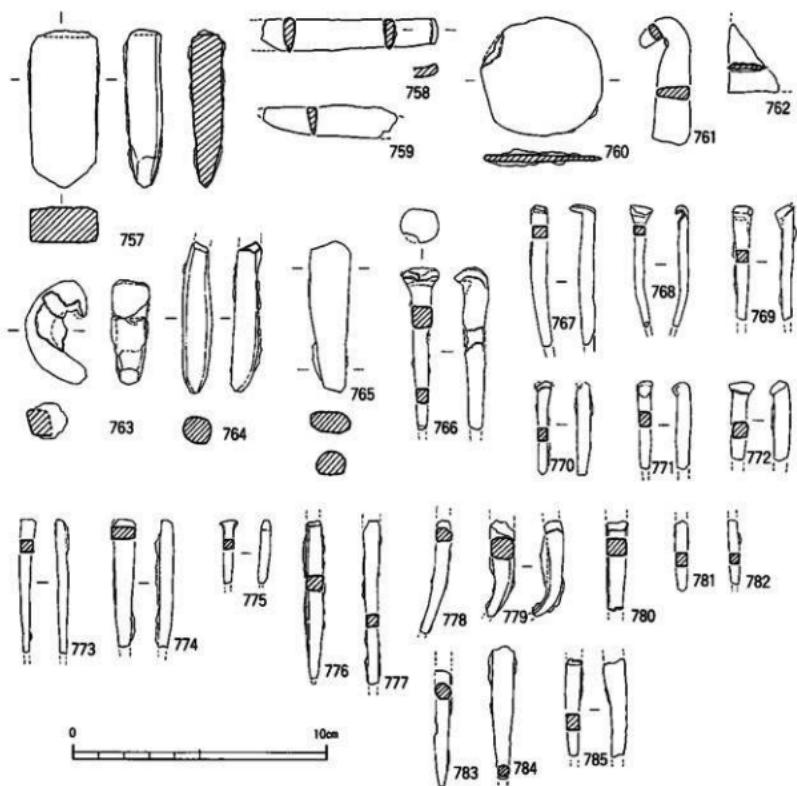


755

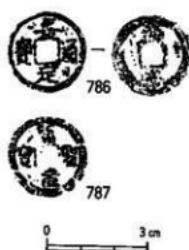


0 10cm

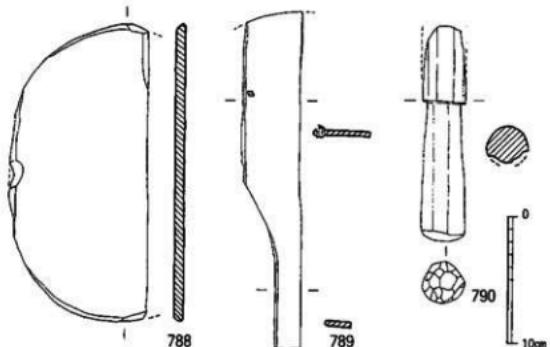
第67図 出土石製品実測図 (1:2, 1:3)



第68図 出土鉄製品実測図
(1:2)



第69図 出土古錢拓影 (2:3)



第70図 出土木製品実測図 (1:4)

第3表 造物一覧表 単位cm *①;○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②;○は通常の板目直し、△は縦目状の板目直し。

造物番号	品種①	品種②	品種③	型番	出上重量	口径	径高	底径	底平度	底直角①	板目直②
1	土師質土器	小瓶	A c B	S B I P 2	8.00	1.35	5.90	0.17	○	○	
2	土師質土器	小瓶	A c B	S B I P 4	8.40	1.50	5.40	0.18	?	○	
3	土師質土器	瓶	C c B	S B I P 5	12.75	2.80	7.30	0.22	○	-	
4	土師質土器	瓶	-	S B I P 7	8.60	-	-	-	-	-	
5	土師質土器	杯	C b B	S B 2 P 1	11.95	3.60	8.10	0.30	-	-	
6	土師質土器	瓶	-	S B 2 P 1	10.65	3.60	4.55	0.34	-	-	
7	土師質土器	瓶	-	S B 2 P 1	-	-	5.90	-	-	-	
8	土師質土器	小瓶	A a B	S B 3 P 11	7.05	1.20	5.03	0.17	○	△	
9	土師質土器	小瓶	A a B	S B 3 P 20	7.10	1.20	5.40	0.17	○	△	
10	土師質土器	小瓶	A a B	S B 3 P 20	7.65	1.40	6.10	0.18	?	-	
11	土師質土器	小瓶	C a B	S B 3 P 20	8.00	1.20	6.10	0.15	○	-	
12	土師質土器	小瓶	C b B	S B 3 P 13	8.35	1.15	5.40	0.14	○	-	
13	土師質土器	杯	A a B	S B 3 P 14	12.05	3.10	8.55	0.26	-	-	
14	土師質土器	杯	C a B	S B 3 P 12	12.05	3.30	8.70	0.27	○	-	
15	土師質土器	杯	A a B	S B 3 P 13	13.00	-	-	-	-	-	
16	土師質土器	瓶	A a B	S B 3 P 20	12.15	2.95	8.30	0.24	○	-	
17	土師質土器	瓶	A a B	S B 3 P 11	12.40	3.10	7.50	0.25	○	-	
18	瓦器	瓶	-	S B 3 P 12	14.55	3.40	3.25	0.23	-	-	
19	輸入磁器	青磁	碗(盤)	-	S B 3 P 12	-	-	4.80	-	-	
20	輸入磁器	白磁	盤	-	S B 3 P 17	14.45	-	-	-	-	
21	別窯質土器	瓶	-	S A 3 P 3	12.85	-	-	-	-	-	
22	輸入磁器	青磁	(瓶)	-	S A 4 P 3	-	-	-	-	-	
23	土師質土器	小瓶	A c B	A - P 2	8.75	1.20	6.00	0.14	-	-	
24	土師質土器	小瓶	C c B	A - P 3	7.30	1.10	5.20	0.15	○	△	
25	土師質土器	小瓶	A c B	A - P 3	7.40	1.30	5.40	0.18	○	○	
26	土師質土器	小瓶	A c B	A - P 3	8.10	1.10	6.00	0.14	○	○	
27	土師質土器	小瓶	B a B	A - P 8	7.45	1.50	5.30	0.20	○	-	
28	土師質土器	小瓶	D a B	A - P 10	7.65	1.35	5.30	0.18	○	-	
29	土師質土器	小瓶	C c B	A - P 10	8.10	1.45	6.35	0.18	差調節	-	
30	土師質土器	小瓶	C c B	A - P 10	9.25	1.15	8.30	0.12	-	-	
31	土師質土器	瓶	-	A - P 11	11.00	-	-	-	-	-	
32	土師質土器	瓶	A c B	A - P 12	7.35	0.95	4.95	0.13	○	△	
33	土師質土器	小瓶	D a B	A - P 14	7.20	1.70	5.60	0.24	○	-	
34	土師質土器	小瓶	A a B	S B 5 P 5	8.10	1.50	6.40	0.19	○	-	
35	土師質土器	小瓶	A a B	S B 5 P 1	8.60	1.80	7.25	0.21	○	-	
36	土師質土器	杯	C a B	S B 5 P 5	11.00	-	7.10	-	-	-	
37	土師質土器	瓶	-	S B 5 P 9	11.80	3.30	4.10	0.28	-	○	
38	土師質土器	小瓶	B c B	S B 7 P 11	8.10	1.20	6.00	0.15	○	-	
39	土師質土器	小瓶	C a B	S B 7 P 11	8.55	1.30	6.70	0.15	○	-	
40	輸入磁器	青磁	(瓶)(瓶)	-	S B 7 P 4	-	-	4.50	-	-	
41	土師質土器	小瓶	A c E	S B 9 P 1	7.40	1.15	5.30	0.16	○	○	
42	土師質土器	杯	B c I	S A 5 P 4	12.00	3.85	6.40	0.32	○	-	
43	土師質土器	瓶	-	S A 5 P 9	10.00	3.30	-	0.33	-	-	
44	土師質土器	瓶	-	S A 5 P 4	10.00	-	5.50	-	-	-	
45	土師質土器	小瓶	A c B	B - P 2	6.85	1.50	4.75	0.22	○	-	
46	土師質土器	小瓶	A a B	B - P 2	7.00	1.20	4.90	0.17	○	○	
47	土師質土器	小瓶	C c B	B - P 2	7.40	-	-	-	-	-	
48	土師質土器	小瓶	A c B	B - P 2	8.10	1.75	5.90	0.22	○	△	
49	土師質土器	瓶	D c B	B - P 2	11.20	2.05	7.85	0.18	-	-	
50	土師質土器	瓶	-	B - P 2	9.40	-	-	-	-	-	
51	瓦器	瓶	-	B - P 2	-	-	5.05	-	-	-	
52	土師質土器	小瓶	A a I	B - P 4	7.15	1.65	4.40	0.23	○	-	
53	土師質土器	小瓶	A a B	B - P 7	9.05	1.75	7.10	0.20	○	-	
54	土師質土器	瓶	A a B	B - P 7	11.60	2.90	7.10	0.25	○	-	
55	瓦器	小瓶	-	B - P 6	7.60	1.40	6.50	0.18	酒	-	
56	土師質土器	杯	A a I	B - P 12	10.70	3.75	6.80	0.35	○	-	
57	土師質土器	小瓶	C a B	S D 4	7.70	1.65	5.80	0.21	?	-	
58	土師質土器	杯	C a I	S D 5	8.70	3.05	6.10	0.35	○	-	
59	土師質土器	杯	C b B	S D 5	10.60	3.00	8.00	0.28	○	-	
60	土師質土器	小瓶	A a B	S D 6	7.50	1.45	6.00	0.19	○	-	
61	土師質土器	杯	C a B	S D 6	12.90	3.60	8.60	0.28	○	-	
62	土師質土器	小瓶	A a B	S X 1	5.40	0.85	4.40	0.16	○	-	
63	土師質土器	小瓶	C c B	S X 1	7.20	1.35	5.30	0.19	○	-	
64	土師質土器	小瓶	B a B	S X 1	7.20	1.30	5.80	0.18	△	-	
65	土師質土器	小瓶	D c B	S X 1	7.40	1.20	5.30	0.16	○	-	
66	土師質土器	小瓶	D c B	S X 1	8.00	1.40	6.00	0.18	○	○	
67	土師質土器	小瓶	C c B	S X 1	7.40	1.30	4.90	0.18	○	-	
68	土師質土器	小瓶	C c B	S X 1	7.80	1.30	5.70	0.17	○	-	
69	土師質土器	小瓶	C c B	S X 1	7.80	1.15	5.90	0.15	○	-	
70	土師質土器	小瓶	D a I	S X 1	8.40	2.15	6.50	0.26	○	-	
71	土師質土器	小瓶	C a I	S X 1	7.90	1.85	-	0.23	-	-	
72	土師質土器	小瓶	C a B	S X 1	8.60	1.65	7.00	0.19	○	-	
73	土師質土器	杯	C a I	S X 1	10.20	3.55	5.80	0.25	-	-	
74	土師質土器	杯	A a I	S X 1	11.20	3.75	6.60	0.33	○	-	
75	土師質土器	杯	C a B	S X 1	11.00	3.20	6.70	0.29	○	-	
76	土師質土器	杯	C c B	S X 1	13.10	3.60	7.70	0.27	○	○	
77	土師質土器	瓶	B a I	S X 1	9.80	2.60	7.30	0.27	○	-	
78	土師質土器	瓶	C a B	S X 1	11.85	-	9.40	-	-	-	
79	土師質土器	瓶	C a B	S X 1	11.70	2.65	9.20	0.23	△	-	

単位cm *①; ○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②; ○は通常の板目痕、△は縦目状の板目痕。

測定番号	基準①	基準②	基準③	類型	出土滅菌	口径	壁高	底径	底平面	底部*①	板目痕*②
80	土師質土器	瓶	D a I	SX I	12.40	3.20	8.80	0.26	○	○	
81	土師質土器	瓶	C c E	SX I	12.50	2.55	8.45	0.20	○	-	
82	土師質土器	瓶	-	SX I	9.40	3.90	4.80	0.41	-	-	
83	土師質土器	瓶	-	SX I	12.45	4.10	5.40	0.33	-	-	
84	土師質土器	瓶	-	SX I	33.20	-	-	-	-	-	
85	瓦器	瓶	-	SX I	14.20	-	-	-	-	-	
86	須恵質土器	瓶	-	SX I	14.20	5.80	6.40	0.41	△	-	
87	輸入磁器	青磁 瓶(底)	-	SX I	11.90	-	-	-	-	-	
88	輸入磁器	青磁(底)	-	SX I	-	-	5.00	-	-	-	
89	輸入磁器	青磁	-	SX I	-	-	4.50	-	-	-	
90	輸入磁器	青磁 瓶(底)	-	SX I	9.70	2.40	3.40	0.25	-	-	
91	輸入磁器	青磁 瓶(底)	-	SX I	10.35	1.65	4.10	0.16	?	-	
92	輸入磁器	青磁 合子蓋	-	SX I	-	-	-	-	-	-	
93	輸入磁器	白磁 碗	-	SX I	14.60	-	-	-	-	-	
94	輸入磁器	白磁 瓶	-	SX I	-	-	-	-	-	-	
95	輸入磁器	白磁 瓶	-	SX I	12.80	2.40	5.80	0.19	-	-	
96	輸入磁器	青白磁 瓶	-	SX I	-	-	6.60	-	-	-	
97	土師質土器	小瓶	A b E	SE I	7.40	1.30	6.70	0.18	○	-	
98	土師質土器	小瓶	A a E	SE I	7.70	1.00	6.50	0.13	○	-	
99	土師質土器	小瓶	D a I	SE I	7.50	1.80	5.00	0.24	○	-	
100	土師質土器	小瓶	D a E	SE I	8.50	1.70	6.60	0.20	○	-	
101	土師質土器	杯	-	SE I	-	-	6.60	-	○	-	
102	土師質土器	杯	-	SE I	-	-	5.60	-	○	-	
103	土師質土器	杯	A a I	SE I	11.00	3.90	7.20	0.35	○	-	
104	土師質土器	杯	A a I	SE I	11.30	3.90	7.05	0.35	○	-	
105	土師質土器	杯	A a I	SE I	11.10	3.90	7.20	0.35	○	-	
106	土師質土器	杯	A c E	SE I	14.30	4.20	8.50	0.29	○	-	
107	土師質土器	瓶	-	SE I	10.50	3.65	4.20	0.35	-	-	
108	土師質土器	瓶	A a I	SE I	11.10	3.10	6.90	0.28	?	-	
109	土師質土器	瓶	A a I	SE I	11.05	2.90	7.00	0.36	△	○	
110	土師質土器	瓶	A a E	SE I	16.90	2.75	6.65	0.25	?	-	
111	土師質土器	瓶	C e E	SE I	11.10	3.50	6.40	0.32	-	-	
112	土師質土器	瓶	-	SE I	15.30	4.10	8.30	0.27	-	-	
113	漆器陶形	瓶	-	SK I	11.90	2.90	3.90	0.24	-	-	
114	漆器陶形	瓶	-	SK I	12.10	3.20	3.95	0.26	-	-	
115	漆器陶形	瓶	-	SK I	13.05	3.00	4.00	0.23	-	-	
116	漆器陶形	瓶	-	SK I	-	-	4.70	-	-	-	
117	漆器陶形	瓶	-	SK I	12.10	3.80	3.25	0.31	-	-	
118	漆器陶形	瓶	-	SK I	10.80	-	-	-	-	-	
119	漆器陶形	瓶	-	SK I	10.40	7.00	4.40	0.67	-	-	
120	瓦	片九瓦	-	SK I	-	-	-	-	-	-	
121	瓦	片九瓦	-	SK I	-	-	-	-	-	-	
122	瓦	片九瓦	-	SK I	-	-	-	-	-	-	
123	鉄製品	用具不明品	-	SK I	-	-	-	-	-	-	
124	土師質土器	小瓶	C e E	SB11P3	7.75	1.20	6.20	0.15	○	-	
125	瓦器	瓶	-	SB11P3	15.70	-	-	-	-	-	
126	土師質土器	杯	D a E	SB11P7	10.30	3.80	7.10	0.37	○	-	
127	土師質土器	小瓶	C c E	SK 4	6.40	1.30	4.50	0.20	△	△	
128	土師質土器	小瓶	A a I	SK 4	7.60	2.00	5.30	0.26	○	-	
129	土師質土器	小瓶	A a I	SK 4	7.60	1.60	5.85	0.21	○	-	
130	土師質土器	杯	A a I	SK 4	11.80	3.90	7.20	0.31	○	-	
131	土師質土器	瓶	A c E	SK 4	12.20	2.60	7.50	0.21	?	○	
132	土師質土器	瓶	B c E	SK 4	15.10	2.55	9.10	0.17	?	○	
133	土師質土器	小瓶	C a E	SD 9	7.20	1.20	6.00	0.17	?	-	
134	土師質土器	小瓶	C c E	SD 9	7.75	1.20	5.95	0.15	○	-	
135	土師質土器	小瓶	C c E	SD 9	7.60	1.30	6.20	0.17	○	-	
136	土師質土器	小瓶	C a E	SD 9	8.10	1.60	6.45	0.22	○	-	
137	土師質土器	小瓶	C c E	SD 9	8.20	1.45	6.20	0.18	○	-	
138	土師質土器	小瓶	C a E	SD 9	8.65	1.70	6.80	0.20	○	-	
139	土師質土器	小瓶	A a E	SD 9	8.20	1.75	6.10	0.21	○	-	
140	土師質土器	小瓶	A a E	SD 9	8.20	1.75	6.60	0.21	○	△	
141	土師質土器	杯	C a E	SD 9	11.80	3.10	8.80	0.26	○	-	
142	土師質土器	杯	C a E	SD 9	11.85	3.30	7.65	0.28	○	-	
143	土師質土器	瓶	C a I	SD 9	11.30	2.90	7.70	0.26	○	-	
144	土師質土器	瓶	C c E	SD 9	13.00	3.10	8.20	0.24	○	-	
145	土師質土器	瓶	C c E	SD 9	13.60	3.25	8.00	0.24	-	-	
146	土師質土器	瓶	C c E	SD 9	12.90	3.10	6.75	0.24	○	-	
147	土師質土器	瓶	D a E	SD 9	12.90	3.25	9.50	0.25	○	?	
148	土師質土器	瓶	A c E	SD 9	13.40	-	7.70	-	-	-	
149	土師質土器	瓶	C c E	SD 9	12.70	2.85	7.50	0.22	○	○	
150	土師質土器	瓶	C a E	SD 9	14.25	2.90	10.10	0.30	○	-	
151	瓦器	瓶	-	SD 9	15.00	3.65	5.15	0.24	-	-	
152	輸入磁器	青磁 瓶(底)	-	SD 10	9.45	-	-	-	-	-	
153	瓦器	瓶	-	SD 10	13.90	3.40	3.00	0.24	-	-	
154	土師質土器	小瓶	A a E	SB13P11	-	-	6.00	-	○	-	
155	土師質土器	小瓶	A c E	SB13P11	9.70	1.60	5.30	0.19	○	-	
156	土師質土器	杯	C a I	S A S F 5	11.20	3.70	6.30	0.23	○	-	
157	土師質土器	小瓶	A a I	SD 11	7.60	2.00	5.10	0.26	○	-	
158	土師質土器	小瓶	D a E	SD 11	8.30	1.65	5.90	0.22	○	-	

単位cm *①;○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②;○は通常の板目痕、△は筵目状の板目痕。

直物番号	記種①	記種②	記種③	類型	出土直道数	口径	路高	底径	底平度	新規④	規則直道⑤
159	上縁貫土器	—	杯	A ± 0	S D II	10.90	3.30	7.15	0.30	○	—
160	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	11.00	3.50	7.50	0.32	○	△
161	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.30	4.00	7.80	0.35	○	—
162	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.30	3.70	6.80	0.33	○	—
163	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.40	3.90	6.70	0.34	○	—
164	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.50	3.85	7.70	0.33	○	—
165	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	11.60	3.60	7.00	0.31	○	—
166	上縁貫土器	—	杯	D ± 0	S D II	11.70	3.50	7.10	0.30	○	—
167	上縁貫土器	—	碗	D ± 0	S D II	9.65	2.50	3.50	0.26	—	—
168	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.40	3.00	3.60	0.29	—	—
169	上縁貫土器	小皿	—	D ± 0	S D II	7.50	1.60	4.80	0.21	○	—
170	上縁貫土器	小皿	—	A ± 1	S D II	7.40	1.95	5.40	0.26	○	—
171	上縁貫土器	小皿	—	A ± 0	S D II	7.80	1.65	5.30	0.21	—	—
172	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	10.50	3.75	5.70	0.36	○	—
173	上縁貫土器	—	杯	A ± 0	S D II	10.60	4.00	6.70	0.38	○	—
174	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	10.70	3.90	6.90	0.36	○	—
175	上縁貫土器	—	杯	A ± 0	S D II	10.90	3.30	7.00	0.30	○	—
176	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	10.80	3.60	7.00	0.33	○	—
177	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	10.80	3.75	7.20	0.35	○	—
178	上縁貫土器	—	杯	C ± 1	S D II	11.00	3.40	7.10	0.31	○	—
179	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	11.00	3.70	6.60	0.34	—	—
180	上縁貫土器	—	杯	C ± 1	S D II	11.00	3.70	6.30	0.34	○	?
181	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	11.20	3.90	6.80	0.35	○	—
182	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.10	3.75	7.00	0.34	○	—
183	上縁貫土器	—	杯	C ± 1	S D II	11.10	3.60	7.10	0.32	○	—
184	上縁貫土器	—	杯	C ± 1	S D II	11.20	3.75	7.20	0.33	○	—
185	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.20	3.80	6.80	0.34	○	—
186	上縁貫土器	—	杯	C ± 1	S D II	11.20	3.70	7.80	0.33	○	—
187	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.30	3.90	7.40	0.35	○	—
188	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.20	3.80	6.20	0.34	○	—
189	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.40	3.70	8.40	0.32	○	—
190	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.40	3.60	7.20	0.32	○	?
191	上縁貫土器	—	杯	—	S D II	10.20	3.60	3.20	0.35	—	—
192	上縁貫土器	—	杯	—	S D II	10.10	3.30	4.60	0.33	—	—
193	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.20	2.95	4.20	0.29	—	—
194	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.10	3.20	3.40	0.32	—	—
195	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.30	—	—	—	—	—
196	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.30	3.30	3.30	0.32	—	—
197	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.20	4.00	4.20	0.29	—	—
198	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.50	3.35	4.00	0.32	—	—
199	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	10.40	3.40	6.70	0.33	○	—
200	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	10.60	3.70	6.00	0.34	○	—
201	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	10.90	3.70	6.40	0.34	○	—
202	上縁貫土器	—	杯	D ± 0	S D II	10.70	4.10	6.80	0.36	○	—
203	上縁貫土器	—	杯	D ± 1	S D II	11.60	3.80	6.20	0.33	○	—
204	上縁貫土器	—	杯	B ± 1	S D II	11.00	3.80	7.40	0.35	○	—
205	上縁貫土器	—	杯	C ± 1	S D II	11.20	3.70	6.30	0.33	○	—
206	上縁貫土器	—	杯	A ± 1	S D II	11.40	3.70	6.90	0.32	○	○
207	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	9.80	2.90	3.50	0.30	—	—
208	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.40	2.90	3.00	0.28	—	—
209	上縁貫土器	—	碗	—	S D II	10.20	3.30	3.10	0.32	—	—
210	上縁貫土器	小皿	—	A b 1	A - 包合等	6.10	1.50	6.00	0.25	○	—
211	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.15	1.45	4.30	0.24	○	—
212	上縁貫土器	小皿	—	A b 0	A - 包合等	6.20	2.40	4.00	0.39	○	—
213	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.40	2.00	5.00	0.31	○	—
214	上縁貫土器	小皿	—	D a 1	A - 包合等	6.45	2.00	4.30	0.31	○	—
215	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.50	1.90	5.30	0.29	○	—
216	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.50	1.90	5.70	0.29	○	—
217	上縁貫土器	小皿	—	D a 1	A - 包合等	6.50	1.70	4.70	0.26	○	—
218	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.50	1.90	4.50	0.29	○	—
219	上縁貫土器	小皿	—	D a 1	A - 包合等	6.50	2.35	4.30	0.36	○	—
220	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.50	2.10	4.00	0.32	○	—
221	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.60	1.70	5.50	0.26	○	—
222	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.60	1.90	4.50	0.29	○	—
223	上縁貫土器	小皿	—	A b 1	A - 包合等	6.60	3.10	3.90	0.47	○	—
224	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.70	1.60	5.30	0.24	○	—
225	上縁貫土器	小皿	—	A a 0	A - 包合等	6.70	2.50	4.80	0.37	○	—
226	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.75	1.45	4.40	0.21	○	—
227	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.80	2.00	4.30	0.29	○	—
228	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.80	1.70	5.20	0.25	○	—
229	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.80	2.00	5.10	0.29	○	—
230	上縁貫土器	小皿	—	C a 1	A - 包合等	6.80	1.90	5.20	0.28	○	—
231	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.80	1.90	4.20	0.28	○	—
232	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.90	2.95	4.20	0.43	○	—
233	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	6.95	1.70	4.20	0.24	○	—
234	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	7.00	2.20	4.70	0.31	○	—
235	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	7.00	2.35	4.60	0.34	○	—
236	上縁貫土器	小皿	—	A a 1	A - 包合等	7.00	2.20	4.40	0.31	○	—
237	上縁貫土器	小皿	—	C a 1	A - 包合等	7.00	2.05	5.20	0.29	○	—

単位cm *①;○は「回転系切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②;○は通常の板目痕、△は縦目状の板目痕。

遺物番号	器種①	器種②	器種③	類型	出土位置	口径	深さ	底径	底平面	底部④	側面⑤
238	土師質土器	小皿	A a Ⅲ	A・急合繩	7.00	1.30	5.10	0.19	-	-	
239	土師質土器	小皿	C a I	A・急合繩	7.00	1.85	5.00	0.26	○	-	
240	土師質土器	小皿	D a I	A・急合繩	7.00	2.10	5.20	0.30	○	○	
241	土師質土器	小皿	D a B	A・急合繩	7.00	2.60	4.50	0.37	○	-	
242	土師質土器	小皿	D a I	A・急合繩	7.10	1.90	5.00	0.27	○	○	
243	土師質土器	小皿	C a I	A・急合繩	7.10	2.30	5.00	0.32	○	○	
244	土師質土器	小皿	C a I	A・急合繩	7.10	2.00	4.80	0.26	○	-	
245	土師質土器	小皿	A c B	A・急合繩	7.20	1.60	6.00	0.22	△?	-	
246	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.20	2.10	4.80	0.29	○	-	
247	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.20	2.10	4.10	0.29	○	-	
248	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.30	2.15	4.80	0.29	○	-	
249	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.30	2.30	4.20	0.32	○	-	
250	土師質土器	小皿	C c E	A・急合繩	7.30	1.55	4.60	0.21	△?	-	
251	土師質土器	小皿	D b T	A・急合繩	7.40	2.15	5.40	0.29	○	-	
252	土師質土器	小皿	A c B	A・急合繩	7.50	1.40	5.80	0.19	○	△	
253	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.50	2.00	5.70	0.27	○	-	
254	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.50	1.80	4.20	0.24	○	-	
255	土師質土器	小皿	A a B	A・急合繩	7.50	2.60	4.20	0.35	○	-	
256	土師質土器	小皿	A a B	A・急合繩	7.50	2.70	5.00	0.36	○	-	
257	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.55	1.95	5.00	0.26	○	-	
258	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.55	2.10	4.45	0.28	○	-	
259	土師質土器	小皿	C a E	A・急合繩	7.60	1.70	5.90	0.22	○	-	
260	土師質土器	小皿	A a B	A・急合繩	7.60	1.50	5.70	0.20	△	○	
261	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	7.60	2.20	4.90	0.29	○	-	
262	土師質土器	小皿	C a I	A・急合繩	7.60	2.05	4.40	0.27	-	-	
263	土師質土器	小皿	A a E	A・急合繩	7.70	1.30	6.00	0.17	○	○	
264	土師質土器	小皿	A a E	A・急合繩	7.70	1.40	6.20	0.18	○	-	
265	土師質土器	小皿	A a E	A・急合繩	7.70	1.60	5.50	0.21	○	-	
266	土師質土器	小皿	B a I	A・急合繩	7.70	2.30	4.85	0.30	○	-	
267	土師質土器	小皿	C a E	A・急合繩	7.75	1.60	6.60	0.21	○	-	
268	土師質土器	小皿	C a E	A・急合繩	7.80	1.40	5.70	0.18	○	-	
269	土師質土器	小皿	A a E	A・急合繩	7.80	1.50	5.80	0.19	○	-	
270	土師質土器	小皿	A a E	A・急合繩	7.80	1.30	6.00	0.17	-	-	
271	土師質土器	小皿	A a E	A・急合繩	7.80	1.60	5.60	0.21	○	-	
272	土師質土器	小皿	D a I	A・急合繩	7.80	2.10	5.50	0.27	○	-	
273	土師質土器	小皿	D a E	A・急合繩	7.90	2.20	5.10	0.28	○	△	
274	土師質土器	小皿	A a B	A・急合繩	7.90	1.45	5.80	0.16	-	-	
275	土師質土器	小皿	C c B	A・急合繩	7.90	1.30	5.70	0.16	○	-	
276	土師質土器	小皿	A a B	A・急合繩	7.90	1.75	6.50	0.22	-	-	
277	土師質土器	小皿	B c B	A・急合繩	8.00	1.30	5.90	0.16	○	-	
278	土師質土器	小皿	A c C	A・急合繩	8.00	1.15	6.10	0.14	○	-	
279	土師質土器	小皿	B g I	A・急合繩	8.00	2.00	4.85	0.25	○	-	
280	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	8.00	2.15	5.50	0.27	○	-	
281	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	8.00	2.40	5.60	0.30	○	-	
282	土師質土器	小皿	C a I	A・急合繩	8.00	2.20	5.35	0.28	○	-	
283	土師質土器	小皿	C a E	A・急合繩	8.05	1.60	6.15	0.20	○	-	
284	土師質土器	小皿	C a E	A・急合繩	8.20	1.80	5.70	0.22	○	-	
285	土師質土器	小皿	A a E	A・急合繩	8.20	1.50	6.10	0.18	○	-	
286	土師質土器	小皿	C a E	A・急合繩	8.40	1.55	6.10	0.18	+	-	
287	土師質土器	小皿	A c C	A・急合繩	8.30	1.30	6.00	0.16	○	-	
288	土師質土器	小皿	C a E	A・急合繩	8.30	1.60	5.80	0.19	○	-	
289	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	8.40	2.25	5.00	0.27	○	-	
290	土師質土器	小皿	A c E	A・急合繩	8.50	1.20	6.30	0.14	○	-	
291	土師質土器	小皿	C c E	A・急合繩	8.50	1.50	5.40	0.18	○	-	
292	土師質土器	小皿	C c E	A・急合繩	8.50	1.70	6.50	0.20	○	-	
293	土師質土器	小皿	C c E	A・急合繩	8.60	1.70	6.70	0.20	-	-	
294	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	8.60	1.95	6.00	0.23	○	-	
295	土師質土器	小皿	A a I	A・急合繩	8.80	2.30	7.70	0.26	○	-	
296	土師質土器	小皿	A a B	A・急合繩	8.80	1.65	6.00	0.19	○	-	
297	土師質土器	碗	-	A・急合繩	8.80	-	-	-	-	-	
298	土師質土器	杯	A a B	A・急合繩	9.80	2.90	7.90	0.30	○	-	
299	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	9.80	3.25	5.00	0.33	○	-	
300	土師質土器	杯	A a B	A・急合繩	9.90	2.95	6.30	0.30	○	-	
301	土師質土器	杯	A a B	A・急合繩	9.90	3.05	5.60	0.40	-	-	
302	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	10.00	3.15	5.80	0.32	○	-	
303	土師質土器	杯	B a I	A・急合繩	10.10	3.40	6.10	0.34	○	○	
304	土師質土器	杯	B a I	A・急合繩	10.15	3.20	6.00	0.32	○	-	
305	土師質土器	杯	B a B	A・急合繩	10.40	3.10	6.40	0.30	○	-	
306	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	10.30	3.60	6.00	0.35	○	-	
307	土師質土器	杯	A a B	A・急合繩	10.40	3.85	6.60	0.37	○	-	
308	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	10.50	3.40	6.15	0.32	?	-	
309	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	10.50	3.40	7.00	0.32	○	-	
310	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	10.50	3.50	7.30	0.33	○	-	
311	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	10.50	3.50	5.40	0.33	○	-	
312	土師質土器	杯	A a B	A・急合繩	10.50	3.10	6.30	0.30	○	-	
313	土師質土器	杯	B n II	A・急合繩	10.50	3.90	5.70	0.37	○	-	
314	土師質土器	杯	A a I	A・急合繩	10.55	3.70	6.50	0.35	○	-	
315	土師質土器	杯	D a B	A・急合繩	10.55	3.05	7.70	0.29	○	-	
316	土師質土器	杯	D a B	A・急合繩	10.60	3.45	6.60	0.37	○?	-	

単位cm *①;○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②;○は通常の板目痕、△は筵目状の板目痕。

測定番号	測定項目	測定値(1)	測定値(2)	測定値(3)	類型	寸法直角	□寸法	高さ	底辺	斜平面	底面(4)	板目痕(5)
317	土師質土器	杯	C b I	A - 低含糊	10.60	3.80	6.70	0.36	○	-	-	
318	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	10.60	3.75	6.00	0.35	○	-	-	
319	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	10.65	3.25	5.90	0.31	○	-	-	
320	土師質土器	杯	A a II	A - 低含糊	10.70	2.90	7.70	0.27	○	-	-	
321	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	10.70	3.50	7.50	0.33	○	-	-	
322	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	10.70	3.75	6.10	0.35	○	-	-	
323	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	10.70	3.75	6.50	0.35	○	-	-	
324	土師質土器	杯	B a I	A - 低含糊	10.70	3.30	6.40	0.31	○	-	-	
325	土師質土器	杯	B a I	A - 低含糊	10.70	3.90	5.40	0.36	○	-	-	
326	土師質土器	杯	A a II	A - 低含糊	10.75	3.95	5.80	0.37	○	-	-	
327	土師質土器	杯	D a II	A - 低含糊	10.75	3.25	7.30	0.30	○	-	-	
328	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	10.80	3.95	7.80	0.32	○	-	-	
329	土師質土器	杯	A a III	A - 低含糊	10.90	3.10	7.40	0.28	○	-	-	
330	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	10.90	3.50	7.50	0.36	○	-	-	
331	土師質土器	杯	B a I	A - 低含糊	11.10	3.90	6.50	0.35	○	-	-	
332	土師質土器	杯	D a III	A - 低含糊	10.95	3.30	7.70	0.30	○	-	-	
333	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	11.00	3.60	6.80	0.33	○	-	-	
334	土師質土器	杯	C b I	A - 低含糊	11.00	3.40	8.40	0.31	○	-	-	
335	土師質土器	杯	B a II	A - 低含糊	11.05	4.25	5.30	0.38	○	-	-	
336	土師質土器	杯	D a II	A - 低含糊	11.05	3.25	7.25	0.29	○	-	-	
337	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.10	4.05	6.40	0.36	○	-	-	
338	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.10	3.60	6.30	0.32	○	○?	-	
339	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	11.20	3.45	7.50	0.31	○	○	-	
340	土師質土器	杯	A a II	A - 低含糊	11.20	3.25	7.20	0.29	○	-	-	
341	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.20	3.70	7.00	0.33	○	-	-	
342	土師質土器	杯	A a B	A - 低含糊	11.20	4.25	6.60	0.38	○	-	-	
343	土師質土器	杯	A a B	A - 低含糊	11.20	3.40	6.30	0.30	○	-	-	
344	土師質土器	杯	D a B	A - 低含糊	11.20	3.25	7.40	0.29	○	○?	-	
345	土師質土器	杯	B a I	A - 低含糊	11.20	4.00	6.65	0.36	○	○	-	
346	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.20	3.45	7.30	0.31	○	-	-	
347	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	11.20	3.60	6.95	0.32	○	-	-	
348	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.30	3.60	7.40	0.32	○	-	-	
349	土師質土器	杯	B a I	A - 低含糊	11.30	3.50	5.80	0.31	○	-	-	
350	土師質土器	杯	B a B	A - 低含糊	11.30	4.30	6.60	0.38	○	-	-	
351	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	11.30	3.75	6.90	0.33	○	○?	-	
352	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	11.30	4.00	7.00	0.35	○	-	-	
353	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	11.30	2.80	6.90	0.34	○	-	-	
354	土師質土器	杯	C b I	A - 低含糊	11.30	3.55	8.30	0.31	○	-	-	
355	土師質土器	杯	A a B	A - 低含糊	11.35	3.40	8.30	0.30	○	○	-	
356	土師質土器	杯	A a B	A - 低含糊	11.35	3.30	6.05	0.29	○	-	-	
357	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	11.35	3.50	7.0	0.31	○	○	-	
358	土師質土器	杯	A a B	A - 低含糊	11.40	3.10	8.50	0.27	○	-	-	
359	土師質土器	杯	D a B	A - 低含糊	11.50	3.15	8.00	0.27	○	-	-	
360	土師質土器	杯	B a I	A - 低含糊	11.40	4.00	6.70	0.35	○	-	-	
361	土師質土器	杯	A a B	A - 低含糊	11.40	3.40	7.40	0.30	○	-	-	
362	土師質土器	杯	C a B	A - 低含糊	11.40	3.45	7.50	0.30	○	-	-	
363	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	11.40	3.60	6.90	0.32	○	-	-	
364	土師質土器	杯	D a B	A - 低含糊	11.50	3.40	7.90	0.30	○	-	-	
365	土師質土器	杯	D a B	A - 低含糊	11.50	3.50	6.80	0.30	○	-	-	
366	土師質土器	杯	B a I	A - 低含糊	11.50	3.85	6.40	0.33	○	-	-	
367	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	11.50	4.00	7.30	0.35	○	-	-	
368	土師質土器	杯	C a B	A - 低含糊	11.60	3.00	7.60	0.26	○	-	-	
369	土師質土器	杯	D a B	A - 低含糊	11.60	3.20	8.20	0.28	○	-	-	
370	土師質土器	杯	C b I	A - 低含糊	11.60	3.75	7.70	0.32	○	-	-	
371	土師質土器	杯	B a II	A - 低含糊	11.80	3.50	6.60	0.30	○	-	-	
372	土師質土器	杯	D a I	A - 低含糊	11.70	3.90	6.50	0.31	○	-	-	
373	土師質土器	杯	D a II	A - 低含糊	11.80	3.00	8.80	0.25	○	-	-	
374	土師質土器	杯	B a B	A - 低含糊	12.00	3.60	6.10	0.30	○	-	-	
375	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	12.00	3.90	7.30	0.33	○	-	-	
376	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	10.50	2.80	7.40	0.27	○	-	-	
377	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	10.90	3.20	6.90	0.29	○	-	-	
378	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.00	3.05	7.00	0.28	○	○	-	
379	土師質土器	杯	C a B	A - 低含糊	11.10	3.20	7.00	0.29	○	-	-	
380	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	11.20	3.20	8.30	0.29	○	-	-	
381	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.60	2.80	8.20	0.24	○	-	-	
382	土師質土器	杯	A a I	A - 低含糊	11.80	3.20	8.10	0.27	○	-	-	
383	土師質土器	杯	C c B	A - 低含糊	11.90	2.70	7.70	0.23	○	-	-	
384	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	12.20	3.25	7.75	0.27	○	-	-	
385	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	12.20	3.30	8.00	0.27	○	-	-	
386	土師質土器	杯	C a I	A - 低含糊	12.20	3.20	8.30	0.26	○	-	-	
387	土師質土器	杯	A c B	A - 低含糊	12.30	2.35	7.20	0.19	○	-	-	
388	土師質土器	杯	C a B	A - 低含糊	12.30	3.10	9.10	0.25	○	△	-	
389	土師質土器	杯	C c B	A - 低含糊	12.40	3.10	8.00	0.25	○	○	-	
390	土師質土器	皿	C c B	A - 低含糊	12.50	3.00	8.20	0.24	○	○	-	
391	土師質土器	皿	C a I	A - 低含糊	12.50	3.50	7.50	0.28	○	-	-	
392	土師質土器	皿	A a I	A - 低含糊	12.60	-	8.40	-	-	-	-	
393	土師質土器	皿	C a I	A - 低含糊	12.60	3.60	9.00	0.29	○	○	-	
394	土師質土器	皿	C a B	A - 低含糊	12.70	2.95	8.20	0.23	○	○	-	
395	土師質土器	皿	C g B	A - 低含糊	12.70	3.00	9.20	0.24	○	-	-	

単位cm *①；○は「回転系切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②；○は通常の板目痕、△は縦目状の板目痕。

造物番号	基準①	基準②	基準③	類型	出土遺物	口径	高さ	底径	底平度	底部④①	瓶目痕④②
396	土師質土器	陶	C a B	A - 伝呂等	12.70	3.00	9.60	0.24	○	-	
397	土師質土器	陶	C a B	A - 伝呂等	12.90	3.10	8.30	0.24	-	-	
398	土師質土器	陶	C c E	A - 伝呂等	13.00	2.80	8.70	0.22	○	○	
399	土師質土器	陶	C a I	A - 伝呂等	13.00	3.60	8.80	0.26	○	△	
400	土師質土器	陶	A c E	A - 伝呂等	13.10	3.00	8.70	0.23	○	-	
401	土師質土器	陶	C e E	A - 伝呂等	13.20	2.85	6.90	0.22	○	○	
402	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	8.50	2.40	3.75	0.28	-	-	
403	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	9.00	2.80	3.10	0.31	-	-	
404	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	9.10	2.90	3.00	0.29	-	-	
405	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	9.10	2.60	3.60	0.29	-	-	
406	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	9.20	2.95	4.00	0.32	-	-	
407	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	9.70	2.95	4.20	0.30	-	-	
408	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	9.40	2.70	2.90	0.29	-	-	
409	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	9.70	2.60	4.40	0.27	-	-	
410	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	10.00	2.90	3.80	0.29	-	-	
411	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	10.00	3.45	4.20	0.35	-	-	
412	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	10.10	3.15	4.10	0.31	-	-	
413	瓦質土器	陶	-	A - 伝呂等	28.20	-	-	-	-	-	
414	土師質土器	陶	-	A - 伝呂等	-	-	-	-	-	-	
415	燒成質土器	陶	-	A - 伝呂等	-	-	-	-	-	-	
416	輸入磁器	青磁	碗(盤)	A - 伝呂等	17.40	-	-	-	-	-	
417	輸入磁器	青磁	碗(盤)	A - 伝呂等	-	-	4.75	-	-	-	
418	輸入磁器	青磁	碗(盤)	A - 伝呂等	6.60	-	4.20	-	-	-	
419	輸入磁器	青磁	碗(盤)	A - 伝呂等	-	-	4.85	-	-	-	
420	輸入磁器	青磁	碗(杯・盤)	A - 伝呂等	11.00	-	-	-	-	-	
421	輸入磁器	青磁	碗(杯・盤)	A - 伝呂等	8.20	-	-	-	-	-	
422	輸入磁器	青磁	盤(圓)	A - 伝呂等	-	-	4.85	-	-	-	
423	輸入磁器	青磁	香炉?	A - 伝呂等	17.05	-	-	-	-	-	
424	輸入磁器	白磁	碗	A - 伝呂等	-	-	-	-	-	-	
425	輸入磁器	青磁	碗	A - 伝呂等	16.40	-	-	-	-	-	
426	灰釉陶器	陶	-	A - 伝呂等	9.65	3.70	4.60	0.37	-	-	
427	土師質土器	小皿	A a B	C - 伝呂等	6.50	1.30	5.00	0.30	△	無名ナダ?	
428	土師質土器	小皿	C c B	C - 伝呂等	6.60	1.40	4.70	0.31	△	無名ナダ?	
429	土師質土器	小皿	A a I	C - 伝呂等	6.90	1.75	6.00	0.35	○	無名ナダ?	
430	土師質土器	小皿	C a I	C - 伝呂等	7.00	2.00	5.20	0.29	○	-	
431	土師質土器	小皿	A b I	C - 伝呂等	7.00	1.60	6.30	0.33	△?	無名ナダ?	
432	土師質土器	小皿	C a J	C - 伝呂等	7.10	1.60	5.20	0.23	○	△	
433	土師質土器	小皿	A a I	C - 伝呂等	7.40	1.80	6.00	0.34	○	-	
434	土師質土器	小皿	C a I	C - 伝呂等	7.50	1.90	5.40	0.25	○	-	
435	土師質土器	小皿	A c III	C - 伝呂等	7.70	1.70	6.30	0.22	○	-	
436	土師質土器	小皿	A a I	C - 伝呂等	7.70	2.00	5.80	0.26	○	-	
437	土師質土器	小皿	A a I	C - 伝呂等	7.80	1.90	5.00	0.24	○	-	
438	土師質土器	小皿	A c III	C - 伝呂等	7.90	1.70	6.00	0.22	○	-	
439	土師質土器	小皿	A a I	C - 伝呂等	8.10	1.85	6.20	0.23	○	-	
440	土師質土器	小皿	C c III	C - 伝呂等	8.00	1.60	5.60	0.30	-	-	
441	土師質土器	杯	B b I	C - 伝呂等	10.40	3.65	7.60	0.35	○	-	
442	土師質土器	杯	C a II	C - 伝呂等	10.40	3.80	6.70	0.37	○	-	
443	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	10.40	3.70	6.70	0.36	○	-	
444	土師質土器	杯	A a I	C - 伝呂等	10.60	3.45	6.30	0.33	○	-	
445	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	10.60	3.90	6.60	0.37	○	-	
446	土師質土器	杯	B a I	C - 伝呂等	10.60	3.60	6.60	0.34	○	-	
447	土師質土器	杯	A b II	C - 伝呂等	10.70	3.95	7.30	0.37	○	-	
448	土師質土器	杯	C a I	C - 伝呂等	10.90	3.65	7.10	0.34	○	-	
449	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	10.90	3.60	6.50	0.33	○	-	
450	土師質土器	杯	D b II	C - 伝呂等	10.90	4.10	7.60	0.38	○	-	
451	土師質土器	杯	A a I	C - 伝呂等	11.00	3.60	6.40	0.33	○	-	
452	土師質土器	杯	A a III	C - 伝呂等	11.00	3.45	6.80	0.31	○	-	
453	土師質土器	杯	A a I	C - 伝呂等	11.10	3.80	6.40	0.34	○	-	
454	土師質土器	杯	A a I	C - 伝呂等	11.10	3.70	6.50	0.33	○	-	
455	土師質土器	杯	C a I	C - 伝呂等	11.00	3.70	7.50	0.34	○	-	
456	土師質土器	杯	A c III	C - 伝呂等	11.20	3.25	6.50	0.29	?	-	
457	土師質土器	杯	C a I	C - 伝呂等	11.20	3.55	7.40	0.32	○	-	
458	土師質土器	杯	C a I	C - 伝呂等	11.40	3.55	7.10	0.31	○	-	
459	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	11.40	3.75	6.60	0.33	○	-	
460	土師質土器	杯	D a III	C - 伝呂等	11.40	3.40	6.60	0.30	○	-	
461	土師質土器	杯	B a III	C - 伝呂等	11.60	3.50	8.00	0.30	○	-	
462	土師質土器	杯	C a I	C - 伝呂等	11.60	4.00	6.50	0.34	○	-	
463	土師質土器	杯	A a III	C - 伝呂等	11.60	3.50	7.30	0.30	○	-	
464	土師質土器	杯	C a I	C - 伝呂等	11.60	4.00	7.20	0.34	○	-	
465	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	11.70	4.10	7.00	0.35	○	-	
466	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	11.40	3.70	6.90	0.32	○	-	
467	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	11.80	3.90	7.00	0.33	○	-	
468	土師質土器	杯	D a I	C - 伝呂等	11.80	3.95	7.10	0.33	○	-	
469	土師質土器	杯	D b I	C - 伝呂等	11.80	3.90	8.00	0.33	○	-	
470	土師質土器	杯	C a B	C - 伝呂等	12.00	3.65	8.10	0.30	○	-	
471	土師質土器	杯	C a E	C - 伝呂等	13.70	3.85	8.90	0.38	○	-	
472	土師質土器	瓶	A a B	C - 伝呂等	12.10	2.70	8.40	0.22	○	-	
473	土師質土器	陶	-	C - 伝呂等	10.00	2.90	3.40	0.39	-	-	
474	土師質土器	陶	-	C - 伝呂等	10.30	3.00	3.20	0.29	-	-	

単位cm *①; ○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②; ○は通常の板目痕、△は縦目状の板目痕。

直掛番号	直掛①	直掛②	直掛③	型番	出寸直掛	背高	底挂	底平度	底部①	板目痕②
475	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	10.30	3.20	2.80	0.31	-	-
476	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	10.30	3.40	3.50	0.33	-	-
477	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	10.30	3.60	4.00	0.35	-	-
478	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	10.50	3.60	4.10	0.34	-	-
479	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	10.70	3.80	3.70	0.36	-	-
480	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	11.70	3.10	4.50	0.26	-	-
481	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	11.70	3.60	4.30	0.31	-	-
482	土師質土器	鉢	-	C・盆合物	12.30	3.30	4.50	0.27	-	-
483	輸入磁器	青磁	碗(鉢)	C・盆合物	17.30	-	-	-	-	-
484	土師質土器	小皿	A b II	A・3脚	5.80	2.15	4.40	0.37	○	-
485	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	6.25	1.50	4.95	0.24	○	-
486	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	6.30	1.85	3.70	0.29	○	-
487	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	6.35	1.80	4.10	0.28	○	-
488	土師質土器	小皿	A c II	A・3脚	6.50	1.30	5.10	0.20	△?	-
489	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	6.50	2.10	4.20	0.32	○	-
490	土師質土器	小皿	B a II	A・3脚	6.60	1.40	4.80	0.21	?	-
491	土師質土器	小皿	B a I	A・3脚	6.60	1.80	5.30	0.27	○	-
492	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	6.60	2.10	4.20	0.32	○	-
493	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	6.70	1.95	4.50	0.29	○	-
494	土師質土器	小皿	A a II	A・3脚	6.75	0.90	5.50	0.13	○	○
495	土師質土器	小皿	C b I	A・3脚	6.70	2.15	5.40	0.32	○	-
496	土師質土器	小皿	B a I	A・3脚	6.75	1.75	5.45	0.26	○	-
497	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	6.80	2.00	4.60	0.29	○	-
498	土師質土器	小皿	C b II	A・3脚	6.80	2.35	4.70	0.35	○	-
499	土師質土器	小皿	A c I	A・3脚	6.90	1.70	5.70	0.25	△?	周目ナメ
500	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	6.90	1.60	5.00	0.23	○	-
501	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	6.90	1.70	5.90	0.25	○	-
502	土師質土器	小皿	C a II	A・3脚	6.90	2.30	4.50	0.33	○	-
503	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	6.90	2.30	4.35	0.33	○	-
504	土師質土器	小皿	B a I	A・3脚	7.00	2.15	4.80	0.31	○	-
505	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.00	2.00	4.70	0.29	○	-
506	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	7.00	2.20	4.65	0.31	○	-
507	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	7.00	2.30	4.05	0.31	○	-
508	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	7.00	1.95	5.00	0.28	○	-
509	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	7.10	1.65	5.00	0.23	○	-
510	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.10	1.95	4.70	0.27	○	-
511	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.10	-	4.70	-	○	-
512	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.10	1.90	4.90	0.27	○	-
513	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.10	1.90	4.90	0.27	○	-
514	土師質土器	小皿	A a II	A・3脚	7.20	1.50	5.10	0.21	○	-
515	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.20	2.20	4.70	0.31	○	-
516	土師質土器	小皿	B a I	A・3脚	7.20	2.30	4.30	0.32	○	-
517	土師質土器	小皿	A a II	A・3脚	7.20	2.45	4.10	0.34	○	-
518	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.25	2.40	4.50	0.33	○	-
519	土師質土器	小皿	A c II	A・3脚	7.30	1.45	5.30	0.20	?	○
520	土師質土器	小皿	C a II	A・3脚	7.30	1.40	5.40	0.19	○	-
521	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	7.30	1.65	5.10	0.23	○	-
522	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	7.30	1.90	5.70	0.26	○	-
523	土師質土器	小皿	B a I	A・3脚	7.30	2.20	4.60	0.30	○	-
524	土師質土器	小皿	A a II	A・3脚	7.30	2.60	4.30	0.36	○停止?	-
525	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.40	2.30	4.75	0.31	○	-
526	土師質土器	小皿	A c I	A・3脚	7.50	1.25	5.70	0.17	○	-
527	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	7.50	1.75	4.80	0.23	○	-
528	土師質土器	小皿	A c I	A・3脚	7.50	1.45	5.40	0.19	○	-
529	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	7.50	1.80	4.80	0.24	○	-
530	土師質土器	小皿	B a I	A・3脚	7.50	2.10	4.30	0.28	○	-
531	土師質土器	小皿	C a II	A・3脚	7.50	2.60	4.80	0.35	○	-
532	土師質土器	小皿	C a I	A・3脚	7.50	1.80	5.00	0.25	○	-
533	土師質土器	小皿	A c II	A・3脚	7.60	1.10	6.00	0.14	○	-
534	土師質土器	小皿	A c I	A・3脚	7.60	1.40	5.60	0.18	○	-
535	土師質土器	小皿	C a II	A・3脚	7.60	1.70	5.80	0.22	○	-
536	土師質土器	小皿	A a II	A・3脚	7.70	1.40	6.50	0.18	○	-
537	土師質土器	小皿	A a II	A・3脚	7.70	1.50	5.60	0.19	-	-
538	土師質土器	小皿	A c II	A・3脚	7.70	1.40	6.30	0.18	○	-
539	土師質土器	小皿	C c II	A・3脚	7.70	1.65	5.40	0.21	-	-
540	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.70	2.10	4.40	0.27	○	-
541	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	7.80	1.55	5.60	0.20	○	-
542	土師質土器	小皿	C a II	A・3脚	7.80	1.70	5.60	0.22	○	-
543	土師質土器	小皿	C c II	A・3脚	7.85	1.55	6.10	0.20	○	-
544	土師質土器	小皿	C c II	A・3脚	7.90	1.40	5.70	0.18	○	-
545	土師質土器	小皿	C c II	A・3脚	7.90	1.45	6.50	0.18	○	-
546	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	7.90	2.00	5.35	0.25	-	-
547	土師質土器	小皿	A c II	A・3脚	7.95	1.20	5.60	0.15	○	-
548	土師質土器	小皿	A a II	A・3脚	8.00	1.40	6.40	0.18	○	-
549	土師質土器	小皿	C c II	A・3脚	8.00	1.70	5.20	0.21	○	-
550	土師質土器	小皿	A a I	A・3脚	8.00	1.90	5.00	0.24	?	-
551	土師質土器	小皿	D a I	A・3脚	8.00	2.00	5.50	0.25	○	△
552	土師質土器	小皿	C a II	A・3脚	8.05	1.65	5.60	0.20	○	-
553	土師質土器	小皿	C a II	A・3脚	8.10	1.60	5.80	0.20	○	-

単位:cm *①:○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②:○は通常の板目痕、△は縦目状の板目痕。

造物番号	面積(1)	面積(2)	面積(3)	類型	出士状況	口径	設置	底径	底平度	底部(1)	底部(2)
554	上縫貫上器	小皿	A a E	A・3等	8.20	2.60	5.40	0.03	○	-	
555	上縫貫上器	小皿	A c E	A・3等	8.20	1.50	5.20	0.18	○	-	
556	上縫貫上器	小皿	D c I	A・3等	8.45	2.00	5.80	0.24	○	△	
557	上縫貫上器	小皿	C c I	A・3等	8.50	2.30	6.80	0.27	○	-	
558	上縫貫上器	小皿	C a I	A・3等	8.80	2.00	6.40	0.23	○	○	
559	上縫貫上器	杯	B a I	A・3等	9.60	3.45	5.00	0.35	○	-	
560	上縫貫上器	杯	A a I	A・3等	10.20	3.70	6.60	0.36	○	-	
561	上縫貫上器	杯	B a I	A・3等	10.40	3.50	6.45	0.34	○	○	
562	上縫貫上器	杯	A a B	A・3等	10.55	3.20	7.20	0.30	○	-	
563	上縫貫上器	杯	D a B	A・3等	10.70	3.05	8.10	0.29	○	-	
564	上縫貫上器	杯	B a I	A・3等	10.70	3.80	6.00	0.36	○	-	
565	上縫貫上器	杯	B a I	A・3等	10.80	3.70	6.20	0.34	○	-	
566	上縫貫上器	杯	B a I	A・3等	10.85	3.55	6.10	0.33	○	-	
567	上縫貫上器	杯	C a I	A・3等	10.85	3.50	6.60	0.32	-	-	
568	上縫貫上器	杯	D a B	A・3等	10.90	2.90	8.10	0.27	○	○	
569	上縫貫上器	杯	D a B	A・3等	10.90	2.95	7.90	0.27	○	-	
570	上縫貫上器	杯	D a I	A・3等	10.90	3.40	7.50	0.31	○	-	
571	上縫貫上器	杯	D a I	A・3等	10.90	3.65	6.10	0.33	○	-	
572	上縫貫上器	杯	D a E	A・3等	10.90	4.40	5.45	0.40	?	-	
573	上縫貫上器	杯	B a I	A・3等	11.00	3.80	6.40	0.35	○	-	
574	上縫貫上器	杯	D a B	A・3等	11.10	3.20	7.90	0.30	○	-	
575	上縫貫上器	杯	D a B	A・3等	11.10	3.20	7.30	0.29	○	-	
576	上縫貫上器	杯	D a I	A・3等	11.10	3.55	8.30	0.32	○	-	
577	上縫貫上器	杯	B a I	A・3等	11.20	3.60	6.60	0.32	○	-	
578	上縫貫上器	杯	D a B	A・3等	11.30	3.20	8.40	0.28	○	△	
579	上縫貫上器	杯	D c B	A・3等	11.30	3.40	6.10	0.30	○	-	
580	七縫貫上器	杯	B a I	A・3等	11.30	3.65	6.80	0.32	○	-	
581	上縫貫上器	杯	D a I	A・3等	11.40	3.90	6.60	0.34	?	-	
582	七縫貫上器	杯	B a I	A・3等	11.50	3.65	6.60	0.32	○	-	
583	上縫貫上器	杯	C a I	A・3等	11.60	3.65	7.70	0.31	○	-	
584	上縫貫上器	杯	C a E	A・3等	11.60	3.45	7.90	0.29	○	-	
585	上縫貫上器	杯	A a E	A・3等	12.60	3.40	7.70	0.27	○	-	
586	上縫貫上器	杯	D a E	A・3等	12.60	3.70	8.50	0.29	○	-	
587	上縫貫上器	杯	D a I	A・3等	12.60	2.80	7.00	0.27	○	-	
588	上縫貫上器	杯	D a E	A・3等	12.60	2.45	6.90	0.24	○	-	
589	上縫貫上器	杯	A a I	A・3等	12.60	2.95	7.45	0.26	○	-	
590	上縫貫上器	杯	C c E	A・3等	12.70	2.60	5.95	0.24	-	-	
591	上縫貫上器	杯	A a E	A・3等	12.70	2.70	7.70	0.23	○	-	
592	上縫貫上器	杯	C c E	A・3等	12.70	2.95	7.30	0.25	○	-	
593	上縫貫上器	杯	A a E	A・3等	13.40	3.10	8.80	0.23	○	-	
594	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	9.40	2.60	3.60	0.30	-	-	
595	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	9.90	3.40	4.20	0.34	-	-	
596	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.10	3.50	3.65	0.35	-	-	
597	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.65	3.60	3.80	0.34	-	-	
598	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.40	3.60	4.25	0.35	-	-	
599	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.60	-	-	-	-	-	
600	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.60	4.00	3.30	0.38	-	-	
601	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.70	3.50	3.80	0.33	-	-	
602	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.75	2.80	-	0.26	-	-	
603	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.80	3.00	6.45	0.28	-	-	
604	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.80	3.40	4.10	0.31	-	-	
605	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	10.90	3.70	3.45	0.34	-	-	
606	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	11.45	3.55	4.00	0.31	-	-	
607	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	37.40	-	-	-	-	-	
608	上縫貫上器	瓶	-	A・3等	34.80	-	-	-	-	-	
609	須貫上器	挂体	-	A・3等	23.40	-	-	-	-	-	
610	輸入船形	青磁(瓶)	-	A・3等	-	-	-	-	-	-	
611	輸入船形	青白磁	-	A・3等	-	-	-	-	-	-	
612	土縫貫上器	小皿	C c E	B・3等	7.90	1.40	5.50	0.18	○	○	
613	土縫貫上器	小皿	D a E	B・3等	13.00	3.10	9.30	0.24	○	○	
614	輸入船形	青磁	瓶(瓶)	-	B・3等	16.50	-	-	-	-	-
615	灰陶豆	瓶	-	B・3等	14.00	6.55	6.40	0.61	○	?	
616	土縫貫上器	小皿	C b I	C・3等	7.30	1.90	6.20	0.26	-	-	
617	土縫貫上器	小皿	A c E	C・3等	7.40	1.40	5.35	0.19	○	○	
618	土縫貫上器	小皿	A a E	C・3等	7.70	1.60	5.00	0.21	-	-	
619	土縫貫上器	小皿	D c E	C・3等	7.80	1.60	5.20	0.21	?	○	
620	土縫貫上器	小皿	A a E	C・3等	8.00	1.35	5.70	0.17	○	-	
621	土縫貫上器	小皿	C a I	C・3等	8.00	2.15	5.20	0.27	○	-	
622	土縫貫上器	小皿	C c E	C・3等	8.30	1.40	5.80	0.17	○	-	
623	土縫貫上器	杯	A a I	C・3等	10.50	3.60	7.00	0.31	○	-	
624	土縫貫上器	杯	A a I	C・3等	10.60	3.30	6.30	0.31	-	-	
625	土縫貫上器	杯	A a I	C・3等	10.80	3.50	7.00	0.32	-	-	
626	土縫貫上器	杯	D a I	C・3等	10.80	3.90	6.60	0.35	○	-	
627	土縫貫上器	杯	A a I	C・3等	10.90	3.60	7.30	0.33	-	-	
628	土縫貫上器	杯	A a I	C・3等	11.25	3.55	7.30	0.31	○	-	
629	土縫貫上器	杯	D a I	C・3等	11.80	3.70	6.90	0.31	○	-	
630	土縫貫上器	瓶	C c E	C・3等	11.80	2.95	8.00	0.25	○	-	
631	土縫貫上器	瓶	D c I	C・3等	12.00	3.10	7.30	0.26	○	-	
632	土縫貫上器	瓶	C c E	C・3等	12.60	3.20	8.00	0.25	○	-	

単位cm *①;○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②;○は通常の板目痕、△は縦目状の板目痕。

直物番号	西様(1)	説様(2)	説様(3)	型番	出土遺物	口径	器高	底径	底平度	底部*(1)	板目痕*(2)
633	土師質土器	瓶	D e II	C - 3号	12.60	2.90	7.40	0.23	○	○	
634	土師質土器	瓶	-	C - 3号	10.20	-	-	-	-	-	
635	土師質土器	瓶	-	C - 3号	10.40	3.20	4.10	0.31	-	-	
636	土師質土器	瓶	-	C - 3号	10.80	3.40	4.20	0.31	-	-	
637	土師質土器	瓶	-	C - 3号	12.00	4.00	4.10	0.33	△?	○	
638	土師質土器	小瓶	D c II	D - 2号	7.70	1.60	6.10	0.21	○	○	
639	土師質土器	杯	C a I	D - 3号	10.55	3.60	7.45	0.34	○	-	
640	土師質土器	杯	A a I	D - 3号	10.90	3.50	7.50	0.32	○	-	
641	土師質土器	杯	A a I	D - 3号	10.90	3.70	6.70	0.34	○	-	
642	土師質土器	杯	D a I	D - 3号	10.90	3.80	6.80	0.35	○	-	
643	土師質土器	杯	C b I	D - 3号	10.95	3.75	7.70	0.34	○	-	
644	土師質土器	杯	D a I	D - 3号	11.00	3.80	7.00	0.35	○	-	
645	土師質土器	杯	A a I	D - 3号	11.10	3.45	7.10	0.31	○	-	
646	土師質土器	杯	D a I	D - 3号	11.10	3.75	6.80	0.34	○	-	
647	土師質土器	杯	D a I	D - 3号	11.15	3.60	6.55	0.32	○	-	
648	土師質土器	杯	D a I	D - 3号	11.15	3.85	6.40	0.35	○	-	
649	土師質土器	瓶	C a II	D - 2号	12.50	3.10	8.50	0.25	○	-	
650	土師質土器	小瓶	C b I	D - 2号	6.30	2.00	4.50	0.32	○	-	
651	土師質土器	小瓶	C b I	D - 2号	6.60	2.00	4.50	0.30	○	-	
652	土師質土器	小瓶	B b II	D - 2号	6.50	2.40	4.30	0.37	○	-	
653	土師質土器	小瓶	C a II	D - 2号	7.00	1.15	5.40	0.16	○	-	
654	土師質土器	小瓶	C a I	D - 2号	7.00	1.70	5.00	0.24	○	-	
655	土師質土器	小瓶	C a I	D - 2号	7.25	2.30	4.85	0.32	○	-	
656	土師質土器	小组	C c II	D - 2号	7.30	1.15	5.70	0.16	○	○	
657	土師質土器	小组	A a II	D - 2号	7.30	1.60	4.85	0.22	○	-	
658	土師質土器	小组	A a I	D - 2号	7.30	1.00	5.60	0.26	○	-	
659	土師質土器	小组	D a I	D - 2号	7.30	1.90	5.10	0.26	○	-	
660	土師質土器	小组	C c II	D - 2号	7.40	1.40	5.40	0.19	○	△	
661	土師質土器	小组	A c II	D - 2号	7.50	1.35	5.90	0.18	○	○	
662	土師質土器	小组	C a II	D - 2号	7.50	1.45	5.80	0.19	○	○	
663	土師質土器	小组	D a I	D - 2号	7.60	2.00	5.00	0.26	○	-	
664	土師質土器	小组	B a I	D - 2号	7.60	1.80	5.70	0.24	△	-	
665	土師質土器	小组	C c II	D - 2号	7.70	1.55	6.00	0.20	○	-	
666	土師質土器	小组	C a I	D - 2号	7.80	1.75	5.70	0.22	○	-	
667	土師質土器	小组	B c II	D - 2号	7.80	1.25	5.65	0.16	△	-	
668	土師質土器	小组	A c II	D - 2号	7.90	1.40	5.60	0.18	○	-	
669	土師質土器	小组	C a I	D - 2号	7.70	2.00	4.90	0.26	○?	-	
670	土師質土器	小组	C c I	D - 2号	8.00	1.95	5.30	0.34	○	-	
671	土師質土器	小组	C c II	D - 2号	8.20	1.50	5.80	0.18	○	△	
672	土師質土器	小组	B c II	D - 2号	8.35	1.10	5.55	0.13	○	○	
673	土師質土器	小组	C a I	D - 2号	8.40	1.85	5.90	0.22	○	-	
674	土師質土器	小组	B a II	D - 2号	8.70	1.60	6.40	0.18	△	-	
675	土師質土器	小组	A c I	D - 2号	10.20	3.15	5.50	0.31	○	-	
676	土師質土器	杯	A a I	D - 2号	10.60	3.60	6.30	0.34	○	-	
677	土師質土器	杯	A a I	D - 2号	10.80	3.40	7.10	0.31	○	-	
678	土師質土器	杯	D a I	D - 2号	10.85	3.45	6.50	0.32	○	-	
679	土師質土器	杯	A a I	D - 2号	10.85	3.80	6.60	0.35	○	-	
680	土師質土器	杯	A a II	D - 2号	10.90	4.20	6.50	0.39	○	○?	
681	土師質土器	杯	A a I	D - 2号	10.95	3.75	5.85	0.34	○	-	
682	土師質土器	杯	A c II	D - 2号	11.05	3.30	6.65	0.30	○	-	
683	土師質土器	杯	D a I	D - 2号	11.20	3.90	7.50	0.35	○	-	
684	土師質土器	杯	A a I	D - 2号	11.20	3.60	7.00	0.32	○	-	
685	土師質土器	杯	A a I	D - 2号	11.30	3.80	7.20	0.34	○	-	
686	土師質土器	杯	D c II	D - 2号	11.30	3.20	5.60	0.28	-	-	
687	土師質土器	杯	A a I	D - 2号	11.85	3.80	7.15	0.32	○	-	
688	土師質土器	杯	D b II	D - 2号	10.90	3.50	7.90	0.32	○	-	
689	土師質土器	杯	A a II	D - 2号	12.10	3.60	7.80	0.30	○	-	
690	土師質土器	瓶	-	薄板区	9.23	2.50	5.00	0.27	-	-	
691	土師質土器	瓶	D a II	薄板区	12.30	2.90	8.20	0.24	○	-	
692	土師質土器	瓶	A a II	薄板区	12.70	2.95	8.30	0.23	○	-	
693	土師質土器	瓶	A c I	薄板区	13.00	3.50	8.00	0.27	○	○	
694	土師質土器	瓶	C c II	薄板区	13.30	2.80	7.85	0.21	○	○	
695	土師質土器	瓶	D c II	薄板区	12.10	-	-	-	-	-	
696	土師質土器	瓶	D c II	薄板区	20.50	-	-	-	-	-	
697	土師質土器	瓶	-	薄板区	13.65	-	-	-	-	-	
698	土師器	瓶	-	薄板区	17.80	-	-	-	-	-	
699	土師器	杯	-	薄板区	10.20	-	-	-	-	-	
700	土師器	杯	-	薄板区	17.80	-	-	-	-	-	
701	土師器	杯	-	薄板区	10.25	2.95	6.00	0.29	-	-	
702	土師器	杯	-	薄板区	13.70	2.90	6.50	0.21	△	-	
703	土師器	杯	-	薄板区	13.15	3.10	6.60	0.24	?	-	
704	土師器	杯	-	薄板区	13.65	2.75	10.90	0.26	△	-	
705	土師器	杯	-	薄板区	-	-	9.50	-	-	-	
706	土師器	杯	-	薄板区	-	-	7.00	-	△	-	
707	土師器	杯	-	薄板区	7.70	3.85	4.70	0.50	△	-	
708	土師器	高杯	-	薄板区	14.20	-	-	-	-	-	
709	土師器	盖	-	薄板区	9.00	2.00	-	-	-	-	
710	土師器	盖	-	薄板区	12.00	-	-	-	-	-	
711	輪大磁器	青磁	瓶 (54)	-	薄板区	-	-	4.80	-	-	

単位cm *①;○は「回転糸切り」、△は「回転ヘラ切り」。*②;○は通常の板目痕、△は縦目状の板目痕。

遺物番号	器種①	器種②	器種③	類型	出土遺跡	口径	器高	底径	底平度	底部④	板目割⑤
712	輸入器	青磁	碗(盤)	-	調査区	13.10	-	-	-	-	-
713	輸入器	青磁	碗(盤)	-	調査区	14.05	-	-	-	-	-
714	輸入器	青磁	碗(盤)	-	調査区	16.00	-	-	-	-	-
715	輸入器	青磁	碗(盤)	-	調査区	-	5.60	-	-	-	-
716	輸入器	青磁	碗(盤)	-	調査区	15.00	-	-	-	-	-
717	輸入器	白磁	碗(深)	-	調査区	-	6.05	-	-	-	-
718	近鉄陶器	田	-	調査区	13.00	3.45	3.25	0.27	-	-	-
719	近鉄陶器	碗	-	調査区	14.10	-	-	-	-	-	-
720	七瀬品	管状土錐	-	S X 1	-	-	-	-	-	-	-
721	土製品	管状土錐	-	S D 8	-	-	-	-	-	-	-
722	土製品	管状土錐	-	S D 2	-	-	-	-	-	-	-
723	土製品	管状土錐	-	S X 1	-	-	-	-	-	-	-
724	土製品	有溝土錐	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
725	土製品	右溝土錐	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
726	土製品	右溝土錐	-	S X 3	-	-	-	-	-	-	-
727	土製品	神伏土錐	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
728	土製品	神伏土錐	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
729	土製品	神伏土錐	-	S B 5 P 6	-	-	-	-	-	-	-
730	土製品	神伏土錐	-	B・P 11	-	-	-	-	-	-	-
731	土製品	神伏土錐	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
732	土製品	神伏土錐	-	B・S 等	-	-	-	-	-	-	-
733	土製品	神伏土錐	-	S D 2	-	-	-	-	-	-	-
734	土製品	輪引口	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
735	瓦	瓦下	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
736	瓦	軒平足	-	S X 1	-	-	-	-	-	-	-
737	瓦	瓦足?	-	D・③等	-	-	-	-	-	-	-
738	瓦	瓦足?	-	S X 1	-	-	-	-	-	-	-
739	瓦	平瓦	-	A・伍等	-	-	-	-	-	-	-
740	瓦	平瓦(巴文)	-	A・伍等	-	-	-	-	-	-	-
741	瓦	平瓦	-	D・〇等	-	-	-	-	-	-	-
742	瓦	平瓦	-	D・〇等	-	-	-	-	-	-	-
743	瓦	平瓦	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
744	瓦	平瓦	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
745	瓦	平瓦	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
746	瓦	平瓦	-	A・伍等	-	-	-	-	-	-	-
747	瓦	平瓦	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
748	瓦	平瓦	-	S X 1	-	-	-	-	-	-	-
749	瓦	平瓦?	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
750	瓦	下瓦	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
751	瓦	平瓦	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
752	石製品	石鍋	-	S B 1 P 6	-	-	-	-	-	-	-
753	石製品	石鍋	-	S B 5 P 1	-	-	-	-	-	-	-
754	石製品	鏡	-	A・包含等	-	-	-	-	-	-	-
755	石製品	鏡石	-	S D 5	-	-	-	-	-	-	-
756	石製品	用途不明品	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
757	石製品	斧	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
758	石製品	刀子?	-	S X 1	-	-	-	-	-	-	-
759	石製品	刀子?	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
760	石製品	用途不明品	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
761	石製品	用途不明品	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
762	石製品	用途不明品	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
763	石製品	用途不明品	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-
764	石製品	用途不明品	-	C・包含等	-	-	-	-	-	-	-
765	石製品	用途不明品	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
766	石製品	刃	-	B・P 3	-	-	-	-	-	-	-
767	石製品	刃	-	A・包含等	-	-	-	-	-	-	-
768	石製品	刃	-	A・包含等	-	-	-	-	-	-	-
769	石製品	刃	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
770	石製品	刃	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
771	石製品	刃	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
772	石製品	刃	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
773	石製品	刃	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
774	石製品	刃	-	S B 4 P 2	-	-	-	-	-	-	-
775	石製品	刃	-	A・③等	-	-	-	-	-	-	-
776	石製品	刃	-	S D 9	-	-	-	-	-	-	-
777	石製品	刃	-	B・P 5	-	-	-	-	-	-	-
778	石製品	刃	-	S X 1	-	-	-	-	-	-	-
779	石製品	刃	-	C・包含等	-	-	-	-	-	-	-
780	石製品	刃	-	A・P 11	-	-	-	-	-	-	-
781	石製品	刃	-	S D 11	-	-	-	-	-	-	-
782	石製品	刃	-	C・③等	-	-	-	-	-	-	-
783	石製品	刃	-	S D 9	-	-	-	-	-	-	-
784	石製品	刃	-	B・P 6	-	-	-	-	-	-	-
785	石製品	刃	-	D・③等	-	-	-	-	-	-	-
786	古鏡	卓定通寶	-	C・③等	-	-	-	-	-	-	-
787	古鏡	昭武元寶	-	A・包含等	-	-	-	-	-	-	-
788	木製品	円板状	-	調査法	-	-	-	-	-	-	-
789	木製品	羽子板状	-	調査法	-	-	-	-	-	-	-
790	木製品	柄	-	調査区	-	-	-	-	-	-	-

V ま と め

三太刀遺跡は広島県中央部の瀬戸内沿岸に所在する中世集落跡である。東流する沼田川河口近くの平安時代末～室町時代の京都・蓮華王院領の荘園である沼田本荘（荘域=現・本郷町及び三原市西・南部）域に位置する。沼田川北岸の「コ」字形の独立丘陵に抱かれた2haほどの広さの平坦地にあり、掘立柱建物跡・木組井戸などの遺構と多量の土師質土器や輸入磁器、土錘などの遺物を検出した。以下においては、掘立柱建物跡と井戸、そして小皿・杯・碗を主とする土師質土器と瓦器・輸入磁器について分析と検討を行い、まとめとしたい。

(1) 遺構について

今回の調査で検出したピットの総数は約450基である。掘立柱建物跡13棟、柵列跡9条を構成するほか、根石・柱根・柱痕跡の検出や遺物の出土がみられた単独柱穴32基がある。これら以外のピットについては柱穴か否かは不明である。

①掘立柱建物跡　掘立柱建物跡はA区（3棟）・B区（7棟）を中心に検出し、C区（2棟）・D区（1棟）にも存在する。その多くが調査区外に延びており建物の全容を窺うことができない。現状では桁行1～5間、梁行1～3間程度の規模である。梁行1～2間、桁行3間以上のものが主体とみられる。桁行4間以上×梁行2間（31m²以上）のSB3、3間四方（52m²）のSB6、桁行5間以上×梁行2間（40m²以上）のSB7、桁行4間以上×梁行2間（34m²以上）のSB13の4棟が大型建物である。SB3・SB13はいずれも東面庇をもつ。また、SB5～7・13の4棟は縦柱建物である。その他は側柱建物と考えられ、SB1・SB2・SB4・SB8～12は桁行1～4間以上×梁行1～2間（4～25m²以上）と規模的にも小さい。中でも、1間四方（4m²）と最小規模のSB10は、主軸方位がほかの建物と大きく異なり柱穴規模も小さいので、時期的・性格的にはほかの建物群と異なる可能性が高い。

建物の方位　建物の主軸方位（桁行方向の方位）はほぼ一定である。即ち、①ほぼ北東～南西方向を指すもの（N54°～62°E）；8棟（SB1・2・4～7・11・12）、②ほぼ北北西～南南東方向を指すもの（N33°～37°W）；3棟（SB3・8・9）の大きく2グループに分かれる。①②はほぼ直交し、時期的にはそれほど大きな開きはないと思われる。SB13（N23°W）は②に近いが10°ほど東に振れ、いくらか時期差が考えられる。SB10（N32°E）は①から大きく（30°）西に振れる。しかし、このSB10を除けば建物の方位はほぼ均一的である。①を東西棟、②を南北棟とすれば、東西棟が主体的といえるが、大型建物4棟のうちの2棟（SB3・13）は南北棟である。

建物規模　建物規模は、現状で桁行4.5～10.2m以上（完存するものでは2.2～8.5m）×梁行1.9～

6.1m、建物面積は現状で8~40m²以上（完存するものでは4~52m²）である。

柱間距離 柱間距離は、桁行方向0.9~3.1m（主体は2.1m・2.2m）、梁行方向0.8~3.1m（主体は1.9m）で、全平均値（146例）は2.03mである。身舎と庇別の平均値は、桁行方向は身舎が2.1m（83例）、庇が2.09m（7例）とほぼ同じだが、梁行方向は身舎が1.98m（52例）に対して庇は0.93m（4例）と狭い。大型建物のSB3（身舎）、SB7、SB13（身舎）はほぼ平均的な値を示すが、SB6は桁行方向2.2~3.1m（平均2.8m）、梁行方向1.9~3.1m（平均2.16m）と桁行方向が特に広い。また、SB11は桁行方向1.5~1.6m（平均1.55m）、梁行方向1.1~1.4m（平均1.28m）と桁行・梁行ともにかなり狭い。

柱穴規模 柱穴規模は、身舎の柱穴は長径21~62cm、深さ8~74cm（主体は直径30~50cm台、深さ30~60cm台）、庇の柱穴は長径28~62cm、深さ10~73cmである。平均値は、全平均値が長径37.8cm（身舎37.2cm、庇42.0cm）、深さ36.9cm（身舎35.7cm、庇45.8cm）で、長径はSB3（身舎=40.4cm・庇=43.6cm）、SB7（44.4cm）、SB10（42.8cm）が、深さはSB1（48.6cm）、SB3庇（49.2cm）、SB6（40.4cm）、SB8（52.2cm）が平均値を比較的大きく上回る。逆に、SB12の長径（27.9cm）、SB10の深さ（12.5cm）は平均を大きく下回っている。大型建物は、SB3が身舎（長径40.4cm、深さ37.9cm）、庇（長径43.6cm、深さ49.2cm）とともに平均値を大きく上回っているのをはじめ、SB6（長径37.8cm、深さ40.4cm）、SB7（長径44.4cm、深さ36.9cm）、SB13身舎（長径36cm、深さ31.3cm）、庇（長径38.8cm、深さ39cm）とSB13身舎の数値がやや平均値を下回るのを除けば、いずれも平均値を上回っている。建物の平面規模と柱穴規模が比例することが分かる。

根石 A・B区の建物は根石の保有率が高く、A区の3棟がSB1（2基/9基）、SB2（2基/7基）、SB3身舎（4基/10基）、同庇（7基/10基）とSB3の特に庇の柱穴の保有率が高い。B区ではSB8~10は根石が皆無だが、SB4（5基/7基）、SB5（4基/10基）、SB6（2基/14基）、SB7（11基/18基）とSB6以外は保有率が高く、SB4・SB7は柱穴の6~7割で根石を検出した。C・D区では各1基の単独柱穴に根石がみられたが、3棟の掘立柱建物跡の柱穴では根石は検出できなかった。根石の保有率は全体で37基/134基=28%（A区；15基/36基=42%、B区；22基/65基=34%）で、1/4強の柱穴が根石を持つ。構列跡の柱穴（4基）や単独柱穴（11基）のなかにも根石をもつものがあり、全ピット数約450基のうちの52基（11.6%）の柱穴で根石を検出した。根石の総点数76点で、17基の柱穴では2~4個の根石をもつ。複数の石材を根石とする場合、中心的な根石と小礫1~3個で構成される場合が多い。根石の形状は、板石31点、角礫14点、小礫5点、形状不明2点で、板石が過半数を占める。根石の大きさ（平均値）は、板石が20.9cm×26.9cm、厚さ9.9cm、角礫が16.9cm×23.5cm、厚さ13.8cmと平面規模はそれ程違わないが厚さは角礫がまさる。石材は計18種類の石材（不明の8点を除く）がみられた。黒雲母花崗岩類5種38点（50%）が最も多く、なかでも粗粒黒雲母花崗岩が20点と目立つ。この他では珪質凝灰岩7点を含む凝灰岩類が13点とやや多い。

柱根・柱痕跡 柱根は4基の柱穴で、柱痕跡は13基の柱穴で検出した。柱根はA区のSB1（P

3 ; 径 8 cm), SB 3 (身舎 P 10; 径 18 cm, 庵 P 11; 径 10 cm) で、柱痕跡は A 区の SB 1 (P 1; 径 12 cm, P 5; 径 13 cm, P 8; 径 14 cm), SB 3 (身舎 P 6; 径 14 cm, 庵 P 15; 径 10 cm), B 区の SB 6 (P 9; 径 18 cm), SB 7 (P 1; 径 12 cm, P 13; 径 17 cm) でみつかっている。単独柱穴でも、A 区の A · P 1 (径 10 cm) で柱根を、B 区の B · P 9 (径 12 cm), C 区の C · P 1 (径 11 cm), C · P 2 (径 11 cm), C · P 3 (径 13 cm), C · P 4 (径 9 cm) で柱痕跡を検出した。柱根は湧水面に近いために残りやすかったのか A 区で集中的に見つかっている(掘立柱建物跡 3 本・単独柱穴 1 本)。柱の太さは径 8 ~ 18 cm で、径 8 ~ 10 cm が主体である。柱痕跡は A ~ C 区の掘立柱建物跡・単独柱穴の計 13 基の柱穴で検出しており、推定される柱材の大きさは径 9 ~ 18 cm (平均 12.8 cm) である。これら柱根・柱痕跡の検出例 (計 21 例) から本遺跡の掘立柱建物跡には径 8 ~ 18 cm 程度の柱材が用いられていたと考えられる。

出土遺物 掘立柱建物跡 (9 棟 22 基)・柵列跡 (4 条 5 基)・単独柱穴 (16 基) の計 43 基の柱穴からは比較的多くの遺物が出土している。これら図示しうる遺物が出土した柱穴は全ピット (約 450 基) の 1 割、掘立柱建物跡 (13 棟 136 基) の全柱穴の 16.2%、柵列跡 (9 条 55 基) の全柱穴の 9.1% を占める。多くは破片で、その内訳は、土師質土器 53 点 (小皿 31 · 杯 9 · 盆 5 · 梗 8), 須恵質土器 · 梗 1 点, 瓦器 4 点 (小皿 1 · 梗 3), 輸入磁器 4 点 (青磁碗 3 · 白磁皿 1), 土製品 (棒状土錘) 2 点, 石製品 (石鍋片) 2 点, 鉄製品 (釘) 5 点の計 71 点 (土器類 62 点 · 土器類以外 9 点) である。これは今回報告する全遺物量 (790 点) の 9.0% にある。

数量的に群を抜いて多いのは土師質土器 · 小皿 (31 点 / 274 点 · 11.3%) で、その他の遺物は 1 種類あたり 1 ~ 9 点に留まる。この柱穴からの土師質土器 · 小皿の出土量の多さは、ほかの土師質土器 (杯 · 盆 · 梗) と比べても明らかである (杯 = 9 点 / 229 点 · 3.9%, 盆 = 5 点 / 71 点 · 7.0%, 梗 = 8 点 / 64 点 · 12.5%)。また、杯 · 盆 · 梗がいずれも破片であるのに対し、小皿は 5 点 (1 · 2 · 25 · 28 · 48) が完形かほぼ完形のものである。また、2 (SB 1 P 4), 28 (A · P 10) は 41 (SB 9 P 1) とともに柱穴底部に横向きに立った状態で出土したことから、柱材に小皿を沿わせて意図的に柱穴に納められた可能性が高い。また、2 (SB 1 北東隅), 34 · 35 (SB 5 北西隅 · 南西隅), 41 (SB 9 南西隅), 124 (SB 11 北東隅) の小皿は、各建物跡の四隅の柱穴から出土していることから考えて、建物の四隅の柱穴に柱材と共に土師質土器の小皿を埋納することが何らかの祭祀的な意味合い (例えば地鎮めなど) を持っていたことが想定される。また、一柱穴から複数 (2 ~ 4 点) の土師質土器 · 小皿が出土する例が比較的多い (2 点 = SB 7 P 11, SB 13 P 11, 3 点 = SB 3 庵 P 20, A · P 3, A · P 10, 4 点 = B · P 2)。

瓦器は、SB 3 庵 P 12 (梗), SB 13 P 11 (梗), B · P 8 (小皿) から出土している。輸入磁器は大型建物の SB 3, SB 7 から出土した。SB 3 の庵 P 12 から青磁 · 碗 (19), 同庵 P 17 から白磁 · 盆 (20), SB 7 P 4 から青磁 · 碗 (40) が出土している。

土器類以外では、棒状土錘と石鍋片、鉄釘の出土がみられる。棒状土錘は SB 5 P 6 と B · P 11 から出土した。棒状土錘は、このほかに SD 2 (1 点), B 区③層 (1 点) からも出土しており、調査区出土の 3 点以外はいずれも B 区からの出土である。石鍋片は A 区南西隅の SB 1 P 6

(752) と B 区北西隅の S B 5 P 1 (753) から出土した。鉄釘は A 区南東隅の A · P 14 (780), B 区北西隅の S B 4 P 2 (774), B · P 3 (766), B · P 5 (777), B · P 6 (784) と, A 区南東隅から B 区北西隅にかけて出土している。

②柵列跡 柵列跡は計 9 条検出した。A 区; 4 条 (S A 1 ~ 4), B 区; 3 条 (S A 5 ~ 7), D 区; 2 条 (S A 8 · 9) である。

方位は、大きく①北西—南東方向を指すもの ($N28^\circ \sim 35^\circ W$) = 5 条 (S A 1 ~ 3 · 6 · 7) とこれにはば直交する②北東—南西方向を指すもの ($N57^\circ \sim 66^\circ E$) = 4 条 (S A 4 · 5 · 8 · 9) に分かれる。ややバラつきがみられるものの、概ね掘立柱建物跡の主軸方位と一致する。中でも、L 字に屈曲する S A 9 ($N66^\circ E + N24^\circ W$) は掘立柱建物跡のなかでもやや主軸方位が東偏する S B 13 ($N23^\circ W$) とほぼ同じ方位を指し、何らかの関わりが考えられる。

S A 9 以外は調査区外に延び、長さ 3.3 ~ 11.4m, 2 ~ 4 間の現存規模である。D 区の S A 8 ($N55^\circ E + N35^\circ W$) · S A 9 ($N66^\circ E + N24^\circ W$) は各々 2 条の柵列が T 字ないしは L 字に交差するもので、S A 8 は 3 間 × 2 間 (6.2m × 3.9m), S A 9 は 4 間 × 3 間 (4.6m × 4.0m) の規模をもつ。S A 1 ~ 4 · 6 · 7 は現状で長さ 3.3 ~ 7.5m, 2 ~ 4 間の規模である。S A 5 は現存長 11.4m であるが、間数や柱間距離は不明確である。この S A 5 を除く 8 条の柵列跡の柱間距離は 0.9 ~ 2.2m (平均 1.55m) である。① 0.9 ~ 1.6m (平均 1.2m) と柱間距離が狭い一群 (4 条 = S A 1 ~ 3 · 9) と、② 1.7 ~ 2.2m (平均 1.9m) と柱間距離が広い一群 (4 条 = S A 4 · 6 ~ 8) に分かれる。柵列跡の柱穴 (計 55 基) の規模 (全平均値) は長径 37.2cm, 深さ 36.8cm と掘立柱建物跡のそれらとあまり変わらない。S A 4 · S A 7 は長径・深さともに平均値を上回り (特に深さが 58.4 ~ 64.7cm と数値が大きい), S A 5 · S A 6 は長径は平均値を上回るが、深さは 23.5 ~ 32.5cm と浅い。S A 3 は深さ 50cm と深いが長径は 36cm と平均的である。S A 8 は長径・深さともにほぼ平均値で、残る S A 1 · S A 2 · S A 9 の 3 条はいずれも平均値を下回っている。

S A 1 ~ 4 の 4 条は大型建物 S B 3 の西辺 (S A 1 · 2), 東辺 (S A 3) と南辺 (S A 4) の 3 辺に沿うように存在し、特に柱穴規模が大きく柱間距離が広い S A 3 · S A 4 には、S B 3 との関連性が強く窺われる。柱間距離の狭い 4 条のうち、S A 1 · 2 · 9 の 3 条は柱穴規模も小さく、通常の柵列跡としての機能が考えられる。一方、S A 3 · S A 4 · S A 6 ~ 8 の 5 条については、柱間距離が広く、柱穴規模が大きいなど、これら通常の柵列跡とは性格を異にする可能性が高い。即ち、S A 7 は S B 7 の西辺梁行の南延長線と一致し、S B 7 に伴う可能性がある。S A 6 · 8 · 9 は脆弱な地盤に掘り込まれていることから柱穴や根石の流失も考えられ、建物を形成していた可能性が残される。このように見えてくると、明確に通常の柵列跡といえるのは、S A 1 · S A 2 と S A 5 のみとなろう。

根石は S A 2 P 1, S A 3 P 2, S A 3 P 3, S A 3 P 4 の 4 柱穴 (5 点、板石・粗粒黒雲母花崗岩が主体) で見つかっている。柱根は 3 基の柱穴 (S A 1 P 3, S A 1 P 4 と S A 3 P 4)

で検出した。前2者は径3~4cm、後者は径16cmである。柱痕跡はSA7P1(径12cm)から見つかっている。SA1の柱は径3~4cmと柵木として妥当な太さであるが、SA3P4やSA7P1の柱材の太さは柵木というより建物の柱のものである可能性が高い。柱穴からの遺物としては、計5基(SA3P3, SA4P4, SA5P4, SA5P9, SA8P5)から、土師質土器4点(杯2・碗2)、須恵質土器1点(碗)、青磁1点(碗)の6点が出土したが、土師質土器・小皿の出土はみられない。

以上のように、計9条の柵列跡は3条(SA1・2・5)を除いて、既存の建物の一部なり、新たな建物の一部である可能性が高い。しかし、現状では調査区の制約もあり、可能性の示唆に留めておきたい。

③井戸 井戸SE1は池状遺構SX1の内部で検出した方形の木組井戸で、現存規模は内法1m四方、深さ2.4mである。構造的にはいわゆる縦板組隅柱横棟型の木組井戸で、四隅に隅柱、各辺に縦板2~3枚とその背後に添板1~2枚を立て、各辺に4段ずつ角材を渡して横棟とする。縦板(大)(長さ2.4m・幅55cm・厚さ6cm)、同(小)・添板(長さ2.4m・幅30cm・厚さ4cm)、隅柱(長さ2.4m・幅20cm・厚さ10cm)、横棟(長さ92cm・102cm、高さ9cm・14cm、奥行7cm・9cm)と井戸の部材はいずれも大型で、特に縦板・隅柱の長さ・幅・厚さは有数のものである。ただ、最下段の横棟に不要な枘穴が見られたり、釘が打ち込まれたりしていること、また縦板の表面にハツリ痕がみられることなどから、建物の廃材を再利用したと考えられる。

井戸の構築年代については明らかにしないが、使用年代は井戸底面で出土した土器類から集落の年代よりやや古い様相が窺われる。このことは南側に接して存在する大型の建物であるSB7の北辺桁行方向の柱穴P2・P3・P4がSX1覆土を掘り込んでいることからもいえる。また、京都系白色土器の大型の皿(112)が井戸上層(疊層から上位)で出土していることから、15世紀前半までには井戸は廃絶していたと考えられる。

ところで、広島県内では中世の縦板組隅柱横棟型の木組井戸は東広島市道照遺跡^[2]、福山市草戸千軒町遺跡^[3]などでみつかっている。道照遺跡は13~14世紀の集落跡で、SE35は内法長約108cmの木組井戸である。幅20cm、厚さ約3cmの縦板を各辺6枚以上用い、5cm×8cm角の横棟を3段以上設けている。草戸千軒町遺跡では計209基の井戸を検出しているが、形態不明のものを除く191基の9割(173基)が木組井戸で、その1割弱(17基)が縦板組隅柱横棟型のものである。草戸千軒町遺跡の縦板組隅柱横棟型木組井戸の大半(16基)がI・II期(13世紀後半~14世紀中葉)に含まれている。内法長55~120cm、現存部分の深さ(最大)150cmで、内法長は90~110cmのものが8基と多い。内法長110cm以上の大型の井戸は4基存在する。縦板は各辺2~4枚ずつ用いるものが9基と多く、添板も大半の井戸でみられる。縦板は幅30cm程度、厚さ2~3cmのものが大半を占める。横棟は残存状況が悪く明確でないが、2~3段以上は認められる。多くの場合横棟には4~5cm角の角材を用いるが、一部に丸太や面取りして丸太状にしたもののが混在する例もみられる。また、縦板と横棟を釘で緊結した例もある。隅柱は径10~11cm程度(最大15cm)の多

角形に面取りした円柱状のものが8基と多いが、一辺5~15cmの角柱のものも6基存在する。これら草戸千軒町遺跡の縦板組隅柱横桟型の木組井戸はⅠ期~Ⅱ期前半では中心区画とその周辺に、Ⅱ期後半には中心区画に近接する居住地に作られており、草戸千軒町遺跡の井戸のなかでも規模の大きな部類に入るとされている。道照遺跡・草戸千軒町遺跡の類例と比較しても、三太刀遺跡のS E 1は大型である。古代~中世においては、縦板組井戸は丸太くりぬき井戸、横板組井戸に次ぐ格式を持つとされる。岡山・百間川米田遺跡^[5]の鎌倉時代の縦板組隅柱横桟型井戸は内法長60~90cm、縦板の幅30~40cm、厚さ3~4cm、京都・京都大学病院構内A J 18・A J 19区（12~13世紀）では内法長55~112.5cm、縦板は幅22~28cm、厚さ約2cm、同じく平安京左京八條三坊二町（鎌倉時代）では内法長71~103cm、同じく平安京左京八條三坊七町^[6]（13~14世紀）では内法長80~100cm、縦板の幅7~25cm、厚さ1~2cmである。鎌倉・今小路西遺跡^[7]（中世前期）の例は縦板組横桟支柱型のものだが、内法長80~120cmである。このように、当時の中心地を含めた他地域での検出例と比較しても、三太刀遺跡の木組井戸は井戸本体や井戸材の規模など多くの点で匹敵ないしは凌駕するものであることが指摘できよう。

（2）出土遺物について

報告し得たものは一部に過ぎないが、今回の調査ではおびただしい量の土師質土器（小皿・杯・皿・碗）を初め、瓦器（小皿・碗）、輸入磁器（青磁=皿・碗、白磁=皿・碗）、土錘（管状・有溝・棒状）、瓦、石鍋、石硯など多くの遺物が出土した。

a. 土師質土器

小皿274点、杯229点、皿70点、碗65点の計638点で報告遺物790点の8割に達する。大半はA・C区の③層・包含層からの出土で、遺構から出土したものは173点（掘立柱建物跡・欄列跡・単独柱穴出土=51点）である。以下においては、これらの土師質土器を法量・形態・調整等の面から類型化し、遺構出土のものを中心に包含層・③層出土の土師質土器と比較・検討しながら器種別に分析を行いたい。

①小皿 遺構出土の小皿は計64点（遺構数23）である。1遺構からの出土点数はS X 1（11点）、S D 9（8点）以外は1~5点（1点出土の遺構は10）である。法量は、口径5.4~9.7cm（平均7.78cm）、器高0.85~2.15cm（平均1.32cm）、低平度0.12~0.26（平均0.19）である。ここでは、出土点数の多いA区包含層・同③層出土の小皿を中心に比較し、必要に応じてC区の包含層・③層及びD区③層出土のものを加える。

まず、法量では、A区包含層出土の小皿計87点の口径6.1~8.8cm（平均値7.44cm）、器高1.15~3.1cm（平均値1.88cm）、低平度0.14~0.47（平均値0.26）、A区③層出土の小皿計75点の口径5.8~8.8cm（平均値7.32cm）、器高0.9~2.8cm（平均値1.83cm）、低平度0.13~0.37（平均値0.25）となり、両者の法量はよく似ている。これに対して、遺構出土の小皿の法量は、口径はやや上回るが器高・低平度とも包含層・③層のそれらに及ばない。つまり、遺構出土の小皿は包含層・③層出土

の小皿に較べてやや大型で低平であると言える。

次に、体部の形態的特長及び類型では、①体部の形状はいずれも直線的なA類（40～60%台）と内湾的なC類（20～30%台）が主体で、内湾→外反・直線のD類（10%台）や外反的なB類（10%未満）が少ない点は共通している。しかし、遺構出土・A区③層出土の小皿はA類（40%台）・C類（30%台）が拮抗するのに対し、A区包含層の小皿はA類が60%台、C類は20%台とA類が優勢である。②体部の傾きはいずれも通常のa類（50～80%台）が圧倒的に多く、次いで開き気味のc類（10～40%台）、直立気味のb類（3～5%）となる。a類とc類の比率は、A区包含層と③層出土の小皿がa類（70～80%台）、c類（10%台）と隔たりが大きいのに対して、遺構出土の小皿はa類（53.1%）とc類（43.8%）が拮抗する。これは次の低平度と密接な関連性を持っている。即ち、③低平度は、A区包含層・③層ともに通常のI類が50%台、低平なIII類が30%台、器高が高いII類が1割程度であるのに対して、遺構出土の小皿は低平なIII類が8割以上を占めるが、I類は10%台に過ぎずII類は皆無である。類型別では、Aa I・Aa III・Ca I・Ca IIIなどが上位を占め、比較的似た傾向を示すが、A区包含層やA区③層で最も多いAa Iが遺構出土の小皿では僅か6%に止まり、同一の形状でより低平なAa IIIが最も多くなる点が特徴である。

調整面では、底部切り離しと板目痕、内底面の一定方向のナデつけ及び内底面・体部外面下端の未調整部分について主にみてみる。底部切り離しは回転糸切り離しが大半で、回転ヘラ切り（可能性のあるものを含む、計13点）は遺構出土（64・127）、A区包含層（245・250・260）、A区③層（488）、C区包含層（427～429・431）、調査区（664・667・674）とそれぞれ1～4点に過ぎない。C区包含層の出現頻度がやや高い。類型的には特定の類型に偏ることなく分散的である。ただ、外反気味の体部を持つB類は出土点数が少ない割に回転ヘラ切りの出現頻度が高い（4点／18点）。概して、回転ヘラ切りを施した小皿は口径・器高が平均より小さく、低平である。

底部回転糸切り離しの小皿の1～3割には板目痕が認められる（遺構出土=18点、A区包含層=17点、A区③層=11点）。筵目状の板目痕はA区包含層・A区③層では各2点に過ぎないが、遺構出土の小皿では半数近く（7点）にみられる。板目痕の認められる器形は、体部の形状はA区③層では分散的だが、A区包含層ではA類（6点／56点）、C類（7点／19点）、D類（4点／9点）とC・D類の出現頻度が高い。また、遺構出土の小皿ではA類（11点／30点）、C類（4点／22点）、D類（3点／9点）とA類が主体を占める。体部の傾きでは、A区包含層では17点中13点と大半がa類だが、A区③層（c類=7点／14点、a類=4点／57点）と遺構出土（c類=13点／28点、a類=5点／34点）ではc類が出土点数・頻度ともに優勢である。低平度では、A区包含層がI類（4点／46点）、II類（1点／9点）、III類（13点／32点）、A区③層がI類（3点／44点）、III類（8点／25点）、遺構出土がIII類（18点／55点）のみとなり、いずれもIII類の出土点数が最多で、出現頻度も30～40%台と高い。これらから、板目痕は開き気味で低平な器形に主としてみられることが分かる。類型的には共通してAc IIIが主体を占める。

未調整部分については、①内底面のみ未調整のもの、②体部外面下端のみ未調整のもの、③内底面・体部外面下端の両方が未調整のもの、の3つに分けることができる。A区包含層（29点=

①15点、②3点、③11点)、A区③層(25点=①8点、②8点、③9点)、遺構出土(7点=①5点、②1点、③1点)となり、その出現頻度はA区包含層・A区③層が3割を超のに対して、遺構出土の小皿は1割程度に過ぎない。A区包含層では①・③、遺構出土では①の内底面未調整の頻度が高いが、A区③層では①~③が同じようにみられる。この未調整部分が残る小皿は類型的には、A区包含層では①~③ともA Iが優勢だが、A区③層・遺構出土の小皿では分散的で、特定の類型には集中しない。ただ、体部の形状では、A区包含層・遺構出土の小皿ではA・C類、A区③層ではA・C・D類の出現頻度が高い。低平度は、A区包含層・③層の小皿ではI類が5割近い出現頻度を示すのに対して、遺構出土の小皿ではⅢ類が多数を占める。

次に、一定方向のナデつけでは、①内底面に一定方向のナデつけのみを施すもの、②内底面に一定方向のナデつけを施し、体部外面下端には未調整部分を残すもの、の2つがみられる。A区包含層(21点=①15点、②6点)、A区③層(10点=①7点、②3点)、遺構出土(24点=①19点、②5点)で、その出現頻度は遺構出土の小皿が最も高く37.5%を示し、次いでA区包含層の24.1%、A区③層の小皿では13.3%に止まる。類型的には、A区③層では分散し特定の類型への偏りは見られないが、体部の形状でA区包含層はC類(8点/19点)・D類(6点/9点)、遺構出土の小皿ではA類(16点/30点)・D類(6点/9点)の出現頻度が高く、低平度の点ではA区包含層(12点/32点)、遺構出土(20点/55点)とともにⅢ類の頻度が高い。このことから、一定方向のナデつけは直線的か内湾気味の形状の体部で、低平な器形に比較的多く出現するといえよう。

色調は淡黄褐色を主体に淡橙色のものが多い。一定の割合で焼成が非常に良好な個体がみられる(A区包含層=6点、A区③層=12点、遺構出土=12点)。A区③層・遺構出土の小皿では黄白色や灰白色の色調のものとの関連性がみられ、遺構出土の小皿ではSB3、SE1、A・P3(各3点)など特定の遺構からやや集中的に焼成が良好なものが出土している。

②杯 遺構出土の土師質土器・杯は計60点(遺構数14)で、D区S D11から35点出土しているが、他の遺構は1~6点の出土である(1点出土の遺構は8)。法量は、口径8.7~14.3cm(平均11.26cm)、器高3.0~4.2cm(平均3.65cm)、低平度0.26~0.38(平均0.33)である。ここでは、出土点数が多いA区包含層・A区③層・C区包含層出土の杯と主に比較し、必要に応じてC区③層・D区③層出土の杯を加える。

先ず、法量ではA区包含層の杯(78点)の口径9.8~12.0cm(平均10.98cm)、器高2.9~4.3cm(平均3.53cm)、低平度0.25~0.40(平均0.32)、A区③層の杯(28点)は口径9.8~12.6cm(平均11.08cm)、器高2.9~4.4cm(平均3.51cm)、低平度0.27~0.40(平均0.32)、C区包含層の杯(31点)は口径10.4~13.7cm(平均11.25cm)、器高3.25~4.1cm(平均3.27cm)、低平度0.28~0.38(平均0.33)となる。C区③層(7点)とD区③層(10点)を含めても、これらは平均値で口径10.96~11.26cm、器高3.51~3.72cm、低平度0.32~0.34のごく狭い範囲に納まり、よく似た法量を示す。強いて分ければ、全体に高い数値を示すC区包含層・C区③層・D区③層と低い数値のA区包含層・A

区③層に分かれ、遺構出土の杯の法量は前者に近い。ただ、口径だけでみてみるとやや様相が異なる。口径の平均値が $10.96\sim10.98$ cmのA区包含層・C区③層・D区③層の杯と口径 11.08 cmのA区③層の杯、そして口径 $11.25\sim11.26$ cmのC区包含層・遺構出土の杯に分かれる。C区③層・D区③層の杯は、器高・低平度は値が高く遺構出土・C区包含層の杯の法量値に近いが、口径は平均より小さく、A区包含層やA区③層の杯に近い数値を示している。つまり、本遺跡出土の土師質土器・杯は口径・器高・低平度とも類似した数値を示すが、A区包含層・A区③層出土の杯はいくらか小振りで、遺構出土・C区包含層出土の杯はやや大型である。そして、C区③層・D区③層の杯は口径は小さいが、器高・低平度はやや高めで前2者の折衷的な様相を示している。

次に、体部の形態的特徴と類型では、大きくはA区包含層・A区③層とC区包含層・C区③層・D区③層に分かれ、遺構出土の杯は後者に近い傾向を示している。即ち、先ず体部の形態的特徴では、遺構出土の杯はA類・I類が半数近くを占め、C類・D類・III類も $20\sim30\%$ 台と比較的よくみられるが、B類・II類は少ない。C区包含層出土の杯はI類が7割近くを占め、D類・C類・A類・III類も $20\sim30\%$ 台と優勢だが、B類・II類は劣勢である。C区③層・D区③層出土の杯はD類・A類・I類が多く、B類・C類・II類・III類はあまりみられない。以上の4者は、ほぼI類・A類を中心に、C類・D類・III類がよくみられるが、B類・II類（一部ではC類・III類も）劣勢傾向にある。一方、A区包含層出土の杯はA類・I類が5割前後を占め、B類・D類・III類も $20\sim30\%$ 台と比較的よくみられるが、II類・C類は少ない。また、A区③層出土の杯はD類・I類が5割程度と主体的で、B類・III類も $30\sim40\%$ 台と高い優位を保つが、A類・C類・II類は皆無か殆どみられない。これら2者においては、I類・D類・III類が優勢である点は前4者と変わらないが、B類の優勢化やC類の劣勢化とA類の劣勢傾向が窺える。言い換えれば、遺構出土・C区包含層・C区③層・D区③層出土の杯では主体的な内湾気味の体部を持つC類が、A区包含層・A区③層出土の杯では殆どみられず、A区③層では直線的な体部のA類が極端に少ない。かわりに外反気味な体部のB類が優勢傾向にある。B類の体部は遺構出土・C区包含層・C区③層・D区③層出土の杯では殆どみられない。全体を通じて、内湾→直線・外反のD類が優位を保つ。

調整面では、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデが基本である。回転ヘラ切りは皆無で、板目痕も小皿ほど出現頻度は高くない。最も多いA区包含層で7点、遺構出土の杯で4~6点、A区③層が4点、C区③層が2点で、C区包含層・D区③層の杯には板目痕はまったく認められない。

次に、未調整部分について（ $72\text{点}/214\text{点}=33.6\%$ ）は、C区③層を除いて、 $30\sim60\%$ と高い出現頻度を示す。①~③がほぼ均等に出土しているが、体部外面下端にのみ未調整部分を残す②が31点（43.1%）と最も多く、内底面のみ未調整の①が24点（33.3%）、両者が併存する③が17点（23.6%）である。A区③層・C区包含層では②が6~7割を占めるが、遺構出土・A区包含層では①・②がいくらか優勢で、③がやや少ないものの比較的均等である。D区③層では①が優勢で、③がいくらか劣勢で、②はみられない。類型的には、A a I=18点（25.0%）、D a I=15

点(20.8%)、C a I = 10点(13.9%)が主体である。A a Iは①・②が多く、C a Iは②・③が多い。D a Iは②を中心に③・①にもみられる。

内底面の一定方向のナデつけは、未調整部分ほど出現頻度は高くない(28点/214点=13.1%)。A区包含層(14点=17.9%)・A区③層(9点=32.1%)が主で、ほかには遺構出土(3点)、C区包含層・D区③層各1点があるのみである。①内底面に一定方向のナデつけのみを行うもの(18点=64.3%)、②内底面の一定方向のナデつけ+体部外表面下端の未調整のもの(10点=35.7%)とに分かれ、①がやや多い。類型的にはD a III=12点(42.9%)、D a I・A a III=各6点(21.4%)が大半を占める。①はD a III・D a I・A a IIIが各5点で全体の8割余りを占めるが、②はD a III(7点)が7割と大勢を占める。全体的には、一定方向のナデつけは内湾→直線・外反気味の体部で、低平な器形に主体的にみられる。ただ、A区包含層の①では、内湾→直線・外反気味の体部で通有な低平度のものや直線的な体部で低平な器形も優勢である。

C区包含層(13点=41.9%)や遺構出土(5点=8.3%)の杯を中心に、内底面中央が強く凹むものがみられる。計20点で、類型的にはD a I(7点)、A a I(6点)が主体である。体部の形状ではD類(8点)・A類(7点)・C類(5点)、低平度ではI類(15点)が大勢で、一部にIII類(4点)がみられる。

色調は淡黄褐色(40~50%)・淡橙色(20~40%)が大半を占める。焼成が非常に良好な個体が45点(21.0%)存在する。遺構出土の杯で14点=23.3%、A区包含層出土の杯で21点=26.9%と大半を占める。類型的には、A a I(15点)と多く、次いでD a I(6点)、C a I・D a III各5点、A a III(4点)などが優勢である。色調としては、淡橙色(22点=48.9%)、淡黄褐色(15点=33.3%)が大半を占め、橙色(5点)・黄白色(2点)・暗褐色(1点)となる。出土地点毎に特定の類型が集まることは殆どなく分散的だが、D a IIIは4点/5点がA区包含層に集中する。

③皿 遺構出土の土師質土器・皿は計25点(遺構数8)で、S D 10(10点)、S X 1・S E 1各5点を除けば、1遺構あたり1~2点出土している。法量は口径9.8~15.2cm(平均12.36cm)、器高2.05~4.1cm(平均2.94cm)、低平度0.17~0.28(平均0.24)である。出土点数的に多いA区包含層(26点)を中心に比較し、必要に応じてA区③層(7点)以下の皿を加える。

先ず、法量ではA区包含層出土の皿は口径10.5~13.2cm(平均12.20cm)、器高2.35~3.6cm(平均3.07cm)、低平度0.19~0.29(平均0.25)、A区③層(平均値)出土の皿は口径11.17cm、器高2.79cm、低平度0.25である。これらと較べて、遺構出土の皿は口径は大きく、器高はほぼ同じであり、より低平である。即ち、遺構出土の皿はA区包含層・A区③層出土の皿に較べるとやや大ぶりで低平な器形であることが分かる。

体部の形態的特徴及び類型では、①体部の形状はいずれも内湾気味のC類(40~70%台)を主体に直線的なA類(20~30%台)が優勢で、内湾→直線・外反気味のD類や外反気味のB類は皆無に近い。②体部の傾きは通常のa類(50~70%台)が大勢を占めるものの、開き気味のc類も

20~40%台と一定程度みられる。③低平度は、遺構出土の皿ではⅢ類（75%）が大半を占めるが、A区包含層出土の皿ではⅠ・Ⅲ類が半々である。ほかの出土地点でもⅢ類の優勢は動かないがⅠ類も比較的良くみられる。類型別では、遺構出土の皿ではCcⅢ・AaⅢ・CaⅢなどが優勢で、A区包含層ではCaI・CaⅢ・CcⅢ・AaIが優勢である。A区③層はAaⅢ・CcⅢ、C区③層はCcⅢがやや優位である。つまり、内湾気味の体部のC類が全体に多くみられ、直線的な体部のA類が介在する状況である。ただ、遺構出土の皿は大半が低平な器形であるのに対して、A区包含層の皿ではやや器高が高い通有な低平度（Ⅰ類）の器形が一定程度みられる。

調整面では、先ず底部切り離し及び板目痕について見てみると、回転ヘラ切りは遺構出土の皿以外ではみられない。板目痕は全体に30~70%台の高い出現頻度を示す。縦目状の板目痕は1~2点程度みられるに過ぎない。

未調整部分は20%台、内底面への一定方向のナデつけは20~30%台の出現頻度を示す。未調整部分は、遺構出土の皿では①~③が均等に見られるが、A区包含層では①が最も優勢で、③は少ない。類型的には特定のものに集中せず、内湾気味な体部や低平な器形に比較的集まる（CcⅢなど）。内底面への一定方向のナデつけは、遺構出土・A区包含層出土の皿とも内底面のナデつけのみの①が大勢を占め、体部外面下端の未調整部分を併せ持つ②は殆どみられない。

色調は、淡黄褐色（40~50%台）を主体に、淡橙色・淡褐色などがみられる。SE1の硬質の皿では灰白色・暗灰色がみられる。焼成は、非常に良好な個体が4~9点と一定程度みられる。類型的には、CcⅢが多い。

なお、SE1出土の112は口径15.2cmと大型のやや丸みを帯びた底部をもつ京都系の白色土器の皿で、硬質である。小森・上村編年の¹⁰V期新段階（15世紀前半）に相当すると考えられる。同様の皿は調査区内から2点出土している（695・696）。695の口径17.1cm、696の口径20.5cmで、口縁部の形状から112よりやや時期が下り、やはり小森・上村編年のIX期中・新段階（15世紀後半頃）に相当すると考えられる。

ここで、本遺跡出土の椀を除く小皿・杯・皿について、遺構出土（古）→A区包含層→A区③層（新）という時間軸のなかで形態の変遷の概略を示しておきたい。先ず、小皿・杯では、体部の形状は直線的なA類、内湾気味のC類の減少と内湾→直線・外反気味のD類や外反気味のB類の増加、体部の傾きでは通常の傾きのa類と開き気味のc類の拮抗からa類の独占化、低平度では低平なⅢ類の減少と通常の低平度のⅠ類の増加傾向がみられる。皿では、A類・c類・Ⅲ類の減少とC類・a類・Ⅰ類の増加として捉えられる。皿における内湾気味の体部が増加する点は別として、全体的には直線的あるいは内湾気味で低平な器形から外反気味で低平度が通有な器形へと変化していくことが指摘できよう。

④椀 遺構出土の土師質土器・椀は計24点（遺構数9）で、SD11（13点）以外は1遺構あたり1~2点の出土である。法量は口径8.6~12.45cm（平均10.27cm）、器高2.5~4.1cm（平均3.34cm），

低平度0.26～0.41（平均0.32）である。底部を欠失しているものもあるが、S A 5の43・44、S X 1の82の無高台のもの3点以外は高台をもつ形態のものである。以下においては、包含層（A区・C区）・③層（A区・C区）から出土した椀と比較検討したい。出土点数は遺構出土の椀に較べると少なく、A区包含層が12点、A区③層が13点、C区包含層が10点、C区③層は4点である。

先ず、法量ではA区③層出土椀が口径9.4～11.45cm（平均10.54cm）、器高2.8～4.0cm（平均3.40cm）、低平度0.26～0.38（平均0.32）、C区包含層出土椀が口径10.0～12.3cm（平均10.81cm）、器高2.9～3.8cm（平均3.35cm）、低平度0.26～0.36（平均0.31）、C区③層出土椀が口径10.2～12.0cm（平均10.85cm）、器高3.2～4.0cm（平均3.53cm）、低平度0.31～0.33（平均0.32）であるのに対して、A区包含層出土椀は口径8.5～10.1cm（平均9.38cm）、器高2.4～3.45cm（平均2.85cm）、低平度0.27～0.35（平均0.30）である。遺構出土・A区③層・C区包含層・C区③層出土椀の平均値が口径10.27～10.85cm、器高3.34～3.53cmであるのと較べて、A区包含層出土椀は小型である。低平度は前者が0.31～0.32、後者が0.30と大差ない。A区包含層出土の椀は9点／12点と大半が無高台のものであり、無高台の椀が口径8.5～10.0cm（平均9.2cm）、器高2.4～3.45cm（平均2.8cm）であるのに対して、有高台の椀3点の口径9.7～10.1cm（平均9.93cm）、器高2.9～3.15cm（平均3.0cm）といずれの数値も有高台の椀が無高台の椀を上回ってはいるものの、有高台の椀の法量をほかの地点から出土した椀のそれと較べてみると、いざれも大きく下回っている。つまり、A区包含層の椀は無高台のものが主体を占めるが、有高台の椀を含めて他の地点から出土した椀よりも小型であることが分かる。

形態的には、有高台の椀はやや内湾気味に外上方に延びる浅いボウル状の低平な体部に高台径3～4cm、高さ2～3mmほどの粗雑な高台を貼り付けたものが大勢を占めるが、一部に体部の内湾の度合いが大きく重心が低いものが見られ、これらは概して大型品である。

調整面では、体部内面は丁寧なナデで一部に横方向・斜め方向とナデの方向が分かるものがある。体部外面上半は回転ナデなど横方向のナデを施す。そのために壁面が凹み、ために外面中位に稜が形成されるが、稜が不明確な場合も多い。A区包含層・C区包含層出土のものは比較的稜が鮮明だが、A区③層・C区③層出土のものは稜が緩やかなものが目立つ。遺構出土の椀ではSD11の椀がやや緩やかな稜をもつものがみられるが全体としては鮮明なものが多い。この体部外面中位の稜を介して体部外面下半～外底面にかけては、未調整のものと指頭ナデを施すものがある。遺構出土の椀では未調整のものが比較的優勢で、そのほかのA区③層・C区包含層・C区③層出土の椀では不明確な部分が多いが概ね指頭ナデがみられるようである。なお、高台内の外底面には一部に板目痕状のものがみられるものがある（37・195・410・597・637）。

高台は上記のようにごく乱雑で簡略化したものだが、幅8mm、厚さ2mm程度の粘土紐を円形に巻いて貼り付けたもので、断面は逆三角形ないし逆台形を呈している。高台の表面には横方向のナデが見られる。外底面との接合面は外側は丁寧にナデ消されているが、高台内側は未調整で接

合面が露呈していることが多い。ただ、C区包含層出土の椀（4点／10点）は内側の接合面も比較的丁寧にナデ消されている例が多い。

色調は黄白色・淡黄褐色にはほぼ限定される。胎土・焼成とこれら色調はそれほど有機的な関連性は見出せないが、大まかに言えば黄白色のものは1～2mm大の砂粒を比較的多く含み、淡黄褐色のものがむしろ胎土が精良な場合が多くみられる。ただ、黄白色という色調は椀以外の器形ではごく稀にしかみられない色調であり、逆に淡黄褐色は他の器形に通有の色調であることからすると、このいわゆる吉備系椀と見られる黄白色の椀は吉備地域からの搬入品であり、淡黄褐色の椀はそれを模した在地産の椀である可能性が高い。

b. 瓦器

計7点（小皿1・椀6）の瓦器が出土している。いずれも遺構からの出土で、椀18・125が掘立柱建物跡（SB3・SB11）、小皿55と椀高台片51がB区の単独柱穴（B・P8, B・P2）、椀85は池状遺構SX1、椀151・153はC区の溝状遺構（SD9・SD10）から出土した。

椀8・151・153は口径13.9～15.0cm、器高3.4～3.65cmと低平な器形で、内面体部下半から底面にかけてごく粗いミガキ（直線・格子状）を行い、外面口縁部直下に回転ナデによる緩やかな稜を形成する。体部下半から外底面にかけては未調整ないしは指頭によるナデ調整を加える。ごく形骸化した輪状高台を貼付する。法量及び低平度0.23～0.24の低平な器形から和泉型IV-1期に相当すると考えられる。85はこれらに較べると、器壁が立ち気味で器高が高くなる可能性があり、また内面のミガキもほぼ全面的に密にほどこされていることから、和泉型II-3・4期まで遡る可能性がある。125は以上4点と異なり、体部中位でやや明瞭な屈曲をもつ器壁の厚いタイプのもので、内面の口縁部から体部上半にかけて粗いミガキがみられる。外面の体部下半は未調整である。高台片の51とともにその出自は不明である。55は口径7.6cm、器高1.48cmの小皿で、体部内外面にミガキを行い、外底面を中心に指頭によるナデ調整を施している。やや小振りだが、和泉型の椀の一群と時期的にはほぼ併行すると考えられる。

以上のように、本遺跡出土の瓦器は和泉型IV-1期を主体とし、ほぼ13世紀前半～中葉の時期のものとみられる。

c. 輸入磁器

計36点（青磁28点、白磁6点、青白磁2点）出土している。青磁は碗22点、皿4点、合子蓋・香炉？各1点である。白磁は碗4点、皿2点、青白磁は皿、瓶？各1点である。遺構に伴うものは15点（青磁10=碗7・皿2・合子蓋1、白磁4=碗2・皿2、青白磁=皿1）で、掘立柱建物跡SB3・SB7、構列跡SA4、池状遺構SX1、溝状遺構SD9からそれぞれ出土しているが、SX1で10点出土しているのを除けば、いずれも1～2点の出土である。残りの21点はA区包含層（10点）、C区包含層（1点）、A区③層（2点）、B区③層（1点）といった包含層・③層と調査区内（7点）からの出土である。

これらの輸入磁器は、大宰府出土資料による分類によると、以下のようになる。

イ. 遺構出土

- ① S B 3 = 龍泉窯系青磁碗 I-2 類 (19), 白磁皿Ⅶ-2 類 (20)
- ② S B 7 = 龍泉窯系青磁碗 I-2 類 (40)
- ③ S A 4 = 龍泉窯系青磁碗 I-5 類 (22)
- ④ S X 1 = 龍泉窯系青磁小碗 I-4 類 (87), 龍泉窯系青磁碗 I-4 類 (88), 龍泉窯系青磁碗 I-5 類 (89), 龍泉窯系青磁皿 I-2 類 (90), 同安窯系青磁皿 I-1 類 (91), 青磁合子蓋 (92), 白磁碗 V-4 類 (93・94), 白磁皿Ⅵ-2 類 (95), 青白磁皿 (96)
- ⑤ S D 10 = 龍泉窯系青磁小碗 I 類 (152)

ロ. 遺構外出土

- ① A 区包含層 = 龍泉窯系青磁碗 I-2 類 (416), 龍泉窯系青磁碗 I-4 類 (417), 龍泉窯系青磁碗 I-5 類 (418・419), 龍泉窯系青磁小碗 I-4 類 (420), 龍泉窯系青磁小碗 III 類 (421), 同安窯系青磁皿 I-1 類 (422), 青磁香炉? (423), 青磁碗 (425), 白磁碗 V-3 類 (424)
- ② C 区包含層 = 龍泉窯系青磁碗 I-2 類 (483)
- ③ A 区③層 = 龍泉窯系青磁碗 I-5 類 (610), 青白磁瓶? (611)
- ④ B 区③層 = 龍泉窯系青磁碗 I-5 類 (614)
- ⑤ 調査区 = 同安窯系青磁皿 I-1 類 (711), 龍泉窯系青磁碗 I-5 類 (712~714), 龍泉窯系青磁碗 I-4 類 (715・716), 白磁碗 V-4 類 (717)

青磁は、皿 3 点 (91・422・711) が同安窯系 I-1 類、龍泉窯系は皿 1 点 (90) が I-2 類、碗 18 点は無文と割花文 (蓮花折枝文) のものを含む 4 点 (19・40・416・483) が I-2 類、割花文 (飛雲文) のものを含む I-4 類 4 点 (88・417・715・716)、そして体部外面に鏽蓮弁を含む蓮弁文を配する I-5 類 9 点 (22・89・418・419・610・614・712~714) がある。また、小碗は I-4 類 (87・420)・III 類 (421)、そして S D 10 出土の 152 は比較的丸みの強い体部の外面に複弁の蓮弁文、内面に 1 条の沈線下に割花文を配するもので、I-4 類の可能性が高い。

白磁は皿 (20・95) がⅦ-2 類、碗は V-3 類 (424) と V-4 類 (93・94・717) がみられる。

以上のように、本遺跡出土の輸入磁器は 13 世紀前半～14 世紀前半の龍泉窯系青磁碗 I-5 類を中心とし、12 世紀前半～14 世紀前半のものが一部に含まれる。量的には 12 世紀後半～14 世紀前半に含まれるものが多いが、耐久消費財である輸入磁器の使用の時間差を考えると、遺構の年代と直ちに結び付けることはできない。因みに、遺構毎に出土した輸入磁器の年代を見てみると、S B 3・S B 7・S A 4・S D 9 はいずれも 13 世紀前半、S X 1 は 12 世紀後半～13 世紀前半となる。S X 1 がやや先行するが、掘立柱建物跡・櫛列跡・溝状造構はほぼ同時期である。また、包含層・③層は、A 区包含層が 12 世紀前半～14 世紀前半と幅があるが 14 世紀前半を中心とするものがやや目立つ。C 区包含層は 12 世紀後半～13 世紀前半、A 区③層・B 区③層とともに蓮弁文の龍泉窯系碗 I-5 類が出土しており、13 世紀前半～14 世紀前半の年代が与えられる。包含層・③層出土の輸

入磁器の年代は概して遺構出土のそれよりも新しいが、C区包含層出土の輸入磁器の年代は、A区包含層やA区③層などから出土した輸入磁器の年代よりも遅る。

(3) おわりに

最後に、本遺跡の時期と性格については、今回の調査が広大な三太刀遺跡のごく一部分に止まっており、十分な検討は今後の調査成果を踏まえた上で行われるべきだと考えられるので、ここでは、上記の調査内容の分析から導き出された事実関係にのみ簡単に触れて終わりにしたい。

先ず、遺構については、掘立柱建物跡・横列跡を中心に井戸・墓・鍛冶遺構などがあるが、建物跡は一部を除いてほぼ同一方向を指し、柱間距離も2m前後とほぼ同じであることから、ほぼ単一の時期の集落跡とみられる。SB10やSB13はほかの建物跡と主軸方位がずれしており、特にやや東偏するSB13はSA9とほぼ同じ方向を指している。SB5出土の椀37は他の椀と較べて口径が大きく(11.8cm)、また高台が高く造りも整美であり、ほかの椀の粗雑な高台とは異なることから時期が遅ると思われる。また、墓SK4はSB11と重複し、その柱穴を壊して造られている。出土した皿131・132はほかの皿とは異なり、体部が外反気味に延びる低平な器形である。これと比較的良く似た小皿がSB13からも出土しており(155)、これらの皿や小皿から、SK4やSB13・SA9は草戸縄年のⅢ～Ⅳ期に下る可能性がある。一方、池状遺構SX1・木組井戸SE1は一体で同一の時期と見られるが、SE1の底面から出土した椀107は、比較的造りが丁寧で整美なことから草戸縄年のⅠ期後半の椀に類似すると考えられる。よって、少なくともSE1の使用年代は本集落の主体的な時期よりも遅ると考えられる。ただ、SE1の上・中層で出土した京都系の白色土器の皿から、井戸の廃絶時期が15世紀前半にまで下る可能性が考えられるところから、SX1の覆土を掘り込んで建てられたSB7の構築年代は更に下ることになる。

本集落跡の中心的な時期は、その退化した粗雑な吉備系椀(椀B)の主体的な存在から草戸縄年のⅡ期(14世紀前半～中葉)を中心とした時期と考えられる。そして、古くはSE1の使用年代から13世紀後半まで遡り、新しくはSE1の廃絶に伴うとみられる京都系の白色土器やA区包含層での椀Aの存在、さらにはSK4やSB13出土の外反する低平な皿・小皿の存在などから15世紀に及ぶ可能性が考えられよう。

本遺跡は從来から沼田荘地頭小早川氏が東国から下向して最初に定めた拠点であるとの伝承をもつ。本遺跡は鎌倉時代から戦国時代にかけて当地域で勢力を維持した小早川氏の拠点である沼田荘域に位置し、今回の調査では大型の建物跡や有数の規模の木組井戸、膨大な量の土師質土器の出土、中国からの輸入磁器や京都を中心とした畿内との交流を物語る京都系の白色土器や和泉型瓦器の存在、そして吉備地域との繋がりを示すまとまった量の吉備系椀の出土など質的、量的に一般の中世集落跡を超える内容の一端が明らかになった。しかし、その具体的な様相については、今後の調査の進展を待って改めて検討したい。

註

- (1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (2) 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『道照遺跡』 1982年
- (3) 岩本正二「井戸」「草戸千軒町遺跡発掘調査報告」V 広島県教育委員会 1996年
- (4) 鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V 広島県教育委員会 1996年
以下、草戸千軒町遺跡の土師質土器の編年はこの論文による。
- (5) 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会『百間川米田遺跡』3 1989年
- (6) 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告』II 1981年
- (7) 財團法人古代學協會『平安京左京八條三坊二町』 1983年
- (8) 財團法人京都文化財団『平安京左京八條三坊七町』 1988年
- (9) 鎌倉市教育委員会『今小路西遺跡発掘調査報告書』 1993年
- (10) 註(1)と同じ。
- (11) 百瀬正恒・橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展開」『考古学ジャーナル』299 ニュー・サイエンス社 1988年
橋本久和「瀬戸内の中世土器」「中世土器研究序説」 真陽社 1992年
- (12) 橋本久和「吉備系土師器碗の分布」「立命館大学考古学論集」I 立命館大学考古学論集刊行会 1997年
- (13) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』4 九州歴史資料館 1972年
- (14) 三原市『三原市史』第一巻通史編一 1977年
本郷町「本郷町史」通史編 1996年



a 遺跡遠景（空中写真、
南東から）



b 遺跡全景（空中写真、
南東から）



c 遺跡近景（南東から）



a 遺跡全景（南西から）



b 遺跡全景（空中写真、
南西から）

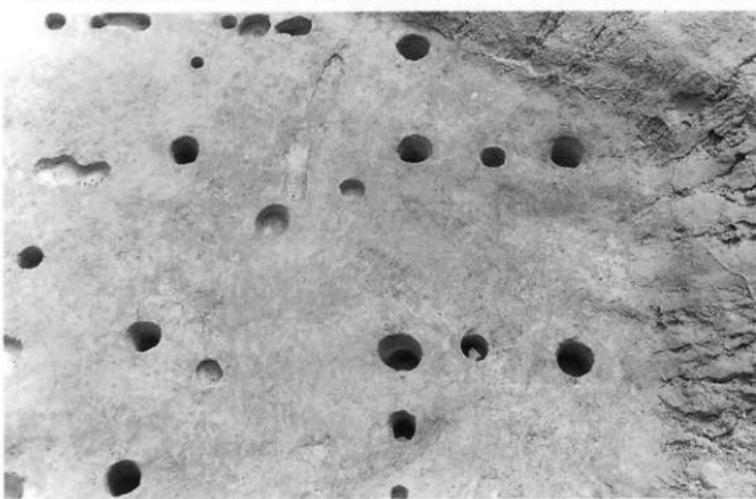


c 遺跡全景（空中写真、
北から）

a A区全景（東から）



b A区SB1（北から）

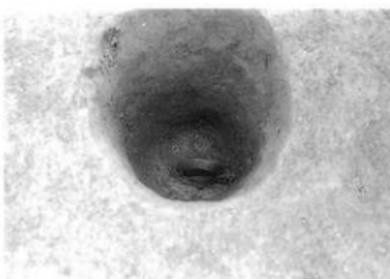


c A区全景（南から）

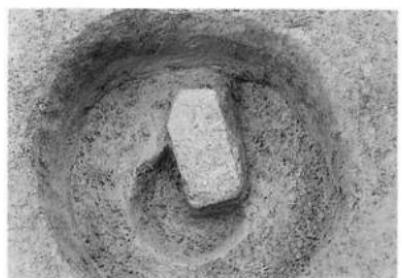




a A区SB1P3 (北東から)



b A区SB1P4 (南東から)



c A区SB2P2 (西から)



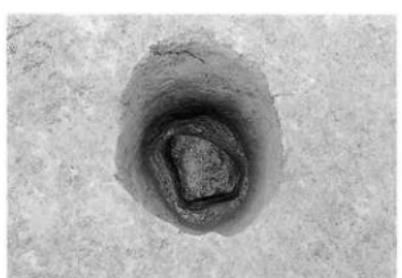
d A区SB2P4 (南西から)



e A区SB3P2 (南東から)



f A区SB3P3 (北東から)



g A区SB3P4 (北から)



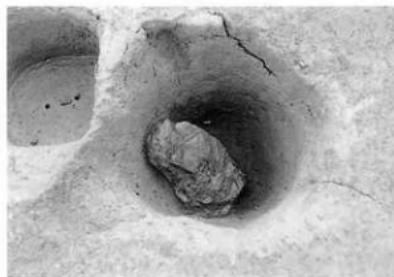
h A区SB3P5 (南東から)



a AKB3P10 (西から)



b AKB3P11 (東から)



c AKB3P12 (南東から)



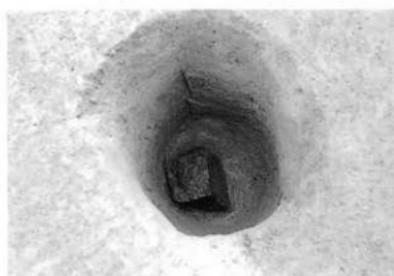
d AKB3P13 (東から)



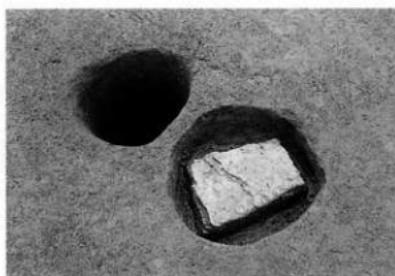
e AKB3P14 (南から)



f AKB3P17 (南東から)



g AKB3P18 (南東から)



h AKB3P19 (南東から)



a A・S A 3 P 2 (南西から)



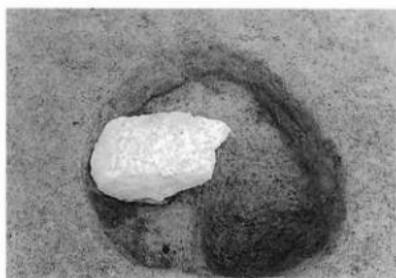
b A・S A 3 P 3 (南から)



c A・S A 3 P 4 (南から)



d A・S A 3 P 4 (南から)



e A・S A 4 P 1 (北東から)



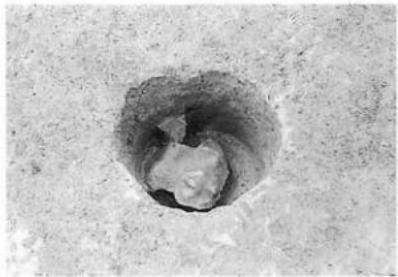
f A・P 1 (北東から)



g A・P 4 (東から)



h A・P 6 (東から)



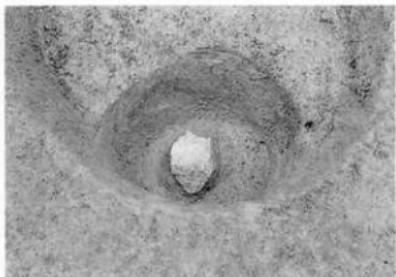
a A · P 7 (南西から)



b A · P 9 (南から)



c A · P 10 (北西から)



d A · P 13 (南西から)



e B区全景 (西から)



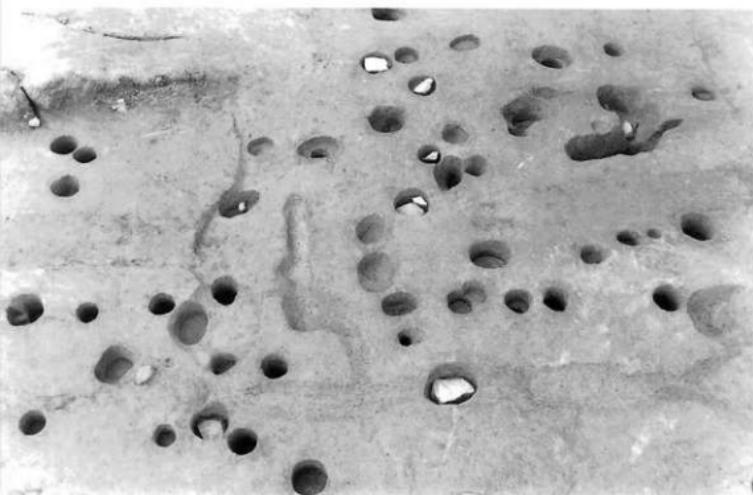
f B区全景 (北西から)



a B区全景（北西から）



b B区SB4・SB5
(南東から)



c B区SB4・SB5
(南東から)



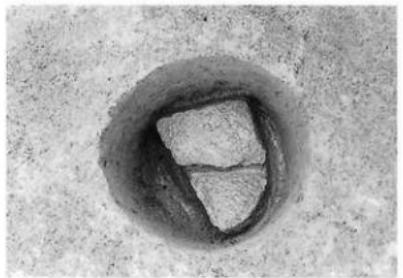
a B区全景（南から）



b B区SB 7～SB 9
(北東から)



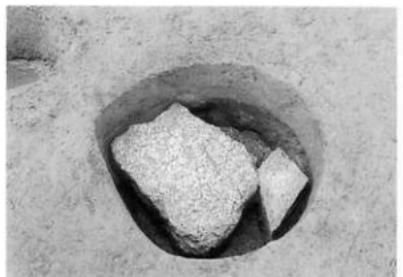
c B区全景（北東から）



a B区SB4P2 (北から)



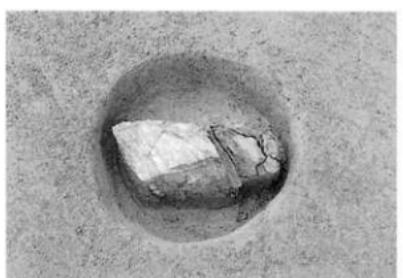
b B区SB4P3 (南から)



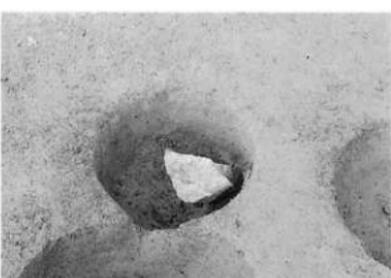
c B区SB4P4 (東から)



d B区SB4P5 (南から)



e B区SB5P4 (東から)



f B区SB5P5 (東から)



g B区SB5P10 (南東から)



h B区SB6P8 (南東から)



a B区SB6P10 (南から)



b B区SB7P1 (下石, 北東から)



c B区SB7P2 (南東から)



d B区SB7P3 (南東から)



e B区SB7P5 (上石, 南から)



f B区SB7P4 (南東から)



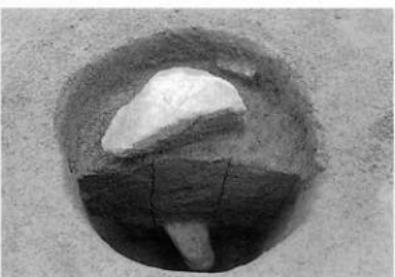
g B区SB7P5 (下石, 南東から)



h B区SB7P6 (北東から)



a B区SB7P7 (北東から)



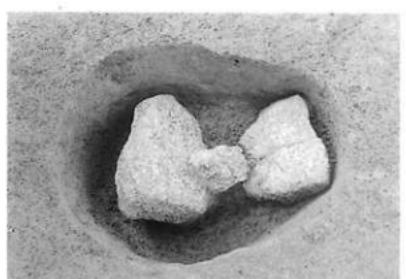
b B区SB7P13 (北西から)



c B区SB7P9 (北東から)



d B区SB7P13 (北西から)



e B区SB7P18 (北東から)



f B・P1 (南東から)



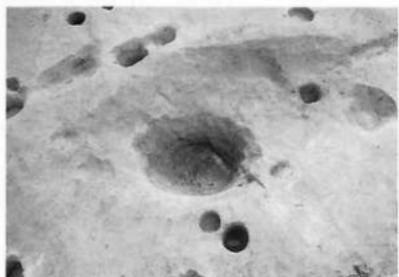
g B・P7 (北東から)



h B・P10 (東から)



a B区SK 1 (北から)



b B区SK 1 (北から)



c B区SK 1 遺物出土状況 (南から)



d B区SK 1 遺物出土状況 (西から)



e B区SK 2 (北から)



f B区SK 3 (南から)



g B区SA 5・SD 5 (東から)



h B区SA 6 (西から)



a B区SX1 (北東から)



b B区SE1 (南西から)



c B区SE1 (南西から)



a B区SE1 (掘り下げ前, 北西から)



b B区SE1 (方形高まり土層, 南西から)



c B区SE1 (中層礫群, 南西から)



d B区SE1 作業風景 (南西から)



e B区SE1 作業風景 (西から)



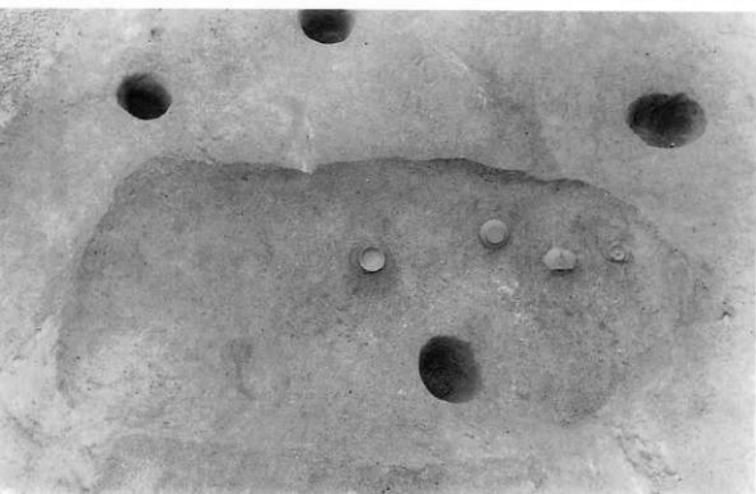
f B区SE1 (東側背後, 東から)



a C区全景（北西から）



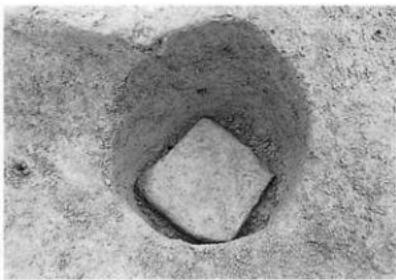
b C区全景（北から）



c C区SK 4（南東から）



a C区SK 4 (南から)



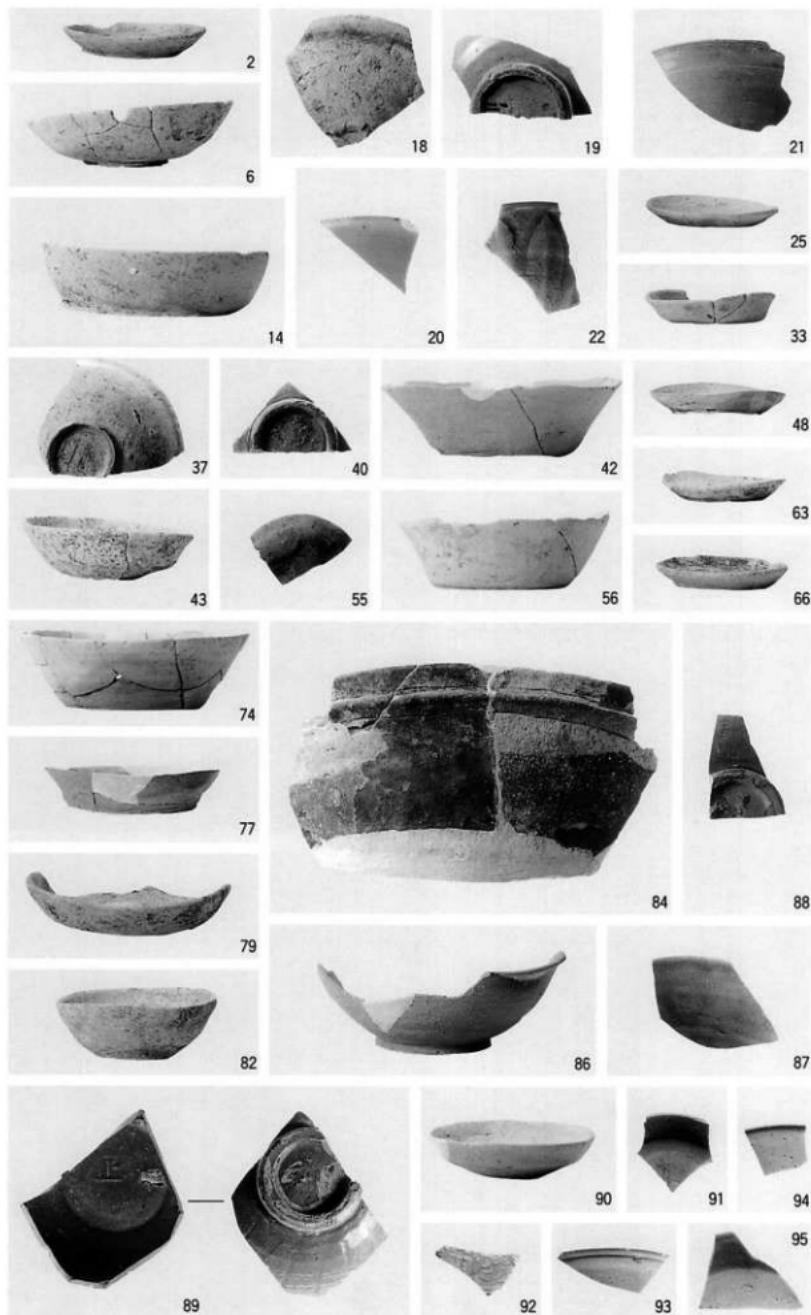
b D・P I (北西から)



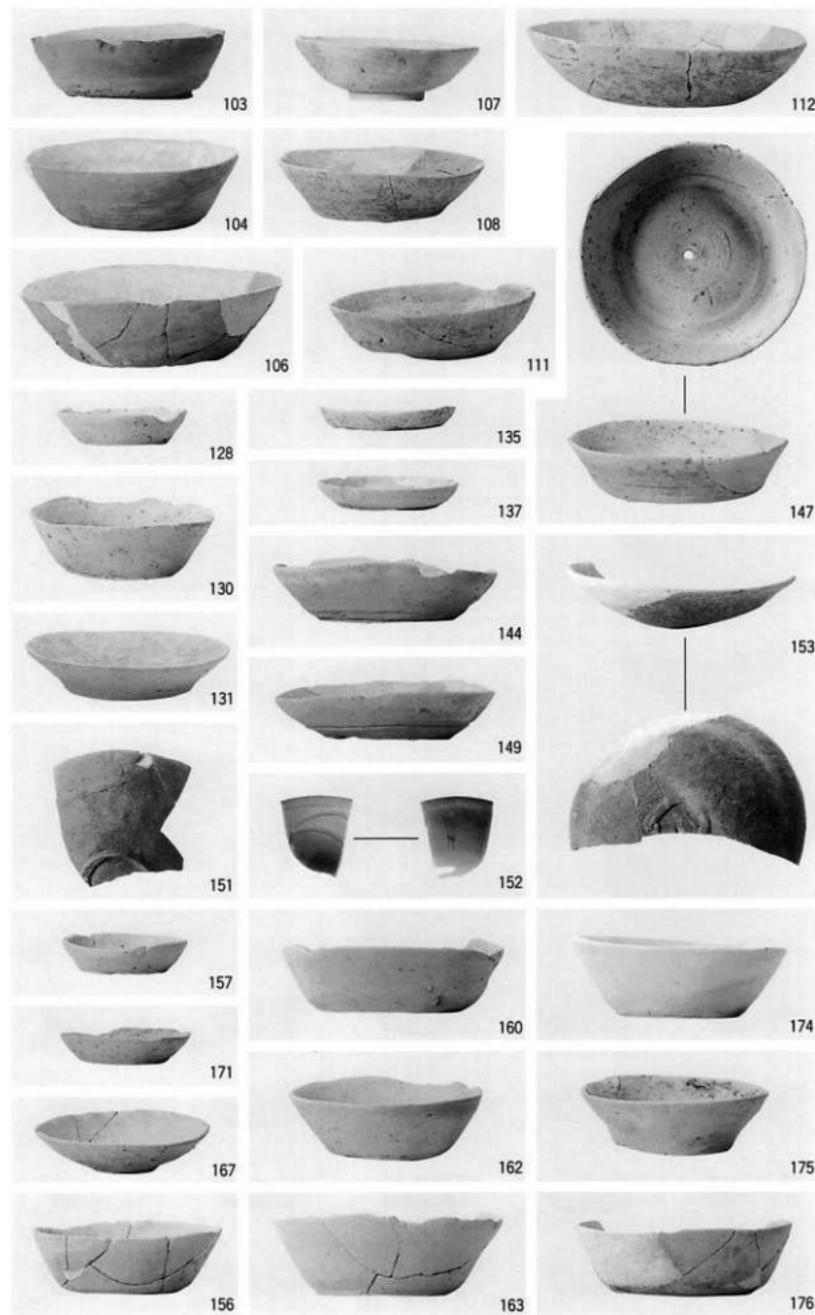
c D区全景 (北西から)



d D区S B 13 (西から)

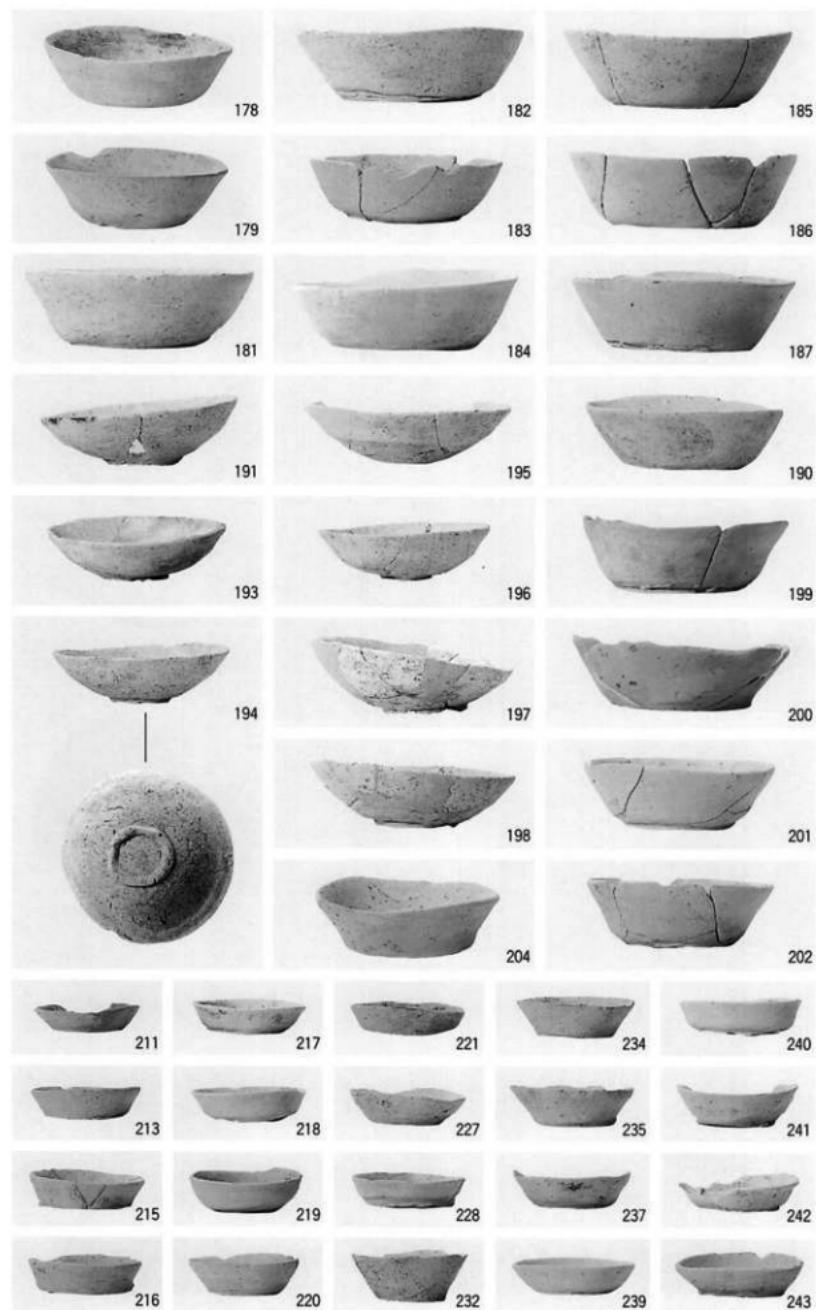


出土遺物（1） 土器類 A・B区遺構出土



出土遺物（2） 土器類

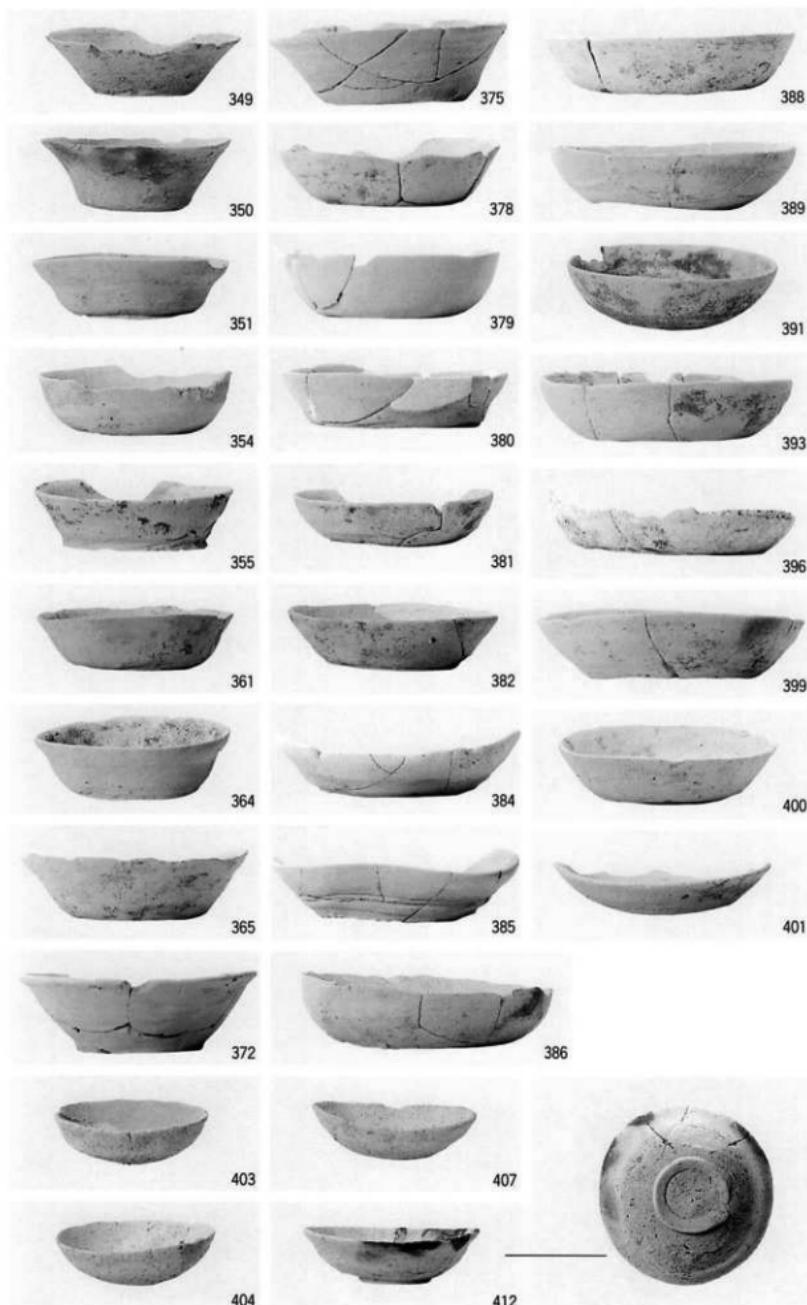
B・C・D区遺構出土



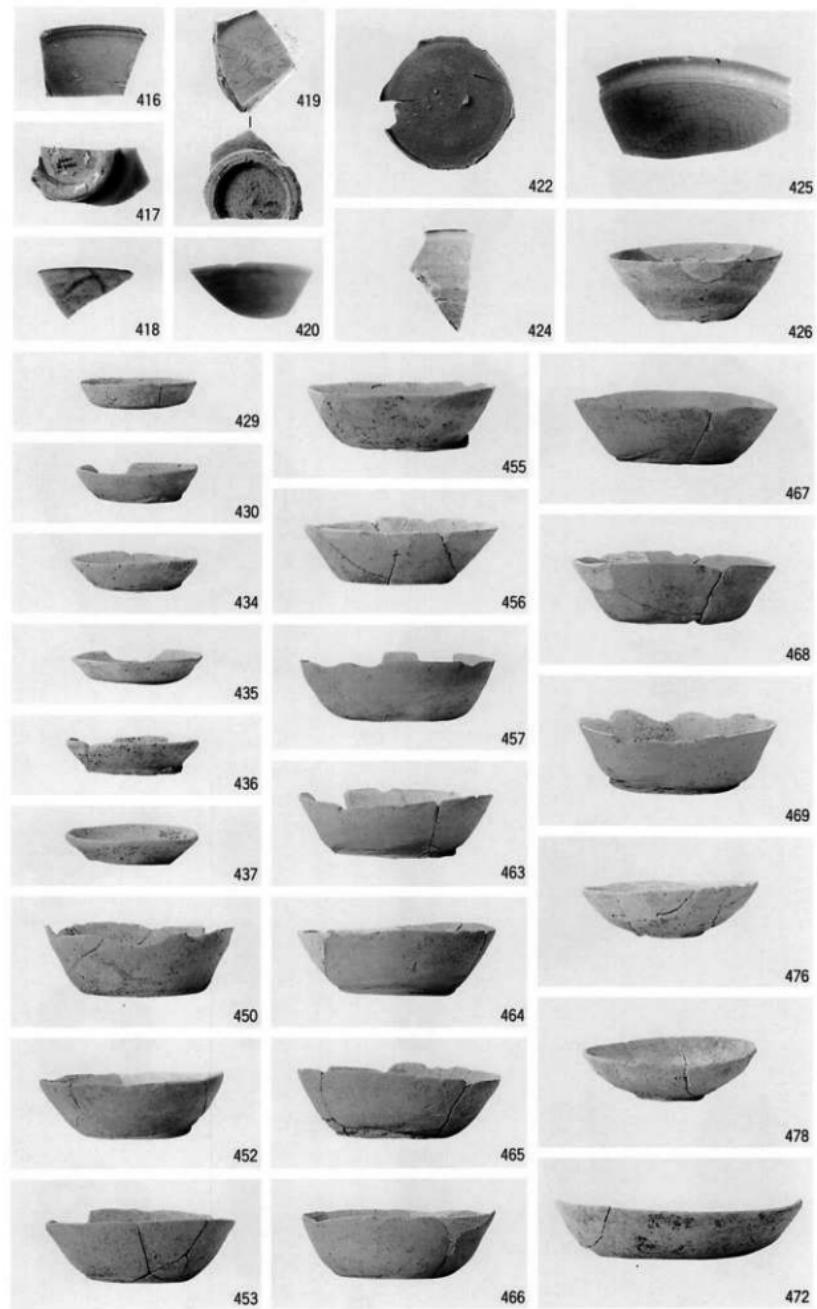
出土遺物（3） 土器類 D区遺構・A区包含層出土



出土遺物（4） 土器類 A区包含層出土

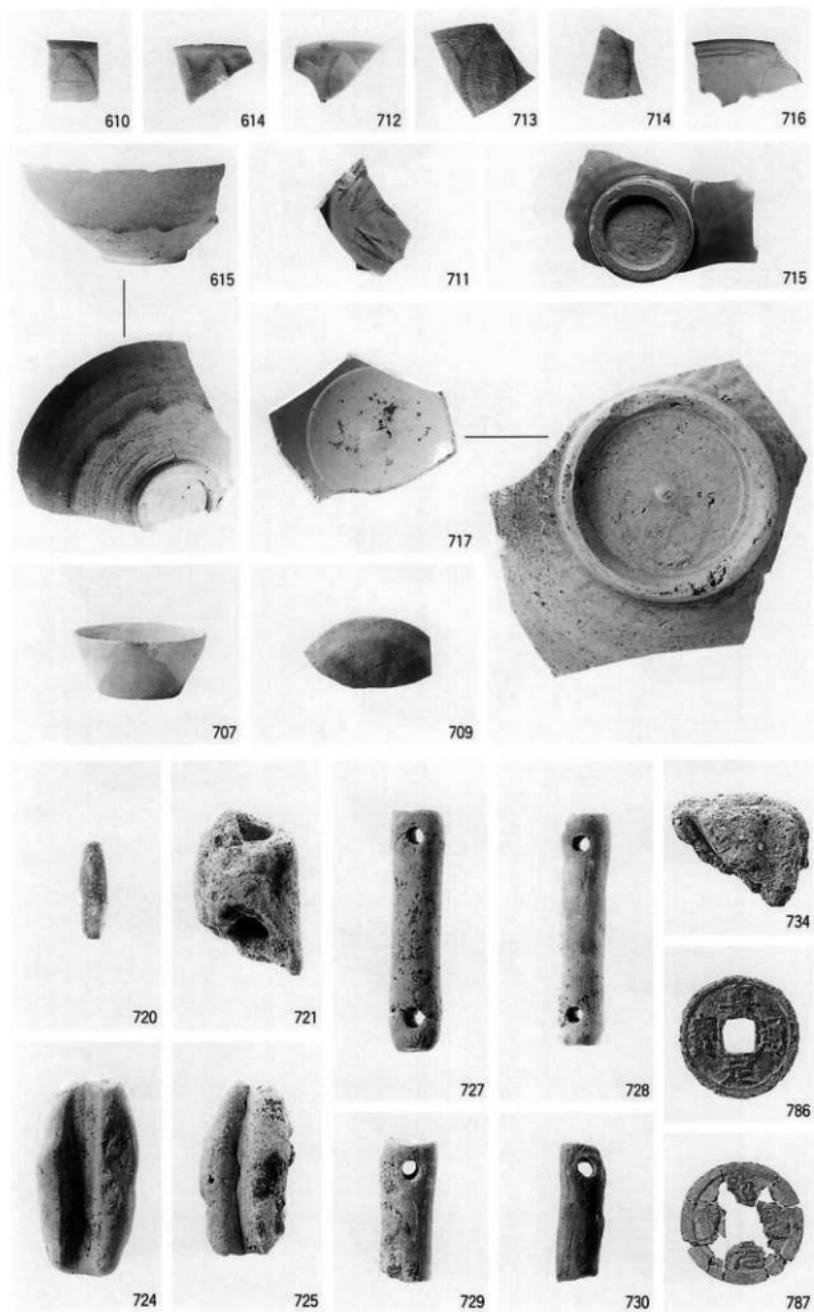


出土遺物（5） 土器類 A区包含層出土

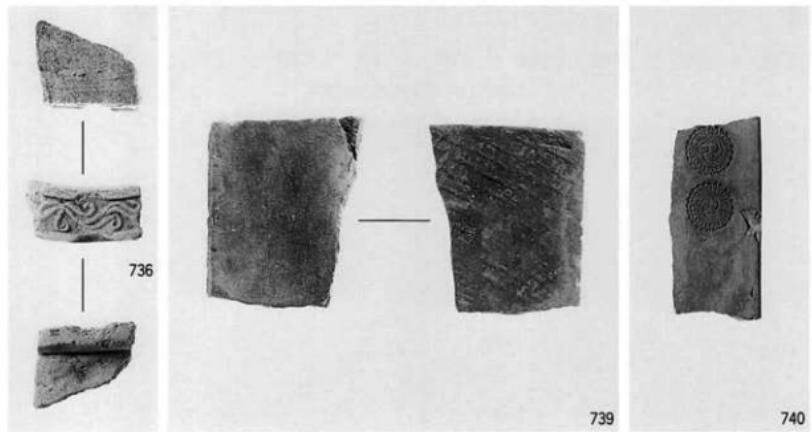
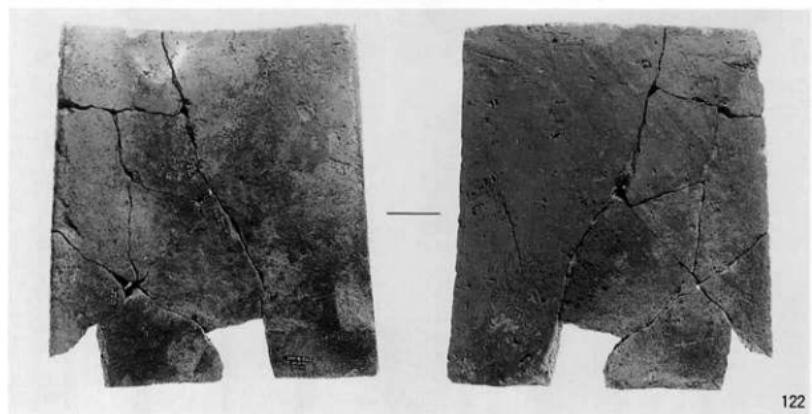
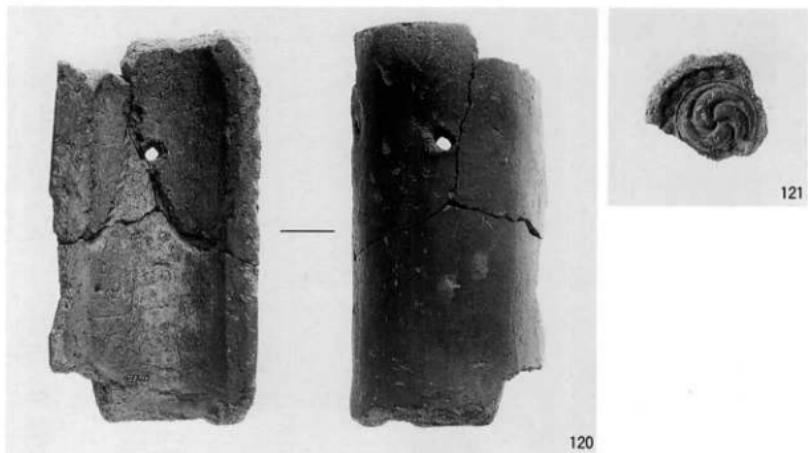


出土遺物（6） 土器類

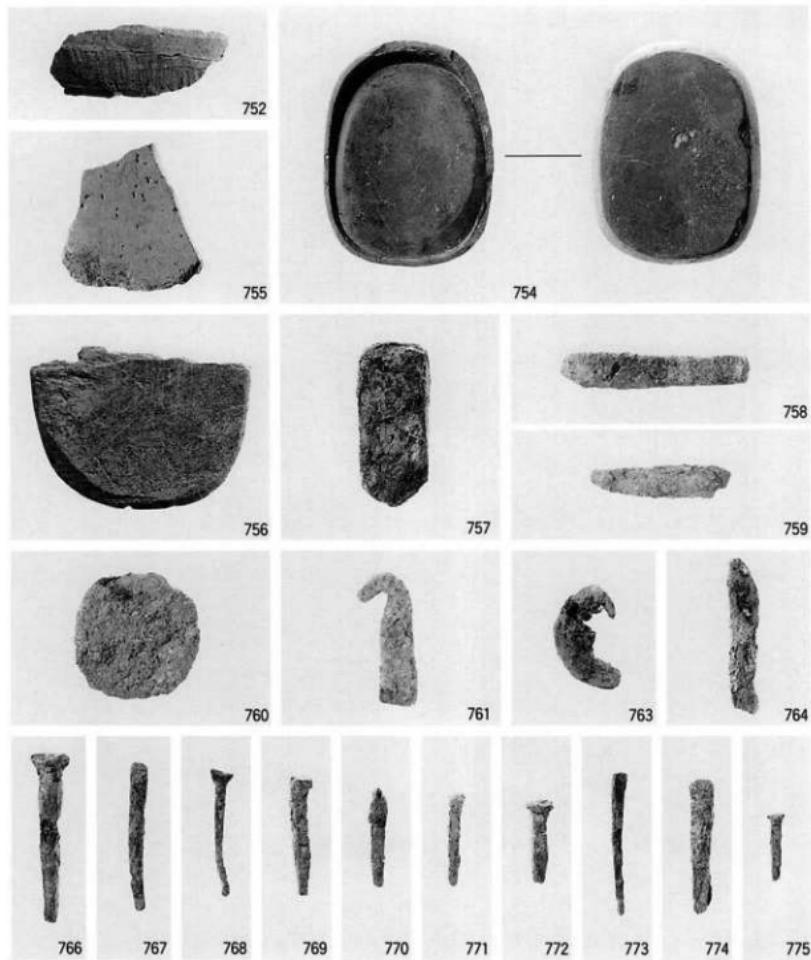
A・C区包含層出土



出土遺物（7） 土器類・土製品・古銭



出土遺物 (8) 瓦



出土遺物（9） 石製品・鐵製品

報告書抄録

ふりがな 書名	みたちいせき いち 三太刀遺跡（I）							
副書名	東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	1							
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第206集							
編集者名	梅本健治							
編集機関	財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
三太刀遺跡	広島縣 豊田郡本郷町本郷	34421	250	34° 23' 36"	133° 0' 3"	20000828 ~ 20010126	1,865	東本通地区 土地区画整 理事業に係 る発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三太刀遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡13棟 横列跡9条・土坑4基・ 池状遺構1基・木組井戸 1基・鎧治遺構1基	土師質土器（小皿・皿・ 杯・碗）、瓦器、青磁 (皿・碗)、白磁(皿・碗)、 瓦、土鍬、石製硯、滑石 製石鍋、鉄製品、古銭 (嘉定通寶・昭慶元寶)	京都系白色土器、墨 唐のある白磁碗、梯 状土鍬、大量的土師 質土器、木組井戸、 迦葉王院領沼田荘及 び地頭小早川氏との 関連性			

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第206集
東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（I）

三太刀遺跡（I）

発行日 平成15(2003)年3月31日
編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082)295-5751

印刷所 西日本印刷株式会社